

平成17年6月2日・6月3日

教育研究会要録

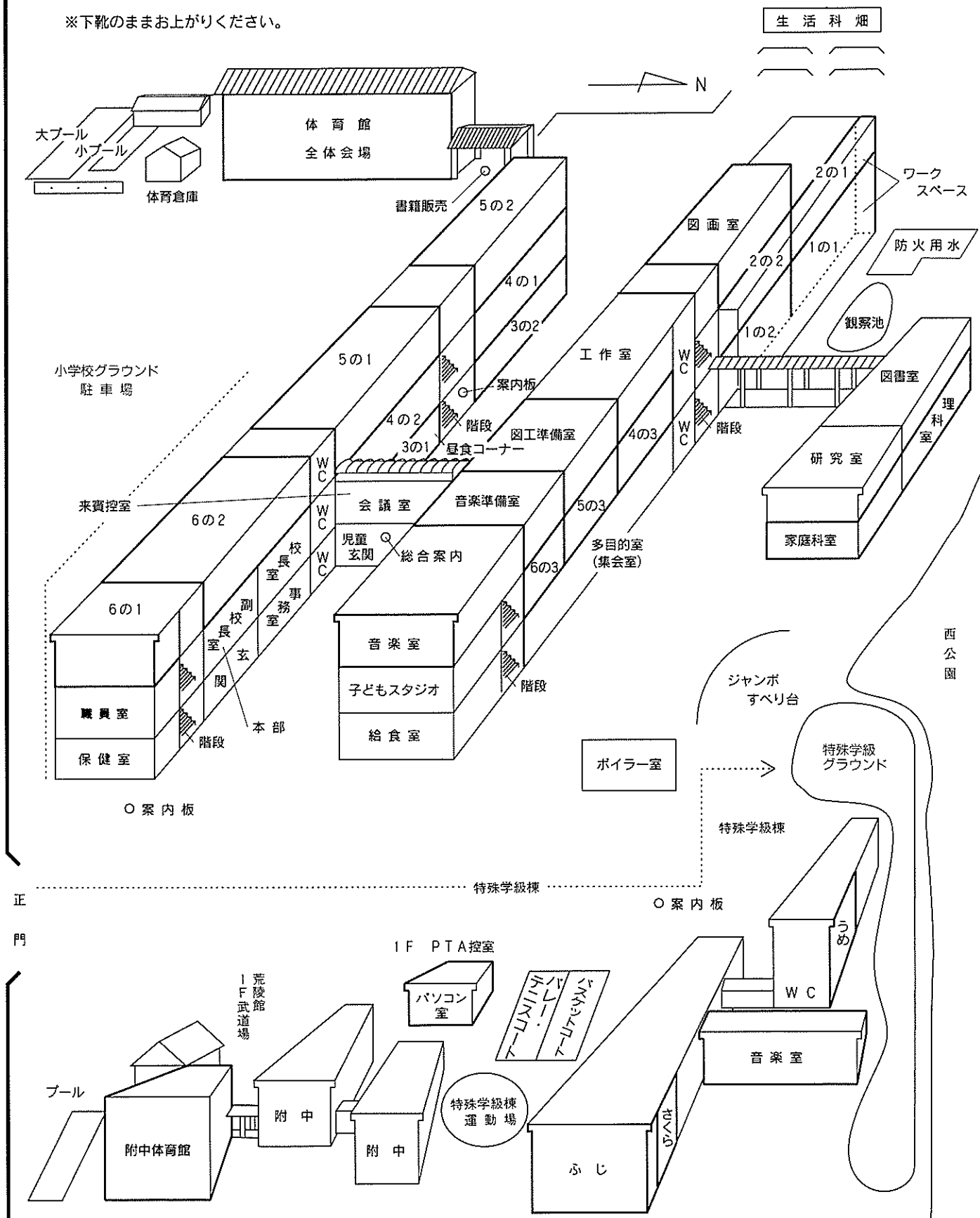
豊かに生きる子どもをはぐくむ 教育課程の創造

自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する
〈ふくおかプラン〉の展開



福岡教育大学附属福岡小学校

※下靴のままお上がりください。



ご あ い さ つ

福岡教育大学 学 長 松 尾 祐 作

福岡教育大学附属福岡小学校の平成17年度研究発表会の開催にあたりまして、ひとことごあいさつを申し上げます。

一昨年、本学は国立大学法人福岡教育大学となり、教員養成担当大学として、教員にふさわしい人材育成を中核に据えて、地域とともに歩む大学をめざしておるところです。

また、各附属学校は、その役割についても、先行研究実験校としての任務を確かに果たしていくことが、何よりも大切なことの一つであると考えております。なかでも、大学と連携した研究開発はますます必要であり、その成果が、この研究発表会を通して、それぞれの公立学校に還元されるものであることが強く求められています。

本年度の研究発表会は、主題を「豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造－自己開発と『生活・文化・人間の学び』を統合するくふくおかプラン＞の展開－」と設定して、その研究成果を世に問うものであります。公開授業はもちろん、教科等の発表、学習指導協議会、大学と附属による教育シンポジウム、全体講演と、2日間にわたる、多彩な内容となっております。昨年度までの研究を基盤に、発展的に継続研究してきた成果が発表されるものと期待しています。

今回の研究発表会が地域の学校のみならず、わが国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば、これに優る喜びはありません。ご参会された皆様方のご指導・ご助言を切にお願いする次第であります。

最後になりましたが、ご多用のなか、ご講演をお引き受けくださいました上智大学教授の奈須正裕先生に深く感謝申し上げます。また、司会者・指導助言者としてご協力くださいました諸先生方にもお礼申し上げます。今回の研究発表会を機会に附属学校を中心に、大学と各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと願っております。関係する皆様のより一層のご支援をお願い致しまして、ごあいさつと致します。

は じ め に

昨年、学習指導要領の一部改正が行われ、現在では、学習指導要領の全面的な見直しが叫ばれています。教育界のみならず、社会的に関心の高まっていることを強く実感しているところです。大きく変わろうとしている教育改革の波のなかで、学校はそれぞれ特色あるカリキュラムマネジメントを構想、実施していく必要があるのです。

本校では、教育課程の編成、実施、評価について、これまでかなりの年数をかけ、研究実践を積み重ねてきました。

それまでの研究成果をさらに発展させ、研究を進めてまいりました。そのなかでは、本校の教育目標から各教科等で育むべき資質・能力を明確にし、その関連付けを意図的・計画的に行うカリキュラムづくりを進めてきました。本年度は、確かな学力の育成のために、各教科等の役割や立場を問い直し、本校の基礎基本をしっかりと見据えた授業づくりからカリキュラムづくりへとつなげていきたいと考えています。

昨年度は、今日的な教育課題を解決するために人間が生きる側面に着眼し、研究主題「豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造」としました。そして、子どもたちの学びの姿を「生活」「文化」「人間」と類型化することで、各教科等固有の役割を明らかにし、発表することができ、多くの賛同をいただくことができました。

そこで、本年度は、学びのなかで自分自身を強く意識できる、子ども主体の学びの展開をめざし、研究を進めてまいりました。それが、副主題 自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉の展開です。

これらの研究成果につきましては、この研究発表会が多くの方々のご指導・ご支援のもとに開催できていることを深く感謝申し上げますとともに、今後とも各方面からのご助言やご協力をお願いする次第でございます。

平成17年6月

校 長 永 江 誠 司

目

次

ごあいさつ	1
-------------	---

はじめに	2
------------	---

目 次	3
-----------	---

日程と内容（第1日目）	4
-------------------	---

日程と内容（第2日目）	6
-------------------	---

本校研究の歩み	8
---------------	---

公開授業及び全体会の部(第1日目)

学習指導案（午前）	9
-----------------	---

全 体 会	30
-------------	----

学習指導案（午後）	31
-----------------	----

学習指導協議会	50
---------------	----

教育シンポジウム	50
----------------	----

公開授業及び全体会の部(第2日目)

学習指導案（午前）	51
-----------------	----

全 体 会	70
-------------	----

学習指導案（午後）	71
-----------------	----

テーマ別協議会	88
---------------	----

全 体 講 演	88
---------------	----

研 究 紀 要 の 部

研究紀要の部目次	89
----------------	----

研究全体構想	90
--------------	----

各教科等部要項	116
---------------	-----

障害児教育部要項	170
----------------	-----

帰国子女教育部要項	184
-----------------	-----

おわりに	195
------------	-----

平成16年度研究同人	196
------------------	-----

第1日目 6月2日（木）の日程

I 学習指導の部(午前)

▼ 学 習 指 導（9：15～10：00）

学年 組	教科領域等	学び	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	国 語 科	文化	くちばしのよさをみつけよう!～一つ一つのことを大事にして～	光 延 正次郎	1年1組教室
2年1組	生 活 科	生活	つくろう!附小リサイクルステーション	塚 本 正 典	2年ワークスペース
3年2・3組	音 楽 科	文化	旋律でつなぐ木の詩物語	秦 克 伸	音 楽 室
4年2組	理 科	文化	飛ばそうロケット!発射台改造大作戦	清 水 隆一郎	理 科 室
5年1組	社 会 科	文化	開催!福岡いちご生産会議	藤 野 俊 明	5年2組教室
5年2・3組	家 庭 科	生活	つくろう!さわやかライフ～洗濯はおまかせ!～	脇 本 孝 枝	家庭科室
6年1組	人 間 総 合	人間	生きる輝きを求めて	高 野 誠 一	3年2組教室
6年2組	体 育 科	文化	つくろう!ユニバーサル・ホッケー	岩 城 一 磨	附属中体育館

▼ 帰国子女教育学習指導（9：15～10：00）

6年3組	社 会 科	そのときどうした?鎌倉武士～元の大軍博多にせまる!～	高 良 祐 治	4年1組教室
------	-------	----------------------------	---------	--------

▼ 障害児教育学習指導（9：15～10：00）

梅 組	算 数 科	なんじなんぶん!つくろう, おでかけアルバム	園 田 洋 一	特殊棟音楽室
-----	-------	------------------------	---------	--------

II 全体会の部(午前)

▼ あ い さ つ（10：20～10：35）

福岡教育大学学長 松 尾 祐 作
校 長 永 江 誠 司

▼ 主 題 発 表（10：35～11：05）

・豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造

ー自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合するくふくおかプラン>の展開ー 研 究 主 任 岩 城 一 磨

▼ 帰国子女教育発表（11：05～11：25）

・社会的事象についての知識を獲得する帰国子女教育社会科学習

ー個の実態をもとに作成した個別カリキュラムをいかした社会科学習プランー 帰国子女教育部 高 良 祐 治

▼ 教 科 等 発 表（11：25～11：45）

・自ら筋道立てて考える算数科学習

ー問題事象の選択場面を位置づけた算数科学習プランー 算数科部 田 中 健 悟

▼ 児 童 発 表（11：45～12：00）

・創り出そう!私達のハーモニー

指導者 秦 克 伸

Ⅲ 学習指導の部(午後)

▼ 学習指導 (13:00～13:45)

学年組	教科領域等	学び	単元・題材・主題名	授業者	会場
2年2組	国語科	文化	仲間とふれあう生き物の話を読もう～スイミーをきっかけに～	平島健二	2年2組教室
3年1組	学級活動	生活	つくろう！めざそう！サンイチ・スピリッツ	矢野俊次	子どもスタジオ
4年1・3組	図画工作科	文化	唐人町ランタンフェスティバル	北田尚雄	図画・工作室
5年1組	算数科	文化	つくろう！分数カードゲームの攻略書	田中健悟	5年2組教室
6年1・3組	理科	文化	正体ズバリ解明！～水溶液ガイドブックを使って～	今泉伸一郎	理科室
6年2組	道徳	人間	君は友を救えるか？	木下美紀	6年1組教室

▼ 障害児学級と通常学級の交流学習指導 (13:00～13:45)

1年2組 1・2年ぶじ組	体育科	なかよく あてよう！かわそう！ ごろびょんボール	久保勝美 下川勝彦	附属中体育館
-----------------	-----	-----------------------------	--------------	--------

▼ 障害児教育学習指導 (13:00～13:45)

3・4年ぶじ組	生活単元	つくって ふれあおう どうぶつひろば	原田敏男	特殊棟中庭
---------	------	--------------------	------	-------

▼ 授業づくりの基礎・基本を明確にした学習指導協議会 (14:00～15:00)

会場	教科領域等	司会者	指導助言者
2年2組	国語科	宗像市立東郷小学校 教諭 田 淵 聡	志摩町立桜野小学校 校長 古 川 千 年 福岡教育大学 教授 前 田 眞 澄
4年2組	社会科	宗像市立自由ヶ丘小学校 教諭 川 口 克 典	古賀市立花見小学校 校長 西 邦 彰 福岡教育大学 教授 石 丸 哲 史
5年2組	算数科	大野城市立平野小学校 教諭 前 田 一 誠	志免町立志免西小学校 校長 山 下 英 俊 福岡教育大学 助教授 飯 田 慎 司
理科室	理科	福岡市立塩原小学校 教諭 園 田 一 浩	筑紫野市立山家小学校 校長 安 永 純 二 福岡教育大学 教授 宮 脇 亮 介
1年2組	生活科	黒木町立黒木小学校 教諭 北 島 孝 徳	瀬高町立下庄小学校 校長 堀 直 樹 福岡教育大学 助教授 寺 岡 聖 豪
音楽室	音楽科	福岡市立金山小学校 教諭 関 屋 成 久	須恵町立須恵第一小学校 校長 高 橋 秀 喜 福岡教育大学 教授 木 村 次 宏
工作室	図画工作科	福岡市立石丸小学校 教諭 田 澤 秀 樹	福岡市教育センター 主任指導主事 樺 島 穂 福岡教育大学 助教授 草 尾 和 之
附属中学校 体育館	体育科	福岡市立別府小学校 教諭 穴 井 仁 人	福岡市立博多小学校 校長 三 原 英 喜 福岡教育大学 教授 相 部 保 美
家庭科室	家庭科	福岡市立八田小学校 教諭 篠 原 裕 子	福岡市立香陵小学校 校長 藤 永 福 子 福岡教育大学 教授 長 山 芳 子
子どもスタジオ	特別活動	大川市立田口小学校 教諭 宮 崎 昌 人	久留米市立大城小学校 教頭 中 原 浩 一 福岡教育大学 教授 高 田 清
6年1組	道徳	前原市立怡土小学校 教諭 石 硯 昭 雄	柳川市立柳河小学校 校長 松 石 正 夫 福岡教育大学 教授 堺 正 之
梅組	障害児教育	大野城市立御笠の森小学校 教諭 古 賀 健 一	福岡市立福岡中央養護学校 校長 高 井 敏 雄 福岡教育大学 教授 納 富 恵 子

Ⅳ 全体会の部(午後)

▼ 大学と本校による、教育シンポジウム (15:20～16:45)

今、子どもたちに育てたい力は？ ～これからの教育の在り方を考える～ ○シンポジスト 福岡教育大学 教授 大坪靖直先生 博多座 参与 小坂弘治氏 本校研究副主任 北田尚雄 ○コーディネーター 本校研究主任 岩城一磨			
--	--	--	--

▼ あ い さ つ

副校長 金子孝信

第2日目 6月3日（金）の日程

I 学習指導の部(午前)

▼ 学 習 指 導 (9:15～10:00)

学年 組	教科領域等	学び	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	図画工作科	文化	きらきらゆらゆらかぜのおまつりだ	北 田 尚 雄	図画・工作室
1年2組	算 数 科	文化	いくつといくつでこうりゃく？バックンゲームをしよう	永 尾 健	1年2組教室
2年2組	道 徳	人間	みんな一生けんめい生きてるね！	木 下 美 紀	2年2組教室
4年1組	社 会 科	生活	つくろう！わたしの防災マニュアル	高 良 祐 治	4年1組教室
5年2・3組	理 科	文化	てこを使ったリフトゲーム！高得点をねらう作戦をたてよう	清 水 隆一郎	理 科 室
6年1組	国 語 科	文化	文章を選んで考えよう～イースター島からいえること～	平 島 健 二	6年1組教室

▼ 保健養護部学習指導 (9:15～10:00)

5年1組	体育科(保健)	生活	ストレス、すっきり大作戦	畠 山 佳 子	5年2組教室
------	---------	----	--------------	---------	--------

▼ 障害児教育学習指導 (9:15～10:00)

3・4年さくら組	国 語 科	みんなにしらせよう！じぶんのこと	諏訪原 佳 子	特殊棟音楽室
5・6年梅組	体 育 科	つないでゴール！パスしてネットゲーム	下 川 勝 彦	附属中体育館

II 全体会の部(午前)

▼ あ い さ つ (10:20～10:35)

初等教育研究部委員長
校 長 永 江 誠 司

▼ 主 題 発 表 (10:35～11:05)

・豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造

ー自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合するくふくおかプラン>の展開ー 研究副主任 北 田 尚 雄

▼ 教 科 等 発 表 (11:05～11:45)

・価値ある動きをつくり出す体育科学習

ー場面に応じて動きを生み出す活動を位置づけた体育科学習プランー 体育科部 久 保 勝 美

・道徳的な価値を主体的にとらえる道徳学習

ー自他の比較活動を位置づけた道徳学習プランー 道徳部 木 下 美 紀

▼ 児 童 発 表 (11:45～12:00)

・創り出そう！私達のハーモニー

指導者 秦 克 伸

Ⅲ 学習指導の部(午後)

▼ 学習指導(13:00~13:45)

学年組	教科領域等	学び	単元・題材・主題名	授業者	会場
2年1組	体育科	文化	えらんで楽しもう!ドライブマット	久保勝美	附属中体育館
3年1組	理科	文化	つくろう!豆電球おもちゃ博物館	今泉伸一郎	理科室
3年2組	国語科	文化	ウィルソンの研究を読み取ろう~段落と段落とを比べて~	光延正次郎	3年2組教室
4年2組	国語科	文化	「かむ」ことの力をさくろう!~段落を相互に関係づけて~	平川洋一	4年1組教室
5年2組	文化総合	文化	がんばろう福岡、つくろう福岡のじまん	藤野俊明	5年2組教室
6年2組	算数科	文化	ブロックパズルのピースをつくろう	田中健悟	6年1組教室

▼ 帰国子女教育学習指導(13:00~13:45)

3~6年 3組合同	国際交流タイム (総合)	つくろう! 3組 ワールド マネー ミュージアム	清水隆一郎 脇本孝枝 高良祐治	子どもスタジオ
--------------	-----------------	-----------------------------	-----------------------	---------

▼ 障害児教育学習指導(13:00~13:45)

ふく く 組 梅	合同生活単元学習	つくろう!なかよしガーデンルーム	園田洋一、下川勝彦 原田敏男、諏訪原佳子	特殊棟中庭
-------------------	----------	------------------	-------------------------	-------

▼ 保健養護部実践提案部会(13:00~15:00)

会場	提案者	司会者	指導助言者
5年1組 教室	本校養護教諭 島山佳子	二丈町立福吉中学校 養護教諭 森田常子	聖マリア学院短期大学 非常勤講師 筑紫味子 福岡教育大学 教授 照屋博行

▼ テーマ別協議会「知・徳・体の調和のとれた子どもをめざして」(14:00~15:00)

会場	協議会	協議会テーマ	提案者	指導助言者
3年2組 教室	学力向上の 授業づくりA	数学的思考力をつけるための授業はどの ように工夫したらよいか(算数科を中心に)	田中健悟 北田尚雄	福岡教育大学 助教授 飯田慎司
4年1組 教室	学力向上の 授業づくりB	読解力をつけるための授業はどのよう に工夫したらよいか(国語科を中心に)	平島健二 光延正次郎	福岡教育大学 教授 前田眞澄
5年2組 教室	いのちの 教育	いのちについて子どもたちにどのように 教えたらいいか	木下美紀 高野誠一	福岡教育大学 教授 堺正之
6年1組 教室	体力向上の 教育	子どもたちの体力を高めるための学校教 育、授業づくりはどうすればよいか	久保勝美 岩城一磨	福岡教育大学 教授 相部保美
2年1組 教室	帰国子女 教育	学習適応と特性伸長を図る帰国子女教育 をどのように進めたらよいか	高良祐治 脇本孝枝	福岡教育大学 助教授 小林万里子
特殊学級 梅組教室	特別支援 教育	特殊教育から特別支援教育へ、何をどう 変えるか	園田洋一 下川勝彦	福岡教育大学 教授 藤金倫徳

Ⅳ 全体会の部(午後)

▼ 全体講演(15:15~16:45)

「子どもの学力を保障する教師の授業力」

全体講師 上智大学 総合人間科学部 教育学科 教授 奈須正裕 先生

▼ あいさつ

副校長 金子孝信

本校研究のあゆみ

年度			
23	○学習効果判定の理論と実際	58	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 個が生きる課題づくり —
24	○カリキュラムの構成と実際	59	○自己実現の喜びを生み出す学習内容の検討 — 学習実態の多様性に即応する学習指導 —
25	(発表会なし)	60	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 — 子どもの個性が生きる指導 —
26	○学習深化の指導	61	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 「学習の個性化をめざす指導法の開発」 (明治図書から出版)
27	○学習深化の指導	62	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 — 学習の個性化をめざす学習過程 —
28	○学習深化をめざす指導	63	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 — 「学習の個性化」をめざす授業の改造 — 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」 (明治図書から出版)
29	○学習指導における諸問題の再検討	平成	○個が生きる授業の創造 — 自己理解の学習過程 —
30	○学習指導における新課題の再検討	元年	○個が生きる授業の創造 — 考えを確かにする活動構成 —
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明	2年	○個が生きる授業の創造 — 考えを深める自己吟味活動を通して — 「個が生きる授業づくり」 (北大路書房から出版)
32	○組織化をめざす学習指導法の究明	3	○生きる喜びを生み出す授業の創造 — 思い・願いをもって問いつづける 活動づくり —
33	○組織化をめざす学習指導法の究明	4	○生きる喜びを生み出す学習の創造 — 思いをあらわしていくよさを 実感する活動の展開 —
34	○学習指導の系統化	5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 — 自分のよさを実感する表現活動の展開 —
35	○改訂指導要領による学習指導の諸問題	6	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 — 新しい教育課程における教科領域の 学習の具体化 —
36	○考える子どもを育てる指導法の究明	7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 — 子供主体の活動からみる教育課程の編成 — 「新時代の授業を創る」(明治図書から出版)
37	○考える力をのばす学習指導法の考察	8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 — 子供主体の活動からみる教育課程の編成 —
38	○考える力をのばす学習指導法の考察	9	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 — 活動や体験を基盤にした学習の総合化 — 「学習創造」(算数・人間・障害児教育) 出版
39	○考える力をのばす学習指導法の考察	10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 — 子供と創る教科・総合的学習の展開 — 「学習創造」(理科・図画工作・音楽) 出版
40	○考える力をのばす学習指導法の考察	11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 — 知恵と心情をはぐくむ教科・総合の 調和的展開 —
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 「授業における思考訓練」(明治図書から出版)	12	○「学習創造」(国語・体育) 出版
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 「思考をのばす学習過程の評価」 (明治図書から出版)	13	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 — 調和的に展開する教科領域・総合的 学習像の明確化 — 「新世紀の学力づくり」(明治図書) 出版
43	○(発表会なし)	14	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 — 教科・総合の学びを連動する〈ふくおかプラン〉の展開 —
44	○現代化をめざす指導法の究明 — 教材の現代的価値と児童の実態と 反応に基づく指導内容の検討 —	15	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 — 「自己追究」の学びを拓く〈ふくおかプラン〉の展開 — 「評価で変えるカリキュラムづくり」(明治図書) 出版
45	○現代化をめざす指導法の究明 — 基本的内容にせまらせる学習の開発 —	16	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 — 「生活・文化・人間の学び」を位置付けた〈ふくおかプラン〉の構想 —
46	○現代化をめざす指導法の究明 — ひとりひとりを生かす 合理的な学習指導のしくみ —	17	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 — 自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉展開 —
47	○現代化をめざす指導法の究明 — 学習の連帯化をはかる指導のしくみ —		
48	○現代化をめざす指導法の究明 — 連帯性を育てる学習指導のしくみ —		
49	○現代化をめざす指導法の究明 — 連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる 学習指導のしくみ — 「学習を連帯化する指導法」 (明治図書から出版)		
50	○現代化をめざす指導法の究明 — 学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ —		
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 — 操作を通した学習の構造化 —		
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 — 操作を通した学習指導の展開 — 「できるまで育てる」(秀巧社から出版)		
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 — 交流でよりよい操作を身につける 学習指導 — 「自由活動の時間」(秀巧社から出版)		
54	○現代化をめざす指導内容と指導法の実証的究明 — 教材の価値にせまらせる操作学習の評価 —		
55	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 見直し活動を生かした操作学習の深化 —		
56	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 自己を見直し、考えを深める 指導のしくみ —		
57	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 自ら見直し活動に取り組み、 自己を深める指導のしくみ — 「学ぶ喜びを生み出す授業」 (北大路書房から出版)		

公開授業及び全体会の部

第1日目 午前の部

公開授業指導案

▼ 学 習 指 導 (9:15~10:00)

学年 組	教科領域等	学び	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	国 語 科	文化	くちばしのよさをみつけよう～一つ一つのことばを大事にして～	光 延 正次郎	1年1組教室
2年1組	生 活 科	生活	つくろう！附小リサイクルステーション	塚 本 正 典	2年ワークスペース
3年2・3組	音 楽 科	文化	旋律でつなぐ木の詩物語	秦 克 伸	音 楽 室
4年2組	理 科	文化	飛ばそうロケット！発射台改造大作戦	清 水 隆一郎	理 科 室
5年1組	社 会 科	文化	開催！福岡いちご生産会議	藤 野 俊 明	5年2組教室
5年2・3組	家 庭 科	生活	つくろう！さわやかライフ～洗濯はおまかせ！～	脇 本 孝 枝	家庭科室
6年1組	人 間 総 合	人間	生きる輝きを求めて	高 野 誠 一	3年2組教室
6年2組	体 育 科	文化	つくろう！ユニバーサル・ホッケー	岩 城 一 磨	附属中体育館

▼ 帰国子女教育学習指導 (9:15~10:00)

6年3組	社 会 科	そのときどうした？鎌倉武士～元の大軍博多にせまる！～	高 良 祐 治	4年1組教室
------	-------	----------------------------	---------	--------

▼ 障害児教育学習指導 (9:15~10:00)

梅 組	算 数 科	なんじなんぶん！つくろう、おでかけアルバム	園 田 洋 一	特殊棟音楽室
-----	-------	-----------------------	---------	--------

写真や自分の経験を手がかりにことばをふくらませ、意味を正しく読む国語科学習

第1学年1組 国語科学習指導案

指導者 光 延 正 次 郎

単 元 くちばしのよさをみつけよう～一つ一つのことばをだいじにして～

指導観

- 本単元は、きつつき、おうむ、はちどりそれぞれのくちばしの形のよさについて、写真や自分の経験などを手がかりにしながら比べて読むことをねらいとしている。具体的には、①それぞれの鳥のくちばしの形のよさを読んで見つけたいという課題をもって、一つ一つの事柄を読むこと、②写真や自分の経験を手がかりにしながら、鳥のくちばしのよさについて正しく読むことが主な学習内容である。「いろいろなくちばし」は、話題提示文があり、ページを改めてその説明という展開で繰り返されている。また、文章と写真が照応するようにも構成されている。よって、写真や自分の経験を手がかりにしながら情報を補う読みを展開することができる。こうした学習は、自分の力で意味を正しく読めた自分に自信をもち、楽しんで読書しようとする態度を育てる上からも意義がある学習である。
- 本学級の子どもたちは、好んで読書をするができる。また、読書の様子を観察すると、絵本や図鑑などに興味を示すことが多くなってきている。そして、その読み方をよく観察してみると、さし絵や写真を追っていったり、説明されている文章を声に出して読んだりしている。しかし、さし絵や写真とことばの読み

がバラバラで、ことばとさし絵や写真を結び付けて書かれていることを正しく読むには至っていない。そこで、説明的文章への初めての出会いでもあるので、写真や自分の経験を手がかりにしながら、意味を正しく読むことを重点とする。

- 本単元の指導にあたっては、写真や自分の経験で教材文をふくらませながら正しく読む読み方を身に付け、鳥のくちばしのよさを実感する文化の学びで展開する。そのために、つかむ段階では、鳥はみんな同じくちばしだという自分の情報と教材文に位置付けられた3種類のくちばしの写真のもつ情報を比較させ（自分の情報と文章内の情報の比較）、課題を設定する。つくる段階では、きつつき、おうむ、はちどりの鳥のくちばしの特徴と食べ物の関係を前の鳥と比較したり、写真と自分の経験を手がかりにしながら読み（文章内の情報の比較）、食べ物にあったくちばしの形になっていることを正しく読み取らせる。みいだす段階では、他の鳥でも同じことが言えるのか課題を発展させ、かわせみ(教師自作)の文章に出合わせ（文章内の情報と文章外の情報の比較）、鳥のくちばしはみんな食べ物にあったくちばしになっていることを実感させたい。

目 標

- 1 鳥のくちばしの形はどうして違うのだろうという課題をもって読み、自分の読みをまとめることができる。
- 2 鳥のくちばしの形のよさについて、写真や自分の経験などを手がかりにしながら比べて読むことができる。

計 画 (約7時間)

階	つかむ (2時間)	つくる (3時間)	見出す (2時間)
活動と内容	1 鳥について知っていることや、きつつき、おうむ、はちどりのくちばしの写真を比べて気付いたことについて話し合う。 ○ 鳥のくちばしの形の違い(よさ)に向かう課題意識をもつこと	2 鳥のくちばしのよさを読む。 ○ 鳥のくちばしの形と食べ物との関係について正しく読むこと (1) きつつきのくちばしのよさを読む。 ① (2) きつつきと比べながら、おうむのくちばしのよさを読む。 ① (3) きつつき・おうむと比べながら、はちどりのくちばしのよさを読む。 本時①	3 かわせみのくちばし(教材文の説明の順序を生かして教師が自作)について読む。 ○ 他の鳥も教材文の3種類の鳥と同じだと読むことができた自分に自信をもつこと
写真や自分の経験で教材文をふくらませながら正しく読む読み方を身に付け、鳥のくちばしのよさを実感する文化の学び			
支援	※ 子どもたちのもつ鳥の情報を分析し、それと食い違う鳥のくちばしの情報を提示	※ 大事なことばに着目させる発問や視写 ※ 鳥がくちばしを使い食べ物を食べている様子を模型で演じさせること	※ 教材文の説明の順序を生かして教師が自作したかわせみの説明文の活用
評価基準	● 鳥のくちばしの写真を見て、どうしてくちばしの形が違うのかなという疑問を発表している。	● きつつき、おうむ、はちどりのくちばしのよさを示すことばを根拠として、鳥がくちばしを使って食べ物を食べている様子を模型を使って正しく演じている。	● 鳥のくちばしの違いは食べ物の違いから生まれているというよさを見つけ堂々と発表している。

本時の授業仮説

はちどりのくちばしのよさを読んで見つける段階において、はちどりが花の蜜を吸っている様子をはちどりのくちばしが細長い場合と短かかったり太かったりした場合とを比較しながら模型で演じさせたり、はちどりときつつきやおうむのくちばしと流れ図を使って比較させたりすれば、はちどりの細長いくちばしは、細長い形をした花の奥にある蜜を吸いやすいつくりになっていることを読み取ることができるであろう。

本時の目標

- 1 はちどりのくちばしのよさを読んで見つけたいという課題をもって意欲的に「はちどりのくちばし」の段落を読み、はちどりのくちばしのよさについて自分が想像したことを進んで話し合える。
- 2 写真や自分の経験を手がかりにしながら、はちどりの細長いくちばしは、細長い形をした花の奥にある蜜を吸いやすいつくりになっていることを読み取ることができる。

準備

拡大教材文、学習プリント、きつつき、おうむ、はちどりのくちばしの写真、はちどりの模型、学習の流れ図

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 前時までに学習したきつつきとおうむのくちばしの写真と、はちどりのくちばしの写真を比較し、はちどりのくちばしのよさを予想し話し合う。  ○ 「はちどりのくちばしのよさを読んで見つけたい」という思いをもつこと (めあて) はちどりの くちばしの よさを、おはなしと シャしん、じぶんが 知っていることから よみとろう。 ※ きつつきとおうむのくちばしにはよさがあつたことを想起させ、はちどりのくちばしにもきつとよさがあるんじゃないかと予想させる。 2 お話と写真、自分の経験からはちどりのくちばしのよさを読み取る。 (1) はちどりが花の蜜を吸っている様子を、はちどりのくちばしが細長い場合と、短かかったり太かったりした場合とを比較しながら模型で演じる。  ○ はちどりの細長いくちばしは細長い形をした花の奥にある蜜を吸いやすいつくりになっていることを読み取ること ※ くちばしが細長いのはちどりと短いのはちどり、太いのはちどりの模型を用意しておき、比較しながら演じさせる。 (2) はちどりのくちばしときつつき、おうむのくちばしを比較する。 はちどりは、はちどりの食べ物にあつたくちばしの形になっていることを正しく読み取ること ※ 「はちどりのくちばしがおうむみたいだといけなないかな」ということを問い返し、子どもの読みを深めさせる。 3 はちどりのくちばしのよさを表す大事なことを視写する。 ○ 「ほそながい」「はなのみつ」というのはちどりのくちばしよさを表す一番大事なことを視写すること ※ 早くできた子どもがいたら、お手紙セットをやり、家庭学習にする。	○ きつつきのとがったくちばしは、木に穴を開けて中にいる虫を、細くて長い舌で引き出して食べやすいつくりになっていた。 ○ おうむの先が曲がったくちばしは、固い種の殻をはさんで割り、中の実を食べやすいつくりになっていた。 ○ はちどりは、細長いくちばしだ。 ○ はちどりのくちばしのよさは何かな。お話と写真、自分の知っていることから絶対に見つけるぞ。きつつきとおうむでも見つけたから見つけられるはずだ。 ○ はちどりは、細長いくちばしを花に入れて花の蜜を吸うんだ。 ○ はちどりのくちばしは、花の形が細長いから細長いんだ。 ○ はちどりのくちばしが太いと細長い形をした花の中に入らないな。だけど、はちどりのくちばしが細長いと花の中に入るぞ。 ○ はちどりのくちばしが短いと花の奥の蜜まで届かないな。だけど、はちどりのくちばしが細長いと花の奥の蜜まで届くぞ。 ○ はちどりのくちばしが太いと花の中に入らないし、短いと花の奥の蜜に届かないから、細長い形をした花の奥にある蜜を吸いやすいよう細長いくちばしを持っているんだ。書いてあることがよくわかった。 ○ はちどりさんのくちばしは「ほそながい」んだ。そして、「はなのみつ」を吸うんだ。 ○ お家に帰ったら、はちどりさんに手紙を書こう。

第2学年1組 生活科学習指導案

指導者 塚 本 正 典

単 元 つくろう! 附小リサイクルステーション

指 導 観

- 本単元は、ごみの再資源化に努める環境推進委員の堤さんとの出会いから身近にある物のなかで子どもたちが遊びに取り入れることのできる物を使って遊びを工夫し、みんなで遊びを工夫して楽しむことができることをねらいとしている。ここでの主な学習内容は、
- ①身近な素材を生かしたり、遊び方や約束を変えたりしていくことにより、さらに楽しい遊びをつくること、
 - ②友達とのかかわりを通して、約束やルールが大切なことやそれを守って遊ぶと楽しいことに気付くこと、
 - ③友達のよさや自分との違いに気付いたり相手の考えを尊重したりできる態度を身につけることである。
- 本学級の子どもたちは、前単元「あらつ町の町をたんけんしよう」の学習で、唐人町商店街の様々な店や公民館、そこに携わる人々とのふれあいを通して、親しみを持ち、かかわりのよさに気付いている。また、紙資源の回収を進める環境推進委員の堤さんとの出会い、様々な資源を再利用していく大切さや身近な物を大切にする意識を高めている。そこで、身近にある物の有効な活用を図りながら楽しい遊びをつくり出す楽しさ
- や夢中になって遊ぶ楽しさを味わえるようにしていく。また、友達と一緒に遊ぶために遊び方や約束、ルールを繰り返してつくり変えたりして、友達とのよりよいかかわりや尊重しあえる人間関係つくる上で価値がある。
- 本単元の指導にあたっては、身近な物を大切に使う遊びを工夫したり、遊び方やルールを変えたりしてみんなで遊びを楽しむことができる生活の学びを仕組んでいきたい。そのために、まず、であう段階では、地域でリサイクル活動を進めている環境推進委員の堤さんとの出会い、身近な物を有効に使う遊びを新たに楽しい遊びをつくり出す計画を立てることができるようにする。次に、ふかめる段階では、身近な物を使った遊びをもとにグループを編成し工夫して遊びをつくり出すことができるようにする。さらに、いかす段階では、友達とのかかわりから遊び方や準備の見直しを通して、約束やルールの大切さ、友達のよさや自分との違いに気付く、もっと作って遊びたい、みんなと楽しく遊びたいという思いや願いを絵や文に表し、発表の場を通して全体に広げることができるようにする。

目 標

- 1 身近にある物を使って遊びを工夫し、素材のよさやルールの工夫、友達のよさに気付く、自分の思いや願いを絵や文で表したり発表したりすることができる。
- 2 自分たちの思いや願いをもとに、附小リサイクルステーションを友達と協力してつくり、繰り返してつくり変えて楽しく遊ぶことができる。

計 画 (約9時間)

階	第1次であう段階(2時間)	第2次ふかめる段階(4時間)	第3次いかす段階(3時間)
活動と内容	1 町探検で、紙リサイクルステーションに出会い、地域の方の考えをもとに自分の再利用の仕方について話し合う。 ○ 物を大切に使うという地域の方の願いをもとに自分たちが工夫してできる遊びを考えること	2 身近な物で遊びをつくり工夫して遊ぶ。 (1) 身近な物を使って遊ぶ附小リサイクルステーションをつくる。 ② ○ 身近な物を使って工夫した遊びを作り出すこと (2) 附小リサイクルステーションで工夫して遊ぶ。 本時1/2② ○ 遊び方やルールのよさに気付くこと	3 身近な物を使った遊びを見直し、より楽しく遊ぶ。 ○ かかわりのよさに気付く、工夫して遊ぶことができること ○ 遊びを通して自分の思いや考えを絵や文で表し、全体に広げること
堤さんの再資源化への思いや願いに気付く、生活を豊かにつくり変える、生活の学び			
支援	※ 堤さんに紙回収活動の目的について説明を聞いたリインタビューする場の設定	※ 素材をもとに工夫した遊びのグループ編成やコーナー、役割分担の交流設定 ※ 友達とのよさを生かす交流の場	※ 活動をもとに、友達のよさや工夫を取り上げ生かせる交流の場
評価基準	● 環境推進委員の堤さんとの出会いから、物を大切にする考えをつくり、身近な物を使ってみんなと楽しくかかわれる遊び方を考え出している。	● 身近な物から工夫した遊びをつくり、遊び方やルールの見直すよさに気付いている ● 友達と協力して、より楽しい遊びを繰り返してつくり、生き生きと遊ぶことができている。	● 友達とのかかわりのよさの点から、遊びを見直しより楽しい遊びをつくりだしている。

本時の授業仮説

グループごとに身近な物を使った遊びの学習において、遊びの種類ごとのコーナーや他のグループで遊んだ活動に対する振り返りの場を設定すれば、自分たちでつくり出した遊びで生き生きと遊び、遊び方やルール工夫、友達とかかわるよさに対する思いや気付きを絵や文で表現したり、発表したりすることができるであろう。

本時の目標

- 1 身近な物を使った素材のよさや遊びの工夫やルール、友達のよさに対する思いや気付きを、絵や文で表現したり、発表したりすることができる。
- 2 自分たちの思いや願いをもとに附小リサイクルステーションで、身近な物を生かした遊びを友達と協力し合ったり遊び方を工夫したりして楽しく遊ぶことができる。

準備

各コーナー（牛乳パック、ペットボトル、空き缶、段ボール）、学習ノート、CDラジカセ

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1 前時の活動をもとに、本時学習のめあてをつかむ。 ○ 他のグループのコーナーで遊ぶ期待感や友達のお世話をする活動への意欲を高めること （めあて）よりたのしい ふ小リサイクルステーションをつくろう。 ※ 遊びへの期待感やお世話活動への意欲が高まるよう、自分たちのグループの遊びの紹介をさせ、時間による役割分担を確認させる。 2 各コーナーで楽しく遊び、自分の思いや願いを書き表す。 （1）友達のグループのコーナーで楽しく遊ぶ。〔子どもの活動例〕  ペットボトルコーナー（ペットボーリング） 投げる位置の工夫 たまの大きさの工夫 ペットボトルの大きさや重さの工夫 点数の付け方の工夫 投げ方の工夫 ゲームをする順序の工夫  ぎゅうにゅうパックコーナー（はからりゲーム） つりあげるものの大きさの工夫 さおやひもの長さの工夫 磁石の力の工夫 点数や時間の工夫 ゲームをする順序の工夫 ○各コーナーで遊び方やルールの工夫をして友達のよさに気付くこと ※ お世話係は活動に自信がない友達を誘い仲よく遊ぶように助言する。 （2）遊んで気付いたことや思ったことを学習ノートを書く。 ○ 友達のよさや遊び方、ルールの工夫のよさに気付くこと ※ 前回の活動を想起させ、遊び方やルールで工夫したよさを提示する。 3 今日したことをもとに、次の学習について話し合う。 （1）活動を振り返って、気付いたことや思ったことを発表する。 ○ 友達とかかわりのよさやルールのよさ、遊びの工夫のよさについて気付くこと ※ 友達のかかわりや遊び方、ルールのよさについて気付くことができるよう、楽しかった理由を大切にしながら発表させる。 （2）次の活動について話し合う。 ○ 次の活動への思いや願いを高めること ※ 友達とかかわるよさに気付き、さらにかかわりを深め広げていく次時の活動への思いや願いについて話し合う場を設定する。	○ 前の遊びとくらべて、どんなコーナーがあるのかな。 ○ 早く遊びたいな。どこのコーナーで遊ぼうかな。 ○ わたしは、初めお世話の係だからみんながたのしくあそべるようにしっかりおてつだいをしよう。 ○ いよいよ始まるよ。やったー ○ ボーリングはむずかしいよ。だんだん多くなってくると、もっとむずかしくなってくるよ。どうしたら、うまくたおせるかな ○ まとあては、うまくあたるかな。どうしたらもっとあたってたおれるかな。 ○ △△さんは、なかなかつれないよ。かんたんにはつれないけど、どんなふうにするといいかな。 ○ ○○くんは、なかなかペットボトルがたおれないから、前の方から投げて、かんたんにたおれるものを準備するね。 ○ 前に遊んだ時よりとっても楽しかったよ。また遊びたいな。 ○ ○○くんといっしょに競争して遊んだから、とても楽しかったよ。 ○ わたしが遊ぶ時、かんたんなルールにしてくれたから、とても楽しかったです。○○さんがやさしくしてくれたのでたのしかったです。 ○ おせわはたいへんだったけど、たくさんの友達が来てくれたのでとてもうれしかったです。 ○ 次はもっと工夫してほかの友達にも来てほしいな。 ○ 楽しい遊びをもっと考えて作ったり、友達と遊んだりしたいな。

表現の工夫を重ねるための活動を選択する音楽科学習 第3学年2・3組 音楽科学習指導案

指導者 秦 克 伸

題 材 旋律でつなごう!木の詩物語

指 導 観

- 本題材は、歌詞が表す世界を想像したり、旋律の特徴を感じ取ったりしながら、強弱を工夫した歌唱表現の仕方を身につけ、物語性ある楽曲を歌う楽しさを味わうことをねらっている。主な学習内容は①物語性あふれる楽曲の楽しさを味わうこと②物語の場面の様子を想像し、歌い方を工夫して表現すること③表したい思いに合った発声で歌うことである。教材曲として、主題が明確な複数の楽曲がつながり、物語が展開される作品を選定することで、個々の歌唱表現の追究活動を通してつくられた表現の多様さやおもしろさを味わうことができるものである。このことは、音楽の楽しみ方を広げ、音楽に対して進んで関わる子どもを育てる上でも意義深い。
- 本学級の子どもたちは、これまでにわらべうたをはじめとする様々な遊びの歌、拍の流れに自然と体が動き出す歌、リズムをつくる活動など、拍のながれを感じ取り、リズムに敏感に反応しながら表現する力を身につけてきている。このようにリズムを中心に直観的に思考しながら表現をつくってきた子どもたちではあるが、旋律の動きや流れを感じ取って十分に表現するまでには至っていない。そこで、歌詞の内容や旋律の動きを十分に感じ取る活動を通して、自分が表したい音楽を表すには、強弱を工夫することが必要であるという強い思いをもち、自分の歌唱表現をつくっていくことは、旋律に重点をおいた中学年の子どもたちにとって価値あるものであると考える。
- 本単元の指導にあたっては、身につけてきた歌唱表現の技能を「き」の歌唱表現の工夫とつなげ、自分の「木の詩物語」を創る文化の学びとして展開する。であう段階では、物語性のある楽曲と出合わせ、自分たちも歌唱表現を工夫し、自分の「木の詩物語」を歌いたいという強い求めをもたせるようにする。ふかめる段階では、歌詞の内容や旋律の動きを十分感じ取り、強弱の変化を工夫する活動を複数設定し、自分のよさを生かして選択した追究活動を行うことで、自分の「木の詩物語」をつくらせたい。また、つくった自分の表現を、友達と聴きあいながら、自他の表現の工夫の追究活動のよさを実感させたい。ひろげる段階では、自分がつくった表現をつないで発表し、それぞれの楽曲の表現の工夫の違いを感じ取るとともに、自他の表現の工夫のよさを実感させ、旋律の表現を工夫し、物語性ある楽曲を歌う喜びを味わわせたい。

目 標

- 1 物語の場面を想像し、場面にあう音楽になるよう、歌詞にこだわったり、身体表現をしたり、友達と聴きあったりしながら、物語の音楽を楽しもうとする態度を育てる。
- 2 どんな木の詩物語かわかる音楽にしたいという求めを持ち、今まで身につけた歌唱表現の技能を運用しながら強弱の変化を工夫し、自分の「木の詩物語」をつくることができる。

計 画 (7時間)

階	第1次(2時間)	第2次(3時間)	第3次(2時間)
活動と内容	1 木の歌を歌う。 (1) 「大きい木」を歌う。① ○ 情景を想像しながら歌うこと (2) 「き」の全曲を歌う。① ○ 物語のあらすじと旋律の全体像をつかむこと	2 「木の詩物語」をつくる。 (1) 芽が出るまでを歌う。① ○ 強弱を工夫の仕方がわかること (2) 花が咲くまでを歌う。 本時 ① ○ 強弱を工夫しながら歌うこと (3) 再び春を待つまでを歌う。 ① ○ 小さな強弱の変化をつくること	3 自分がつくった「木の詩物語」を発表する。 ② ○ 自分や友達がつくった強弱のつけ方のよさに着目して、歌唱表現のよさを感じ、物語の歌の楽しさを味わうこと
強弱を工夫し、自分たちの「木の物語」の歌唱表現をつくる文化の学び			
支援	※ 大きな木の情景画 ※ 物語の情景画、歌詞の掲示	※ 強弱のつけ方を工夫した比較活動の設定 ※ 強弱を工夫する複数の追究活動の設定	※ 発表会の場の設定 ※ 聴き合う視点の提示
評価標準	● 大きな木のイメージをふくらませている。 ● 歌唱表現への意欲を高めている。	● 強弱の工夫と曲の感じをつなげている。 ● 追究活動を選択し、木の様子が表れるような強弱のつけ方を工夫している。	● 自他の表現をじっと聴いて、見つけた旋律の表現の仕方を発表したり、ノートに書いたりしている。

本時の授業仮説

自分の「木の詩物語」をつくる場面で、情景画や歌詞の内容をもとにしながら、木の様子や台詞を考え、表したい音楽を明確にした子どもたちに、身体表現、歌詞の音読、範唱テープのコーナーを設定すれば、木の様子があらわれるような強弱の付け方を意欲的に工夫し、自分の歌唱表現をつくるであろう。

本時の目標

- 1 「き」の歌唱表現において、歌詞や情景画をもとに、自分があらわしたい音楽を明確に持ち、意欲的に強弱の付け方を工夫しながら、自分の求める木の様子をあらわす歌物語の中の音楽を追究している。
- 2 表したい感じが表れるような強弱の付け方を、体の動きや、歌詞があらわす様子や気持ちを味わうことや、範唱テープの鑑賞を通してつくることができる。

準備

拡大楽譜、マジック、表現カード、前時までの流れ図、情景図、場面ごとの楽曲の伴奏テープ、

展開

活 動 と 内 容 (※は、評価を生かした支援)			子どもの思考の流れ
1 「伸びる木」と「花が咲いた」が、どんな音楽か表現カードに書き、自分が表したい音楽について話し合う。 (1) 自分の表現カードをつくる。 ○ 強弱のつけ方を工夫したら表せそうだという見通しを持つこと ※ 情景画、吹き出しをつけた学習プリントをもとに、交流をさせる。			○ ゆっくり伸びていく木の様子が伝わるように歌いたいね。 ○ 花が咲いたときにいろいろな動物や虫がやってきて、とてもにぎやかになるな。 ○ 強弱のつけ方をかえると、ずいぶん曲の感じがかわるんだな。強弱のつけ方を工夫したら、自分が表したい音楽を表すことができそうだ。 ○ 自分があらわしたい音楽も、強弱のつけ方をかえたら、あらわすことができそうだな。 ○ それぞれの曲の「どこを」「どんな強さ」で歌ったら、表すことができるかな。 ○ 種や木の気持ちになりきって歌ったら、きっと強弱をつけて表すことができると思うよ。 ○ もっと歌詞をよく読むと、強弱の場所を見つけることができそうだ。 ○ どこを強くすればいいか、まだよくわからないから、範唱テープを聴いて考えよう。 ○ ゆっくり伸びていく木は、だんだん大きな木になっていくんだから、歌声もだんだん強くしたいな。 ○ 自分が考えた強弱のつけ方ができあがったな。ほかの人は、どんな強弱のつけ方を考えたのかな。聴いてみたいな。 ○ 違う方法で追究をしていたけれど自分の強弱のつけ方と同じようなつけ方になっていたな。 ○ 最後の曲まで完成させたから、全部の音楽をつなげて歌って、木の詩物語をつくりあげたいな。
めあて 自分が表したい音楽になるように、強弱のつけ方を工夫して歌おう。			
2 自分が表したい音楽になるように強弱のつけ方を追究する。 (1) 自分が追究したい方法を選択する。 ○ 提示された方法の中から、自分がやりたい追究方法を選ぶこと ※ (身体活動) (範唱テープ) (歌詞の朗読) の場の設定 (2) 自分が選んだ方法で歌い方を追究し、見つけ出した強弱のつけ方を自分の楽譜に書き入れる。 ○ 自分の表したいことと関係づけながら強弱のつけ方を判断すること [活動コーナーで予想される子どもの反応]			
身体表現	範唱テープ	歌詞の朗読	
音楽に合わせて、種や木の様子を自分の体を使って表現し、歌唱表現とつなぐ。	強弱のつけ方が違う複数のテープを聞き比べて、自分があらわしたい強弱のつけ方を見つける。	歌詞を声に出して読んだり、言葉からイメージされる様子を想像したりする。	
ここは力強く手をのばすところだから、歌声も強く歌おう。 ここは枯れ葉が散って行く動きだから、少し弱く歌おう。	強弱のつけ方が違う範唱テープを聞き比べてさっきの強弱のつけ方を少し取り入れたらいいね。	「伸びる」という言葉は、強い方がいいな。「風が吹く」ところも、こわそうな雰囲気強い方がいいな。	
※ 強弱の記号を消し、言葉や文字を書き込むことができる楽譜の提供			
3 強弱のつけ方を工夫した表現を全体の前で発表し、友達と比べる。 ○ 自分が表したい音楽と、選んだ方法を関連づけて発表したり、感想をもったりすること ※ どんな音楽にしたいのかということと、そのための強弱のつけ方とを関連づけて感想を持つことができるような学習プリントを用意する。			

かさの変化に着目する共通実験から個別追究をし、きまりをつくり出す理科学習 第4学年2組 理科学習指導案

指導者 清水 隆一郎

単 元 飛ばそうロケット！発射台改造大作戦！

指導観

- 本単元は、閉じこめた空気及び水に力を加え、そのかさや押し返す力の変化を調べていくことをねらっている。具体的には、①閉じこめた空気を圧すとかさは小さくなるが、押し返す力は大きくなること、②閉じこめた空気は押し縮められるが、水は押し縮められないことである。ここでは、透明ホースに注射器をつなげ、反対側のロケットを飛ばすロケット発射台を作る活動を行っていく。この活動を通して、ロケットを遠くに飛ばす求めをもち、ロケットの飛び方とホースの中にある水と空気のかさの変化を関係づけて調べる活動と空気や水のかさの変化のきまりを子どもが見出していくことで、科学する楽しさを味わい、学んだ自分に自信をもち、価値を感じることができると考える。
- 本学級の子どもは、空気と水の違いについて、空気と水は同じという考えや、空気は見えないけど水は見えるなど、さまざまな考えをもっている。また、ペットボトルロケットや水鉄砲の経験から、水や空気は押し縮めるとその反発で水や的が飛んでいくという考えをもっている。しかし、水と空気の押し縮められるかさの違いについては意識してなく、水の方が勢いが強いという考えや空気の方が勢いが強いなど様々な考えをもっている。そこで、力を加えたときのかさの変化に着目し、その違いを明確にすることで、空気と水の違いや、変化のきまりをとらえさせていきたい。
- 本単元の指導にあたっては、ロケットを遠くに飛ばしたいという求めのもとに、子ども自らがロケットを飛ばすための方法を空気と水のかさの変化に着目しながら調べ、きまりを見出す文化の学びで展開する。そのためまず、ロケットとばしの活動を設定し、ロケットを遠くに飛ばすための要因として、空気や水の量とかさの変化に着目させる。次に、「ロケットをもっと飛ばすための方法」について話し合うことにより、中にある空気や水の変化に着目することができるようにする。また、その時の予想を実験計画によって具体化させ、実験道具を選択し、自分の考えを自ら試していく中で、空気と水の違いを加えたときのかさの変化でとらえていくことができるようにしたい。さらに、とらえたきまりのもとに、ホースの太さが違うときの飛び方について調べたり、空気の入れ方を考えたりし、きまりや調べ方を適用できるようにしていく。

目 標

- 1 ホースロケットを遠くに飛ばすための方法を意欲的に考え、空気や水の量とかさの変化に着目して、ホース中の空気や水の量を変えて自分の考えを試していく活動を通して、科学する楽しさを味わうことができる。
- 2 空気と水の違いをそのかさの変化に着目して調べ、空気は押し縮められるが水は押し縮められないことや空気は押し縮めるとかさが小さくなり、押し返す力が大きくなることをとらえることができる。

計 画 (約10時間)

階	第1次(2時間)	第2次(4時間)	第3次(4時間)
活動と内容	1 ロケット発射台を使って遊ぶ活動を行い、ロケットが遠くに飛ぶ仕組みについて話し合い、改造計画をたてる。② ○ ホースの中の空気や水の縮められ方や量の違いに疑問をもつこと	2 ロケットが遠くに飛ぶための仕組みを空気と水の量や空気の縮まり方で調べる。 (1) 空気の縮まり方を調べる。本時2/2② ○ ロケットを飛ばす力は、空気の量ではなく、押し縮められ方できまること (2) 水を入れた時の縮まり方を調べる。② ○ 空気は押し縮められ、元に戻る	3 空気を押し縮めるための方法を考え、自分の発射台を作ってロケット飛ばしコンテストを行う。④ ○ 空気を押し縮めると押し返す力が働くことや方法を適用すること
支援	※ 透明パイプに水と空気を閉じこめて圧すとロケットが飛び出す遊びを提示する。	※ 子どもの考えを確かめていくことのできる材料を準備する。 ※ アクリルパイプでの押し縮まり方の提示	※ いろいろな太さのホースやロケットの栓、ポンプを準備する。
評価規準	● ロケットが遠くに飛ぶための仕組みを空気と水の量や縮み方に着目して考え、改造計画をたてている。	● 空気がロケットを飛ばしていることをかさの縮み方と関係づけて説明している。 ● 空気が押し縮められるほど反発する力が強くなることを実験から考えている。	● 押し縮められた空気が押し返すきまりを使って、自分の考えた発射台を作り、きまりを試している。

本時の授業仮説

空気の量による飛び方の違いを調べる場面において、自分の考えをもとに、長さの違うホースを選び、空気の量を変えて、飛び方の違いを調べる個別の追究を設定すれば、目的意識をもとに意欲的に追究したり、結果から方法を吟味したりし、ロケットを飛ばすのは空気の元に戻ろうとする力であることを見出すことができるであろう。

本時の目標

- 1 ロケットを飛ばすために、パイプの中の空気の量を自分の考えをもとに、調整して実験し、実験結果からロケットを飛ばしている力を説明していくことができる。
- 2 ロケットの発射装置である透明ホースの大きさを変え、空気の縮み方による飛び方の違いを調べ、押し縮められた空気が元に戻ろうとする力でロケットが飛んでいくことをとらえることができる。

準備

個別実験の計画、様々な長さの透明ホース、注射器、ロケット発射台

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1 前時学習を想起し、ホースの長さを変えたときのロケットの飛び方について話し合い、本時学習のめあてを設定する。 ○ ロケットを飛ばすための空気の量に着目すること （めあて）遠くにロケットを飛ばすために、発射台のパイプの長さを変えて調べ、ロケットを飛ばす力について考えよう。 ※ 長さの違うパイプを提示する。 2 いろいろな長さのホースを選んで、押し縮める実験を行い、ロケットを飛ばしている力について話し合う。 (1) 自分の考えた予想をもとに、発射台のホースの長さを変え、空気の量の違いによるロケットの飛び方を調べる。 ○ 力を加えたときの空気の様子やロケットの飛び方を観察すること ※ 長さの違うパイプを準備する。	○ 空気を多くすればロケットが遠くに飛ぶと思うからパイプを変える。 ○ 空気の量とロケットが遠くまでとぶことは関係ないと思う。 ○ 空気を少なくした方が遠くに飛ぶんだと思うよ。 ○ 空気の量を変えるために、ホースを選んでロケットが飛ぶのにいちばん関係しているものを見つけよう。 ○ 空気を多くしても、ロケットが遠くまで飛ぶようにならなかった。 ○ 長さが短いホースの方がロケットはたくさん飛ぶことがわかった。
出合う段階での共通実験 予想される子どもの個別実験 高く飛ばすために、ホースを長くして空気を多くする。 高く飛ばすために、ホースを短くして空気を減らす。 (2) 予想別に実験結果を発表し、ロケットを遠くに飛ばすきまりについて話し合う。 ○ 玉を遠くに飛ばすには、空気がたくさん押し縮められることが必要であることをまとめること ※ 拡大模式図を使った結果の交流の場を設定する。 3 ホースの反対側を閉じて、空気が縮む様子を観察したり、大型空気であらうで縮めた空気を観察し、空気のはたらきについて話し合う。 ○ 空気は力を加えれば縮み、手応えが強くなること ○ ロケットを飛ばすのは押し縮められた空気が元に戻る力であること ※ ホースの反対側をふさぐゴム栓を用意する。 ※ 大型空気であらうを使った空気が縮むことの提示実験を行う。	○ どの実験結果が1番飛んだかな。 ○ 短くしたのが1番よく飛ぶ。 ○ 短くて、空気が少ないのによく飛んだのはどうしてなのかな。 ○ 空気がたくさん詰まればロケットを遠くに飛ばすんだと思う。 ○ 空気は本当に縮まって元に戻ろうとする力があるのかな。 ○ 空気をは縮めると元に戻るよ。 ○ 水は本当に縮まないのかな。 ○ ロケットを飛ばすのは空気が元に戻る力だったんだ。

他県の生産開発の工夫との比較からこれからのいちご生産の方向性を見出す社会科学習 第5学年1組 社会科学習指導案

指導者 藤 野 俊 明

小単元 開催!福岡いちご生産会議

指導観

- 本小単元は、福岡県のいちごの開発や生産、出荷の工夫を比較追究することを通して、我が国の農業に携わる人々が自然条件を生かしたり、消費者に対応する農産物をつくろうと工夫努力していることをとらえることをねらいとしている。具体的には①福岡県や我が国の農産物の生産の様子に興味関心をもつこと②いちごの開発や生産出荷の工夫や努力の比較から法則性を見出すこと③開發生産出荷に携わる人々の工夫や努力を取材や聞き取り、統計的資料から調べること④人々が消費者の要望という社会的条件や自然的条件を生かして生産を行っていることをとらえることである。
- 本学級の子どもたちは、中学年で福岡県の特徴ある地域を生活や生産といった観点から調べ、比較するを通して、それぞれの土地の特徴ある地理的条件を生かした生活が営まれていることをとらえてきている。そこで本小単元では、我が国の農産物生産の様子について複数の事象を開發生産出荷の観点から追究し、比較させることで農業に携わる人々は自然的社会的条件を生かして生産を行い、より「食」と「農」をつなげる生産を行っているという法則性をとらえ、これからの農

業を見ていく視点として適用させることに挑戦させていく。このことは比較や条件思考という能力を高めると共に、自らの食生活を農業が支えていることをとらえさせ、社会科を学ぶ意義を高める意味でも価値高い。

- 本小単元の指導にあたっては、我が国の農業生産と自然環境や国民生活とのかかわりを見出す文化の学びを進めていく。そのためにまず、つかむ段階では生活に身近な県産の野菜を提示したり、流通センターの見学をしたりして学習問題「福岡県産のいちご生産に携わっている人々はどんな工夫をしているのかを他県と比べて、福岡県産のよさを発信しよう」を設定させる。次にさぐる段階では、いちごの開發生産の工夫や努力を複線的に追究させていく。そして、追究内容毎に比較させていく開発会議を設定して、それぞれの共通点から人々が自然条件や社会条件を生かしながら生産を行っているという法則性を見出させていく。さらに、今後の福岡県の農業を発展させる方策について考えさせることで、見出した法則性を適用させていく。最後に県の農業を発展させる方策を作成検討吟味しながら県の農政作として発信させて、学習をまとめさせる。

目 標

- 1 「福岡いちご生産会議を開こう」の目的のもと、いちごの生産の様子を他県と比較追究することを通して、共通する人々の工夫から自分たちの食生活を支えている農業を大切にしていこうとする態度を培うことができる。
- 2 福岡県産のいちごの開發生産出荷の様子を調べることを通して、人々が土地の条件や健康への要望という社会的条件に適用するように開発や生産、出荷を行っていることをとらえることができる。

計 画 (約12時間)

階 段	つかむ段階 (4時間)	さぐる段階 (6時間)	ひろげる段階 (2時間)
活 動 と 内 容	1 福岡県の農業の特色を複線的に調べる学習計画を立てる (1) 福岡県産農産物を調べる② ○ 福岡県の農業の概要の把握 (2) いちごの出荷までの過程から学習計画を立てる。 ② ○ 追究対象や方法の明確化	2 福岡県産のいちごの開發生産出荷の工夫や努力の法則性を調べる。 (1) 生産における工夫努力を調べる。 ③ ○ 工夫や努力を観点別に調べること (2) いちご生産会議で工夫や努力を比べる。 1/3本時 ○ 消費者につなげる法則性を見出しと適用	3 追究内容を啓発新聞にコース別にまとめ、発信する (1) 追究内容を啓発新聞にまとめる。 ① ○ 工夫や努力の構造化 (2) 新聞を発信しまとめる。 ○ 有用感の感受
いちごの開發生産の比較追究から農産物生産の方向性を見出す学び			
支 援	※ 福岡県産の主な農産物の提示と農産物マップ ※ 生産量の比較的な提示	※ 普及センターでの開発や生産出荷に関する見学や取材 ※ 参画への事象を提起するGTの招聘	※ 追究内容をもとに内容を構造化できるように資料の提示
評 価 規 準	● 福岡県の農業生産の概要を資料からとらえている。 ● 比較追究する対象と観点を見出している。	● 福岡県の生産や出荷の工夫や努力を見学や具体的資料からとらえている。 ● 複数の事象の比較から食と農をつなげる生産の法則性を見出している。	● 福岡県の農業生産を発展させるための「健康」という観点を生かして表現している。

本時の授業仮説

福岡県の農産物の開發生産出荷についていちごで他県と比べて追究している場面において、追究内容を比べたり、福岡県の農業の現状についてGTに取材する場を設定すれば、消費者を大切にしたい農業への移行や特色あるブランド化といった法則性を見出すと共に、魅力ある福岡県のいちご生産のため生産者と消費者の立場としてより生産の工夫を活かした考えをもつようになるであろう。

本時の目標

- 1 福岡県の農産物の開發生産出荷の現状や工夫を観点毎に比べたり、GTから福岡県の現状と課題を取材したりすることを通して、消費者を大切にしたい県の農業の特色を伸ばしていこうという態度を培う。
- 2 福岡県産いちごの開發生産出荷の工夫を出し合うことを通して、消費者を意識した生産の法則性を見出すとともに、生産を生かすことや出荷方法を方法を向上することが重要であることをとらえることができる。

準備

追究観点毎の自作資料 福岡県の就業者数や競争力を示す資料 学習ノート 流れ図

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）

1 いちご生産や開発の様子から本時学習のめあてについて話し合う。

○ いちごの開発や生産の様子を比較するめあての把握

（めあて） 福岡県のいちごづくりの様子を比べる農産物開発会議をして、日本一奪還のためのきまりを見つけよう。

※ 流れ図や学習ノートや自作資料をもとに前時までの学習を想起させ、他県との比較を行う会議を開催するめあてをとらえさせる。

2 福岡県のいちごづくりの特色を比べ、これからの福岡県のいちご生産の方向性について話し合う。

(1) 福岡県のいちごづくりの特色について他県と比べ、共通点と相違点について話し合う。

○ 福岡県の農産物生産の法則性を明らかにすること

	福岡県いちご	他県
開発	あまおうにつぐ新種の開発 他県産のいちごの品種調査	10年計画による品種改良 多種勾配と情報収集活用
生産	有機農法の定着 生産地の拡大	有機農法の定着 自然条件にあう品種生産
出荷	朝摘みや冷蔵システム、トレーサビリティシステムの本格導入	

消費者を意識した生産出荷システム

※ 追究対象県の追究内容を観点別に出し合わせることを通して、どの対象にも共通している法則性を見いだせる。

(2) 福岡県農産課の方のお話を聞き、今後の福岡県の農業で大切にしていきたいことを話し合う。

○ 福岡県農業の発展のための方向性を明らかにすること

【GTの話】

福岡県のいちごは日本をリードする技術があり、日本一をねらえるところまできている。そのなかで出荷方法を工夫したり、消費者のニーズに応えることは重要。さらに生産効率をあげる工夫をしたい。

※ 見出した法則性について評価してもらうとともに、福岡県の現状を提示してもらい、法則性を適用できるようにする。

3 これからの福岡県のいちご生産で大切にしたいことを話し合う。

○ 消費者に軸足を移した開發生産出荷の重要性をとらえること

※ GTの問題提起に対する考えを話し合わせ方向性を明らかにさせる。

子どもの思考の流れ

○ いちごはあまおうの生産が拡大されて県外への出荷も増えてきて、あまおうは福岡農業の顔になったよ

○ あまおうは「赤い」「丸い」「大きい」「うまい」のあまおうで親しまれているようだ。生産量の多くは関東地方に出荷されているよ。

○ あまおうの生産によって日本一の座をねらえるところまできているよ

○ 開発のポイントは味と安全性が中心になっているよ。それには消費者の要望を取り入れないといけないね。調査しないといけないけれど、いちごは関東地方での評判も意識して生産し糖度の研究もしているよ。

○ 今までよりもより消費者のことを考えて生産するようになったと中堀さんは言っていたよ。

○ 流通センターでも消費者を意識しての冷蔵出荷等の工夫をしていたよ。おいしさを維持する工夫だね。

○ 3つに共通するのはできた者が消費者に喜ばれるものになるようにと出荷だけでなく、安全性にこだわっていることだね。

○ 福岡は日本でも有数の農産物を抱えているな。でも生産者が減っているから大変だぞ。

○ 開発で生産力向上も大切にしたいけれど安全性など消費者のことを考えた生産や開発は続けたいね。

○ 山口さんがいうように食と農がつながる生産が大切だし、自分たちが食べるときにも安心だね。福岡県の農業のよさを大切にしたいね。

第5学年2・3組 家庭科学習指導案

指導者 脇 本 孝 枝

題 材 つくろう！さわやかライフ～洗濯はおまかせ！～

指 導 観

- 本題材は、衣服の働きに気付き、気持ちよく着るための衣服の手入れの仕方が分かり、日常生活で実践できるようにすることがねらいである。具体的には、①洗濯に関心をもち、生活に生かそうとすること、②衣服の種類や汚れに応じて洗濯を工夫しようとする、③水や洗剤を無駄にしない衣服の洗濯の計画を立てたり、衣服の種類や汚れに応じて洗濯ができること、④洗濯の必要性が分かり、洗濯の基本的な作業を理解していることが主な学習内容である。洗濯についての基礎・基本について身に付けると共に、子どもが自分で学び方を決め、生活での事象を学習材として課題を解決していこうとする素地を養うことができる。
- 本学級の子どもたちは、これまで家庭生活を見つめ直していくことで、家庭生活の課題を解決し工夫してよりよい生活を送りたいという思いをもっている。衣服の手入れをすることに関しては、家族任せという子どもがクラスの8割で、自分で洗濯をする子どもは少ない。洗濯した衣服を取り込む、たたむ、なおすという仕事の経験は多く、洗濯が必要であることは感じている。しかし、汚れたままでは気持ちが悪い、洗剤をたくさん使った方が汚れが落ちる等の理解で止まっている。そこで布の汚れによる性能変化や洗剤の洗浄効果を調べる活動を通して、衛生的な生活をするために生活を工夫する力を高めることができるようにしたい。
- 本題材の指導にあたっては、生活経験から得た思考の仕方や課題解決の方法の違いに対応した課題別学習を設定する。つかむ段階では、【試し活動Ⅰ】で洗濯の必要性を実践的・体験的な活動を通して実感し、自分の生活を見つめ直すことで生活に根ざした課題をつかむ。つくる段階では、【試し活動Ⅱ】の情報収集をもとに、科学的な見方を付加する実験や実習・観察を設定し、自分の課題を解決できるようにする。生かす段階では、環境や消費を考えた洗濯の家庭実践計画を立て、報告会をして家庭実践への意識を高め、「手洗いハンドブック」を作成することにより、課題解決したことを家庭での実践につなげ達成感をもたせたい。

目 標

- 1 日常着の手入れに関心をもち、布の汚れによる性能変化から洗濯の必要性が分かり、洗濯の基本的な作業を理解して衣服の洗濯の計画を立て衣服の種類や汚れに応じて洗濯できる。
- 2 衣服を気持ちよく着るため洗濯等の手入れの仕方が分かり、衣生活を快適にすることができる。

計 画 (約9時間)

階	第1次 (3時間)	第2次 (4時間)	第3次 (2時間)
活動と内容	1 衣服の手入れの課題をもつ。 (1) 自分の生活をふり返り、洗濯の必要性・洗剤の働きを実験を通して話し合う。 【試し活動Ⅰ】 ② ○ 洗濯の必要が分かること (2) 家庭での洗濯の様子を調べ、自分の課題をつくる。① ○ 自分の課題をもつこと	2 課題を解決するための見通しをもつ。 (1) 洗濯の工夫を情報収集してきたことを話し合い、課題解決の計画を立てる。 ○ 課題解決の計画を立てること ② (2) 気持ちのよい衣生活を送るための課題解決の方法を実験・実習等により確かめる。 【試し活動Ⅱ】 本時1/2 ② ○ よりよい洗濯の方法が分かること・洗い方・洗剤・水の量・干し方等	3 洗濯の家庭実践の計画を立て、報告会をする。 (1) 手洗いでできる物の家庭実践の計画を立てる。 ① ○ 家族の一員として洗濯の仕事を分担すること (2) 報告会をし、ハンドブックを作成する。 ① ○ 生活を工夫すること
	洗濯についての自分の課題を自己決定し、自分の生活を快適にする方法を見つける生活の学び		
支援	※ 汚れの付着による布の吸水性変化の実験の場の設定 ※ 情報収集活動Ⅰ・Ⅱ (家庭調査の場) の設定	※ 洗濯の手順表や洗剤の使用量と洗浄効果やすすぎと洗剤の残留の資料の提示 ※ 情報収集活動Ⅲ (家庭での洗濯の工夫を調べる場) の設定	※ 実践カードと報告会の場の設定 ※ 情報収集活動Ⅳ (家庭実践の場) の設定
評価基準	● 衣服の働きから洗濯に関心をもち生活を振り返る。 ● 試し活動Ⅰで洗濯の必要性が分かり課題をつかんでいる。	● 生活の中から課題を設定し、見通しをもって追究することができる。 ● 気持ちよい衣生活をするための洗濯の手順、洗剤の使い方が分かっている。	● 学習を生活の中に生かそうとしている。 ● 自分の生活を工夫できたことを感じている。

本時の授業仮説

試し活動Ⅱにおいて、自分の課題を解決するために科学的視点を付加するような実験や観察の場を設定すれば、課題を解決するための根拠を科学的に認識し、生活を工夫する観点を広げたり深めたりして自分の生活を変えようとすることができるであろう。

目 標

- 1 自分の課題を解決するために、洗剤の量や洗い方の種類、すすぎの回数等が実験や観察を通して分かる。
- 2 家庭の洗濯の工夫に気づき、目的に応じた手洗いの方法が分かる。

準 備

実験用具（洗剤、ビーカー、ペットボトル、試験布、タイマー）、資料（洗剤の濃度と洗浄効率など）

展 開

活 動 と 内 容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1 洗濯の必要性を想起し、気持ちのよい衣生活をするための自分の課題の解決法について実験等を通して確かめることを確認する。 ○ 課題をもとに調べてきた自分の家庭の洗濯の様子や工夫から、よりよい洗濯の仕方を自分の計画にしたがって調べていくこと （めあて） 自分の課題を解決するための手洗いの仕方を調べよう。 ※ 情報収集カードをもとに、自分の家庭の洗濯の工夫を確かめたり工夫の科学的根拠を調べたりして課題解決の見通しをもてるようにする。 2 課題解決のために自分の予想を試し、課題解決の見通しをもつ。 （1）自分の課題を解決するために、予想に基づいて試し活動Ⅱをし、自分の課題解決の方法を確かめる。 ○ 自分の課題解決の方法が分かること ※ ためすすぎした排水や流しすすぎした排水の実物の提示や洗剤濃度と洗浄効率など科学的に思考できるようにコーナーを設ける。 （2）試し活動Ⅱの結果分かったことについて話し合う。 ○ 汚れや衣服に応じた洗濯の仕方が分かること ※ 分かったことを実験別に構造的に板書し、それぞれの課題解決の方法を関係づけて考えることができるようにする。	○ 洗たくの手順は分かったけど、今日は、自分の課題のなかなかとれにくいしみの取り方を実験を通して解決していこう。 ○ 私は洗濯をしたことがないので、お母さんに聞いたら、すすぎは3回ぐらいでいいと言っていました。水がきれいになるのか調べてみます。 ○ 僕のサッカーのユニフォームの泥汚れがなかなか落ちません。どんな洗い方をしたらいいか比較して実験しきれいになる方法を見つけます。 ○ お湯と水ではどちらが汚れが取れやすいか比べてみます。本当にお湯の方が汚れが落ちたら、おふろの残り湯を使って洗たくをしたらとても合理的です。水も節約できます。

（予想される児童の課題解決の例）

洗たくはおまかせ！



自分の課題

なかなかきれいにならないくつ下の汚れを簡単にきれいにしたい。

課題を選んだ理由

なかなかとれにくいくつ下のよごれを簡単に手洗いできれいにしたい。
おふろのお湯を使ったら、水で洗濯するよりきれいなり汚れもよく落ちるようだ。お湯の方がきれいになるのなら、おふろに入ったときにくつ下は自分で手洗するよ。その結果をお母さんにも教えて洗濯に役立てたい。



観察・実験の場

- 洗濯温度と洗浄効果の比較実験（科学的視点）
- ① 3種類の洗濯液（A：水10℃，B：ぬるま湯30℃，C：ぬるま湯+洗剤）をそれぞれビーカーに入れる。
 - ② ごま油をスライドガラスの上に滴下。
 - ③ スライドガラスを洗濯液ビーカーに入れる。
 - ④ 油よごれの落ちる様子を観察する。

科学的認識

洗濯温度と洗剤の効果が分かる

生活を工夫する観点が広がったり、深まったりした姿

洗濯液温度を上げるだけで落ちやすい、洗剤を使うとさらに洗浄効果上がるという結果を得、洗濯温度と洗剤の効果を納得できたことから汚れを落とすために標準使用濃度の洗剤でお湯を使って洗濯した方ががいいと分かる子ども（合理性と経済性）

- 3 洗濯の工夫について話し合い、次時の学習は自分の課題解決の方法をまとめることを確かめる。

○ 洗濯の工夫の根拠や工夫する観点について分かること

※ 洗濯後の気持ちよさにも着目させ家庭実践の意欲につなげる。

○ みんなの実験の結果を聞いたら洗濯の仕方がよく分かりました。家でも手洗いで洗濯も取り入れて、家族を喜ばせたいと思います。

第6学年1組 人間総合学習指導案

指導者 高 野 誠 一

単 元 生きる輝きを求めて

指 導 観

- 本学級の子どもたちは、これまでに、文化総合学習で福岡城の歴史的な建築としての価値を追究したり人間総合学習において、いのちのすばらしさを感じ取ったりしてきている。また、持久走大会などの学校行事や、道徳の時間などで自分の目標に向かって努力する大切さに気づいてきている。そこで、高い理想を追い求めるこの期に本単元を設定し、自分のいのちの輝きを求めて精一杯生きる姿に出合わせる人間総合学習をおこなうことは、自他の生命を大切にしようとする態度を育てるとともに、人間は生きる糧をもつ存在であるという見方を培う上でも価値がある。
- 本単元は、足が不自由ななかで水泳選手という自分の目標に向かって努力し続ける人との出会いから、自分の理想や目標に対する生き方を見直す人間総合学習である。本単元で対象としている人物は、脳性麻痺のため歩行が困難で、長くは生きられないと宣告されたが、競技水泳をめざし、パラリンピック日本代表として活躍できるようになった方である。この人物を追究することでの主な学習内容は、①人間が輝いて生きるためには、自分の理想や目標が大切であり、その実現には強靱な意志や挫折を克服することが必要であることに気付くこと、②自分の目標や理想に対する生き方を見直し、自分への自信をもつこと、③人物を追究する視点を持ち、多面的・総合的に、人間が生きることについて考えることなどである。このような人物を学ぶことは人間が生きる輝きを求める存在であることを自覚できる意義がある。
- 本単元の指導にあたっては、自分の理想をもち輝いて生きる人を追究し自分自身の生き方を見つめる人間の学びで展開する。まず課題把握の過程では、人物が足が不自由であるなかで、水泳選手としてパラリンピックをめざした様子から目標を実現していく人物の考えについて追究する課題をつかませる。次に、人間追究の過程では、人物について描いた資料や年譜をもとに人物が目標をもち困難を克服する様子をとらえるようにする。そして、直接、人物とかかわり、個性を生きし生きる輝きを求める考え方に共感できるようにする。さらに、生き方向上の過程では自分の理想や目標について考え、自分も理想を追い求める存在であると自信をもつことができるようにしたい。

目 標

- 1 自分の目標に対して努力し続けている人物を追究する課題を設定し、人物史をもとに調べたり直接話を聞き取ったりして調べるなどの多様な調べ方を通して、人間を多面的・総合的に追究することができる。
- 2 自分の生きがいを追い求める人物の考え方を追究していくことで、目標や理想をもつすばらしさと実現に必要な意志力の大切さに気づき、自分の目標や理想について考えることができる。

計 画 (約10時間)

単元	課題把握 (2時間)	人間追究 (6時間)	生き方向上 (2時間)
活動と内容	1 パラリンピックのメダリストとの出会いから、課題を設定する。② ○ 人物の置かれた状況と現在の姿を比較することで、目標達成に必要な考えについての課題を設定すること	2 人物を追究し自分の応えをつくる。 (1) 人物史を資料をもとに調べる。② ○ 人物の状況について理解すること (2) 人物の考えを聞き取る。本時2/2 ② ○ 人物の考え方の推し量りと共感 (3) 人物追究から課題の応えをつくる。② ○ 目標や理想の実現への意志力の把握	3 人物とかかわって得た見方や考え方をもとに自分の生き方について考える。② ○ 自分も理想を追い求め、生きる輝きをもてる存在であると自分の可能性に自信をもつこと
理想を求めて生きる人物の考え方をもとに自分の生き方を高めようとする人間の学び			
支援	※ 人物の生まれたときの様子やパラリンピックにかかわる資料の提示	※ 人物の行為が記述されている資料の提示 ※ 直接、人物とかかわり、人物の心情や考え方を聞き取る場の設定	※ 自分の理想や目標について問い直す活動 ※ お礼の手紙を書く活動
評価基準	● 人物に対する興味関心を高め、人物が置かれた状況や心情などの人物の生き方にかかわる課題を設定している。	● 自分の課題をもとに、人物について行為や心情、状況などから追究している。 ● 人物の心情について自分と照らして推し量っている。	● 自分の理想や目標について考えたり、それらの実現に近づこうとする気持ちを表したりしている。

本時の授業仮説

梶原さんが水泳選手としてこだわり続ける理由を追究する場面において、自分が気がかりに思ったそれぞれの時点での思いや考えを聞き取ったり、練習の様子の資料をもとに、梶原さんのこだわりについて考えたりする場を設定すれば、自分の個性を生かして生きる輝きを求める人物の思いや考えに迫ることができるであろう。

本時の目標

- 1 自分が気がかりに思った場面についての推し量りをもとに、積極的に人物とかかわることができる。
- 2 梶原さんが水泳選手としての自分にこだわる理由を追究することを通して、水泳という自分の個性を生かして生きる輝きを求める思いや考えをとらえ、自分の理想や目標を問い直そうとすることができる。

準備

学習ファイル、梶原さんの人物年表、練習の様子の資料(VTR他)、学習の流れ図

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 梶原さんの人物年表をもとに、自分が特に関心をもった場面について話し合う。 ○ 水泳を始めたときや、アトランタのパラリンピックでメダルをとったとき、シドニーでメダルがとれなかったときなどのそれぞれの場面で自分が推し量った考えについて想起し、めあてをつかむこと (めあて) 梶原さんが水泳の選手にこだわり続ける理由について、梶原さんと交流して明らかにしよう。 ※ 梶原さんの人物年表や学習の流れ図をもとに、これまでの学習の過程を振り返らせる。 2 梶原紀子さんと対話する。 (1) 梶原さんについて感じたことや特に関心をもった時点での考え方について話し合う。 ○ 自分が梶原さんだったら、どのように感じていたか推し量ったことをもとに梶原さんの心情に共感すること ※ 梶原さんについて特に関心をもった時点を類型化しておき、意図的に指名して、それぞれの時点での梶原さんの心情について考えさせる。 【予想される課題ごとの反応】 水泳を始めた頃 ・どんなきっかけ ・水泳を始めたときの気持ち アトランタで ・メダルを獲得したときの気持ちは シドニーで ・メダルが獲得できなかったときの気持ちは (2) 梶原さんが水泳選手としての自分にこだわる理由を話し合う。 ○ 自分の個性、生きがいとして選手を続ける梶原さんのこだわりを推し量ること ※ 練習の様子のビデオを見ながら話し合う。 (3) 梶原さんの話を聞く。 ○ 水泳という梶原さんの目標が梶原さんに与えた生きる輝きを感じ取ること ※ 梶原さんに、自分の生きがいである水泳を通して得た考え方を話していただく。 3 梶原さんの話を聞いて感じたことを話し合う。 ○ 梶原さんの思いや考えへの共感と理想をもつすばらしさの感受 ※ 梶原さんから子どもたちへのメッセージを話していただく。	○ 梶原さんは、スポーツを見るものだと考えていたのに、どうして水泳を始めようとしたのだろう。 ○ アトランタで金メダルをとったときには、とてもうれしかっただろう。どのように努力したのだろう。 ○ シドニーでメダルがとれなかったときの気持ちはどうだっただろう。 ○ 梶原さんの気持ちや考えについて梶原さんに直接聞いてみよう。 ○ 水泳を始める前は、スポーツなんてできないというあきらめたような気持ちや、自分を外に表現することに難しさを感じていらっやっただな。 ○ 金メダルを獲得したり、世界新記録を出したりするためには、自分の目標に対する困難さを克服することが大切なんだな。 ○ 一度選手をやめようと思っていたのに、どうしてまた、水泳選手を続けるようにしたのだろう。 ○ こんなに練習を積み重ねて、何が梶原さんをここまで動かしているのだろう。 ○ 梶原さんにとって、水泳選手であることはどんな意味があるのかな。 ○ 梶原さんは、自分の個性として水泳選手であることを求め続けているし、それが自分の生きがいだとしっかりと考えていらっやる。 ○ 自分の理想をもって、そのために努力を積み重ね、負けないことの大切さや、チャレンジ精神をもち自分を表現するすばらしさを感じた。



梶原紀子さん

チームに合った作戦ゲームをつくり、パスを駆使して攻める動きを身に付ける体育科学習 第6学年2組 体育科学習指導案

指導者 岩 城 一 磨

単 元 つくろう！ユニバーサル・ホッケー

指導観

- 本単元は、ボールをスティックで操作しパスで運び、ゴールにシュートすることで得点を競い合うボールゲームである。本単元のねらいは、動きや作戦の課題を、作戦ゲームをつくり、解決する活動を通して、より高い動きや作戦へとつくりかえることができるようにすることである。具体的には、①ルールを単純化したミニ・ゲームを行い、チームの動きの課題をルールや場の工夫から分析的にもつこと、②作戦ゲーム（タクティクスゲーム）をつくり、戦術的な動きの解決を繰り返し行うこと、③動きや作戦を交流で、相互評価し、位より一層、高め合っていくことが主な内容である。このことは、自分の動きを振り返り、自分で練習を工夫し、動きを高める子どもを育てる上で意義深い。
- 本学級の子どもたちは、ボールゲームにおいては、チーム内で役割分担をし、互いに協力してゲームを進めたり、ルールや作戦、ゲームの技能について交流したりする姿が見られる。また、パスでボールをつなぎ、シュートに結びつけることができる子どもも複数見られる。基本的なルールについては、他のボール運動の経験から、十分に理解している。しかし、パスを受け
- るために位置取りをしたり、シュートにつないだりという戦術的・空間的な動きは十分ではない。また、子どもたちは、自分のチームの特徴に気づき、攻撃や守備を考え、ゲームを組み立てることができつつある。そこで、文化としてのゲームづくりとともにゲームの状況に対応する基本的技能も併せて高めていきたい。
- 本単元の指導にあたっては、運動をつくる文化の学びに重点をおき、チームの作戦を支える集団の動きを高める。みいだす段階では、ミニ・ゲームを行わせ、チームで協力する動きが得点に結びつくことをVTRでつかみ、課題を作戦づくりで具体的に設定できるようにする。次に、ひろげる段階では、タクティクスゲームをつくらせ、ルールや場を工夫しながら、チームの作戦にかかわる動きを身に付け広げていく。そのために、プレー分析カードに動きを記録しながら動きを空間的に広げ、作戦をつくり出す力を身に付ける。最後にたかめる段階では、自己・相互評価させチームの動きや作戦の高まりを味わわせる。そのために「6－2ユニ・ホック大会」を開き、チームの動きを発揮させ、身に付けた作戦の有効性を実感させる。

目 標

- 1 ゲームにおけるチーム内での役割を分担しプレーしたり、友達と協力して作戦をつくり出したりすることで、他のチームと得点を争い合うユニバーサル・ホッケー（ユニ・ホック）のゲームを楽しむことができる。
- 2 新たなゲームの体験から、コートや人数を制限したミニ・ゲームでチームの作戦を支える動きの課題をもとに作戦ゲームをつくり、練習を工夫することで、集団の動きを身に付けゲームに生かすことができる。

計 画（約9時間）

階	第1次（2時間）	第2次（6時間）	第3次（1時間）
活動と内容	1 ユニ・ホックに出合い、動きや作戦の課題を把握する。 (1) 試しのゲームをする。① ○ ユニ・ホックの基本的な動きの分析的なとらえ (2) ミニ・ゲームをする。① ○ 作戦をつくり課題の把握	2 タクティクスゲームをつくり、作戦を支える動きを高め、課題追究を繰り返す。 (1) タクティクスゲームを用い空間的視点を明確にし動きを高める。本時2／3③ ○ チームの空間的な動きのとらえ (2) ゲームをしながら動きを広げる。③ ○ チームでパスを駆使する動きの広がり	3 作戦や課題とした動きの高まりを実感する6－2ユニ・ホック大会を行う。 ○ 作戦の高まりとそれを支える動きの高まりの評価・自己・相互評価による総合的評価をし合う。
集団のパスを中心とした戦術的な動きや新しいゲームづくりで運動をつくり出す文化の学び			
支援	※ 場や人数を限定したり、VTRの集団の動きを比較したりして課題を把握させる。	※ 動きを限定し、タクティクスゲームを行い、空間的な動きを解決させる。対抗戦を行い、チームの作戦をゲームでためす。	※ ユニ・ホック大会で総合的に評価させ、作戦・動きの高まりの実感をさせる。
評価基準	● ミニ・ゲームでチームの動きをとらえたり、VTRのチームの動きを比較したりしてチーム課題を把握している。	● タクティクスゲームをチームの動きや作戦の課題に応じて友達と協力してつくり、空間的な動きや作戦をつくり出し、実際のゲームで繰り返し試し、いかしている。	● チームの動きを評価し合って、動きや作戦の高まりや作戦のなかの自分の役割のよさを実感している。

本時の授業仮説

ゲームの攻撃の場面において、最少人数で実行できる作戦をつくり、タクティクスゲームで練習を工夫させれば、チームの動きをつくり出し、自らチームの戦術を高め、ユニバーサル・ホッケーを楽しむことができるであろう。

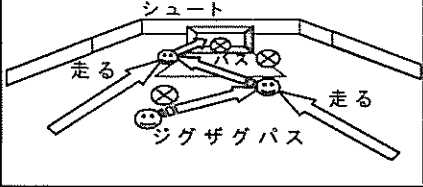
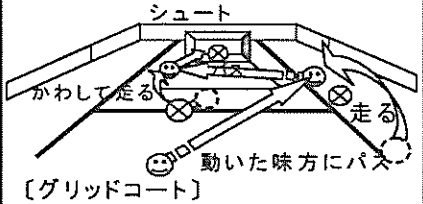
本時の目標

- 1 友達と協力し、チームの作戦に応じたパスを中心とする攻め、役割分担の守りの動きの課題を場を工夫して練習し、チームの特徴やチームの作戦を生かしてユニバーサル・ホッケーのゲームを楽しむことができる。
- 2 作戦の練習をするためにゲームをつくり、ゲームでの相手意識やシュートまでの流れから、作戦を支える動きを空間的な視点でとらえ、追究していくことで、新たな動きを身に付けることができる。

準備

スティック、ボール、ゴールケージ、ゼッケン、得点板、ストップウォッチ、プレー分析カード、作戦ボード

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 チームの課題の動きをもとに今日のゲームについて話し合う。 (1) チームの動きを分析しチームの作戦を高める学習の流れをつかむ。 ○ 前時に設定したチームの作戦とシュートまでの動きの想起 ・VTR、プレー分析カード、作戦ボードなどによる課題の確認 ※ 前時学習の流れ図を提示し、本時の学習での追究内容を確認する。 (2) ためしのゲーム1を行い、本時学習のめあてをつかむ。 ○ 本時追究するユニバーサル・ホッケーのめあての把握 (めあて) チームの作戦が成功するように、練習や作戦を工夫し、ゲームでたくさん得点できるようになる。 【ユニバーサル・ホッケーのルール】 ・シュートが決まった時、センターラインでのフェイスオフ ・得点は、1ゴール1点 ・ゲーム時間は、5分間 ※ VTRの動きやプレー分析カードから、役割分担しチームで協力する動きやフロアを上手に使った空間的な動きの必要性をつかませる。 2 作戦をもとに工夫したフロアで練習したり、ゲームでチームプレーを発揮したりするタクティクスゲームをつくり、チームの作戦をつくる。 (1) 作戦を成功させるためのチームの動きを調べ、作戦をつくる。 ○ 相手を加えたタクティクスゲームによる空間的で連続した動きのとらえと新たな作戦、動きの課題の把握 ※ プレー分析カードで動きを振り返らせ、空間的な動きを分析することで相手を加えた場合のタクティクスゲームがつけられるようにする。 (2) 交流タイムでチームの動きや作戦の内容・方法を評価する。 ○ 作戦を支える空間的で連続した動きの課題の把握 ・相手ありのタクティクスゲームでの攻撃プレーの空間的な気付き ・相手の得点を阻む防御プレーの空間的な気付き ・パスをつなぎ、フロアを活用した流れのある作戦やプレー ※ 課題の追究・吟味をすすめるために、タクティクスゲームのアイデアやチームのプレー分析カード、作戦ボードでの交流タイムを設定する。 (3) ユニバーサル・ホッケーを行い、作戦をためし、動きを評価する。 ○ ゲームによる作戦を支えるチームの動きの課題の明確化 ※ 交流で気づいた新たな動きを生かして、兄弟チームで5分間のユニバーサル・ホッケーのゲーム2を行わせる。 3 チームの動きや作戦をもとにできるようになった動きを発表する。 ○ 作戦やプレーの動きの高まる追究方法や方向性の把握 ※ 児童の演示による交流をもち、チームの課題解決の意欲をもたせる。	○ 今日は、目標の達成に向けてチームの課題をもとに練習の場を工夫し作戦が成功するようにしよう。 ○ どんな作戦なら得点できてゲームで勝つことができるのかな。 ○ チームの作戦を成功させるためにはどんな動きにすれば、得点できるようになるのかな。 【作戦の例】  ○ 作戦が成功するようフロアを広く使ったタクティクスゲームをつくり繰り返しチームで動きを高めよう。 【タクティクスゲームの例】  ○ 友達と分析カードを活用してお互いに評価しながら課題を決めよう。 ○ △△チームは、フロアを広く使ってパスをつなぎ作戦を考えたのか。 ○ ユニバーサル・ホッケーのプレーの秘密は、パスのつなぎ方やチームで協力して動く作戦にあるのだな。 ○ 練習の場を工夫して、空間的な動きのチームプレーを高め、もっと得点できるようになりたいな。

元の襲来に立ち向かう武士の姿から、鎌倉幕府の力をコース別学習でとらえる帰国子女教育社会科学習 第6学年3組 社会科学習指導案

指導者 高 良 祐 治

小単元 そのときどうした？鎌倉武士～元の大軍博多にせまる！～

指導観

- 本学級の子どもたちは、様々な国から長期滞在を経て帰国しており、個々の学習経験や身に付けている知識など、実態に大きな違いが見られる。前小単元「鎌倉幕府の始まり」においても、頼朝が鎌倉に幕府を開いたようすを幕府と武士の主従関係の仕組みや結びつきの強さをとらえた子どもや、幕府が開かれたという事実をとらえている段階の子どもなど様々である。このため、個の実態に応じて学習展開を変える必要がある。こうした個の実態をふまえてコース別学習を展開することは、子どもたちが、①自己の学習に見通しをもつことにつながる、②今日の日本の成り立ちの背景を理解し、日本の歴史を大切にしていこうとする心情をはぐくむ上でも価値がある。
- 本小単元は、2度にわたる元の襲来を退けた幕府軍の様子を追跡し、幕府の政治の影響力が地方にまで広がっていた当時の様子をとらえることをねらいとしている。元との戦いは、子どもたちが生活する福岡を舞台としており、遺跡や資料や歴史研究家などに直接出会うことができ、イメージをつくりながら追跡していくことが可能である。そこで、この戦いの様子を追跡していくことでの主な学習内容は、①ここ福岡の地を舞台に今から700年以上前に元との戦いが繰り広げられた様子をとらえること、②防塁を造ったり、命がけて戦ったりするなど、九州を中心として全国の武士が団結して元の攻撃を退けたことをとらえること、③武士の行動のようすから幕府の影響力が九州にまで及んでいたことに気付くことなどである。
- 本小単元の指導にあたっては、前小単元でとらえた武士による政治の始まりの様子と、元との戦いの様子を手がかりとして北条時宗を中心とした幕府の力が九州にまで及んでいたことを個の実態に応じてとらえさせ、時代観をつくらせたい。そこで、習熟度をもとに3つのコースで学習を展開する。具体的には、Aコースは、元・幕府・鎌倉武士の立場から追跡させることで日本が元に支配されなかった原因を、Bコースは、防塁が地方武士によってつくられる様子を見学やジオラマをもとに再現し、幕府の影響力が地方の武士にまで及んでいたことをとらえる。Cコースは、戦いや防塁の様子を、用語ヒントカードや体験的活動で具体的に追跡し、紙芝居作りを通してとらえさせていく。

目 標

- 1 見学や歴史ガイドとの交流、場面の再現などの体験的活動を通して、元との戦いの様子についてのイメージを膨らませ、自分の課題に応じて具体的に追跡することができる。
- 2 元との戦いについて、(A)武士が命を賭けてまでも戦った理由(B)日本を守った長い防塁がどのように造られたのか(C)武士の戦う様子や防塁の様子を追跡し、幕府の全国的な力で日本を守ることができたことをとらえることができる。

計 画 (約7時間)

階	第1次(2時間)	第2次(4時間)	第3次(1時間)
活動と内容	1 元との戦いに出会い、コース別の学習問題をつくる。 ○A:元に支配されなかったのはなぜか B:元の襲来をどのように防いだのか C:元との戦いの様子 ○ 追跡の見通しをもつこと	2 元との戦いについて追跡し、幕府の影響力について調べる。 (1) 元との戦いを調べる。 ② (2) 武士や幕府について調べる。本時2/2② ○ A:幕府の政治、元の事情、武士の事情からのとらえ B:幕府の政治力が全国的に広がっていたこと C:2度にわたる元との戦いの様子をとらえること	3 新聞をつくり、これまでの追跡を確かめる。 ○ 幕府の力により、全国の武士が福岡に集まり、元の襲来を退けることができたことを自分なりに整理すること
実態に応じて、元との戦いを追跡することで、自分の鎌倉時代のイメージをつくる文化の学び			
支援	※ 当時の世界地図による元と日本との比較や元軍の進路と福岡との関係の把握	※ 防塁や元寇資料館の見学 ※ 「福岡ガイド」の方々との交流 ※ 元との戦いをジオラマを利用して再現	※ これまでの学習を流れ図を利用して確認 ※ GTによる評価
評価規準	● 福岡で大きな戦があったことに関心をもち、幕府の全国的な力をとらえることにつながる課題を設定している。	● A:幕府の政治力、元軍の統制力、鎌倉武士の生活から元を退けた理由を、B:多くの武士が防塁づくりに参加したことは、幕府の力を物語っていること、C:元との戦いのようすを、それぞれとらえている。	● 幕府の政治と鎌倉武士の関係をふまえながら、自分の鎌倉時代のイメージを表現している。

本時の授業仮説

ここ福岡を舞台に繰り広げられた元との戦いに関心をもち、追究してきている子どもたちに、実態に応じて(Aコース)鎌倉武士にとっての元との戦い、(Bコース)防塁と武士と幕府の関係、(Cコース)防塁の造られる様子を調べるコース別学習を仕組めば、幕府の全国的な影響力をとらえ、学びへの自信につなげることができるであろう。

本時の目標

- 1 元との戦いの様子を、博多湾の海岸線を表したジオラマを使って考えたり、蒙古襲来絵詞などの当時の様子がわかる資料をもとに調べたりすることで、鎌倉武士の行動の様子を具体的に追究することができる。
- 2 元との戦いや鎌倉武士の様子を調べることで、(Aコース)武士にとって領地が何よりも大切なものであり、その領地を獲得できる戦いに進んで参加したこと、(Bコース)防塁が地方武士によって造られた様子から、幕府の力が九州まで及んでいたこと、(Cコース)防塁の役割やつくられる様子をとらえることができる。

準備

博多湾の海岸線を表したジオラマ 防塁の写真、実物大の図、同じ大きさの石 鎌倉武士の生活を表す資料

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)		
Aコース	Bコース	Cコース
1 恩賞にこだわる鎌倉武士の姿に関心をもつことで、元の戦いを追究する本時学習のめあてをつくる。 ○ 領地にこだわる武士の姿からめあてを確認すること (めあて) 武士が領地にこだわる理由を明らかにしよう。 ※ 蒙古襲来絵詞の恩賞を要求する場面を提示し、借金してまで恩賞を要求しに行ったことを提示する。 2 鎌倉武士にとっての領地について調べる。 (1) 鎌倉武士の生活について調べる。 ・ 領地の農作物の生産で生計を立てる→広い程高収入 ・ 質素な生活と責任の重さ ○ 領地の広さが、位や生活の豊かさに直結していることに気付くこと ※ 住居や食事の資料の提示 (2) 武士が命をかけてまで元との戦いに参加した理由を考える。 ・ 分割相続→戦って恩賞を得なければ、滅亡につながる ○ 元との戦いで活躍することが武士にとって命をつなぐ大切なものであることをとらえること ※ 分割相続の仕組みの提示 3 各コースの調べたことを話し合う。 ○ 危険な戦いでも戦わざるを得なかった武士の理由を説明すること ※ BとCコースの発表をふまえて説明させる。	1 防塁の長さを調べ、本時学習のめあてをつくる。 ・ 約15kmの防塁を半年でつくる ○ 見学してきたことと長さからめあてを確認すること (めあて) 幕府がどうやって防塁を造らせたのか調べよう。 ※ ジオラマ上で長さを実感させ、2回目の襲来に備えて幕府が計画したことを確認する。 2 防塁と鎌倉武士との関係について調べる。 (1) 防塁を地方の武士が分担してつくったことについて調べる。 ・ 九州各地の武士が、水田10aにつき防塁建設3cmを分担 ○ 防塁が、九州一円の武士の自己負担によってつくられたことをとらえること ※ 資料「九国石塁構築分担地区」の提示 (2) 幕府の九州への政治の影響力について考える。 ・ 4kmで3貫5百文→現在造れば約10億円の費用 ○ 莫大な費用を負担した武士と幕府の影響力の関係をとらえること ※ 防塁建設資料の提示 3 各コースの調べたことを話し合う。 ○ 防塁が、幕府の命令に多くの武士が従って造られたことを説明すること ※ Cコースの後に説明させ、Cコースの発表を活かした説明をさせる。	1 見学した防塁の様子を振り返り本時学習のめあてを確認する。 ・ 博多湾沿いに広がる防塁 ○ 防塁は人が造ったことを確認しめあてをとらえること (めあて) ぼうるいについて調べ紙芝居にかくことを決めよう。 ※ ジオラマ上で防塁の様子を確認し、1回目と2回目の戦いの間につくられたことを確認させる。 2 防塁の造られた様子や役割について調べる。 (1) 防塁が造られる様子について体験を通して調べる。 ・ 石を積み上げた防塁の構造 ○ たくさんの人たちの努力や協力で、長い防塁が完成したことをとらえること ※ 実物大の石の積み上げ体験 (2) 防塁がつくられた目的やその効果について調べる。 ・ 3mの高さの防塁 ・ 50日間上陸を防いだこと ○ 防塁をあらかじめつくっておいたおかげで、元の襲来を防ぐことができたことに気付くこと ※ 実物大の防塁の絵を提示 3 各コースの調べたことを話し合う。 ○ 防塁について、紙芝居に載せたいことを説明すること ※ ジオラマや資料を使い、説明させる。

針の形や動きのとらえ方をいかし、時計の読み方を身につける障害児教育算数科学習 第5・6学年梅組 障害児教育算数科学習指導案

指導者 園 田 洋 一

題 材 なんじ、なんぷん! つくろう お出かけアルバム

指導観

- 本学級の子どもたちは、精神年齢3歳から7歳程度の5年生男子3名女子1名、6年生男子2名の計6名で構成されている。これまでの学習から、時計があり生活で使われていること、時計には針と数字があることなどをとらえてきている。時計の読み方では、12時をとらえる子ども、〇時をとらえる子ども、〇時半や〇時〇分を大体とらえる子どもと、その段階には幅がある。また時計の針の形からとらえている子どもや、針の動きからとらえている子どもというように、とらえ方にも違いがある。「テレビで〇〇がある7時が好き」など生活場面に即した時刻について興味や関心があり、意欲的に働きかけていくことができると考える。
- 本題材は、お話の中のお出かけする中で、生活場面とつなげて時刻の読み方や時間の求め方を身につけることをねらっている。そのために、梅組でお出かけするお話を設定する。その中で、バスに乗ったりお弁当を食べたりする時刻の時計をもとに正しい時刻を見つけ、その場面の写真を手に入れアルバムに表していく。こうすることで、お話の中で時間を意識する生活場面と結びつけながら、時計の読み方を身につけることができる。さらに時計のとらえやすさに応じるために2種類の模擬時計の操作を位置付けた活動を設定する。1つは針の形や向きから、もう1つは針の動きく順から操作する模擬時計である。具体的な学習内容は、①〇分などの時刻を読んだり〇分間といった時間を求めたりすること、②針の形や示す数の違いから時計のきまりをとらえる見方③時刻や時間を針の形や目盛りから求める操作の仕方、④身につけたことを生活の中で用い、自信ややる気を高めることである。
- 本単元の指導にあたっては、時計の針やその示す数字をもとに、その形や目盛りの順に目を向けながら、時刻を読んだり時間を求めたりすることをねらっている。そのために、身につけている範囲で学校生活におけるアルバム作りを行うことで、興味・関心を高め、数対象や手順をとらえさせる。次に、子どもの時計のとらえ方の傾向性から、針の形や、針の動きを順にとらえさせるアプローチによる模擬時計の操作を行うことで、より個に応じていく。最後に、実際に「山笠見学」のお出かけアルバムを作成することで、今まで身につけた内容をいかし、自信ややる気をもたせる。

目 標

- 1 時計の時刻や時間を読み、生活場面と時刻を組み合わせることで、時刻を表したお出かけアルバムを楽しむことができる。
- 2 お出かけアルバム作りを通して、AGは〇時を読むこと、BGは〇分を読むこと、CGは〇時〇分を読むことDGは〇分間や〇時間を求めることができる。

計 画 (約5時間)

階	きづく段階 (2時間)	ころみる段階 (3時間)	いかす段階 (課外)
活動と内容	1 試しのお出かけアルバム (学校生活編) を作る。 ○ お出かけアルバム作りに興味・関心を持ち、時刻や時間をとらえること ○ アルバム作りの手順が分かること	2 お出かけアルバムを作る。 (1) アルバム (山編) を作る。 ① AG針の違い, BG30分, CG5分, DG〇分間 (2) アルバム (海編) を作る。 本時① AG〇時, BG5分, CG1分, DG〇分間 〇時読む (3) アルバム (島編) を作る。 ① AG〇時, BG1分, CG, 〇時30分, DG, 〇時間	3 「山笠見学」のお出かけアルバムを作る。 ○ 身につけた時刻の読み方や時間の求め方をいかすこと ○ 時計についてのやる気や自信をもつこと
お出かけアルバム作りを通して、時刻や時間の求め方とその見方をとらえる基礎的・基本的な学び			
支援	※ 見方をもとにしたお出かけアルバム作りの活動の設定 ※ 試しのアルバム作り	※ 見方をもとにした段階的な時刻の設定や助言と、針の形や動きのとらえやすさに応じた数操作や補助具,	※ 新たな対象場面として実の場の設定 ※ 一人一人への賞賛
評価基準	● もとになる時計にの絵をもとに、模擬時計を使って時刻時間をみつけお出かけアルバムを作っている。	● 時刻を針の形から示したものを選り時刻を読んだり、時刻や時間を目盛りで示した模擬時計をもとに時間や時刻を読んだりしてアルバムの絵と時刻と合わせている。	● 校外学習「山笠見学」のお出かけアルバムを開き、〇時や〇時〇分、〇分間などと話している。

本時の授業仮説

お出かけアルバム（海編）を作る場面において、より個に応じるために、時計の仕組みをもとに見方を明らかにした内容を設定し、針の形や動きの順のとりえ易さに応じた操作や補助具によるお出かけアルバム作りを行えば、針の位置や針が示した数をもとにした見方から、時刻の読み方や時間の求め方をとらえることができるだろう。

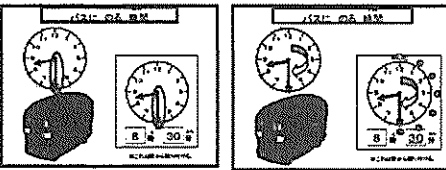
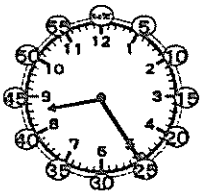
本時の目標

- 1 時計の時刻や時間を読み、生活場面と時刻を組み合わせることで、お話の中で生活の時刻を表したお出かけアルバム（海編）を楽しく作ることができる。
- 2 お出かけアルバム（海編）作りを通して、AGは〇時を読むこと、BGは〇分（5分単位）をが読むこと、CGは〇時〇分（5分単位）を読むこと、DGは〇分間（〇時をはさんで）を求めることができる。

準備

お出かけアルバム（海編）、時刻カード、時刻と時刻を示した時間カード、模擬時計、手順絵

展開

活動と内容		個の活動を促す支援
1 前時の本作りをもとに、めあてについて話し合う。 ○ AGは〇時、BGは〇分（5分単位）、CGは〇時〇分（5分単位）、DGは〇分間（〇時を挟んで）の時刻に気づくこと ○ お出かけアルバム作りへの意欲をもつこと （めあて） とけいを よんで、うみの アドベンチャースクールの お出かけアルバムを つくろう。		1 活動への興味・関心を喚起し、目的意識をもたせる支援 ○ 見方による内容の設定 ○ アルバム（海編）の提示と前時との違いの確認
2 作り方を示す手順絵やモデル演示を見て、アルバムを作る。 (1) 時計の絵をもとに時刻や時間を表したパーツをみつける。 ○ それぞれの手順と数操作についてとらえること ①場面の絵と時計を読むこと ②模型時計を操作し時刻を見つけること ③アルバムに時刻を書き込むこと ④時刻が書かれたものから正しい物（写真）を選ぶこと ⑤写真を取り出し、場面と照らし合わせること ⑥同じであれば、写真を貼り、完成させること。		2 時計のとりえやすさに応じた操作活動を促す支援 ○ 手順表の提示 ○ 子どもの時計のとりえやすさに応じたアプローチ
針の形をとらえさせるアプローチ	針の動きをとらえさせるアプローチ	 ・針の形をたらしえさせるアプローチ 針の形から、その向きにあるカード選ぶ ことで時刻をみとる補助具
①針の向きや形を見取ること ②大きな時計の数字の位置に対応して時刻を表すに小さなカードあり 針をその向きに合わせ、選ぶこと ③時刻を読み取ること	①12からの針の変化を見とること ②ちょうどから数字の箇所を順に5跳びで数えること ③同じだけ進ませた模擬時計の時刻を読み取ること	
(2) お出かけアルバム（海編）を作る。 ○ 生活場面と時計から時刻や時間をとらえること		 ・針の動きをとらえさせるアプローチ 12から針の動きに合わせ順に数えることで時刻をみとる補助具
○ AG：短針の示した数から「〇時」（短針のみ）を読むこと ○ BG：長針が示した向きと数字から「〇分」（5分単位・長針のみ）をが読むこと、 ○ CG：長針が示した向きの数字から1分ずつ数えだし、「〇分」（1分単位・長針のみ）を読むこと	○ BG：12から5跳びの数で「〇分」（5分単位・長針のみ）をが読むこと ○ CG：12から5跳びの数で「〇時〇分」（5分単位・長短針あり）を読むこと ○ DG：もともになる時刻から数えた目盛りの数から、「〇分間」（〇時をはさんで）を求めること	
3 自分の作ったお出かけアルバムを発表する。 ○ アルバムを作った達成感や満足感をもとに次時の学習についての意欲をもつこと		3 時計の本を作り上げた達成感を味わわせる支援 ○ 発表の場の設定 ○ 各子どもへの賞賛

全 体 会 (1 日 目)

▼ あ い さ つ (1 0 : 2 0 ~ 1 0 : 3 5)

福岡教育大学学長 松 尾 祐 作
学 校 長 永 江 誠 司

▼ 帰国子女教育発表 (1 1 : 0 5 ~ 1 1 : 2 5)

・社会的事象についての知識を獲得する

帰国子女教育社会科学習

一個の実態をもとに作成した

個別カリキュラムをいかした社会科学習プランナー

帰国子女教育部 高 良 祐 治

▼ 主 題 発 表 (1 0 : 3 5 ~ 1 1 : 0 5)

・豊かに生きる子どもをはぐくむ

教育課程の創造

ー自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する

くふくおかプラン＞の展開ー

研究主任 岩 城 一 磨

▼ 教 科 等 発 表 (1 1 : 2 5 ~ 1 1 : 4 5)

・自ら筋道を立てて考える算数科学習

ー問題事象の選択場面を位置づけた

算数科学習プランナー

算数科部 田 中 健 悟

▼ 児 童 発 表 (1 1 : 4 5 ~ 1 2 : 0 0)

・創り出そう！私達のハーモニー

指導者 秦 克 伸

第1日目 午後の部

公開授業指導案

▼ 学 習 指 導 (13:00～13:45)

学年 組	教科領域等	学び	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
2年2組	国 語 科	文化	仲間とふれあう生き物の話を読もう～スイミーをきっかけに～	平 島 健 二	2年2組教室
3年1組	学 級 活 動	生活	つくろう！めざそう！サンイチ・スピリッツ	矢 野 俊 次	子どもスタジオ
4年1・3組	図画工作科	文化	唐人町ランタンフェスティバル	北 田 尚 雄	図画・工作室
5年1組	算 数 科	文化	つくろう！分数カードゲームの攻略書	田 中 健 悟	5年2組教室
6年1・3組	理 科	文化	正体ズバリ解明！～水溶液ガイドブックを使って～	今 泉 伸一郎	理 科 室
6年2組	道 徳	人間	君は友を救えるか？	木 下 美 紀	6年1組教室

▼ 障害児学級と通常学級の交流学習指導 (13:00～13:45)

1年2組 1・2年ふじ組	体 育 科	なかよく あてよう！かわそう！ ごろびょんボール	久 保 勝 美彦 下 川 勝 彦	附属中体育館
-----------------	-------	-----------------------------	---------------------	--------

▼ 障害児教育学習指導 (13:00～13:45)

3・4年さくら組	生 活 単 元	つくって ふれあおう どうぶつひろば	原 田 敏 男	特殊棟中庭
----------	---------	--------------------	---------	-------

本の読み味わい方を創り出し、読書を広げていく国語科学習

第2学年2組 国語科学習指導案

指導者 平 島 健 二

単 元 なかまとふれあう生き物のお話を読もう～スイミーをきっかけに～

指導観

- 本単元は、場面の様子を想像しながら読むとともに、易しい読み物を進んで読む態度を育てることをねらっている。具体的には、①人物の言動について課題をもち、事柄の順序をとらえ、人物の様子を想像すること、②教材文「スイミー」をきっかけにして、易しい読み物を選んで読むこと、③読み物を読んで感じたことを話す楽しさを味わうことである。中心教材である「スイミー」は、人物の言動や場面の様子が単純で、明確な文型で、巧みな表現で生き生きと描き出されている。また、「黄色いバケツ」、「にじいろの魚」、「うさぎのホッパー」などの選択教材は、動物が主人公の話で、話の順序がとらえやすい作品である。これらの話を選んでつないでいくことは、人物に感情移入しながら、人物の心の動きを体験していく上でも意義がある。
- 本学級の子どもたちは、前学年の「たぬきの糸車」で、たぬきとおかみさんの心の交流について想像を広げ話の面白さを味わっている。また、前単元「ふきのとう」では、春を迎える自然と生物の動きの変化を順序よくとらえることを学習している。こうした学習で、話の大体を読み取りながら想像しながら読もうとする態度が育ちつつある。しかし、事柄の順序を考えて人物や場面の様子を想像しながら読むことは十分ではない。読書に関しては、ほとんどの子どもたちが読書が好きであるが、楽しさを味わうまでには至っていない。そこで、自分で選んだり、話をしたりして本を読み味わう楽しさを創り出すことができるようにしたい。
- 本単元の指導にあたっては、中心教材と副教材で順序を考え想像豊かに読み、本を読む楽しさを味わう読書ができるようにしたい。そのために、「スイミー」で順序をとらえて想像を広げて読む読み方を学び、選択教材でそれを生かし、読み広げていく文化の学びで展開する。自分の力を試したり、お話を選んだり、自分の感じたことを話し合ったりして読書への自信や意義を感じさせる。つかむ段階で、スイミーに出合わせ、関心を高める。深める段階で、スイミーの言動や場面の様子を事柄の順序に気を付けて想像豊かに読み取らせる。広げる段階で話を選択し、「スイミー」の読み方を使って読み、お話会を開く。興味・関心に応じて本を選択し読み進めていく楽しさとお話会で自分の読書を友達に伝える楽しさを味わわせたい。

目 標

- 1 スイミーの言動について課題をもって意欲的に読み、選択教材から自分の興味・関心に応じたお話を選んで読んだり、読み取ったことや感じたことを進んでお話ししたりして読書の楽しさを味わうことができる。
- 2 スイミーの心情がその行動やまわりの情景とともにどのように揺れ動いているのか叙述をもとに想像を広げて読み、他の読み物で事柄の順序をとらえながら人物や場面の様子を想像して読むことができる。

計 画 (約12時間)

階	第1次 つかむ段階 (3時間)	第2次 深める段階 (6時間)	第3次 広げる段階 (3時間)
活 動 と 内 容	1 「スイミー」に出会い、関心を高め課題について話し合う。 (1) スイミーの言動を話し合う。① ○ スイミーに関心をもつこと (2) 通読し、わかったこと・よくわからないことを話し合う。② ○ 学習計画を立てること	2 「スイミー」を想像しながら読む。 (1) スイミーの様子を話し合う。⑤ ○ 言動や場面を想像し広げること (2) わかったことや面白かったことを話し合うお話会を開く。① ○ スイミーの言動やわけ、感想を伝える楽しさを味わうこと	3 お話を選んで読み、感想を話し合う。 (1) 選んだお話を読む。② ○ 想像を広げながら選んだお話を読むこと (2) お話会を開く。本時① ○ 読書の意義を感じることに
順序をとらえて想像する読み方を創り、他のお話へ広げ、読書の楽しさを創り出す文化の学び			
支 援	※ 題名や挿絵に出合わせ、話を想像させ、スイミーに着目させる。 ※ スイミーの言動に着目させる。	※ スイミーの言動のわけが想像できる言葉を選べるノートの準備をする。 ※ 読み進める観点を明確にする。	※ 選択教材を提示する。 ※ 読書ボランティアの方と打ち合わせをし、支援する。
評 価 規 準	● スイミーの言動の言葉を指摘したり、そのわけを状況とつないで話したりしている。 ● 根拠をもって動作化している。	● スイミーの言動の言葉を指摘したり、そのわけを状況とつないで、話したり書いたりしている。 ● 感じたことをお話会で話している。	● 人物の言動のよさや面白さを想像して話している。 ● お話する面白さや選ぶ楽しさを書いている。

本時の授業仮説

お話を選んで読んできている子どもたちに、自分が読んだことを広げる場面において、お話会の観点を示したり、読書ボランティア（図書館の方、保護者、学生）の方と交流したりすれば、人物の気持ちを想像する読み方を使う意義を感じたり、読書したことをお話する楽しさを味わったりすることができるであろう。

本時の目標

- 1 自分が選んだお話を想像する楽しさを味わい、お話会のなかで自分から進んで話したり、友達の話に興味をもって聞いたりしながら、自分の読書のよさを感じたり自信をもったりして、読書への意欲を高めることができる。
- 2 スイミーで身につけた読み方や話し合い方を生かして、自分が選んだお話で読み取ったことをもとに、事柄の順序をとらえ、人物や場面の様子について想像を広げながら読み深め広げることができる。

準備

板書用カード、学習ノート、流れ図、拡大本文、拡大挿絵、お話会用机・椅子、ネームプレート（G T用）

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1 前時学習を想起し、本時学習のめあてを話し合う。 ○ 読みの観点を中心に自分の考えを作ってきたことを想起し、生き物たちのお話を開く意欲を高め、本時学習のめあてを把握すること （めあて） それぞれのお話の人物がしたことやそのわけ、思ったことについて、グループで話し合おう。 ※ 「スイミー」で読み取ったことと、自分が選んだ話で読み取ってきていることを比べさせ、どんなことがお話会で分かりそうか発問する。 2 自分の読み取りをもとに、それぞれのグループでお話を開く。 （1）人物がどんなことを、なぜしたのかについて話し合う。 ○ 事柄の順序をとらえ、人物や場面の様子を想像すること ※ 3つの観点のうちの2つ「人物がしたこと」「そのわけ」をそれぞれの話で具体化しておき、自分の考えを作らせておく。 （2）人物や話についての自分の感じたことを話し合う。 ○ お話の順序や自分が思ったこと、興味をもったところなどを話したり、話題に沿って話し合ったりすること （例）黄色いバケツ ①きつねの子は、黄色いバケツと出合ってどんなことをしたのかな。 「それじゃ、一週間だね。」 ・「何べんとなく、丸まぼしのたもとへバケツのへりをたたきました。」 ・バケツにいっぱい水をくみ、バケツのまわりをぐるぐるまわり、名前を書くまね、バケツに手をふり、「いいんだよ、ほんとに。」 ②きつねの子は、どうして「いいんだよ。」と言えたのだろう。 ・「ずいぶん、長いこと、黄色いバケツといっしょにいたような気がしました」 ・ほかのだれのものでもなく、いつも自分のものだった 黄色いバケツのおかげで、一週間楽しかったから。自分のバケツじゃなかったのに、この一週間だけは自分のものと思えたから。 ③そのことをどう思うかな。 きつねの子がかわいそうに思ったけど、きつねの子は最後に、にっこり笑ったからよかった。きつねの子はバケツと過ごした一週間がとても楽しかったんだな。 ※ 読書ボランティアの方々にグループに入っていただき、支援する。図書館の先生には、本を読みたくなるような子どもたちが気づかない観点からの働きかけを、保護者の方からは子どもたちの読書への意欲を引き出すような働きかけを、学生サポートには、子どもの感想を引き出す進行や話し合いが苦手な子どもへの支援をお願いする。 3 お話会の感想を書きまとめて、お話会でわかったことや自分が選んで読んでお話会を開いてよかったことを話し合う。 ○ 読書の楽しさを味わったり、読書のよさや自信を感じる ※ ゲストティーチャーを代表して、図書館の先生から子どもたちのよさ（言葉をもとに想像したり順序よく考える読み方や話し方）を評価してもらったり、他の動物たちが出てくるお話を紹介してもらったりする。	○ 「スイミー」で読んできた読み方を使って、自分が選んだお話を読んで、考えを作ってきたな。 ○ 今日は、いよいよお話会だぞ。どんなことがわかるかな。自分が思ったことをみんなに教えてあげよう。 ○ お話会でどんな話かはっきりするかな。友達の考えを聞いてみよう。 ○ まず、登場人物がどんなことをしたかを話し合うんだな。 ○ きつねの子は、黄色いバケツに出合って、毎日バケツを見に行き、いろいろなことをしてあげてるな。 ○ 早く一週間がたたないかと思って、いるんだろう。楽しみにしてるな。 ○ うさぎの子やくまの子もきつねの子のことを心配して、いろいろな知恵を出して上げているな。 ○ きつねの子は、自分のものにならなかったけど、それまでの一週間が楽しくて、自分のものだったから、もうバケツがなくても大丈夫なんだろうな。心の中にあるんだろうな。 ○ きつねの子がかわいそうだけど、きつねの子は、にっこり笑っているからすごいと思うな。強いなあ。 ○ 黄色いバケツととても仲良しになった気持ちなのかな。いつかまた、あのバケツにきつねの子が出会えたらとても素敵だろうな。いいお話。 ○ 自分で読んで、こうじゃないかなと書いていたことが今日のお話会に役に立ってよかったな。 ○ 読みの観点をもとに、自分で読み取っていくことができて自信がついた。この読み方を自分で続けよう。

集団の一員としての自分の存在価値を意識しながら展開する学級活動

第3学年1組 学級活動指導案

指導者 矢野俊次

題材 つくろう!めざそう!サンイチ・スピリッツ ～ホット!ほっと!サンイチキックベース大会をしよう～

指導観

- 本学級の子どもたちは、学級目標「ホット!ほっと!チャレンジ3の1」をみんなで決め、新しい友達とも仲良く学級生活を送ってきている。係活動では、友達と協力して取り組んでいる姿も見られる。しかし、そうした行為が学級目標の達成につながっている姿という認識はあまりない。そこで、本題材を通して、学級目標を具現化した姿を明らかにしながら集会活動に取り組ませたい。そして、集会の計画・実践を通して、活動に積極的ににかかわらせることで、学級集団の一員としての自分の存在価値を意識できるようにしたい。
- 本題材は、集会づくりを通して、学級目標を具現化した姿を求め、3年1組の一員としての自分の存在を意識できることをねらっている。具体的には、①集会を行い学級をよりよくしたいという願いを共有化すること、②集会の具体的な内容を集団決定し、集会でめざす姿を明らかにすること、③協力して集会を実施し、集会をつくりあげた満足感や有用感を味わうことである。本題材で取り上げるキックベースは、個々の運動能力に応じて容易にルールを変更することができ、子ども同士のかかわりが旺盛なスポーツである。また、
- 集団決定する話し合いにおいて分割討議を取り入れることで話し合いの中での個々の存在を意識しやすくなる。このようなことから、本題材はよりよい学級生活を求め学級集団への関与を強める上からも意義深い。
- 本題材の指導にあたっては、子どもたちが積極的に集会づくりにかかわる活動を展開したい。そのためには、つかむ段階では、学級でスポーツを楽しみたいという子どもの願いを取り上げ、どんな集会をめざしていくのか明らかにさせる。きめる段階では、キックベース大会の開催に向けて、ルールや表彰のあり方等について集団決定させていく。その際、分割討議を設定し一人一人の子どもが自分の役割を意識して責任をもって話し合いに参加できるようにするとともに、意見の根拠を明らかにした話し合いを展開させる。そして、分割討議で話し合ったことをもとに全体討議で集団決定を行う。その際には、集団決定した根拠を活動のめあてや学級目標と結びつけながら3年1組のめざす活動の姿を明らかにしていく。最後に行う段階では、計画に沿って集会を実践し、これまでの活動を振り返らせ集会をつくりあげた満足感や有用感を味わわせたい。

目標

- 1 学級生活をより楽しいものにしたいという願いを大切にしながら、学級目標を具現化する「ホット!ほっと!サンイチキックベース大会」を企画し、友達と仲良く協力して集会を実践していくことができる。
- 2 サンイチキックベース大会の活動内容を話し合ったり、集会活動を実際に行ったりする中で、友達のことを考えて判断したり行動したりするすばらしさを3の1のスピリッツとして実感することができる。

計画(約3時間+課外)

階	第1次 つくる(1時間)	第2次 きめる(1時間+課外)	第3次 行う(1時間+課外)
活動と内容	1 活動のめあてや見通しについて話し合う。 ① (1) サンイチキックベース大会のめあてを話し合う。 ○ 目的を明らかにすること (2) 実践までの見通しについて話し合う。 ○ 集団決定していくことを明らかにすること	2 サンイチキックベース大会の内容について話し合い、実践の準備をする。 (1) ルールやチーム分け等について話し合う。分割討議→全体討議 本時① ○ 活動内容を活動のめあての観点から集団決定すること (2) 決定したことをもとに、実践に向けて準備をする。 課外 ○ 協力して準備をする	3 「ホット!ほっと!サンイチキックベース大会」を行う。 (1) 計画に沿って、集会活動を行う。 ① ○ 協力して実践すること (2) 学級目標でめざしている姿を話し合う。 課外 ○ 満足感や、有用感を味わうこと
学級のめざす姿を明らかにしながら、よりよい学級生活を築いていく生活の学び			
支援	※ 計画委員会への助言 ※ 集団決定していくことを活動のねらいから整理	※ 分割討議と全体討議の設定 ※ 司会マニュアルの準備 ※ 話し合いを焦点化する助言	※ 行為の賞賛 ※ 活動を振り返る資料の提示・写真、VTR、感想文など
評価基準	● サンイチキックベース大会に対する期待感をノートに書いている。 ● 次時の話し合いに向けた情報収集をしている。	● 自分の考えの根拠を活動のめあてを観点にして積極的に述べている。 ● 休み時間等に、友達を誘いながら集会の準備をしている。	● 友達に動き方を教えたり、賞賛や励ましの声かけをしたりしている。 ● 感想文にがんばったことや次の活動への意欲を書いている。

本時の授業仮説

集会の具体的な活動内容を話し合って決める段階において、決める項目を分担して話し合う分割討議を行わせ、そこで話し合ったことをもとに全体討議で集団決定する場を設定すれば、自分の役割を意識して責任をもって話し合いに参加し、集会を通して大切にしたい3の1のスピリッツ(活動の姿)を明らかにしていくことができるであろう。

本時の目標

- 1 サンイチキックベース大会の活動内容の決定に向けて、自分の役割を意識しながら責任をもって話し合いに参加するとともに、よりよいキックベース大会をつくっていかうとする意欲をもつことができる。
- 2 サンイチキックベース大会のルールや表彰のあり方等を決める話し合いを通して、3年1組で大切にしたい活動の姿を、活動のめあてや学級目標と結びつけて明らかにすることができる。

準備

学級会ノート、司会マニュアル、移動黒板

展開

活 動 と 内 容 (※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ																
1 「サンイチキックベース大会」の活動のめあてと本時話し合って決めることを確かめ、学級会の進め方について話し合う。 ○ 活動のめあてを想起し、本時学級会の見通しをもつこと <table border="1"> <tr> <td colspan="2">議題「サンイチキックベース大会をしよう」</td></tr> <tr> <td colspan="2">活動のめあて(提案理由)</td></tr> <tr> <td colspan="2">サンイチキックベース大会に熱く取り組み、みんなが笑顔になれて3の1がもっと仲良いクラスになる集会にしよう。</td></tr> <tr> <td colspan="2">話し合うこと<例></td></tr> <tr> <td>① キックベースのルール</td><td>② 表彰について など</td></tr> <tr> <td colspan="2">話し合いの進め方</td></tr> <tr> <td>① グループでの話し合い</td><td>② 全体での話し合い</td></tr> <tr> <td>③ 先生の話</td><td>④ 話し合いの反省</td></tr> </table> ※ 事前に学級会で話し合うことや進め方について計画委員会と教師で打ち合わせを行い、助言を与えておく。	議題「サンイチキックベース大会をしよう」		活動のめあて(提案理由)		サンイチキックベース大会に熱く取り組み、みんなが笑顔になれて3の1がもっと仲良いクラスになる集会にしよう。		話し合うこと<例>		① キックベースのルール	② 表彰について など	話し合いの進め方		① グループでの話し合い	② 全体での話し合い	③ 先生の話	④ 話し合いの反省	○ 今日は、サンイチキックベース大会に向けて、決めなくてはいけないことを分担して話し合うぞ。 ○ ぼくは、ルールについて話し合うグループだけど、調べてみたらキックベースのルールは、いろいろ変えることができることがわかったぞ。そのことを意見として言おうかな。 ○ 活動のめあてが「みんなが笑顔になる」とあるから、キックベースを知らない人や上手でない人も楽しませるのは難しそうだな。 ○ 話し合いの時間も限られているので、めあてが達成できるキックベース大会になるように、今日は進んで意見を言うぞ。 ○ ルールは、投げたボールを蹴ってもいいし、置いたボールを蹴ってもいいようにしたらどうかな。そうすると、蹴るのが苦手な人でも安心して蹴れると思うよ。 ○ ルールを変えようとおもっていたけど、○○さんの意見を聞いて、ルールを変えた方がみんなが楽しめて、活動のめあての笑顔になれると思う。 ○ 今日決まったことは、学級目標の「ホット」「ほっと」に関係しているな。今日のことを今度のキックベース大会に生かしていくぞ。 ○ 今日の話し合いではたくさん意見を言うことができたぞ。自分の考えと違うことに決まったけど、ぼくの考えも分かってもらえたからうれしかったな。キックベース大会に向けてもっとがんばるぞ。
議題「サンイチキックベース大会をしよう」																	
活動のめあて(提案理由)																	
サンイチキックベース大会に熱く取り組み、みんなが笑顔になれて3の1がもっと仲良いクラスになる集会にしよう。																	
話し合うこと<例>																	
① キックベースのルール	② 表彰について など																
話し合いの進め方																	
① グループでの話し合い	② 全体での話し合い																
③ 先生の話	④ 話し合いの反省																
2 話し合うことを分担して分割討議を行い、その話し合いをもとに全体討議を行う。 (1) 話し合うことを分担して、各グループで分割討議を行う。 ○ 責任をもって話し合いに参加し、友達の意見を自分の考えと比べながら聞いたり、自分の考えを述べたりして、集会の具体的な内容を活動のめあての観点から吟味すること <table border="1"> <tr> <td>① キックベースのルール ・誰もが楽しめるルール設定</td><td>④ 表彰について ・がんばりを認める表彰のあり方</td></tr> </table> ※ 意見の根拠を明らかにした話し合いになるように助言する。 (2) 分割討議で話し合ったことをもとに、全体討議を行う。 ○ 分割討議において、自分たちのグループで吟味した内容を、他のグループの人にも分かるように話すこと ○ どんな集会をめざすのか明らかにしながら集団決定すること ※ 決定したことの根拠を活動のめあてや学級目標と結びつけながら、この集会で大切にしたい活動の姿を明らかにしていく。	① キックベースのルール ・誰もが楽しめるルール設定	④ 表彰について ・がんばりを認める表彰のあり方															
① キックベースのルール ・誰もが楽しめるルール設定	④ 表彰について ・がんばりを認める表彰のあり方																
3 先生の話聞き、本時の話し合いの反省を学級会ノートに書く。 ○ 自分の話し合いに対する参加の仕方を自己評価すること ○ みんなで話し合ったよさを味わい、集会に向けて意欲をもつこと ※ 教師の話では、活動のめあてを達成する観点から述べられた意見の賞賛や今後の実践活動に対する期待について話す。																	

第4学年1・3組 図画工作科学習指導案

指導者 北 田 尚 雄

題 材 唐人町ランタンフェスティバル

指 導 観

- 本題材は、唐人町商店街でランタンフェスティバルを開く共通の目的をもち、一人一人がオリジナルのランタンをつくることを通して、色や形の構成力や創造的な技能を培うことをねらいとする。具体的には①唐人町夏のランタンフェスタをつくるために、自分の表現テーマを発想し、材料や方法を選択しながら楽しく表現すること、②作品と光の組み合わせの美しさを生かしながら材料や方法を発想し、表したいことに合わせて色や形を構成していくこと、③表現過程において、グループの友達作品を見ながら、その表現のよさについて情報交換することで、新たな技能を獲得しながらお互いの表現を高めていくことである。
- 本学級の子どもたちは、これまでに割り箸を用いての立体構成や、ステンシル版画を通して色構成をし楽しく造形活動する経験がある。そこでは、友達作品や表現方法に対する興味・関心は高く、友達の表現のよさに気づき認めていくことはできる。しかし、自分の表現や作品を自ら評価し高めていったり、友達の表現のよさを自分の表現に取り入れていくことまでには至っていない。そこで、友達と自分の表現を比べながら、そのよさを自分の表現に取り入れることや、光と作品のかかわりを考えながら、新たな発想を生み出し表現を練り上げていくことは価値があると考え、
- 本題材の指導にあたっては、3つの段階で展開する。まず「構想段階」では、実物のランタンの映像を見することで、光とオブジェを組み合わせる美しさに気づき、自分の表現テーマを発想できるようにする。そのために、暗室において身近なあかりを様々な材料と組み合わせ美しさについて話し合わせる。次に「表現段階」では、自分のテーマに合わせて、光との組み合わせ色や形の構成ができるようにする。そのために、材料として和紙を用いる。また、つくりながら光を組み合わせ鑑賞する活動を仕組み常に作品や表現について自己評価し次の活動や材料を選択できるようにする。最後に「展示段階」では、実際に作品を展示場所において、その周りの様子の変化と作品の関係について見直し、さらに彩色や付加材料で表現するとともに「ランタン点灯会」として展覧会を開くようにする。

目 標

- 1 ランタンのオブジェのあかりの美しさに気づき、自分たちの身近な造形空間に、自分の表現テーマをもとに、美しいランタンの町をつくりだす造形活動を楽しむことができる。
- 2 ランタンフェスタをつくる共通の目的のもと、友達作品や作品をおくまわりの環境との組み合わせを工夫しながら、自分の求めに合わせて材料の選択や作品の形や色を構成し、新たな表現をつくることができる。

計 画 (約9時間)

階	第1次 (2時間)	第2次 (4時間)	第3次 (3時間)
活動と内容	1 ランタンのあかりの映像を見て自分の表現を構想する。 (1) ランタンの美しさを話し合いテーマを決める。① ○ あかり美に気付くこと (2) テーマからランタンオブジェの形や色を考える。① ○ 自分の表現構想すること	2 自分の表現構想にしたがって、ランタンオブジェを形づくる。 (1) 自分のテーマから形づくる。② ○ 和紙のよさを生かしてること (2) 友達と作品を合わせて、形の付加表現や、彩色表現する。② ○ 自他のよさを生かしながら、新たな表現をつくっていくこと	3 ランタンの作品とあかりを組み合わせ新たな材料で再構成する。 (1) 新たな材料を使って付加表現する。本時1/2② ○ 新たな表現を思いつくこと (2) 友達と作品展示する。① ○ 作品のよさを生かすこと
支援	※ ランタンのあかりに出合わせ、美しさを話し合わせる。 ※ ランタンの造形物を参考に形の構想を立てさせる。	※ 子どもの自己分析に合わせた、材料提示やヒント資料の提示 ※ 作品を組み合わせ、お互いの作品を見合う、情報交流活動の設定	※ 色の再構成をする色コースと新たな材料で付加表現する形コースに分けた活動の設定
評価規準	● ランタンの映像を見て表したいテーマを制作カードにかいている。 ● 友達とテーマや方法を交流し材料や方法をカードに記入している。	● 自分の表現テーマから、和紙ややちいなどの材料用具を使っておもしろい形をつくる。 ● 友達の作品との調和を考えて、形や色の選択、表現をして作品に表している。	● 自分の課題に合わせてコースを選択し、使う材料のよさを生かしながら、形や色を変化させたり、材料を付加して飾り付けをしている。

本時の授業仮説

ランタンの作品とあかりを組み合わせて表現をする場面において、自分の表現テーマや、めざす作品像について、これまでの表現や作品をふり返らせ、新たな構想をもとに付加材料や装飾の方法を選択させれば、新たな表現内容や方法を発想し、それらを駆使しながら自らの作品をつくりかえていくことができるであろう。

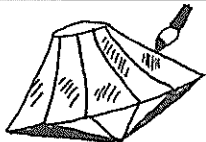
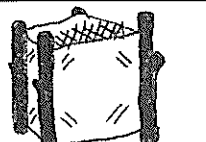
本時の目標

- 1 ランタンにあかりを灯したときの感じから、これまでの表現を見直し、新たな表現の課題を設定して、さらに形を構成したり、新たな材料を使い表現したりすることができる。
- 2 自分や友達の作品や表現方法や材料のよさに気づき、新たな表現の構想を立てながら、そのよさを生かして新たな表現を思いつくことができる。

準備

作品、制作カード、新たな材料

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1 自分の作品にあかりを灯し、その光と映し出される形が醸し出す周りの様子から、これからの表現について話し合う。 ○ あかりと作品の組み合わせによるまわりの様子から、新たな表現の課題を見いだすこと （めあて）ランタンの作品に灯りをともし、自分の表現テーマがもっと表せるようなランタンのオブジェにしていこう。 ※ 表現テーマでグループ化し、夜の環境として暗室をつくらせてランタンにあかりを灯して展示させ、お互いの作品やこれまでの表現のよさについて話し合うことで、自分のこれからの表現課題を明らかにさせる。 2 ランタンにあかりを灯したときの、オブジェの様子から、和紙や籐で構成した形や材料を見直し新たな表現でオブジェの形や色を構成する。 （1）自分の表現テーマからこれまでの表現を見直し、これからの表現の課題を明らかにして、表現の場や材料を選択する。 ○ 自分の表現のテーマを考えて、自分の作品や表現、材料のよさを生かしていけるように新たな材料や方法を発想すること ※ 自分の課題に合わせて課題別表現ができるような場と材料の提供 （2）それぞれの表現コースに分かれて、さらにあかりのオブジェをつくりかえていく。	○ 前の時間は、ぼくたちのグループは、夏祭りをテーマにつくっていったけど、みんなの作品を集合させ実際にあかりを灯してみて、楽しい感じになっているか確かめてみよう。 ○ もっとくり抜く形やももとの形をおもしろい形にしたり、オブジェの中に影を増やすと、もっとおもしろいあかりになって美しそうだ。 ○ 友達の作品のように、オブジェ自体の形や色を変えていくと、もっと楽しいあかりのオブジェになりそうだよ。 ○ 私は、橙色のあかりが漏れて、まわりに映し出されるように、和紙を染めて色のオブジェにしよう。 ○ あかりのまわりに網を巻くと、もれてくるあかりが不思議になるよ。
【じっくり表現コース】 ・映し出される形を変化させたり、周りに色や形を付加したりする。 ○ オブジェの形やオブジェの色を工夫すること ※ 映し出される形の資料の提示や色構成の場の提供  	【こだわり表現コース】 ・オブジェに網や木の枝、色セロハンをつかって付加表現する。 ○ あかりが映し出す様子や美しさを生かすこと ※ ランタンの作品に付加していく新たな材料の提供  
3 本時の活動において、自分の表現課題に合わせて、どのような材料を選んだり、表現をしたりしたか話し合う。 ○ 本時の表現活動をふり返り、選んだ材料のよさや使い方、表現の仕方のよさについて明らかにし、次時の表現の見通しをもつこと ※ 実際に作品にあかりを灯したときの様子や、選んだ材料、表現の様子をデジタルカメラで撮影し、どのような考えでどのような表現をしたか発表させ、次時の表現の参考にさせる。	○ 友達と作品を合わせたときに、お互いのあかりが映し出す模様を工夫していけばもっとランタンオブジェの効果がでて、自分たちの夏祭りのテーマが表れると思う。 ○ 次は実際に展示場所で設置してみてもわりの様子を見てみよう。

第5学年1組 算数科学習指導案

指導者 田 中 健 悟

単 元 つくろう！分数カードゲームの攻略書

指 導 観

- 本単元は、同分母の分数の加法及び減法や、商分数の意味について理解し、それらを適切に用いることができるようになることをねらいとしている。文化の学びで展開する本単元では、分数の大小比較、簡単な場合の等しい分数探し、分数の加法・減法の内容を含んだカードゲーム等を教材化する。ここでは、分数ものさしを補助的に用いながら、分数のカードゲームを進めていけるようにする。カードゲームを教材化して取り扱うのは、大小の判断や等しい大きさなどの場面で分数の数値だけの操作に終わらせず、量に立ち戻って考えることに意義があると考えからである。また、分数ものさしを用いることで、分数どうしの大きさの関係を視覚的に捉えることができ、分数の計算に対する自信も深まっていくと考える。
- 本学級の子どもたちは、これまでに第4学年で量を表す分数を学習してきている。そこでは、半端の数を的確に表現する方法として分数を捉えてきている。しかしながら、小数も学習してきている子どもたちにとっては、分数よりも十進法に基づいた小数の方が使いやすい、わかりやすいといった意識をもっており、分数での表現のよさに気づくまでには至っていない。
- 本単元の指導にあたっては、分数によるカードゲームの攻略法を学習課題として設定し、分数のしくみを明らかにしながら攻略書をつくっていく文化の学びを重点とする。そのために、まず、カードゲームの全体像を把握した後、分数の大小比較の判断を用いたゲームや等しい分数を集めるゲームの活動を行う。ここでは、分数のものさしの量を手がかりに大小関係や等値関係を判断し、攻略書に等しい分数を書き出しながら等しい分数の見つけ方を明らかにしていく。次に、分数の加法・減法を用いて解決するカードゲームの活動を設定する。ここでは、2口の同分母分数どうしの加法や減法の仕方を生かして、3口の加法や減法のゲームを進めるための式を調べる。最後に、商分数を用いて分数と小数の変換をするゲームを行う。これらの過程の中では、子どもが自分のこれまでの学習の理解度などを振り返り、自己の課題に応じた学習が展開できるように、問題事象の選択場面を設定する。

目 標

- 1 分数を用いた種類の異なるカードゲームの攻略書をつくる学習活動を展開する中で、分数の数直線を用いて意欲的に追究し、整数や小数とは異なった分数の数のしくみを見つけだすことができる。
- 2 分数カードの操作を通して、分数の加法・減法の計算ができるとともに、等しい分数の意味が分かり、整数と分数の関係や小数とは異なった分数のしくみを明らかにすることができる。

計 画 (約14時間)

単 元	第1次(4時間)	第2次(5時間)	第3次(5時間)
活 動	1 分数のカードゲームの攻略書をつくり、遊ぶ。	2 分数の加法・減法を用いたカードゲームの攻略法をつくり、遊ぶ。	3 分数と小数の変換ゲームの攻略法をつくり、遊ぶ。
内 容	(1) 大小比較や等値関係を調べ、攻略書をつくる。③ ○ 分数ものさしによる比較 (2) 攻略書を使い遊ぶ。① ○ 分数の等値関係の利用	(1) 分数の加法・減法を見通し、カードゲームの攻略書をつくる。本時3/3③ ○ 合計や差が1や2になる加法や減法 (2) 加法や減法の攻略書を使い遊ぶ。② ○ 分数の加法や減法の利用	(1) 小数と分数の変換の攻略書をつくる。④ ○ 商分数の意味の理解 (2) 攻略書を使い遊ぶ。① ○ 分数と小数の変換
分数のカードゲームを選択し、そのおもしろさや分数のしくみを見つける文化の学び			
支 援	※ 分数ゲームのステージを見通す場の設定 ※ 問題事象の選択の場の設定	※ 分数の加法・減法を用いたカードゲームの設定と組み合わせた大きさ確かめることができる分数ものさしの活用	※ 分数と小数を混ぜたカードゲームの設定 ※ 小数の数直線の活用
評 価	● 分数の大小関係、等値関係を数直線用いて説明できる。	● 単位分数のいくつ分の考えをもとに、同分母分数のたし算やひき算ができる。	● 分数とわり算の式との変換ができる。
規 準	● 帯分数を仮分数に、整数を仮分数に変換できる。	● 答えが1や2になる分数の加法や減法の式をつくることことができる。	● わり算の式を用いて、分数と小数の変換ができる。

本時の授業仮説

分数の加法・減法を用いたカードゲームの攻略書をつくる場面において、式の1カ所に分数の数値をかき込んだものを混せておき、3口の加法の式で答えが1か2になる組み合わせを追究する問題事象群、3口の加法と減法が混じった式で答えが1か2になる組み合わせを追究する問題事象群のうち、どちらか一方を選ぶ場を設定すれば、前時の学習から問題分析と自己分析を行って追究し、3口の同分母分数の式へと発展させることができるであろう。

本時の目標

- 1 分数の加法・減法を用いたカードゲームの攻略書をつくる目的の中で、その組み合わせが1か2整数になる場合について単位分数のいくつ分を意識しながら、数直線などを用いて意欲的に探ることができる。
- 2 分数の加法・減法のカードゲームの攻略法となる分数の組み合わせを見つける活動において、条件にあう分数の加法や減法の式を多様につくり出すことができる。

準備

分数カード、式の1カ所に分数がかき込まれた未完成の式カード（選択できるもの）、学習ノート

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1 前時にした分数カードの数合わせゲームの攻略法について話し合う。 ○ 2口だけでなく、3口の加法・減法の見方にも気づくこと （めあて） たしたりひいたりして1や2になる3つの分数カードの組み合わせを見つけ、攻略書につけ加えよう。 ※ 分数のカードを数枚提示し、一つの例として、その提示したカードの中からたしたりひいたりして1や2になる組み合わせを見つけさせる。 1か2 手持ちのカード カードの山 2 3口の式のうち、加法のみでの式と、加法と減法が組合わさった式との2つの問題事象から選択し、1や2になる組み合わせを追究する。 （1）分数の加法・減法の3口の式の問題事象群と出会い、その中から自分が追究しようと思う計算式の問題事象群を選択する。 ○ 問題の分析や自己の分析を行いながら問題事象を選択すること ※ 問題事象群を提示する際に、数値を一部書き入れものを混せておく。 （2）自分が選択した問題事象群の式について追究する。 ○ 分数カードの加法や減法をうまく使って合計を1や2にすること ※ 特に答えが2になる式をつくっている児童には、式の正しさを理解できるように、分数ものさしで確かめる場を準備しておく。	○ この分数カードゲームは、合計が1か2になるとカードを捨てることができるというルールだったな。 ○ この場合は、$1/3 + 2/3 = 1$ や $5/4 - 1/4 = 1$ のほかにも、$1/6 + 2/6 + 3/6 = 1$ のように3つの分数の計算式でもカードゲームの条件に合っているな。 ○ 3つの分数の計算式だったら、3枚同時に捨てられるから、ゲームでは得をすることになるな。 ○ 今日は、3つの分数を使った計算式で答えが1か2になる組み合わせを考えるんだな。だから、前の時間の考え方が使えるそうだな。 ○ 私は、前の時間に試しにやった問題で、たし算の式ばかりしか考えることができなかったの、ひき算になる場合を調べてみたいな。
加法のみの3口の式を選んだ児童の追究 $\frac{1}{4} + \frac{2}{4} + \frac{5}{4} = 2$ $\frac{1}{4} + \frac{3}{4} + \frac{4}{4} = 2$ $\frac{1}{6} + \frac{2}{6} + \frac{3}{6} = 1$ $\frac{1}{7} + \frac{2}{7} + \frac{4}{7} = 1$ 2になる組み合わせ $\frac{1}{4} + \frac{2}{4} + \frac{5}{4}$ $\frac{1}{4} + \frac{3}{4} + \frac{4}{4}$	加法と減法の混じった3口の式を選んだ児童の追究 $\frac{4}{5} + \frac{8}{5} - \frac{2}{5} = 2$ $\frac{4}{5} + \frac{7}{5} - \frac{1}{5} = 2$ $\frac{4}{6} + \frac{5}{6} - \frac{3}{6} = 1$ $\frac{5}{7} + \frac{4}{7} - \frac{2}{7} = 1$ 1になる組み合わせ $\frac{4}{6} + \frac{5}{6} - \frac{3}{6}$ $\frac{5}{7} + \frac{4}{7} - \frac{2}{7}$
3 見つけ出した3つの組み合わせの分数を出し合い、それらの式をみてその見つけ出し方について話し合う。 ○ 2つの分数の組み合わせのとき同様に、単位分数に着目すれば、分子だけの計算をして分母と同じ数が2倍の数にすれば見つかること ※ 合計が1や2になる分数の式を実際に示しながら発表させる。	○ 2つのカードの時も、3つのカードの時も見つけ方が似ているな。 ○ 分母がそろっているの、分子のところだけの計算を考えて、整数の時と同じようにすればいいんだな。

水溶液の正体の解明に向けて水溶液の性質を調べ、工夫して追究する理科学習

第6学年1・3組 理科学習指導案

指導者 今 泉 伸 一 郎

単 元 正体ズバリ解明!～水よう液ガイドブックを使って～

指導観

- 本単元のねらいは、不明な水溶液の正体を、その性質から多面的につきとめる方法をつくり出すことである。主な学習内容は、①水溶液が酸性、中性、アルカリ性に分類できること、②加熱したり、金属と触れさせたりなどして調べ、水溶液には気体が溶けているものがあること、③金属を変化させるものがあることをとらえることである。そこで、不明な水溶液の正体をさぐるための「水溶液ガイドブックづくり」を教材化する。水溶液の性質から水溶液の正体を探るためのガイドブックづくりの活動を通して、水溶液について興味・関心を高めながら、その性質をとらえていくようにする。
- 本学級の子どもたちの多くは、洗剤等の身近な生活用品や見聞きした情報から酸性、中性、アルカリ性という言葉に気付いている。また、5年生社会科の学習で酸性雨について知っている子どももいる。しかし、これらの水溶液の性質について考えるまでには至っていない。水溶液については、溶けた物の質量保存、とける量の限界、溶けた物の温度変化や蒸発による溶質の抽出について学習しており、固体が溶け込んで透明の状態のものが水溶液であるという認識をもっている。本単元では水溶液の種類で性質が違うこと、そのことで分類できることを追究することに価値がある。
- 本単元は、不明な水溶液の正体を水溶液の性質からつきとめていく方法をつくり出す文化の学びとして展開する。まず、第1次では、水溶液の正体を、性質からつきとめる求めをもつために水溶液が鉱物を溶かす現象や硬貨の汚れが消える現象の提示をする。第2次では、水溶液が金属や鉱物を溶かす現象や蒸発による溶質の抽出から正体をつきとめる方法を追究する活動を設定する。ここでは、数種類の水溶液と反応する金属や鉱物を選択して実験計画を立て、比較実験により個別に性質を調べるようにする。また、水溶液を試薬を用いて様々な水溶液を酸性、中性、アルカリ性によって分類していく活動を位置付ける。これらの活動から多面的に水溶液の正体を調べる方法をつくり出すようにする。第3次では、学んだことの価値を実感することができるように、水溶液をつきとめる方法を適用して正体不明な水溶液を調べる活動を設定する。

目 標

- 1 不明な水溶液の正体をつきとめることに求めをもち、物との反応、蒸発による抽出、試薬による分類から多面的に調べる活動を通して、水溶液の正体をつきとめる方法をつくり出し、思考する楽しさを味わう。
- 2 水溶液はその性質によって酸性、中性、アルカリ性から分類でき、水溶液には気体が溶けているものがあることや、金属を変化させるものがあることをとらえることができる。

計 画 (約10時間)

階	であ階 (1時間)	追究する段階 (7時間)	いかす段階 (2時間)
活動と内容	1 不明な水溶液が金属やミネラルに反応する現象を観察する。 ○ 水溶液の正体をつきとめる求めをもつこと	2 水溶液を調べる方法をつくり出す。 (1) 溶質の抽出から方法をつくり出す。 ○ 気体が溶けている水溶液があること (2) 物質との反応から正体を探る方法をつくり出す。 ○ 液性による金属やミネラルとの反応の違い (3) 水溶液を酸性、中性、アルカリ性に分類する。 ○ 試薬を使つての分類	3 正体がわからないいくつかの水溶液についてガイドブックを用いて不明な水溶液を調べる。 本時2/2② ○ 水溶液ガイドブックの価値の実感
水溶液の正体解明のためにその性質を調べ、方法、手順の選択に生かし、追究方法をつくり出す文化の学び			
支援	※ 正体不明な水溶液の金属や鉱物との反応に着目させる。	※ 酸性の水溶液と金属や鉱物との反応の提示から、水溶液の液性や金属を変えての個別追究 ※ 蒸発による抽出を行い、水溶液に溶けている物を調べる活動の位置付け	※ 水溶液の性質や分類方法の整理 ※ 提示する水溶液の準備 ※ 実験計画の検討
評価基準	● 正体をつきとめる方法を調べたいという求めをもっている。	● 水溶液と金属との反応を定性的にとらえている。 ● 蒸発による溶質の抽出する実験の結果から溶けているものを推論している。 ● 試薬を使って水溶液を液性で分類している。	● ガイドブックを適用し水溶液を調べている。 ● ガイドブックの価値を実感している。

本時の授業仮説

無色透明ないくつかの水溶液の正体をつきとめていく活動で、これまで調べてきた水溶液の性質を生かして手順や方法を選択してつくった実験計画をもとに、水溶液を特定していく活動を位置付けることで、実験結果について相互評価して再実験したり、追究方法についての価値を実感したりすることができるであろう。

本時の目標

- 1 不明な水溶液の正体をつきとめたいという求めから調べた水溶液の性質をもとに追究の方法や手順の工夫を行い、実験結果の相互評価から水溶液ガイドブックの価値を実感することができる。
- 2 水溶液の中には、ある種の金属を溶かしたり、気体が水に溶け込んでいる水溶液があるといった水溶液の性質を利用したり、リトマス試験紙等の分類方法を駆使したりして、不明な水溶液の正体を突き止めることができる。

準備

酸性の水溶液（塩酸、外傷消毒薬、炭酸水、食塩水、砂糖水、虫刺され用塗布液、水酸化ナトリウム）、アルミニウム片、試験管、スポイト、リトマス試験紙、アルコールランプ、蒸発皿、三脚、ガラス棒、

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1 本時学習のめあてについて話し合う。 ○ 不明な水溶液の正体をつきとめる方法について追究していること（めあて） 7種類の無色透明の水よう液の正体について自分の立てた実験計画によって調べよう。 ※ 7つの水溶液について（塩酸、外傷消毒薬、炭酸水、食塩水、砂糖水、虫刺され用塗布液、水酸化ナトリウム）あらかじめ知らせておき、活動に見通しをもつようにする。 2 自分の実験計画にそって7つの水溶液の正体を調べる。 (1) 7つの水溶液の正体について調べる実験計画から器具を準備する。 ○ 目的を意識し、素材や手順、自分の予想を器具の確認をすること ※ 実験計画から必要な器具を選択できるように事前に準備しておく。 (2) 自分の立てた実験計画にそって、7つの水溶液の正体を調べる。 ○ 水溶液の性質から正体をつきとめる実験を行うこと ※ 予想と試験管のラベルを確認しながら結果をノートにまとめさせる。	○ 今日は、いろんな水溶液について実験計画に沿って正体を突き止めていくんだね。 ○ 僕は、においだけで虫刺され用の薬がどれかわかるよ。 ○ 塩酸とオキシドールはよく似たにおいがする。2つの水溶液を選んで、それにアルミニウムを入れると、どちらが塩酸かわかる。 ○ 私は、まず、試薬を使ってどれが、酸性か中性かアルカリ性かを調べます。次ににおいで調べます。例えば、酸性の水溶液でにおいがしないものが炭酸水です。においがするものは塩酸です。
個別追究 A ①リトマス試験紙で酸性・中性・アルカリ性に分類 ②蒸発させると固体が残る。 アルカリ性 → 水酸化ナトリウム 中性 → 食塩水、砂糖水 ③酸性の水溶液のにおいをかいで調べる。 無臭 → 炭酸水 きつい臭い → 塩酸、外傷消毒薬 ④臭いのきつい酸性の水溶液にアルミニウムを入れて調べる。 はげしく反応 → 塩酸 反応しない → 外傷消毒薬	個別追究 B ①水溶液のにおいをかいで調べる。 すっぱい臭い → 塩酸、外傷消毒薬 鼻を突く臭い → 虫刺され用塗布液 ②すっぱい臭いの水溶液にアルミニウムを入れて調べる。 はげしく反応 → 塩酸 反応しない → 外傷消毒薬 ③残りの水溶液をリトマス試験紙で酸性・中性・アルカリ性に分類 酸性 → 炭酸水 中性 → 食塩水、砂糖水 アルカリ性 → 水酸化ナトリウム ④2種類の中性的水溶液を蒸発させて調べる。 白い粉状 → 食塩水 ゲル状 → 砂糖水
【水溶液の正体をつきとめる個別追究の例】 (3) 各グループごとに、実験結果について話し合う。 ○ 相互評価や再実験によって水溶液の正体を確かめること ※ 実験結果をもとに交流を行い、結果が違うときは再実験で確かめる。 3 各グループの結果について報告しあい、そのことから判断できる水溶液の正体について話し合う。 ○ 水溶液の性質と正体をつきとめたことを関連付けること ※ 実験結果を水溶液と金属との反応、試薬での分類、蒸発による溶質の抽出を観点として板書で整理していく。	○ 僕の考えと君の考えとを比べること、1液と2液とが入れ替わっている。それを確かめるために、もう1度グループで確認しよう。 ○ どのグループの予想も同じだった。僕のつくった水溶液ガイドブックは水溶液の調査に使える。 ○ もっと別の水溶液についても自分のガイドブックを使って調べていきたい。きっと役立つと思う。

第6学年2組 道徳学習指導案

指導者 木下 美紀

主 題 君は友を救えるか？

指導観

- 本主題は、相手のことを信じ学び合って友情を深める大切さを理解することをねらいとしている。本主題は、高学年2－(3)の内容である。信頼とは、相手が自分をだましたり、口先と違う言動をとったりしないかと警戒せず、誠を尽くし、未来もそうであろうと信じ頼ることである。それがお互いに向けられたものが友情である。主な内容として、①友達のあやまちを言おうか迷う主人公に共通性を見出すこと、②主人公との差異性から相手を信じ誠を尽くす大切さに気付くこと、③切磋琢磨する関係の中で友情が深まることに気付くことである。本主題は、本当の友情について追求したいという強い求めと、主人公のよさから道徳的な価値の実現をめざす自分に気付いて自信をもち、友達関係を深めようという学ぶ意義を感じることが可能である。
- 本学級の子どもたちは、仲がいい友達になわとびのとび方を教えてあげたり、友達に対してアドバイスしたりすることができる。しかし、仲が良くない友だちに対しては、かわりが消極的であり、友達のあやまちに対して、かばおうとすることがある。これらは、親疎に左右されたり、「友達関係を続けたい」などという自己中心的な考えが働き、友情を深めるには、ともに信じ合い、時には厳しく接して学び合う友達関係が大切だということに気付いていないからだと考える。そこで、主人公の生き方から、弱さを乗り越え、高め合う自分を自覚させる人間の学びを展開していく。
- 本主題の指導に当たっては、本当の友達について知りたいという課題意識をもち、主人公との共通性や差異性から自分の姿を吟味し、実践していこうとする人間の学びで展開する。そのために、常に自分と対象を比較する活動を各段階に位置づけ、追求させる自己開発の学びを展開する。具体的な活動として、第1次で①本当の友達関係を築けているかという気がかりを持たせるために、複数絵ペアと自分を比べる比較活動Ⅰ、②自我関与を図るため、友達のあやまちを言おうか迷う場面で自己決定する活動、第2次で、③交流する活動④黙っていることを選択した主人公のよさを追求する活動⑤自分と主人公の気持ちや行動を比べる比較活動Ⅱ、⑥なりたいたい自己像を描くために、自分見つめカードで友達関係を吟味する比較活動Ⅲを設定する。それらを通して、なりたいたい自己像を描くことができる。

目 標

- 1 自分・主人公比べカードなどから、主人公との気持ちや行動を比べて、共通性や差異性から自分の友達関係を吟味し、より高い価値（信頼友情）に向けて実践していこうとすることができる。
- 2 資料『ニコラスとウェーク』を通して、「嫌われたくない」「恥をかかせたくない」などという自己中心的な心を乗り越え、ともに信頼し合って学び合う大切さを理解することができる。

計 画（約2時間）

階	第1次 振り返る段階（1時間）	第2次 自分の生き方をつくる段階（1時間）	第3次 生かす段階（事後）
活動と内容	1 複数絵ペアから、自分と比べる。（比較活動Ⅰ） ○ 信頼友情の価値から自分の心を見つめること 2 資料『ニコラスとウェーク』の道徳的場面と出合う。 ○ 自分の傾向性に気付くこと	2 資料『ニコラスとウェーク』を通して、道徳的な価値の大切さを感得する。本時 (1) 自分だったらと話し合い、主人公のよさから、自分と比べる。（比較活動Ⅱ） ○ 友達を信じる大切さを理解すること (2) なりたいたい自己像について記述する。（比較活動Ⅲ） ○ 自分への自信から未来の自己像を描くこと	3 信頼友情の価値の振り返りをする。 ○ 友達どうし信じ合い、高め合う態度で接し、気持ちのよい生活ができているか心のノートで振り返ること
	「自分だったら」と主人公と自分の気持ちや行動を比べ、自分のよさに気付く人間の学び		
支援	※ 友達に忠告している絵と、忠告していない異なる2枚の複数絵ペアを提示する。	※ 自分・主人公比べカードや、自分見つめカードから、自分と主人公を比べて、友達を信じて助け合う自分に気付かせる。	※ 自己の行為を内省するために心のノートの信頼友情のページを活用させる。
評価標準	● 複数絵ペアから、自分が本当の友達関係を築けているか知りたいという信頼友情に関する気がかりをもっている。	● 友達どうし信じ合い、学び合う信頼友情の本質に気付いている。 ● 友達を信じて助け合おうとしている自分のよさについて気付いている。	● 信頼友情を深めている自分の今の実践状況を心のノートの写真と言葉をもとに振り返っている。

本時の授業仮説

本当の友達について知りたいという気がある子どもたちに、友達のあやまちを先生に言うか迷う場面で「自分だったら」どうするか交流する場、自分・主人公くらべカードで自分と主人公の気持ちを比較する場、自分見つめカードになりたい自己像を記述する場を設定すれば、友達を信じる心が自分にもあることに気づき、互いに切磋琢磨し、友達関係を高め合う大切さを理解することができるであろう。

本時の目標

- 1 自分・主人公くらべカード・自分見つめカードなどをもとに、自分と主人公との気持ちや行動を比べて、共通性や差異性から自分の友達関係を吟味し、自分の中に主人公と同じような信じ合う心があることに気付くことができる。
- 2 資料『ニコラスとウェーク』を通して、相手の立場や気持ちを推し量り、相手を信じ、高め合う信頼友情の価値の大切さを理解することができるであろう。

準備

場面絵、道徳ノート、自分・主人公くらべカード、自分見つめカード、自分発見カード、流れ図、実態調査表

展開

活動と内容

※は、評価を生かした支援

1 複数絵ペアをもとに前時学習を振り返り、本時のめあてを確認する。

○ 本当の友達について知りたいという気があること

(めあて) 主人公と自分の気持ちや行動を比べて、本当の友達について考えよう。

※ 具体的な絵ペア（かばう友情とつき放す友情）をもとに、自分の気持ちや行動を見直させる。

めばう友情

花瓶を割ったことを黙っている

つき放す友情

先生にきちんと言う

2 資料『ニコラスとウェーク』をもとに、ともに信じ合い、切磋琢磨する信頼友情の大切さについて話し合う。

(1) 資料前半部分の、友達の身代わりになろうか迷った主人公に対して自分はその場でどうするか出し合い、話し合う。

○ 問題事象（友達をかばいたい気持ち）について、自分の信頼友情についての傾向性に気付くこと

※ 「本当のことを言う」「身代わりになる」「黙っている」に分かれて前時の道徳ノートの記述をもとに、自己選択した場面を発表させる。その際①自分の生活と結んで②心情面に着目して発言するよう助言する。

(2) 資料の後半を読み、主人公を支えた心について話し合う。

自分

相手

○ 相手に誠実であってほしいと願い続け、信じ、相手もそれに応えともに磨き合い高め合う信頼友情の大切さについて理解すること

※ 主人公の価値ある生き方について話し合わせ、自分との差異性による比較から道徳的な価値に気付かせる。

(3) 主人公と自分の気持ちを比べ、今までの信頼友情について考える。

○ 主人公の価値（信頼友情）が自分の心の中にあることに気付くこと

※ 視覚的にとらえさせやすいように自分・主人公比べカードをもとに主人公のとした行動や気持ちと自分を比べさせ、交流させる。

(4) 自分の友達関係が本当の友達関係になりえていたか考え自分見つめカードの付箋紙を操作して、信頼友情について話し合う。

○ 自分の信頼友情についての傾向性をとらえること

※ 自分見つめカードに本当に友達のことを思って接していたかという視点で付箋紙を貼り替え、真の友達関係になりえていたか確かめさせる。

3 自分発見カードからこれからの友達関係を明らかにして記述する。

○ 互いに信頼し高め合う関係を築きたいという実践意欲を高めること

※ 自分発見カードをもとにした自己の信頼友情の傾向性から、なりた自己像について自分見つめカードに記述するよう助言する。

子どもの思考の流れ

○ 私と友達は、本当の意味での友達になっているのかな。本当の友達について知りたいな。

○ どうしたら、もっと仲良くなれるのかな。

○ 主人公はどんな友達関係があるのかな。

本当のことを言う	身代わりになる	黙っている
・うそをついたままいてほしくない ・ときには厳しく接するの友達 ・みんなにも迷惑がかかる	・気の弱い友達をかばいたい ・友達を守るのも大切 ・みんなにも迷惑がかかる	・友達に自分の思いに気付いてほしい ・気の弱い友達も守りたい ・うそをつきたくない

○ どうして主人公は、こんなに相手のことを思うことができるのかな。

○ 本当の友達は、相手もそうであってほしいと強く願って信じ、相手もそれに応えたいと思うことだと思う。

○ 自分が身をもって示して友達に気付いてほしいという友達のことを思う大切さが分かった。

○ 私は、主人公とどのくらい重なるかな。気持ちの面で似ているな。

○ 主人公と同じ心が私の心の中にあるよ。

○ 私も友達を信じて助け合っているんだな。自信が持てたよ。

○ あの時、私がしたアドバイスは、相手のことを本当に思って言っていたんだな。

○ これからもっと仲良くなりたい。

○ 友達関係をもっと高めていきたい。

○ 友達をもっと思いやることをがんばりたい。

第1学年2組，第1・2学年ふじ組 体育科学習指導案

指導者 久保勝美

単元 なかよく あてよう！かわそう！ごろびょんボール（ゲーム）

指導観

- 本単元は，ボールをころがしたり，投げたりして当てること，ボールを避けることを楽しむための課題として追究し，ボールをころがす，投げる，避ける動きをつくり，広げていくことをねらっている。主な学習内容は，①規則を守って運動し，ボールを当てたり，避けたりする目的に向かって友達と協力しながら楽しむこと，②意図した方向へボールをころがしたり，投げたりするとともに，移動や姿勢を素早く変化させボールを避けることができるようになること，③ゲームの規則を選ぶことなどである。このことは，ボールをころがしたり，投げたり，避けたりする基本的な動きをつくるとともに，友達と運動できる自分を感じて運動が好きな子どもを育てる上で意義がある。
- 本学級の子ども達は，就学前の遊びを通して，ボールをころがしたり，投げたり，避けたりする動きを経験してきている。そのなかで，ボールを使って友だちと勝敗を競い合う楽しさを味わってきている。しかし，子どもによって異なる運動経験により，1人1人の動きや協力といったゲームを楽しむための実態は様々である。このことから，易しい内容から学習を展開することが必要である。また，ふじ組の子ども達とかかわることは日常生活や行事のなかでできつつある。そこで，チームで力を合わせることで楽しさが増す本単元を通して，動きやかかわりを広げ，深めさせたい。
- 本単元の指導にあたっては，これまでに身に付けた動きをもとにふじ組の友だちとゲームを楽しむための課題を追究し，ボールをころがす，投げる，避ける動きや友だちとのかかわりをつくり，広げていく文化の学びを重点とする。そのために，まず，原ゲームを楽しむ，動きとかかわりから課題を設定する。次に，ロープに沿って動かせる物を的に当てて楽しむなどの当てゲームを通して基本となる動きをつくる。そして，ふじ組の友だちとともにジャンプ台やネットがある「ごろびょんボール」のゲームを攻守交代しながら楽しむなかで，体全体を使ってボールをころがしたり，投げたりして当てる，素早く位置や姿勢を変えて避ける動きを広げていく。最後に，つくり・広げた動きを生かしてまとめのゲーム大会を開き，動きや友達とのかかわりのよさを味わわせるとともに，動きとしての文化をつくり出すことができた自分に気付かせる。

目標

- 1 攻守を交代しながら友だちと協力してボールを当てたり，避けたりすることで相手チームと勝敗を競い合うボールゲーム「ごろびょんボール」を楽しむことができる。
- 2 ロープに沿って動く筒を遠くに移動させる，いろいろなボールなどをころがしたり投げたりして当てる，向かってくるボールを避けるといった「ごろびょんボール」を楽しむための動きをつくり，広げることができる。

計画（約6時間）

階	みいだす段階（2時間）	うみだす段階（3時間）	あじわう段階（1時間）
活動と内容	1 ごろびょんボールを楽しむ学習の課題を設定する。 (1) 原ゲームを楽しむ。 ○ 興味・関心を高めること (2) ゲームについて話し合う ○ 課題を設定すること	2 筒を動かす的当てゲームを楽しむ。 ○ ボールをころがす動きをつくる。 3 ごろびょんボールを楽しむ。 (1) 往復型① (2) ジャンプ台型②本時1/2 ○ 2方向 ○ ジャンプしてくるボールへの対応と強い転がし	4 まとめのごろびょんボールゲーム大会を楽しむ。 (1) まとめ大会を開く。 ○ 動きの定着 (2) 学習について話し合う ○ 動きへの気づき
支援	※ 現在の動きで楽しめる易しいころがす，避ける動きやゲームを試す場の設定 ※ 動きとかかわりの課題整理	※ 基本的な動きにつながる的当てゲームで動きをつくる活動の設定 ※ 友だちとのかかわりと，ころがす，投げる，避ける動きをつくり広げる活動の設定	※ 動きとかかわりを数多く経験できる場の設定 ※ 学びのよさを明らかにする評価の場の設定
評価基準	● ごろびょんボールに興味関心をもっている。 ● 動きとかかわりの課題を設定している。	● 友だちと協力しながら的当てやごろびょんボールのゲームに参加している ● ボールをころがして当てたり，ジャンプしてくるボールを避けたりしている。	● 繰り返しまとめのゲーム大会を楽しんでいる。 ● よりよくなった自分のことに気付いている。

本時の授業仮説

ジャンプ台とのかかわりからボールをころがす強さや軌跡を選択させながらボールをころがしたり、ボールを避ける「ごろびょんボール」のゲームを行わせれば、腕を大きく振り出してボールを意図する方向にころがして当てる動きや素早い位置の移動や姿勢の変化によってボールを避ける動きをつくり、広げることができるであろう。

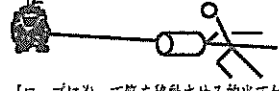
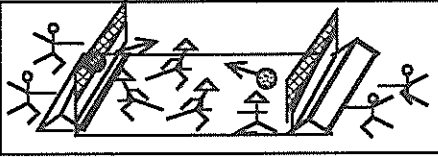
本時の目標

- 1 ロープに沿って動かせる筒を手によって力を加えて移動させたり、ボールを当てたり、避けたりする動きを発揮し、規則を守りながらなかよきの当てゲームやごろびょんボールを楽しむことができる。
- 2 肩を中心に腕を大きく振り動かすとともに足を踏み出しながら手によって力を加えてボールをころがして当てる動き、左右に素早く体を移動させたり、姿勢を大きく変化させたりして避ける動きをつくり、広げることができる。

準備

学習の流れ図、的当てゲームの場、ごろびょんボールの場、角度が異なるジャンプ台、学習ノート

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 的当てゲームを楽しむなかで、これまでにづくり、広げた動きや友達とのかかわりについて話し合う。 ○ 体を横に向ける、腕を引く、押し出すなどのボールをころがす基本的動きをつくとともに、本時学習のめあてを把握すること。 (めあて) ジャンプだいを つかって ボールを ころがしたり よけたりして ともだちと たのしく ゲームを しよう。 ※ ころがしたボールがジャンプするジャンプ台を提示し、ボールの軌跡の変化について演示することで、動きの変化を明確にさせる。 2 ジャンプ台を使ってごろびょんボールを楽しむ。 (1) ジャンプ台がある前半のゲームを楽しむ。 ○ ジャンプ台を使ってボールをジャンプさせてころがす動きや、向かってくるボールを移動や姿勢の変化で避ける動きをつくること ※ ジャンプ台を使ってボールをころがす位置や方向を選びながらボールをころがす活動の場を設定することで、個に応じて動きを発揮させる。	○ 今日もゲームができるぞ、楽しみだな。どうすればうまくいくかな。  [ロープに沿って筒を移動させる的当てゲーム] ○ ボールがジャンプするとはおもろいな。勢いよくころがすとよくジャンプするみたいだ。 ○ ボールがジャンプしてくるからボールをまたいで逃げるのができなくなりました。どうしよう。 ○ ふじ組の友だちが当たらないように手をつないで一緒に逃げよう。
《規則》 ○ 時間による攻守交代 ○ 当てたら得点 ○ 2つのボール ○ ジャンプ台を使い、ネットの下を通すこと 《ゲームのイメージ》  ※ 友だちと動きを紹介し合う活動の場を設定することで、後半のゲームに向けての動きと友だちとのかかわりについての見通しを確かにする。 (2) 角度が大きいジャンプ台がある後半のドッジボールを楽しむ。 ○ より強くボールをころがしたり、左右への素早い移動や大きな姿勢の変化によってボールを避ける動きや友だちとのかかわりを広げること	 [腕を大きく振ってころがす]  [左右に移動して避ける]  [ふじ組の子と一緒に避ける]  [高くジャンプして避ける]
《ジャンプ台の変化》  角度が大きくなる。 ※ 角度を大きくしたジャンプ台を使ってボールをころがす位置や軌跡を選びながら繰り返し楽しめる活動の場を設定することで、動きと友だちとのかかわりをつくり広げる。 3 ジャンプ台によって身に付いた動きについて話し合い、まとめる。 ○ つくり広げた腕を大きく振ってボールをころがす動きや友達と助け合ってボールを避けるかかわりについての気づきを確かにすること ※ できるようになった動きや友達とのかかわりについてよかったことを絵図を用いて整理することで、本時学習のよさを味わわせる。	○ 新しく変わった大きくジャンプするジャンプ台は腕を大きく後ろから前に振って勢いよくころがさないとうまくジャンプしないよ。 ○ ボールをコートの端っこからころがしてみよう。コートの端っこにいる友だちを当てられそうだ。 ○ 素早く左右に動いて避けるぞ。 ○ 今日も楽しかったな。手を素早く大きく後ろから前に動かすとボールを強くころがすことができた。 ○ ふじ組の友だちと手をつなぎ、心を合わせて一緒に逃げたよ。 ○ 次の時間も楽しみだな。

友達とともにジャンプ台を使ってボールをより強く転がしたり素早く避けたりする動きを発揮する体育科学学習

第1・2学年ふじ組 体育科学学習指導案 (1年2組との交流学习)

指導者 下川 勝彦 (T2) 久保 勝美 (T1)

題材 なかよく あてよう! かわそう! ごろびょんボール

指導観

- 本学級の子どもたちは、1年生4名、2年生2名の計6名で構成されている。子どもたちはこれまでに、基本の運動を中心に固定施設やマットを使ったり鬼遊びをしたりしながら、多様な運動経験をしてきている。ゲームについては、決まりについて、簡単な内容であればある程度理解することができる。ボールを使った遊びについては、投げたりころがしたりすることはできるが、的のような目標に向かって投げたりころがしたりすることは不十分である。また、友達とのかかわりについては、積極的に自分からかかわろうとする子どもから、友達からのかかわりを受け入れつつある子どもまで様々である。そこで、ゲームを通して友達とのかかわりながらボールを転がしたり避けたりする動きを身に付けさせたい。このことは、豊かな生活を営むことにつながるたくましい体力を育てることや人とのかかわりを深めていく上でも意義深いと考える。
- 本題材の「ごろびょんボール」は、コートサイドにあるネットの下からボールを転がし、コートの中にいる相手に当てたら得点となるドッジボールを変形したゲームである。本題材は、相手チームの友達の動きを見て、ボールを転がす動きや転がってきたボールを避ける動きを身に付けることをねらいとしている。主な学習内容は、①友達とかかわりながらゲームをする楽しさを味わい、ゲームへの意欲をもつこと、②ゲームの場や相手の位置、動きに応じたボールを転がす動き、来たボールを避ける動きを身に付けること、③身に付けた動きをゲームのなかで発揮することである。
- 本題材の指導にあたっては、ボールを転がす動きを促す場を設定し、味方の子どもとの声をかけ合いながら強くボールを転がす動きや左右に素早く避ける動きを身に付けていく基礎的・基本的な学びを展開していく。であう段階では、ゲームに出合わせ、活動の手順やきまりについて提示したり試しのゲームをしたりして理解させ、新たな動きを体験させる。ひろげる段階では、活動の場を変化させ、場や人の状況をとらえて動きを引きだしていく。また、状況を判断するための声かけや動作補助を行い、多様に動きを体験しながら身に付けていくことができるようにする。いかす段階では、これまでに身に付けた動きを発揮させ、たくさん得点することで満足感を十分に味わえるようにする。

目標

- 1 「ごろびょんボール」を行い、味方の友達からの声かけに応じたり自分から友達に声かけをしながらチームで得点をとることをめざし、意欲的にゲームを楽しむことができる。
- 2 ゲームの手順を理解し、相手の友達の位置や動きを見ながら、素早く相手の方を向いたり向きを変えたりしてボールを転がす動きや、来たボールを左右に動いたり跳んだりして避ける動きを身に付けることができる。

計画 (約6時間)

階	であう段階 (2時間)	ひろげる段階 (3時間)			いかす段階 (1時間)
活動と内容	1 新たなゲームと出会い、試しのゲームをする。 ○ ゲームの手順やきまりをとらえ、転がす、避ける動きを体験すること	2 変化する場で「ごろびょんボール」を楽しむ (I) 相手と向き合った場でゲームをする。 ○ ゆっくりボールを転がしたり避けたりすること	(2) ジャンプ台が変化する場でゲームをする。本時① ○ ボールを強く転がす動きを身に付けること	(3) ジャンプ台が組み合わさった場でゲームをする。① ○ 状況に応じてボールを転がしたり避けたりすること	3 これまでの活動をいかして、まとめのゲームをする。 ○ これまでの動きを振り返り、たくさん得点するために素早い動きを発揮すること
味方の友達と声をかけ合いながら相手の位置や動きに応じた転がす、避ける動きを身に付けていく基礎的・基本的な学び					
支援	※ ゲームの手順表の提示と動きの説明 ※ 動きのモデル演示	※ ボールを転がす動きを身に付けるための、ジャンプ台の段階的な角度の変化とチーム編成や役割の設定 ※ 個に応じた声かけ、動作補助、モデル演示	※ これまでによかった動きの振り返り ※ 得点が増えた賞賛		
評価標準	● ゲームの手順やきまりをとらえ、転がす、避ける動きを発揮している。	● 基本的な動きであるボールを転がす動きやボールを避ける動きを身に付けている。 ● 対戦相手の位置や動き、ボールが転がる位置を見ながら転がす、左右に避ける動きを身に付けている。	● これまでのゲームを想起し、身に付けた動き方をゲームのなかで発揮している。		

本時の授業仮説

これまでに、相手に向かってボールを転がしたり転がってきたボールを避けたりしてゲームを行ってきた子どもたちに、前時の場からジャンプ台のある場に変化させ、転がす位置や避け方を個に応じて声かけしたりモデル演示をして動きを促せば、味方と声をかけ合いながら相手のいる位置に向かって素早く腕を振って強くボールを転がす動き、転がってきたボールを左右に素早く動いて避ける動きを身に付けることができるであろう。

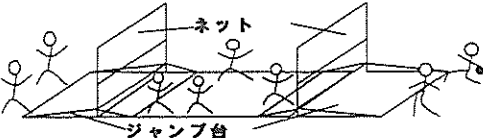
本時の目標

- ロープに沿って動かせる筒を手を大きく振って移動させたり、ゲームでボールを勢よく転がしたり、素早く避けたりする動きを発揮し、きまりを守りながら友達と一緒にゲームを楽しむことができる。
 Aグループ 腕の振りを大きくしてボールを転がしたり友達と一緒に声かけしながらボールを避けたりすることができる。
 Bグループ 腕の振りをより大きくしてボールを転がしたりボールが来る方向を見て避けたりすることができる。
 Cグループ 腕の振りを素早く強くしてボールを転がしたり来たボールに対して左右に素早く避けたりすることができる。

準備

学習の流れ図 ボール 手順表 得点板 角度が違うジャンプ台

展開

活 動 と 内 容			個の活動を促す支援
1 的あてゲームをしながら、これまでに身に付けた動きや友達と一緒にゲームをしてきたことについて話し合う。 ○ ボールを転がす動きを想起し、本時学習の場と出会い、本時のゲームでの動きの課題をつかむこと (めあて) ジャンプだいを つかって ボールを ころがしたり よけたりして ともだちと たのしく ゲームを しよう。			1 意欲的に友達と一緒にごろびょんボールを行おうとするめあてをもたせるための支援 ○ 前時の活動を振り返らせるための動きの演示 ○ ゲームの手順表と的あてゲーム
2 ジャンプ台を使って、「ごろびょんボール」を楽しむ。 (1) ジャンプ台がある場で前半のごろびょんボールをする。 ○ ジャンプ台を使って、ボールを弾ませたり転がしたりする動きや向かってくるボールを左右に動いて避ける動きをつくること			2 ゲームを楽しみながら転がす、避ける動きを身に付けるための支援 ○ ボールを転がす動きを促すジャンプ台を設置した場 ○ 1の2の子どもたちとのチーム編成 Aグループ：1の2の友達に声かけされながらボールを転がしたり避けたりするための声かけやモデル演示 Bグループ：1の2の友達に声かけされながら自分からボールを強く転がしたり、避けたりするための声かけ Cグループ：1の2の友達と一緒にゲームを楽しむための声かけ ごろびょんボールでの動き
Aグループ	Bグループ	Cグループ	・ 手を大きく、素早く振ってボールを転がす動きや走りながらジャンプ台の前まで来て、ボールを転がす動き ・ 友達と一緒に手をつないだりお互いに声をかけ合ったりしながら、転がってきたボールを左右に動いたり跳び上がったして避ける動き
○ 両手を前に振ってボールを転がす、転がってくるボールから友達と一緒に避けること	○ 両手を大きく振ってボールを転がす、転がってくるボールを見て避けること	○ 素早く片手でボールを転がす、転がってくるボールに自分で気づきボールを避けること	
 【ごろびょんボールの場の図】			
(2) 角度が変化したジャンプ台がある後半のごろびょんボールをする。 ○ 強いボールにするために、腕の振りを大きく早くして強く転がしたり、素早く左右に動いてボールを避けたりする動きを身に付けること			
○ 腕の振りを大きくして転がしたり友達と一緒に声かけして素早くボールを避けたりすること	○ 腕の振りをより大きくして転がしたり自分からボールを避けたりすること	○ 腕振りを素早く強くしてボールを転がしたり左右に素早く避けたりすること	
3 ごろびょんボールでの得点の成果と今日の学習で身に付けたボールを転がす、避ける動きについて発表し合う。 ○ 得点板で自分たちのチームの得点を数えて、たくさん相手にボールを当てたり避けたりしたことをとらえること ○ ボールを転がす、避ける動きが身に付いたことを実感すること			3 学習したことへの達成感を味わわせるための支援 ○ 得点板による勝敗の提示と得点したことの発表の場の設定 ○ 動きが変容したことへの賞賛

お世話をしている小動物の広場作りを通して、友達と力を合わせる生活単元学習

第3・4学年さくら組 生活単元学習指導案

指導者 原 田 敏 男

単 元 つくって ふれあおう どうぶつひろば

指導観

- 本学級の子どもたちは、3年生4名、4年生3名の計7名からなっている。子どもたちはこれまでに、一人一鉢で花を育てたり、池を作って水生生物を育てたりしてきている。これらの活動の中で自然とのかかわりをもったり、友達と協力して活動したりできるようになっている。しかし、小動物の飼育を続け、その環境改良をする活動についての経験は少ない。そこで、飼育を続けたり、環境を改良したりすることで、責任感を培い友達と役割分担して改良するよさを味わったりさせる。このことは、生き物の飼育ができるというやる気や、友達と協力して環境を改良する集団参加の力、小動物の飼育で身に付けた力を他の生き物の世話に生かす力などを育てることができる。つまり、豊かな生活を営む子どもを育てる上で意義深いものである。
- 本単元は、小動物を責任もって育てるものである。また、戸外で過ごさせることができるように動物広場を改良していくものである。生き物の飼育の継続を通して自信とやる気を身に付けさせ、動物広場の環境改良による適応力や友達と役割分担する力を育てることをねらいとする。具体的には、①ケージに入った小動

物に出会い、飼育するという課題意識をもち、飼育に取り組むこと、②小動物の飼育に関する知識や技能を身に付けること、③小動物が遊べるように工夫した動物広場を作るために友達と役割分担して活動すること、などが主な内容である。

- 本単元の指導にあたっては、小動物の世話や環境改良を通して子どもたちのできることが増え、身の回りの事象についての理解を深めるという生活上の課題を解決する実際の・総合的な学びを位置づけるようにする。そのために、子どもたちが目的意識をもって活動に取り組み、友達と役割分担しながら活動するための活動構成の工夫、協力して活動するための場の設定、個に応じた動作補助や声かけなどの支援を行う。具体的には、①小動物と出会い、ふれ合う活動を通して、飼育する目的と課題をつかむ活動、友達と協力して餌やり、糞の処理を行うとともに、動物広場の環境を改良するふかめる活動、動物広場でふれ合ういかす活動といった活動構成の工夫、②友達と協力して動物広場を改良する活動、③飼育の手順の提示と個に応じたモデル演示や動作補助、促し、声かけなどの支援を行う。

目 標

- 1 ケージに入った小動物に出会い、自分たちで飼育していこうという目的意識をもって、意欲的に世話をを行い、動物広場を作り、目的達成の満足感や充実感を味わうことができる。
- 2 動物広場作りの際、自分の役割を意識したり、友達と役割分担したりできるようになるとともに、飼育に関する知識や技能を身に付けることができる。

計 画 (約12時間)

階	つかむ段階 (2時間)	ふかめる段階 (8時間)	いかす段階 (2時間)
活動と内容	1 小動物に出会い、遊んだ後、飼育するという目的意識をもち、見通しをもつ。② ○ 小動物と遊ぶこと ○ 小動物をよりよい環境で過ごせるようにするという課題を意識すること	2 小動物の飼育と環境作りをする。 (1) 餌やりや糞の処理の必要性を感じ取り世話の仕方を身に付ける。③ ○ 水、餌、糞の処理の必要性の理解 (2) 友達と協力したり、役割を分担したりして、動物広場を作る。本時4/5 ⑤ ○ 友達と役割分担して作ること	3 友達を動物広場に招待して、動物紹介をしたり、ふれ合ったりする。② ○ 目的達成の満足感や成就感を味わうこと ○ 小動物についてわかりやすく紹介すること
小動物とのかかわりを通して、飼育技能を身に付け、友達と協力する実際の・総合的な学び			
支援	※ 小動物とのかかわり ※ 飼育することを理解するための図鑑の提示	※ 責任もって、協力して活動するための課題に応じたペアリング ※ 飼育手順の写真パネルの提示	※ デジカメの活用 ※ 紹介手順のための個に応じたアドバイス
評価標準	● 小動物と出会い、安全に気をつけて遊んでいる。 ● 小動物を飼育しようという目的をもっている。	● 餌やりや水やりの必要性を感じ、ペアで協力してお世話している。 ● 動物広場をつくるために協力したり、役割分担したりして環境改良している。	● ペアで協力して発表準備をしている。 ● 放し飼いをし、意欲的にふれ合っている。

本時の授業仮説

お世話してきた小動物が楽しく過ごせるようにと考えている子どもたちに、課題に応じたペアリングと力を合わせたコーナー作りの場を設定をすれば、小動物が遊んだり休んだりできるように動物広場の環境を改良することができるであろう。

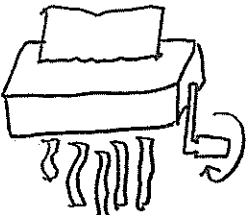
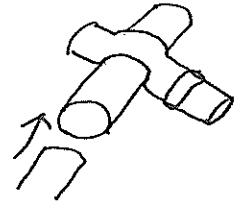
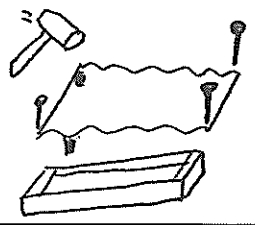
本時の目標

- 1 小動物が快適に過ごせるように、動物広場の環境を改良することを通して、友達と役割分担したり手助けしあったりして、課題に対して粘り強く取り組むことができる。
- 2 小動物が楽しく過ごせるように運動広場の中に製作や改良をすることができる。
 - Aグループ…小動物が潜ったり、遊んだりできるフカフカコーナーをつくること
 - Bグループ…小動物が楽しくくぐれるトンネルコーナーを設置すること
 - Cグループ…小動物が日陰で休めるやすらぎコーナーを設置すること

準備

小動物、手順パネル、各コーナーの材料など

展開

活 動 と 内 容			個の活動を促す支援
1 前時までの活動を振り返りながら、動物広場の完成予想図を見て、本時学習のめあてを確かめる。 ○ 前時は、各コーナーの材料準備をしたこと ○ 閑散とした動物広場を楽しくなるように意識すること (めあて) しょうどうぶつが たのしく すごせるように どうぶつ ひろばを よりよくしよう			1 目的意識や意欲をもたせるための支援 ○ 集めた材料を提示すること ○ ケージに入れた小動物を提示すること
2 ペアごとに、環境改良に取り組む。 (1) 環境改良のやり方を示す手順パネルや教師による環境改良の演示を見て、動物広場の環境を改良する用具を作る。 ○ 工程や動作などを大まかにとらえること			2 友達と意欲的に協力して活動に取り組むための支援 (1) 大まかな活動の手順の提示と材料の提供 Aグループ ○ 紙を裁断する器具を準備すること Bグループ ○ 自由に組み合わせられるようなパーツを提供すること Cグループ ○ 屋根材を打ち込みやすくするための屋根枠の準備
Aグループ ○ 床材を作ること 	Bグループ ○ 小動物がくぐれるようにつなぐこと 	Cグループ ○ 枠組みに屋根材を打ち止めること 	(2) 2人で力を合わせるコーナー作りの活動の設定 Aグループ ○ 床材を柵内に入れるときに協力するためのビニル袋を渡すこと Bグループ ○ トンネル管に被せる土を柵の外に提供し、土を受け渡すためのバケツを準備しておくこと Cグループ ○ 枠を取り付ける金具の止め方の助言をすること
(2) 作った用具を協力して各コーナーに設置する。 ○ 小動物が遊んでも壊れないように設置すること	Aグループ ○ フカフカコーナーに床材を敷き詰めること 	Bグループ ○ 塩ビ管の上に土を盛り、踏み固めること 	
3 快適になった環境を見合って、本時の学習を振り返る。 ○ 環境をよくする課題を解決できた満足感や成就感を味わうこと			3 活動への成就感を味わわせる支援 ○ 互いの成果を見せ合うこと

学 習 指 導 協 議 会

教 育 シ ン ポ ジ ウ ム

テーマ

今、子どもたちに育てたい力は？

ーこれからの教育の在り方を考えるー

○シンポジスト

福岡教育大学	教 授	大 坪 靖 直 先生
博多座	参 与	小 坂 弘 治 氏
本校研究副主任		北 田 尚 雄

○コーディネーター

本校研究主任	岩 城 一 磨
--------	---------

第2日目 午前の部

公開授業指導案

▼ 学 習 指 導 (9:15~10:00)

学年 組	教科領域等	学び	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	図画工作科	文化	きらきらゆらゆらかぜのおまつりだ	北 田 尚 雄	図画・工作室
1年2組	算 数 科	文化	いくつといくつでこうりゃく？バックンゲームをしよう	永 尾 健	1年2組教室
2年2組	道 徳	人間	みんな一生けんめい生きてるね！	木 下 美 紀	2年2組教室
4年1組	社 会 科	生活	つくろう！わたしの防災マニュアル	高 良 祐 治	4年1組教室
5年2・3組	理 科	文化	てこを使ったリフトゲーム！高得点をねらう作戦をたてよう	清 水 隆一郎	理 科 室
6年1組	国 語 科	文化	文章を選んで考えよう～イースター島からいえること～	平 島 健 二	6年1組教室

▼ 保健養護部学習指導 (9:15~10:00)

5年1組	体育科(保健)	生活	ストレス, すっきり大作戦	畠 山 佳 子	5年2組教室
------	---------	----	---------------	---------	--------

▼ 障害児教育学習指導 (9:15~10:00)

3・4年さくら組	国 語 科	みんなにしらせよう！じぶんのこと	諏訪原 佳 子	特殊棟音楽室
5・6年梅組	体 育 科	つないでゴール！パスしてネットゲーム	下 川 勝 彦	附属中体育館

第1学年1組 図画工作科学学習指導案

指導者 北 田 尚 雄

題 材 きらきらゆらゆらかぜのおまつりだ

指導観

- 本題材は、風にゆれる飾りをつくる目的をもって、紙材を中心とした材料を切ったり、曲げたり、つないだりする形の構成力や、付加材料で装飾していく色の構成力を培うことをねらいとする。具体的には①かぜにゆれる飾りをつくる目的をもって、風にゆれる材料のおもしろさやキラキラテープなどの材料からつくる方法やつくりたいものを発想し、自分が好きな色を選んだり、材料や方法を選択したりすること、②自分が表したいことに合わせて、はさみやのり、ホチキス、あるいは付加材料を使いながら、形や色を工夫しておもしろい形や美しい色に表すこと、③自分たちの飾りの形や色のおもしろさや美しさ、風にゆれるおもしろさに気付くとともに、友達といっしょに飾っていく意欲をもつことである。
- 本学級の子どもたちは、これまで「好きなものあつまれ」や、「ふわふわティッシュのきょうりゅうだ」の題材において、材料の質感や、形を思い思いにつくっていくおもしろさや意外性、自分の好きな色で彩色していく楽しさを味わっている。ここでは、描画材として、パスや共用絵の具を使うことができた。自分の好きな色で、好きな形を描いたり、描画材をつかって作品をつくっていくことに意欲的である。しかし、まだ入学して1ヶ月余りということで、自分の作品には興味はあるものの、友達の表し方や作品のよさにはまだ関心がうすい。
- 本題材の指導にあたっては、自分の好きな色や形、使いたい材料を選ぶとともに、友達の作品のよさにも関心をもつために、みんなで風の広場を飾る目的をもって活動を展開させていきたい。そこで、形をつくる段階では、材料の質感を感じ取りながら、思い思いの形をつくらせるようにする。そのために、紙パックなどの材料や色画用紙を筒状にして、さらに分解していく試しの活動を設定する。次に飾り付けをする段階では、風にゆれる感じを生かして付加表現させていく。そのために、風にゆれる展示場所の設定や、色紙や紙テープのほかにキラキラテープなどの材料を提供から自分の表したいことを思いつきながら、好きな色で付加表現させていくようにする。最後に作品を鑑賞する段階では、お互いの表現のよさや作品のおもしろさについて話し合わせ、活動の達成感をもたせる。

目 標

- 1 風のふく場所で、風にゆれる飾りをつくる目的をもち、自分の好きな形や色などを考えながら、材料や用具を意欲的に使い表現することができる。
- 2 自分が表したいことに合わせて、紙材をはさみやホチキス、のりを用いながら思い思いに形づくるとともに、風でゆれるような組み合わせ方を工夫することができる。

計 画 (約5時間)

階	形をつくる (2時間)	飾り付けをする (2時間)	作品を鑑賞する (1時間)
活動と内容	1 風の吹く場所を飾る目的で飾る材料を形づくる。 (1) 短冊が、風にゆれる感じについて話し合う。 ○ 材料の特徴のおもしろさに気付くこと (2) 紙筒状にした材料を分解構成する。 ○ 用具を駆使して構成	2 形づくった風祭りの飾りを、付加材料で装飾表現していく。 (1) 風にゆれる感じを生かして、材料を選んで付加表現する。① ○ 自分が思いついたことから、材料を選んで表現すること (2) 作品を展示し飾りが揺れたり光ったりする感じから材料を再検討する。本時① ○ 自分の表現を見直すこと	3 みんなで、風の吹く場所に作品を展示して、作品のおもしろさや美しさについて話し合う。① ○ 自分や友達の作品のおもしろさや美しさ、または表現のおもしろさに関心をもって、作品をみること
支援	風にゆれる飾りのおもしろさや美しさから自分の表したいことを発想し表現していく文化の学び		
評価基準	※ 風のふく場所に展示する活動提案と、紙材を筒状にするモデル演示 ● 紙材を筒状にしたり、はさみを使って切ったり、穴をあけたりしながら、飾りの形をつくっている。	※ 風に揺れたり、光ったりする材料の提供と、自分の思いにあわせて選択できる色材料の提供 ● 風にゆれる感じや、光に輝く感じから材料の材質や色を選んで、自分の作品の飾り付けをしている。 ● 作品を吊して自分の表現を見直す。	※ 作品を吊して展示するために、風のお祭りをを行う場の設定 ● できた作品を、共用の展示スペースに展示し、お互いの表現のおもしろいところを話し合っている。

本時の授業仮説

前時まででできた作品を、共用の展示スペースに吊して自他の作品を見合い、お互いの表現や作品を比べることで、自分のこれまでの表現から、もっと飾り付けしていくための材料や方法を選択し、新たな方法を考えながら、表現を練り上げていくことができるであろう。

本時の目標

- 1 自分の作品を吊して展示し、これまでの表現を見直すとともに、もっと風に揺れたり、きらきら光ったりするように新たな材料や方法で付加表現することができる。
- 2 自分がやってみたいことや、好きなことに合わせて、材料の種類や色を選んだり、材料に合わせて用具を選んだりしながら表現することができる。

準備

付加材料（キラキラテープ、スズランテープ、紙テープ）、はさみ、のり、ホチキス、展示スペース

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1 前時まででできた作品を吊して展示し、自分の作品と友達作品を比べながら、お互いの表現のおもしろいところや、参考にしてみたいことについて話し合う。 ○ 自他の作品から、表現のおもしろさや材料のよさに関心をもって見るとともに、新たな付加表現の意欲をもつこと （めあて） じぶんのかざりが もっとすてきになるように ざいりょうをえらんで かざりつけをしよう ※ 共用の展示スペースに作品を展示し、お互いの作品や表現を見合う場の設定をする。 2 自分がもっと表したいことから、材料や表現方法を選択して、新たな付加表現をする。 （1）これまでの自分の作品から、もっと飾りたいことに合わせて材料を選択する。 ○ 自分の表したい思いに合わせて、材料の色や種類を選択すること ※ 新たな飾り付けの材料として、キラキラテープやスズランテープ、紙テープを7色程度準備し提供する。 （2）自分が選んだ材料を使って作品の飾り付けをする。 ○ 材料の形や色、材質に関心をもって、風に揺れる感じや、光に輝く感じを生かしながら表現すること ○ 自分が表したいことに合わせて、はさみやホチキス、のりなどを駆使しながら飾り付けをすること ※ それぞれの新たに提供した付加材料の飾り付けのモデル資料を提示し付加表現のヒントにさせる。 【予想される子どもの活動】	○ これまでのできた作品をみんなでつるしてみると、友達作品にも、いろんな色や形があって、とってもきれいだな。 ○ 友達の作品で、短冊みたいに切ったものをたくさん吊しているのは、風が吹いたとき、ゆらゆらゆれてきれいだから、ばくもこれからの表現の参考にしてみよう。 ○ わたしは、友達が金色や銀色の色紙をいろいろな形に切って、飾り付けをしているのがすてきだと思います。だから、わたしも金紙や銀紙を四角や三角、ハート型に切って飾り付けしていこうと思います。 ○ キラキラテープは、ただ作品につけて垂らすだけでなく、キラキラテープ自体も、もっとおしゃれな形につくって作品につけていくと、すてきな風飾りになりそうだよ。 ○ 細いスズランテープは、のりではくっつけにくいので、ホチキスでとめていくとうまく作品につけられそうだよ。
 【キラキラテープを垂らしてみよう】  【キラキラ紙をいろんな形にしてみよう】  【紙テープを巻き付けてみよう】	 【スズランテープを細く切って垂らそう】  【もう一つ紙筒をくっつけてみよう】
3 本時の活動でできた作品を、再度共用展示スペースに展示し、自分や友達作品を見ながら、作品や表現のおもしろさや美しさについて話し合う。 ○ 自分たちの作品の形や色、表し方のおもしろさに関心をもってお互いの作品を見ること	○ たくさんの色のついた材料を作品につけていくと、もっとすてきになったよ。 ○ 今度は、みんなの作品をいっしょに展示してみたいな。

自分のつくった考えを生かせるようなゲームを通して、関数的見方を育てる算数科学習 第1学年2組 算数科学習指導案

指導者 永 尾 健

単 元 いくつかといくつかでこうりやく!!パッくんゲームをしよう

指 導 観

- 本単元は、数の合成・分解を通して、10までの数の多様な見方（加法的な構成）ができるようにするとともに、合成・分解の順序性をもって習熟を図ることによって関数的な見方の基礎の定着をねらっている。具体的には、①操作活動を通して、順序立てて数の構成を調べることができること②操作活動を通して、数の合成・分解には、規則性があるといった関数的見方をとらえること③数の構成には、多様な見方があることなどである。本単元で用いる「パッくんゲーム」は、2匹の「パッくんマン」が、2匹で協力して1つのえさを食べ（数を合成分解し）ながらゴールに進むといったゲームである。子どもたちは、自分の数理をうまく活用する中で、ゲームに勝つことへの自信をもつとともに、関数的な見方をもち、より効率的にゲームを進めることができるよさがある。
- 本学級の子どもたちは、これまでに具体物を数えたり、半具体物に置き換えたり、数から具体物を考え出したり、大きさを比べたりなどの操作経験から、自然数の概念を育ててきた。また、10までの数の学習では、具体物を多く使いながら、1対1対応、集合数の概念

を算数的活動を通して子どもに実感させて学ばせてきた。大小比較に関しては、具体物、半具体物、そして、数字への抽象度を高めてきた。

しかし、数の構成に対して直観的な操作活動に頼りすぎて、数字といった抽象的な数の操作や関数的なものの見方などの数学的な考え方にまで至っていない。

- 本単元の指導に当たっては、まず、10までの数の合成・分解を行う「パッくんゲーム」を通して、ゲームの中で10までの合成分解が効率的にできない場面に出会わせ、学習課題を設定する。次に、数の構成を関係的な見方をしたり、関係図や絵図、表などを取りまとめたりすることによって、数の構成をとらえさせたい。ここでは操作盤（子どもたちのネーミング：串団子）によって数の構成の規則性をとらえることができると考える。また、おはじき（数のお部屋）を操作し、数の構成の多様な見方をとらえさせる。最後に、数の合成・分解場面で条件設定をしたゲームで遊び、数の構成についての理解を深めるとともに、関数的な見方をより活用できるようにするために3つのステージに分けたゲームを準備するといった場を設定する。

目 標

- 1 パッくんゲームを通して、数の構成について具体から抽象へと操作活動を工夫したり、操作活動の順序を工夫したりしながら、効率的な数の合成や分解を行って、楽しくゲームをすることができる。
- 2 数の構成を通して10までの数には、多様な加法的構成があることを理解することができるとともに、数の合成分解について1つの数とほかの数との関係に着目するといった関数的な見方をすることができる。

計 画（約6時間）

階	第1次（1時間）	第2次（4時間）	第3次（1時間）
活動と内容	1 「パッくんゲーム」を行い数の合成・分解をもとにしたゲームであることをつかむ。① ○ 1つの数がある数とそれに対応する数から構成されていること	2 5から10の数の構成を見つけるために、おはじきや操作盤を活用して数の構成について調べ自分のつくった考えを生かしてパッくんゲームをする。 本時4/4④ ○ 数を構成する2つの数には多様にあることをとらえるとともに、数を構成する2つの数を関係づけ、関数的な見方ができること	3 効率のよい数の構成の見つけ方を生かして「パッくんゲーム」を行う。 ① ○ 1つの数とほかの数を関係づけながら数の構成をとらえ、有効に関数的な見方を活用できること
5から10の数の構成をゲームの中で行いながら、関数的な考えを創り出す文化の学び			
支援	※ パッくんゲームを行い数の合成・分解についての課題場面に会わせる	※ 数の合成場面と分解場面に分けたゲームの提示と数の合成分解を調べるために操作盤やおはじきの操作活動ができる教具の活用	※ 3つのステージからなる数の合成・分解ゲーム場面の設定と選択場面の設定
評価標準	● 1つの数がある数とそれに対応する数から構成されていることをもとに数の構成を考えている。	● 操作活動を通して、数の構成について1つの数とほかの数の関係に着目しながら、関数的な見方や多様な見方をとらえている。 ● 順序よく、落ちがなく調べることができる。	● パッくんゲームを行い、数の構成の規則性に関係づけながらパッくんゲームを行っている。

本時の授業仮説

9, 10の構成を考える場面において, 10の合成・分解について操作盤(子どもたちのネーミング: 以下「串団子」とする。)やおはじき(数のお部屋)を使った活動を選択させれば, 1つの数のある数とそれに対応する数でとらえるといった関数的な見方や考え方を身につけることができるであろう。

本時の目標

- 1 自分の見通しをもとに選択した教具で, 落ちがなく, 順序立てながら9や10の数の構成について, 操作活動を選択したり, 操作活動の順序を工夫したりして, 効率的な数の合成や分解を行って, 楽しくゲームをすることができる。
- 2 9や10の数の構成について, 操作活動を通して多様な見方を持ち, 規則性をもっていることがわかる。

準備

前時までにつくったゲーム, 学習ノート, 操作盤(串団子), おはじき

展開

活 動 と 内 容 (※は, 評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 バックンゲームをもとに, 5から8までの数が多様な数によって構成されていることを話し合い, 9や10の数の構成について考えるという本時のめあてと解決の見通しについて話し合う。 ○ 9や10の数の構成にも, 多様性や規則性を見方をすることに気づく (めあて) 9や10のばめんのバックンゲームにちょうせんしよう。 ※ これまでの5から8までの数の構成について調べたことからわかったことや気づいたことを出し合い, 見通しを持つ場を設定する。 2 9と10の数を構成する2つの数について調べ, 調べたことをもとにして各ステージ(数の合成・分解場面)のバックンゲームを行う。 (1) 9や10の数の構成について2つの教具を選択して調べる。 ○ 9や10の数の構成 (数のお部屋: おはじき) (串団子) について教具の特性 (順序性, 多様性) に着目しながら, 調べること ※ 教具を選択した理由と結果について話し合う場を設定する。 (2) 9や10の合成分解を教具をもとに確かめながらゲームを進め, 見つけ方や気づいたことなどを話し合う。 ○ 数の分解・合成で1つの数がある数と関わって規則正しく変わっていていることや多様な数の構成であること ※ 9や10の数の構成について教具を使って操作をしながら, 規則正しく変わっていることや多様な数の構成であることをとらえさせる。また, 3つのステージ(分解, 合成, 合成分解場面)と段階を上げてゲームをする。 3 バックンゲームをして, 勝つ要因としてよかったところについて話し合い, 本時学習のまとめをする。 ○ 数の構成には, 関数的な見方や多様な見方を活用することによさがあること ※ ゲームを終えて, 勝敗のわけに焦点化したり, 操作した具体物をもとに, 発表の場を設定をする。	○ 8は1と7, 2と6, 3と5, 4と4…のように串団子が順序よく並んでできていたよ。 ○ 9や10は, どんな数でできているのかな。たくさんありそうだね。 ○ 今日も串団子を使ってみるとわかりやすそうだね。おはじきも動かしやすいくてよさそうだね。 【操作盤: 串団子を使った操作活動】 ○ 9や10も, 5や6…のように, きれいに数がそろっていくだろう。 ○ 順々に動かして調べてみよう。 ○ 串団子を1つずつ動かしながら順序よく考えてみよう。 ○ 串団子を使うと順々に考えられてわかりやすく, 見やすいね。 ○ 一つ一つ確認ができて, 落ちがないように調べられるからいいね。 ○ 調べてみると, 規則正しく数が並んでいて, おもしろいね。 ○ 串団子で順序よく玉を移しながら調べたら, きれいに階段みたいになって, 整列したようになったよ。 【おはじき: 数のお部屋を使った操作活動】 ○ たくさんの食べ方(数の構成)が見つけられそうだね。 ○ 数のお部屋で調べたら, たくさんの数の構成を見つけれれたよ。 ○ 一つの食べ方(数の構成)がわかれば, 一つずつ増やしたり, 減らしたりすればいいんだね。 ○ おはじきや串団子を使わなくても数の組み合わせ(数の構成)のきまりを使うと, すぐにわかるよ。 ○ はじめに思いついた数から1ずつまたは, 2ずつ増やしたり, 減らしたりすればいいんだね。

第2学年2組 道徳学習指導案

指導者 木下 美紀

主 題 みんな一生懸命生きてるね!

指導観

- 本主題は、生命あるものを大切にしようとする心情を育てることをねらいとしている。本主題は、低学年3-②の内容である。生命は唯一無二何者にもかえられないという個性を有している。また、自らの命は、時間的な視点からいえば、父母、祖父母、祖先から連綿として受け継いできたものであり、そして、後世へと引き継ぐ使命をもったものであるといえる。さらに、空間的な視点からいえば、家族をはじめ、周囲の人々の愛情によって支えられ生かされている命である。そのような命の大切さは、精一杯生きている人や動物に出会ったとき実感される。主な内容として、①命あるものを大切にしようとするものの大切さに気付くこと、②一生懸命生きている動物の命を大切にしている主人公との共通性から生命尊重の大切さを理解すること、③自分の命を大切に元気にいっぱい生きていく大切さに気付くこと、である。本主題は、動物の一生懸命生きる様子を見て、元気に生きていこうとする主人公の姿から、自分も元気に生きていこうとする自信をもち、命のすばらしさについて学ぶ意義を感じるものである。
- 本学級の子どもたちは、生き物に対する関心が高く、生き物を捕まえたり、飼育したりしている。しかし、最初にはかわいがって飼育するが、興味が薄れてくるとそのままにして死なせてしまうことがある。これらは、生き物が単なる愛玩動物であり、命あるものという認識は薄く、自分の都合が優先されるからである。また、

子どもたち自身を考えると、大変活動的で、外で元気に遊び体を動かしている。しかし、度を越してすりきず等の軽度のけがをしたり、危険と分かっているにもかかわらず近づくことがあつてけがをしたりすることがある。これらは、自分の命についての認識が薄いことが要因としてあげられる。そこで、主人公の動物の命を大切にす姿から命の大切さ、すばらしさに気付かせ、自分の命の大切さを自覚する人間の学びを展開していく。

- 本主題の指導に当たっては、命を輝かせて懸命に生きる動物の姿を見て、その命を守らなくてはならないという主人公のよさを追求する人間の学びを展開する。そのために、命の尊さ、すばらしさを感じる資料を開発し、感動的に活用する。そして、生命尊重の価値を含む主人公との同質性から比較を行う自己開発の学びを展開する。具体的な活動として、①自分の命について気がかりを持たせるために、絵本の中からの1枚絵と自分を比べる比較活動Ⅰ②資料を読んで感動した場面とそのわけを考える活動③飼い主を捜したが見つからず、飼うことを決心した主人公を支えた心を追う活動④自分と主人公の気持ちや行動を比べる比較活動Ⅱ⑤自分に気付くために、心のマークで自分の命のとなえと主人公の共通性から、比較活動Ⅲを設定する。それらを通して、主人公との生命尊重に関する同質性を見出して、自信をもち、こうなりたいというなりた自己像を描くことができると考える。

計 画 (約1時間)

階	生活を振り返る段階 (事前)	自分の生き方をつくる段階 (1時間)	生活に生かす段階 (事後)
活動と内容	1 自分の生活に近い1枚絵の提示による実態調査から自分の命のとなえを見つめる。 (事前アンケート) ○ 生命尊重の価値から自分の生命尊重の傾向性を気付くこと	2 資料『大すきだよ！モモちゃん』を通して道徳的な価値の大切さを感じ得る。本時 (1) 主人公に共感し、主人公のよさから自分と間接的に比べる。 ○ 命の大切さを理解すること (関係性) (2) なりたい自己像について記述する。 ○ 自分への自信から未来の自己像を描くこと	3 生命尊重の価値の振り返りをする。 ○ 生き物を大切にしたいという態度で接し、気持ちのよい生活ができているか心のノートで今の自分を振り返ること
「自分も！」と主人公に共感しながら、生き物の命の大切さに気付く人間の学び			
支援	※ 最初にはかわいがっていた生き物をそのままにしている絵を提示する。	※ 心のマークなどから、自分と主人公の同質性を見出し、命あるものすべてを大切にしている自分に気付かせる。	※ 生命尊重についての自己の行為を内省するために心のノートを活用させる。
評価基準	● 自分の生活に近い1枚絵をもとに、自分の生き物に対する傾向性について知りたいという気がかりをもっている。	● 命は一つしかないという命のかけがえのなさについて気付いている。 ● 自分も主人公と動物みたいに元気に生活していこうとする意欲を高めている。	● 生命あるものを大切にしている自分の生命尊重に関する実践状況を心のノートをもとに振り返っている。

本時の授業仮説

自分は生き物の命を大切にしているかという気がかりをもっている子どもたちに、迷った目の不自由な犬に対して放っておけないという気持ちで飼うことに決めた主人公のよさとわけを交流する場、心のマークで自分・主人公と似ている気持ちを比較する場を設定すれば、精一杯生きている生き物の命の大切さに気付き、自分も元気に生活していこうとする自己像を描くことができるであろう。

本時の目標

- 1 主人公の気持ちについて共感的に追求し、自分と主人公の気持ちや行動を間接的に比べて、共通性や差異性から自分の命のとらえについて確かめながら、道徳的な価値（生命尊重）のよさを感じることができる。
- 2 資料『大すきだよ！モモちゃん』を通して、小さな命を救いたいという強い思いから、自分の都合を優先するのではなく、生き物の命を大切にすることの大切さを理解することができる。

準備

場面絵、道徳ノート、自分・心のマーク、流れ図、実態調査表

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)

1 1枚絵とVTRをもとに生命尊重を振り返り、本時のめあてを考える。

○ 生命について知りたいという気がかりをもつこと

(めあて)自分や動物の命についてどんな気持ちが大切か考えよう。

※ 具体的な1枚絵(目の不自由なバグ犬とその飼い主であるN児の写真)とVTR(目が不自由でも元気に走り回っている場面)をもとに、自分の気持ちや行動を見直させる。

2 資料『大すきだよ!モモちゃん』をもとに、かけがえのない命、支えられている命という生命尊重の大切さについて話し合う。

(1) 資料から、感動した場面とその理由について話し合う。

○ 感動の場面を明確にし、自己の傾向性を見つめること

※ 感動した場面の自分の傾向性を見出させるために、感動した場面とその理由とともに、道徳ノートに記述させ、発表させる。

※ 発表させる際に、自分の経験とつなげて発言できるように、事前のアンケートに着目させて、車にひかれそうになっている小犬を見て、命を救いたいという心情について自分との同質性を出させておく。

(2) 小さな命を放っておけないという主人公を支えた心について話し合う。

(空間的広がり) ← 1つ (モモちゃんの命)
 ← かけがえのない命 (個性) →
 (家族・ぼくの姿) ← (支えられ生かされる命)

※ 主人公の価値ある生き方について話し合わせ、自分との共通性から生命尊重に関する道徳的な価値に気付かせる。

(3) 主人公と自分の気持ちを比べ、動物の命をもとに今までの自分の生命尊重について考え、自分の命につなげて考える。

○ 自分の生命尊重についての傾向性をとらえ、主人公の中にある価値(生命尊重)が自分の心の中にあることに気付くこと

※ 視覚的にとらえやすいように心のマークに主人公の気持ちでとりいれたい気持ちそのわけを記述させ、自分と主人公を間接的に比べさせる。

※ 心のノートの絵と言葉から動物と人間をつなげて考えさせる。

3 命を輝かせて生きる目の不自由な犬モモと出会い、動物の命、自分の命の大切さについて話し合う。

○ かけがえのない命を大切にしようとし、自分も元気に生きていこうとする実践意欲を高めていること

※ 目の不自由な犬モモを教室に連れて来てもらい、実物を見て話し合わせる。

子どもの思考の流れ

○ モモちゃんは、とても元気だね。目が不自由なのに、どうしてこんなに元気でいられるのかな。

○ ぼくも○○ちゃんみたいに元気だよ。いっしょに大きくなっている。

○ この写真のように命を大切に生活ができているかなあ。

とても心配している	お母さんに頼んだ	元気に育っている
・約束に遅れるかもしれないのに、犬のことを思っているところ	・放っておけない ・ぼくが助けるしかない	・はやとくんと一緒に大きくなっているところ
・ぼくも同じ経験があった。見ていたことがある	・かわいそうだよ ・目が不自由だから心配	・目が不自由でも元気に生きていること

○ このまま死んだら大変だよ。大切な命だよ。(個性)

○ ぼくしか守る人がいないよ(支えられている命)。

○ 私も、飼っている犬を大事に育てているよ。主人公とどのくらい重なるかな。気持ちが似ているな。

○ 主人公と同じように一つの大切な命を守りたい心が私の中にもある。

○ 私も命を大切にしているんだな。自信が持てたよ。

○ 私もモモちゃんのように元気に大きくなるよ。

○ 私も、主人公のぼくみたいに命がある生き物を大切にしたいな。

○ 私もモモちゃんとMくんみたいに一緒に大きくなりたいな。

○ ○○ちゃんを守ってこれからのずっと育てていきたいな。

自分の生活から災害対策追究の意義をとらえ、安全に生活するための行動を決める社会科学習

第4学年1組 社会科学習指導案

指導者 高 良 祐 治

小単元 つくろう！わたしの防災マニュアル

指導観

- 本小単元は、様々な災害が身の回りで起こりうることを認識し、その災害から人々の安全を守る関係機関の働きを追究することで、自分も安全な生活の実現に協力しようとするのをねらっている。主な学習内容は、①火災、風水害、地震といった災害に関心をもち、災害対策の課題を設定すること、②災害からくらしを守るために、県や消防署をはじめ、諸機関が連携をとり、早く対処できる体制をとっていることやそのための人々の工夫や努力をとらえること③災害発生時にどのように行動すべきか、関係機関の働きを意識しながら決めることなどである。このことは、災害対策の社会の仕組みをとらえるだけでなく、自身の安全を守り、より安全な生活に更新できることから意義深い。
- 本学級の子どもたちは、飲料水やごみの学習で、生活と関係が深いこれらの対策が計画的に進められていることを学習してきている。そこで本小単元では、災害から安全を守る対策に自分自身がどのように関わっていけばいいのか、というところまで追究させたい。災害については、一昨年のもう一つの豪雨、昨年の台風、今年のもう一つの地震を経験しており、災害が身の回りで起こりうることはとらえている。しかし、災害発生時に様々な機関が我々の安全を守るために組織的に活動していることや、その際に自分自身はどのように行動すればいいのか意識している子どもはほとんどおらず、子どもの安全を守る上からも、学習したことを生活の中で活かしていくことから追究させる価値がある。
- 本小単元の指導にあたっては、安全を守る社会の仕組みを複数災害を関係づけながら追究することで、より防災を意識していく生活の学びに重点化する。そのために、防災センターでの災害体験などから、自分の生活場面でこのような災害が起きたらどうなるのか、誰が守ってくれるのか、という気付きをもち、関係機関の働きを調べていこうとする課題を設定する。次に、学校が火災になった場合の関係機関の動きを消防署の方との交流を通して調べることをきっかけとして、さらに、風水害と地震から、自分の生活場面により関わりが深い災害を選択させ、県の防災安全課の方からアドバイスを受けながら図上演習を行うなどして追究させていく。最後に、これまでの追究をもとに自分の生活場面の防災マニュアルを完成させる。

目標

- 1 災害は、いつでもどこでも起こりうることに気付き、その災害からどのように自分自身の安全を守ればいいのか追究することで、防災を意識した生活を送ろうとすることができる。
- 2 様々な災害から人々の安全を守るために、県や消防署をはじめ、関係諸機関が連携をとり、迅速に対応する体制がとられていることや、その実現のために多くの人々が関わっていることをとらえることができる。

計画(約12時間)

階	第1次(3時間)	第2次(7時間)	第3次(2時間)
活動と内容	1 災害への対策を調べ、個の課題を設定する。 (1) 災害模擬体験や過去の災害調べを行い、災害に対しての関心を高める。② ○ 災害の特徴やいつでも起こりうることであることをとらえること (2) 生活を振り返り、課題を設定する。① ○ 身近な生活の災害と関係機関の働きから課題設定すること	2 災害時における関係機関の働きを追究する。 (1) 学校が火災になった場合の関係機関の働きを図上演習で調べる。③ ○ 火災時の関係機関の働きを調べること (2) 風水害か地震を選択し、関係機関の働きを調べる。3/4本時④ ○ 火災の場合と関連づけながら関係機関の働きを追究すること	3 個々が防災マニュアルをつくり、交流する。 (1) 防災マニュアルを作る。① ○ 自己の課題に応じた関係機関の働きをとらえ、自分の防災行動を決定すること (2) 交流会を開く。① ○ 学びへの自信
支援	※ 防災センターでの災害模擬体験をする。 ※ 福岡の過去の災害調べさせる。 ※ 身近な生活の中での災害と関係機関、自己の行動から学習課題を設定させる。	※ 火災場面での追究後、風水害と地震の災害場面を提示し、生活の中から心配される災害を選択させる。 ※ 県防災安全課の方や消防署の方をゲストティーチャーとして招聘する。	※ 予想される災害状況や関係機関の働き、自分の行動、そこから考える予防方法を取り入れたマニュアルづくりをさせる。
評価基準	● 災害発生時のようすをとらえ、自分の生活場面で起こったらどうなるのだろうか、という気付きから課題を設定している。	● 災害時の関係機関の働きをとらえ、災害の種類に合わせて、人々の安全を守る体制がとられていることをとらえること。	● 自分の生活に応じた災害発生時の行動のあり方をつくり、表現することで、自信を高めている。

風水害と地震の場面での関係機関の働きのようすをとらえていく本時において、各場面の図上演習をゲストティーチャーからのアドバイスを受けたり、災害間で交流を行ったりできる場を設定すれば、いずれの災害においても関係機関があらゆる状況を想定して災害から人々の安全を守る工夫をしていることに気づき、自分自身も安全な生活をしていこうとすることができるであろう。

- 1 風水害か地震を選択し、図上演習をゲストティーチャーと交流しながら行っていくことで、これまで気付いていなかった防災の働きに気づき、これから自分自身も防災を意識した生活をしていこうという意欲をもつことができる。
- 2 火災、風水害、地震のいずれの災害においても、また、どのような場面においても、自分たちの安全を守るために、関係諸機関が連携をとりながら迅速に対応する体制をとっていることをとらえることができる。

図上演習図、災害のようすの写真やVTR

活動と内容(※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 火災の場合の図上演習を振り返り、今現在の風水害と地震の図上演習のようすを確かめることで、もっと詳しくしていく必要があることを確認する。 ○ 今の図上演習図では、安全が確保されていないことをとらえること (めあて) 風水害や地震が起こったとき、どのように安全を守るための活動が行われるのか調べよう。 ※ 火災の図上演習図と比較させ、今追究が不十分な部分を発表させ、もっと詳しくしていく必要があることを確認する。	○ 火災の時は、消防署だけでなく、ガス会社や電気会社、水道局など様々な人たちが火を消すために協力して活動していた。だとしたら、風水害や地震のような災害の場合もきっと安全を守るために活動する人たちがいると思う。今のままの図上演習では、十分に安全は確保されていないと思う。
2 風水害や地震の時の関係機関の働きについて調べる (1) 図上演習図に関係機関の働きを書き加える。 ○ 災害の状況を把握し、その条件に応じて、関係機関がどのように活動するのかとらえること ※ 災害の状況や人々の危険性、災害から安全を守る関係機関の活動という視点から図上演習を行わせる。	○ 大きな災害の時は、県庁に災害対策本部が作られて、各地の災害のようすを調べ、指示を出すんだ。電話などが使えなくなっても連絡が取れるような装置を準備して備えているそうだ。 ○ 消防署の人たちは、助けを求めている人々のところに駆けつけるけど、火災と違っていろんなと
※ グループごとに県の防災安全課の方や消防署の方に、適宜アドバイスを出していただいたり、質問したりできるような場を設定しておく。 (2) 風水害と地震の図上演習の結果、明らかになった関係機関の動きについて話し合う。 ○ 災害の種類が異なっても関係機関があらゆる状況を想定して災害から人々の安全を守る工夫をしていることをとらえること ※ 2種類の図上演習の結果を比較できるように提示し、共通する部分について話し合わせる。	ところで助けを求めているから消防団などと協力しながら活動するよ。 ○ 風水害や地震の場合でも様々なところでたくさんの人がぼくたちの安全を守る活動をしてくれるんだ。火事に比べて範囲が広がるから福岡県全体で取り組んでくれるそうだ。 ○ 災害が変わっても、多くの人々が私たちの安全を守るために、計画的に活動してくれているね。
3 本時学習を振り返り、次時の学習について話し合う。 ○ 充実した防災マニュアルを完成させるための視点を見出し、次時からの活動への見通しをもつこと ※ 県防災安全課の方や消防署の方から「生活に役立つ詳しい防災マニュアルをつくってほしい。」という内容で話していただく。	○ これまで調べてきたことや防災安全課の方や消防署の方のアドバイスをもとに、詳しく役に立つ防災マニュアルを完成させていきたい。

体感から規則へ、規則から数値化されたきまりへ、てこのきまり創り出す理科学習 第5学年2・3組 理科学習指導案

指導者 清水 隆一郎

単 元 てこを使ったリフトゲーム！高得点をねらう作戦をたてよう！

指 導 観

- 本単元は、てこを使い、力の加わる位置や大きさを変えて、てこの仕組みやはたらきを調べていく理科学習である。具体的には、①水平に釣り合った棒の支点から等距離にものをつるして棒が水平になったとき、ものの重さは等しいこと、②力を加える位置や力の大きさを変えると、てこを傾けるはたらきが変わり、てこが釣り合うときにはそれらの間に一定のきまりがあることをとらえることをねらっている。ここでは、てこを使ってペットボトルを持ち上げ、その重さをあてるリフトゲームから、棒を使ったときにかかる力を正確に予想する求めをもち、力を数値化する方法を考えたり、てこの仕組みのきまりを調べたりする中で、てこの仕組みやはたらきのきまりを子どもが見出すことで科学する楽しさを味わうことができると考える。
- 本学級の子どもは、ピンセットやはさみなど、日常生活の中でてこを利用したものにふれてきている。その中で、はさみは内側の方がよく切れる、ピンセットは、先をもてば強くつかめるなど、さまざまな考えをもっている。また、てこやてんびんの釣り合いについては、シーソーや積み木遊びの経験から、中心からの距離に気おつけければバランスがとれることや支点をずらしても、重さが違えば釣り合わせることができるという考えをもっている。しかし、支点からの距離とおもりの重さの関係については意識していない。そこで、てこやてんびんが釣り合うきまりが数量的に導き出せることに驚きをもたせ、きまりをとらえさせたい。
- 本単元の指導にあたっては、リフトゲームでの気づきをもとに、棒を使ったときにかかる力を正確に調べたいという求めをもち、支点と力点に着目しながらしくみを調べ、数量的にきまりを見出す「文化の学び」を展開する。そのためにまず、2種類のてこを使って、持ち上げたペットボトルの重さを予想するリフトゲームを行い、力のかかり具合がてこで違ってくることに疑問をもたせる。次に、共通の実験により、支点と力点の位置を長さで表し、持ち上げる重さを数値化していく必然性をもたせたい。また、子どもが自分の考えを試していく中で、数量的にてこのきまりをとらえていくことができるようにする。さらに、とらえたきまりをもとに、身のまわりのものを数値化していくことにより、きまりや調べ方を適用できるようにしていく。

目 標

- 1 リフトゲームの持ち上げたものの重さを正確にあてる方法を考え、支点や力点に着目して、力と重さの関係についての仮説を立て、自分の考えを試していく活動を通して、科学する楽しさを味わうことができる。
- 2 てこにおける支点・力点・作用点の関係を調べ、支点から等距離につるした同じ重さのおもりが釣り合うこととてこが釣り合うには支点からの距離×重さが等しくなければいけないことをとらえることができる。

計 画 (約8時間)

階	第1次(2時間)	第2次(4時間)	第3次(2時間)
活動と内容	1 てこで、ペットボトルを持ち上げたり、釣り合わせたりするリフトゲームを行い、重さを正確にあてるための作戦を考え、計画を立てる。② ○ てこの現象に疑問を感じその仕組みに着目すること	2 リフトゲームで高得点を出すための作戦を考え、てこのきまりを調べる。 (1) 位置による重さの変化を確認する実験を行い力の変化を話し合う。 本時2/2② ○ 位置による重さの増減を捉えること (2) 正確な重さの出し方を調べる。 ② ○ てこのきまりは数値化できること	3 てこのきまりをもとに、ポストメーターやモビールの仕組みを考え、もの作りをしたり、身の周りのてこを追究したりする。 ② ○ きまりを他のものへあてはめること
リフトゲームで高得点をとる求めをもち、自分の仮説から、調べ方を考え、きまりを創り出す文化の学び。			
支援	※ 手応えが変わるてこを使ったリフトゲームを提示し、実際にゲームを行う。	※ 子どもの考えを確かめていくことのできる材料として棒の目盛を準備する。 ※ 数値に着目できる共通実験を設定する。	※ ポストメーターの提示 ※ 身のまわりのてこを使ったものを例示する。
評価基準	● てこの力のかかり具合を感じ、てこを釣り合わせる仕組みを支点・力点・作用点に着目して考えている。	● てこやてんびんが釣り合うきまりを支点からの距離と重りの位置で説明している。 ● 実験の結果を数式にあてはめ、かけ算の式を用いて、重さや位置を予想している。	● きまりを使って、もの作りをおこなったり、身のまわりのてこを使ったものを調べたりしている。

本時の授業仮説

てこを使ったときの力のかかり具合を重りの釣り合いやバネののびに置き換えて調べる場を設定し、調べた結果を支点・力点・作用点の関係から整理していけば、てこの釣り合うきまりについての数量関係に気づき、力点の重さから作用点の重さを正確に予想することができるであろう。

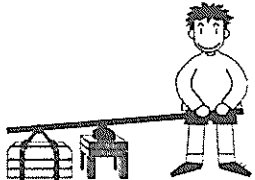
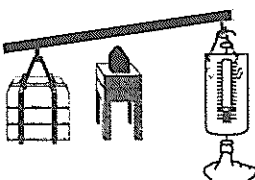
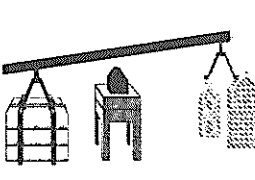
本時の目標

- 1 リフトゲームで、高得点を上げるために、力のかかり具合を正確に予想する方法を工夫して調べ、支点と力点・作用点に着目して、リフトゲームの重さを確かめる方法を見つけていくことができる。
- 2 力のかかり具合を支点からの距離・釣り合い・重さに着目して確かめ、ペットボトルの重さと力の関係を結果をもとに分類することで、てこの釣り合いや重さのきまりを予想することができる。

準備

個別実験の計画、棒と台、長さを設定した棒、重さを設定したペットボトル、バネばかり

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1 前時学習を想起し、力点の力のかかり具合から作用点の重さをもっと正確に導き出す方法について話し合い、本時学習のめあてを設定する。 ○ 正確に重さを調べる意欲をもつこと （めあて）正確にペットボトルの重さを予想するために、ペットボトルを持ち上げる時の位置や力のかかり具合を正確に調べ、自分の実験結果をもとに、てこのきまりについて話し合おう。 ※ 前時に計画したグループごとの実験計画や本時使っていく、実験道具を提示する。 2 自分の考えた実験装置で、てこにかかる力や位置を正確に調べる実験を行い、ペットボトルの重さを見つける方法について話し合う。 （1）支点の位置と力点の位置の条件をそろえ、てこにかかる力を自分の考えた方法で調べる。 ○ 支点と力点を変え、作用点にかかる力を記録すること ※ 条件ごとに数値を記録できる用紙を準備する。	○ 力の大きさを知るためにもっと正確な力の違いを見つけたい。 ○ 手応えだけではどちらが力強いとは言えない場合が出てくる。 ○ 重さに置き換えて、釣り合いを見たら力がわかると思う。 ○ 実際にバネばかりで力のかかり具合を正確に調べる。 ○ 支点や力点の位置も正確に測っていき、何が原因かわかるように、ひとつずつ変えて調べる。 ○ 長さを2倍にすれば、重さは半になるよ。 ○ 支点が真ん中だと右と左は同じ重さになるよ。
予想される子どもの実験装置 力のかかり具合を支点や力点の距離に着目して調べる。 （距離に着目）  バネばかりを用いて、力点にかかる力を定量的に調べる。 （重さに着目）  力のかかり具合を左右の重さの釣り合いから調べる。 （釣り合いに着目）  （2）結果を発表し、力のかかり具合について話し合う。 ○ 支点からの距離と重さとの関係をまとめること ※ 黒板に掲示できる記録カードを使った結果の交流の場を設定する。 3 新たなてこを釣り合わせるために、結果の類型をもとに釣り合うためのきまりについて話し合い、自分なりの仮説を立てる。 ○ てこの数値的なきまりについて予想すること ○ てんびんは支点からの距離が同じ所に同じ重さを置けば、釣り合うことから、釣り合いのきまりを予想すること ※ 支点からの距離の違うてこ（3倍と4倍の長さのてこ）を提示する。 ※ かけ算が成り立つ事例と足し算が成り立つ事例を紹介する。 ○ やっぱり、長さとは関係があったよ。 ○ 数字を見るとてこには、2倍、3倍になるきまりがありそうだ。 ○ 2倍、3倍になるのは、どの実験結果からも言えるのかな。 ○ 足した数が同じじゃないのかな。 ○ かけ算になるって聞いたことがある。 ○ 正確な力がどれくらいなのか調べてみたい。	

第6学年1組 国語科学習指導案

指導者 平 島 健 二

単 元 文章を選んで考えよう!～イースター島からいえること～

指導観

- 本単元は、中心教材を深める教材を自分の課題から選択し、筆者の考えを確かにし、自分の考えを広げ深めることをねらっている。具体的には、①筆者の考えの根拠を追究する課題をもつこと、②文章構成や表現の工夫などから筆者の考えを読み取り、関連教材と比較して確かに行うこと、③自分の立場をはっきりさせながら感想を深め、発表することが主な学習内容である。中心教材である「イースター島にはなぜ森林がないのか」は、大きく3つのまとまりで構成され、人類の文化のあり方を論説している。根拠となるイースター島や文化・環境に関する情報を付加、比較しながら筆者の考えを確かにして自分の考えをつくっていくのに適した文章である。また、文化や環境をこれから築いていく子どもたちにとって意義ある内容である。
- 本学級の子どもたちは、段落相互の関係を考へて、文章の中心的事柄を読み取り、要旨をとらえることができるようになってきている。また、筆者の考えの根拠を問うような課題で教材文を深めていく読み方、自分の既知の情報を付加する読み方を学んできている。しかし、自分の関心点を中心に筆者の見方・考え方を
- 豊かにとらえ直し、自分の立場から感想を深めていくような読み方はまだできていない。そこで、自分の課題から必要な文章を選択し、情報を付加したり比較したりしながら筆者の見方・考え方を確かにする読み方を身につけさせ、情報を効果的に判断・選択したりしながら感想を深めていくことができるようにしたい。
- 本単元の指導にあたっては、段落相互の関係を考へながら「イースター島にはなぜ森林がないのか」を読み取り、自分に必要な情報を選択・付加・比較しながら筆者の考えを確かにし、自分の考えを広げ深めることができるようにしたい。つかむ段階では、中心教材に出合わせ、筆者の考えの根拠に関わる課題を捉えさせる。深める段階では、中心教材を読み、筆者の論理を読み取らせる。読み取った筆者の考えに対して、根拠となる事例が妥当なのか、筆者の意見が現在の状況に当てはまるのか自分の課題を明らかにさせ、必要な文章を選択させる。そして、必要な情報を補完したり比較したりしながら筆者の考えを確かにして「人類の文化」に対する考えを創造していく。生かす段階では、考えを整理して読みを評価し、充実感を味わわせる。

目 標

- 1 人類の文化に関心を高めたり、筆者の考えをよりよくわかつろうとしたりして、中心教材を読んだり自分が追究したい課題をはっきりさせて文章を選択したりしながら、自分の読み方をつくることができる。
- 2 「イースター島にはなぜ森林がないのか」で筆者の考えを文章構成や表現の工夫などからとらえ、自分の課題から教材文を選択し、情報を補完・比較して筆者の考えに対する自分の感想を深めることができる。

計 画 (約12時間)

階	つかむ段階 (3時間)	深める段階 (7時間)	生かす段階 (3時間)
活動と内容	1 「イースター島にはなぜ森林がないのか」との出会いから筆者の述べ方についての学習課題をとらえる。 ○ 題名から関心を高めて通読し、筆者の述べ方について課題をもつこと	2 学習課題をもとに「イースター島にはなぜ森林がないのか」を読み、課題を発展させ文章を選択しながら読み深める。 (1) 筆者の主張や意図を読み取る。 ⑥ ○ 筆者の意図と述べ方を読み取ること (2) 文章を選択し、見直す。 本時① ○ 課題に応じて筆者の考えを見直すこと	3 収集した情報をもとに、筆者の考えに対して自分の考えを書きまとめる。 ○ 情報を比べ、判断し、考えを広げ深めること (1) 読みを話し合う。 ② (2) 考えをまとめる。 ①
	文章を選択し追究することで筆者の考えを確かに受け止め、自分の考えを広げ深める文化の学び		
支援	※ 題名と筆者に着目させる。 ※ 筆者の考えがわかるまとまりなど具体的に考えさせる。	※ 中心教材の読後の感想から筆者の考えへの関心の傾向性を見取り、選択教材の提示の工夫をする。	※ 筆者の考えに対して違いがないか考えさせ、自分の価値に気付かせる。
評価標準	● 「子孫に深く思いを巡らす文化が必要となぜ、筆者が述べているのか」など主張や根拠に関わる課題を書いている。	● 事実と考えを読み分け、文章の構成から筆者の意図や見方・考え方を話している。 ● 必要な情報を選んで、情報を補完め比較しながら自分の考えを話している。	● 人類の文化について、自分の立場から読んだ情報をつないで、感想を書きまとめている。

本時の授業仮説

筆者の述べ方を読みとってきている子どもたちに、筆者の論理を納得する上でどうしても解決したい自分の課題を明らかにした上で選択教材の題名や冒頭の文章を手がかりに自分の課題に応じて選択させ、情報を補完したり比較したりさせれば、筆者の考えに対して自らの立場で判断し、納得した読みを創り上げることができるであろう。

本時の目標

- 1 筆者の考えに対してもっとくわしく知りたいことを明らかにして、自分の課題を発展させ、筆者の考えをよりよくわかろうとする意欲もち、自分の考えが深まったことに自信をもつことができる。
- 2 筆者の考えを文章構成から見直し、自分の課題に応じた文章を選択し、情報を補完したり比較したりしながら自分の課題の解決を図り、筆者の意図をとらえ、自分の読み方を創ることができる。

準備

板書用カード、学習ノート、流れ図、拡大本文、選択教材文、題名と冒頭の拡大文

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 前時学習を想起し、本時学習のめあてを話し合う。 ○ 文章構成やもっと知りたいことを明らかにしてきたことを想起し、本時学習のめあてを把握すること (めあて) 自分の課題を明らかにして、文章を選択し、筆者の考えについて自分の立場からとらえ直そう。 ※ 流れ図や文章構造図を提示し、筆者の述べ方を確認した上で、自分ももっとくわしく知りたいことにどんな意義があるのか明らかにさせる。 2 自分の課題に応じた文章を選択し、情報を補完したり比較したりしながら、筆者の意図について読み深め、話し合う。 (1) 題名や冒頭の文を手がかりに自分の課題に応じた文章を選択する。 ○ 自分の課題を解決するための文章を、根拠をもって選択すること ※ 題名や冒頭の文の拡大文を提示し、書かれている事柄を確かめさせ、内容を予想させて選択する手がかりにさせる。 (2) 選択した文章を読み、自分の立場から見直した筆者の意見に対する自分の考えを話し合う。 ○ 情報を補完したり比較したりしながら筆者の意図を読み取ること ※ 文章構想図をもとに、それぞれの課題に応じた文章で補完した情報と比較した情報を構造的に示し、子どもの考えをうながすようにする。	○ 自分の課題は、筆者の取り上げた事例の妥当性を明らかにする課題なんだな。これが確かめられると筆者の考えが間違いないとわかるぞ。 ○ 自分の課題は、筆者が訴えている背景にあるものだったんだな。これがわかると、筆者の意見が大切かどうかははっきりするぞ。 ○ 「マリオの歌」という言葉から島に伝わる伝説が書いてあるんじゃないかな。イースター島の人々の昔の様子がわかるかもしれないな。 ○ 「ポリネシア芸術」という言葉からモアイ像の運び方が分かるかもしれないな。 ○ 「環境破壊はとめられない」、「新しい社会へ向けた道」という言葉から早急にしなければいけない現状がわかるかもしれないな。 ○ 「自然をまもることと開発と」という言葉からどうすればいいかわかるかもしれないな。 ○ 石の釣り針が発見されていることから漁をしていたことやマオリの歌で丸木船をつくっていたことが伝えられていることが分かった。 ○ 伝説から丸太を使ってモアイを運んだことがわかったんだな。 ○ 大気汚染、水質汚濁、砂漠化、地球温暖化など人類が自然を破壊し、危険な状況であることがわかった。 ○ 筆者の子孫を思う文化を早急に築かなければならないということがよくわかった。ぼくもそう思う。 ○ 他の本から情報を付け加える読み方ができてよくわかった。
3 自分の課題で文章を選択し読み取ったよさから、自分にとって明らかになったことや自分の読み方のよさについて考えを書きまとめる。 ○ 自分で読みの学習を創り、読み深めたことの意義を感じ、情報を付加したり比較したりする読み方への自信をもつこと ※ 自分の課題で追究したことで筆者の意見への感じ方が変わったか、自分にとってよかったことは何か、他の文章と重ねたり比べたりする読み方はできたかななどの観点を与え、書きまとめやすいようにする。	

アクティビティーとリラクセーションで、自分の心と体を見つめる体育科（保健）学習 第5学年1組 体育科（保健）学習指導案

指導者 畠山佳子

単元 ストレス、すっきり大作戦！

指導観

- 本単元は、心と体は深くつながっており、互いに影響しあっていることを実感し、自分にあった不安や悩みへの対処の仕方を追究し、日常生活で不安になったり悩んだりしたときの行動をかえることをねらっている。主な学習内容は、①何種類かのアクティビティーとリラクセーションの体験から、心と体の密接な関係に気付くこと、②心や体に変化をもたらすストレスとは何かを知り自分のストレス状態をチェックし、ストレスへの対処法を考えること、③日常の生活のなかで、友だちのアドバイスを得ながら実践することなどである。このことは、自分が自分のこれまでと違った行動がとれる、日々の生活を変えていくことができると感じて、自分への自信をもつ上で意義がある。
- 本学級の子どもたちは、休み時間に大変活発に外で遊ぶ姿が見られる。学校行事等において学級で取り組む場合も、男女協力し一致してやり遂げようとする様子が見られ、積極的に取り組む姿からは不安や悩みなどあるようには見えない。しかし、不安や悩みについてのアンケートではほとんどの子どもが成績や友だちのこと、やる
- ことが多く時間がないといった項目で不安になったり悩んだりしていること答えている。また、ストレスという言葉は知っているが、ストレスとは何かについて知っている子どもは全体の4分の1ほどしかいない。日常の不安や悩みによるイライラを他人へ向けて発散していると答えている子どももあり、のぞましいストレスの対処法を知らない実態がある。
- 本単元の指導にあたっては、これまでの自分のストレスに対して自分にあったよりよい対処法は何かを追究し、日常のストレスへの対処のありかたを変えていく生活の学びで展開する。そのためにまず、つかむ段階で、心と体のつながりについて実感するために、心の緊張を伴うアクティビティーや、協力し合って体を動かすアクティビティー、リラクセーションを行う。次に、心と体に影響しているストレスとは何かについて風船を使いながら心の状態をイメージさせ、さらに、ストレスチェックを行い実際の自分のストレス状態に気付く。いくつかのストレスへの対処法に出合わせ意欲をもたせて実践し、最後に「ストレス、すっきり作戦ブック」を完成する。

目標

- 1 心と体は密接な関係があることに気付くとともに、不安や悩みは誰もがもっており、それにはストレスが関係していることを理解し、よりよい対処法を見つけていこうとする意欲をもつことができる。
- 2 自分にあった不安や悩みへの対処の仕方をを見つけ、日常のストレスに対してそれらを実践して生活を変えていくことができる。

計画（約4時間）

単元	第1次（1時間）	第2次（2時間）	第3次（1時間）
活動と内容	1 アンケート結果から不安や悩みについて知り、アクティビティーによって心と体のつながりに気付く。 ○ どんなことが不安や悩みになっているのかを知り、心と体のつながりに気付くこと	2 ストレスのしくみについて理解し、対処法をつくり出す。 (1) 風船を使ってストレスのしくみを知る。 ○ ストレスのしくみを知ること ① (2) ストレス状態をチェックし、リラックスグッズを試し、自分なりの対処法を考える ○ 自分なりの対処法をつくること 本時①	3 友だちの作戦をきいて、ストレス、すっきり作戦ブックを完成させる。 ○ うまくいくための対処法に気付き、友だちのアドバイスを参考に自分の方法を振り返ること
自分にあったストレス対処法を追究し、日常のストレスへの対処法を見つけ、自らの健康生活を変える生活の学び			
支援	※ 3つのアクティビティ（クロスワードパズル、人間いす、リラクセーション）で、心と体の状態の比較活動の設定	※ 板書カードと風船を使って説明 ※ ストレスチェックシートの記入とリラックスグッズ等の提示（スポーツ写真、リラックス音楽のCD、ぬいぐるみ、ホブリなど）	※ 自己評価、相互評価の場の設定と、お互いに励まし合うことができる、「はげましカード」の準備
評価標準	● 誰にでも不安や悩みがあることを知ろうとしている。 ● 心と体のつながりに気付いている。	● ストレスについて理解し、自分にあったストレスの対処法を考えようとしている。 ● 自分なりの方法を日常生活で試して、修正できている。	● よりよい対処法を見つけ生かそうとしている。 ● 今後の実践への意欲を高めている。

本時の授業仮説

ストレスの対処法を考える場面において、ストレスチェックで自分のストレス度を測り、リラク্সグッズや対処法を試す場を設定して心と体を見つめさせれば、自ら自分にあったストレス対処法をつくり出し、実際に試して、これまでのストレス対象法を変えていこうとする意欲を高めることができるであろう。

本時の目標

- 1 自分にあったよりよい対処法を見つけ、やってみようとする意欲をもつことができる。
- 2 自分のストレス度について知り、試し活動のなかから自分にあった対処法を考えることができる。

準備

教師：板書用カード 流れ図 「ストレス、すっきり作戦ブック（保健学習ファイル）」 ストレスチェックシート
リラク্সグッズ等各種 ストップウォッチ

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1 前時の学習を思い出し、本時の学習のめあてを話し合う。 ○ 自分のストレス度を知り、対処法を知りたいという意欲をもって、本時の学習のめあてを把握すること （めあて） 自分のストレス度について知り、ストレスサーに対する作戦を見つけよう！ ※ 流れ図やノートをもとに、本時の学習のめあてについて話し合わせる。 2 ストレスチェックで自分のストレス度とストレスのタイプを知った後、試しの活動をおこない、参考にして自分にあった対処法を考える。 （1）ストレスチェックシートをやってみて集計し、自分にはどのくらいストレスがあるのかに気づき、対処法についての課題意識をもつ。 ○ 自分のストレス度とストレスのタイプを知ること ※ <ストレスチェックシート>で、ストレス度を測らせる。 （2）ストレスチェックの後、自分に取り入れたい対処法についてリラク্সグッズ等を体験し、自分に合ったストレスの対処法を考える。 ○ ストレスの対処には、相談や遊びなどいろいろな方法があることを知り、自分なりのストレス対処法をつくりだすこと ※ リラク্সグッズなどを体験させた後、対処法<作戦>を板書に位置づけ、やってみようと思う対処法を作戦ブックに記入させる。 （提示する作戦の種類）	○ 心と体ってとてもつながっていたな。 ○ ストレスサーには、よいものと悪いものがあったな。 ○ なくなった方がよいのかと思ってはいたけど、はりのある生活のためにはなくてはならないものだったよ。 ○ 私は、どのくらいストレスがあるのだろう。 ○ こんなに、ストレスがあるとは知らなかった。 ○ ストレスを、取り除くには、前の授業のように、心が気持ちよくなればいいんだな。 ○ ストレスの対処法を早く知りたいなあ。対処法がわかれば、ストレスを解消できるかもしれないぞ。 ○ こんな対処法もあったのか。知らなかった。試してみたいな。 ○ 気持ちがスッキリとするよ。
<発散作戦> 体を動かすことで、ストレス産物であるコルチゾールを使い切る。	前時の体験場面の写真 スポーツや活動場面の写真（ジョギング、スイミングなど） スポーツの応援の写真 散歩、おしゃべり、歌をうたうところのイラスト
<リラクックス作戦> 筋肉の弛緩や、瞑想などで心身のリラクックス状態をつくり、緊張をほぐす。	リラクックス音楽のCD、ぬいぐるみ、クッション、お茶 入浴剤、オルゴール、ホブリー、アロマ、絵本 睡眠、リラクセーション、趣味のグッズ
<ストレスサー変身作戦> ストレスサーを避けたり評価の仕方を変える	気持ちを整理する日記、おしゃべりのイラスト、相手の立場で考えてみる、プラス思考のイラスト
<相談作戦> 一人で抱え込まず、相談する。	担任の先生の写真、養護教諭の写真、友だちの写真、家族のイラスト、相談電話ののちし、相談風景の写真
3 自分が見つけた作戦を作戦ブックにまとめて報告しあい、今後の日常生活への実践について話し合う。 ○ 自分の作戦を確かめ、日常での実践に向けて、意欲を高めること ※ 本時の体験をもとに取り入れたい対処法も加えて、自分なりのストレス対処法について作戦ブックにまとめさせる。	○ 今までの対処法に、新しく取り入れる作戦をみつけたよ。 ○ 今日見つけた対処法を試してみたいな。家でもやってみよう。うまくいくな。

自分のことを書くことで、書く力、表現しようとする意欲を育てる国語科学習

第3・4学年さくら組 国語科学習指導案

指導者 諏訪原佳子

題材 みんなにしらせよう!じぶんのこと

指導観

- 本学級の子どもたちは、精神年齢3歳から7歳程度の3年生男子2名、女子2名、4年生男子1名、女子2名の計7名で構成されている。意志の伝達に対しての実態は、生活年齢同等の会話ができる子どもから、簡単な質問の意味がわかり、返事はできるが、発語は少ない子どもまで幅広い。読み書きについては、簡単なひらがなのなぞり書きができる子どもから、漢字の読み書きができる子どもまでいる。しかし読み書きができて、言葉の意味が理解できていない事も多い。
- 本題材は、校舎内の「お知らせボード」を利用し、自分たちのことを紹介する。わかりやすく伝えるため順序よく、詳しく、文や字を正しく書くこと、また、生活の中の言葉と結びつけることで、意味の理解もねらっている。この学習における具体的な学習内容は、①書く内容を決めること、②意欲的に書くこと、③文章や単語を正しく書くこと、④書けた満足感を味わうことである。このことを通して、伝わるように文字を確かに書くことが意識でき、周りからの賞賛や書きあげたことからくる自信をもって意欲的に取り組み、他の場面でも、伝えたいことを文字で表していこうとする適応力を身につけることをねらいとしている。意志の表現手段が広がることは、いろいろな人・ものとかかわりを広げる点で意義深いものと考えられる。
- 本題材の指導に当たっては、意味を理解し確かに書く基礎的・基本的な学びができるよう、個に応じた語句や文の内容・長さ、個に応じた支援、書きのヒントや正誤の判断となるための語句や写真、カードの工夫、繰り返し書く活動の設定、書く活動を生活の中で活用する場の設定を行う。具体的には、①書く前に、話を聞き、たくさんの言葉を引き出し、書くことをまとめる。②個の表現する力、書く力に応じて言葉の難易度や長さ、単語や文の選択をする。また、文字を書くマスの大きさなども工夫する。③読みと書きが結びつくために、聞いて確かめられる音声をつけたカードの工夫④完成したお知らせボードをみんなで楽しめ、賞賛が受けられるような場の設定など支援の工夫を行う。このような活動を通して、書くことに興味をもつだけでなく、みんなに知らせる楽しさを感じ、日常生活の中で、書く、話すなど、いろいろな方法で周りに伝えようということへとつなげていきたい。

目標

- 1 お知らせボードを作ることに興味をもち、意欲的に字を書き、書くことができたことを喜ぶことができる。
 - 2 係活動の仕事内容やがんばっていることを考え、正確に書こうとすることができる。
- Aグループ：単語や語連鎖の表現を、なぞり書きで書く。Bグループ：2、3語文の表現を使って書く。
Cグループ：詳しい多語文の表現を使って、文のつながりを考えて書く。

計画（約8時間+課外）

段階	つかむ段階（1時間）	ふかめる段階（5時間）	ひろげる段階（2時間）
活動と内容	1 他の学級が作ったお知らせボードを見て、自分たちも書きたいと意欲をもつ。 ○ お知らせボードに書くことがわかり、がんばっていることを伝えたいと意欲をもち、見通しをもつこと	2 文や単語を書き、内容にあった絵や写真とむすびつける。 本時2/5⑤ ○ すきな食べ物（給食）について書くこと ○ 係活動について書くこと ○ 休み時間について書くこと ○ そうじについて書くこと ○ 勉強のことについて書くこと	3 お知らせボードで知らせる内容を自分で決める。 ○ 1日の流れの中から、自分が知らせたいことを選んできめること
伝えたい意欲をもって書くことで、正しい語句、文の書き方を身につける基礎的・基本的な学び			
支援	※ 他の学級が作成したお知らせボードの提示 ※ 作成時の写真提示	※ 個に応じた、手順表の提示 ※ 個に応じた、語句・文の選定、表記の大きさの工夫	※ 一日の流れの表と活動の様子の写真等の提示 ※ それぞれへの賞賛
評価標準	● 興味をもって、お知らせボードを見ている。 ● 書きたいこと、知らせたいことを進んで話している。	● 手順表を見ながら、学習を進めている。 ● 書き順に気をつけて、書いている。 ● 「書けた。」と、お知らせボードを書けた喜びを表している。	● 自分で書くことを決めている。 ● 書く内容について、つぶやくなどしている。

本時の授業仮説

お知らせボードで自分のことをもっと知らせたいと思っている子どもたちに、係活動をしているビデオを見せたり、それに係わる単語カードを提示したりすれば、子どもたちは書きたいことをきちんととらえ、単語カードを選択したり組み合わせたりしながら、正しい文や言葉を意識し文字や文を正しく書こうとすることができるであろう。

本時の目標

1 毎日がんばっていることを書いて、みんなに知らせることで、意欲的に取り組むことができる。

2 正しい文字を書いたり、文と写真を組み合わせたりすることができる。

Aグループ 単語を書くことができること

Bグループ 助詞を正しく使うことができること

Cグループ 形容詞を使って、詳しく書くことができること

準備

係活動の写真・絵 活動のビデオ お知らせボード ボード用の用紙 ランゲージマスター 手順表など

展開

活動と内容			個の活動を促す支援
1 お知らせボードに書くことについて、話し合い、書く内容を決める。 (1) 本時のめあてについて、話し合う。 ○ 本時の学習について、意欲と見通しをもつこと (めあて) かかりかつどうの ことを しらせよう。 (2) ビデオを見て、自分の係を振り返り、書く内容をきめる。 ○ 活動にあった言葉を言うこと 2 文を書き、その様子を表す写真を選ぶ。 (1) 係活動について、文を書く。			1 本時学習への興味・関心と目的意欲をもたせる支援 ○ 前時作成したボードの提示 ○ ビデオを見ながら、文につながる言葉を引き出すための声かけ ○ 手順表の確認 2 意欲的に書き、文にあう写真を選ぶ活動に取り組ませる支援 ○ 個に応じた単語や文の長さの選定と、正誤が判断できるように、音声カードをつけた写真、絵カードなどの個別の確認方法 (Aグループ) ・ 音声カードにつけている語句カードを使い、正しい単語を選んだり、正しくかけているか確認したりする場の設定 (Bグループ) ・ 単語カードと助詞カードを使って文を組み立て、完成した文を見ながらその一部を書く場の設定 (Cグループ) ・ 単語カードと助詞カードを使って文を組み立て、それを見ながら全文を書かせる場の設定 ○ 意欲をもつよう賞賛の声かけ
Aグループ	Bグループ	Cグループ	
○ 自分の係名を、なぞって書くこと ○ 書く単語を、読んだり、ランゲージマスターを使ったりしてみつけること	○ 助詞を考えて文をつなぐこと ○ 単語カードをつなげて文を組み立て、それを見て、一部を書くこと	○ 活動内容や工夫について、形容詞などを使い詳しく書くこと ○ 単語カードをつなげて文を組み立て、それを見て丁寧に書くこと	
(2) 書いた文にあう、写真を選ぶ。			
○ ランゲージマスターを使って言葉を聞き、写真と文字を結びつけていくこと	○ ランゲージマスターを使ったり、読んだりして、写真や絵と文とを結びつける	○ 書いた文を読んで、内容にあう写真や絵を選び、文と結びつけていくこと	
※ 上記の活動を、書きのヒントを減らして変化させて書いて (AG: なぞり書きの線の太さ、濃さを変える。 BG: 単語の中の一文字を抜けておきその部分を自分で埋める。 CG: 文と文をつなぐ言葉を考えて書く。) その後、写真や文字を選ぶ活動を行う。 ※ 発展的活動の語句を準備し (詳しく表す言葉)、個の学習のすすみ方によって提示する。			
3 お知らせボードに完成した作文を貼って発表し、本時の学習を振り返り、学習のまとめをする。 ○ 書いたことの満足感を味わうこと ○ お知らせボードをつくりあげたことに自信をもち、また作りたいというやる気をもち、次時への意欲をもつこと ○ 次時は、書く内容を自分で決めることを知ること			3 活動への満足感・達成感を味わわせるための支援 ○ 全員がお知らせボードに注目できるような、発表する場の設定 ○ 書きあげたこと、写真が選べたことについてのひとり一人への賞賛

第5・6学年梅組 体育科学習指導案

指導者 下 川 勝 彦

題 材 つないで ゴール! パスしてネットゲーム

指導観

- 本学級の子どもたちは、5年生4名、6年生2名の計6名で構成されている。子どもたちは日頃から友達と一緒に固定施設で遊んだり追いかけてをしたりすることが多く、運動遊びへの関心意欲が高い。また、ゲームについては、これまでにボールを使つての的あてゲームや攻守分離型のゲームを経験してきている。そこで、ボールを使ったゲームを体験させ、そのなかで、ゲームを楽しみながら状況に応じた動きを身に付けさせたい。また、運動の基礎的技能を高めることと身体活動に喜びを感じたり自信がついたりすることができるようにしたい。このことは、豊かな生活を営む力を育てる上でも意義深いと考える。
- 本題材でのゲーム「パスしてネットゲーム」は、コートの中にそれぞれゾーンを決めて、ゴールに向かってシュートして得点をとるという攻守分離型から攻守混合型へとつながるゲームである。具体的には、コートの中にはネットがあり、ネットにかからないように味方にパスしたり味方の位置を見て空いているゴールに向かってシュートしたりする。本題材は、場の変化や人の位置、動きによってボールを投げたり転がしたり自分で判断しながら動きを身に付けることをねらいとしている。主な学習内容は、①チームで得点する楽しさを味わい、ゲームへの意欲をもつこと、②味方の位置やネットの高さなどの状況に応じたボールを投げる、転がす動きを身に付けること、③身に付けた動きをゲームで状況判断しながら発揮することである。
- 本題材の指導にあたっては、ボールを投げる、転がす動きを促す場を設定することでゲームでの場と人による状況をとらえ、ネットや相手にあたらないようにボールを投げる、転がす動きを身に付けていく基礎的・基本的な学びを展開していきたい。そのために、であう段階では、「パスしてネットゲーム」に出合わせ、試しのゲームで活動の手順やきまりについて理解させ、動きを体験させる。ひろげる段階では、ネットの高さを変化させ、味方の位置をとらえて投げる転がす動きを引きだしていく。また、状況をとらえるための声かけや動作補助を行い、多様に動きを体験しながら獲得していくことができるようにする。いかす段階では、これまでに身に付けた動きを発揮させ、たくさん得点して満足感を十分に味わえるようにする。

目 標

- 1 「パスしてネットゲーム」を行い、チームの仲間と協力して得点をとることをめざし、意欲的にネットの高低や味方のいる位置といった状況に応じた投げる、転がす動きを発揮しながらゲームを楽しむことができる。
- 2 ゲームの仕方を理解し、友達と協力してゲームを行いながら、走りながら投げるまたは転がす、投げる向きを急に変える、投げると見せかけて転がすなどの動きを身に付けることができる。

計 画 (約6時間)

時 間	であう段階 (2時間)	ひろげる段階 (3時間)	いかす段階 (1時間)
活動と内容	1 パスしてネットゲームと出合い、試しのゲームをする。② ○ ゲームの手順やきまりをとらえ、投げる転がす動きを体験すること	2 チームに分かれて「パスしてネットゲーム」を行う。 (1) 高いネットの場 (2) 低いネットの場 (3) 高低のネットのある場でゲームをする。① ○ 味方の位置、動きに応じた転がす動きを身に付けること ○ 味方の位置、動きに応じた投げる動きを身に付けること ○ 投げる、転がす動きを状況に応じて発揮すること	3 これまでの活動をいかして、パスしてネットゲームをする。 ○ これまでの動きを振り返り、たくさん得点するために素早く動くこと
支援	※ ゲームのルールと手順表の提示 ※ 動きのモデル演示	※ 動きを身に付けるための場、人をとらえる実態からのチーム編成とポジションの設定 ※ 個に応じた声かけ、動作補助、モデル演示	※ これまでによかった動きの振り返り ※ 得点が増えた賞賛
評価基準	● ゲームの手順やきまりをとらえ、投げる転がす動きを発揮している。	● 場の変化や人の動きから状況に応じた味方が捕れるような投げる、転がす動きを発揮している。 ● 味方の位置や動き、ネットの位置の変化から、味方が捕れるようなボールの投げ方や転がし方を変えている。	● これまでのゲームを想起し、身に付けた動き方をゲームのなかで発揮している。

本時の授業仮説

これまでに、ボールを転がしたり投げたりしてつないでゴールしていくゲームを行ってきた子どもたちに、前時の低いネットだけの場を高低のあるネットの場に変化させ、ボールをつなぐ味方を個に応じて意図的に組み合わせれば、ゲームのなかで味方のいる位置やネットの高低に応じた腕を高く上げてボールを投げる動きや下から強弱をつけてボールを転がす動きを身に付けることができるであろう。

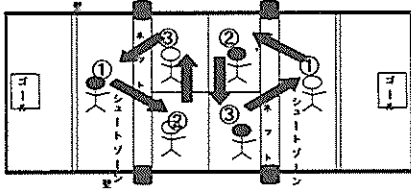
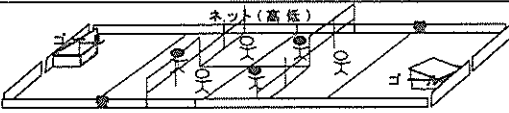
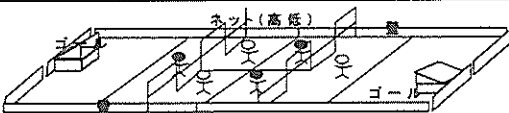
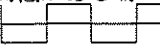
本時の目標

- 1 チームでパスをつないだりシュートを成功させたりすることで得点を増やすことがわかり、意欲的にボールを投げたり転がしたりしてパスやシュートをしながら、ゲームを楽しむことができる。
- 2 ボールをネットのないところをめがけてボールを投げたり転がしたりする動きを身に付けることができる。
 Aグループ ネットの高さだけでなく味方の動きや位置をとらえて、素早く投げる転がす動きを身に付ける。
 Bグループ 味方の声かけや動きだけでなくネットの高さをとらえて、素早く投げる転がす動きを身に付ける。

準備

ボール 高さの違うネット 得点板 仕切りボード ストップウォッチ ゲームの手順表 ローテーションの表

展開

活動と内容	個の活動を促す支援
1 これまでのゲームの場と今日のゲームの場の違いに気づき、試しの活動を行い、めあてについて話し合う。 ○ 試しの活動を行いながら、ネットの形の違いを把握して、本時のゲームでの動きの課題をつかむこと (めあて) ネットの たかさが ちがうところで ボールを なげたりころがしたりして パスや シュートを しよう。	1 意欲的にゲームを行おうとするめあてをもたせるための支援 ○ 前時の活動を振り返りらせるためのビデオ映像や写真の提示 ○ ネットの形の違いをとらえさせるための新たな場での試しの活動
2 ネットの高さが違う場で「パスしてネットゲーム」をして楽しむ。 (1) 新たな場で3人対3人の対戦のゲーム1をする。 ○ ネットやゴールの高さをとらえて、味方へパスしたりシュートしたりする投げる、転がす動きを発揮すること	2 ゲームで場や人による状況に応じた動きを身に付けさせるための支援 ○ ボールの投げ方の変化を促す高低のあるネットや高さの違うゴールの設定 ○ 3人対3人の対戦のチーム編成とポジションをゲームごとに変えるローテーションの設定 (①→②→③)
Aグループ ○ ネットの高さやゴールの高さをとらえ、味方を意識してボールを投げたり転がしたりすること Bグループ ○ 味方の動きを見て声かけに応じて、ネットを意識してボールを投げたり転がしたりすること	
 ←ポジションによってネットの高低が違う場 ネット→  (2) ネットの高さをとらえて投げたり転がしたりする動きを発揮するためのチーム内ゲームを行い、ネットの高低が交互になった場でゲーム2をする。 ○ ネットの場において、ネットの高さやゴールの高さによって、投げる転がす動きが変わることをとらえること	
○ ネットの高さだけでなく、味方の位置によってボールを投げたり転がしたりすること ○ 味方の声かけや動きだけでなくネットの高さによってボールを投げたり転がしたりすること	【ゲームでの場の図とポジション】 ○ ネットの高さによって投げ方がかわることがわかるネットの場の設定 Aグループ：場をとらえるのが優位な子どもに対して、味方の位置を知らせる声かけをすること Bグループ：人をとらえるのが優位な子どもに対して、ネットの高さを知らせる声かけをすること
 ←ポジションに関係なくネットに高低がある場 ネット→ 	
3 得点の成果とゲームのなかで動きが身に付いたことを発表し合う。 ○ 得点板で自分たちのチームの得点を数え、たくさん得点できたことをとらえてゲームをふり返ること ○ 「パスしてネットゲーム」をしてボールを投げる転がす動きが変わったことをとらえ、達成感を味わうこと	3 学習したことへの達成感を味わわせるための支援 ○ 得点板による勝敗の提示 ○ ボールを投げる、転がす動きが変わったことについての賞賛

全 体 会 (2日目)

▼ あ い さ つ (10:20~10:35)

初 等 教 育 研 究 部 委 員 長
学 校 長 永 江 誠 司

▼ 教 科 等 発 表 (11:05~11:25)

・価値ある動きをつくり出す

体育科学習

ー場面に応じて動きを生み出す活動を位置づけた

体育科学習プランナー

体育科部 久 保 勝 美

▼ 主 題 発 表 (10:35~11:05)

・豊かに生きる子どもをはぐくむ

教育課程の創造

ー自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する

＜ふくおかプラン＞の展開ー

研究副主任 北 田 尚 雄

▼ 教 科 等 発 表 (11:25~11:45)

・道徳的な価値を主体的にとらえる

道徳学習

ー自他の比較活動を位置づけた道徳学習プランナー

道徳部 木 下 美 紀

▼ 児 童 発 表 (11:45~12:00)

・創り出そう！私達のハーモニー

指導者 秦 克 伸

第2日目 午後の部

公開授業指導案

▼ 学習指導（13:00～13:45）

学年 組	教科領域等	学び	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
2年1組	体 育 科	文化	えらんで楽しもう！ドライブマット	久 保 勝 美	附属中体育館
3年1組	理 科	文化	つくろう！豆電球おもちゃ博覧会	今 泉 伸一郎	理科室
3年2組	国 語 科	文化	ウィルソンの研究を読み取ろう～段落と段落とを比べて～	光 延 正次郎	3年2組教室
4年2組	国 語 科	文化	「かむ」ことの力をさくろう！～段落を相互に関係づけて～	平 川 洋 一	4年1組教室
5年2組	文化 総合	文化	がんばろう福岡、つくろう福岡のじまん	藤 野 俊 明	5年2組教室
6年2組	算 数 科	文化	ブロックパズルのピースをつくろう	田 中 健 悟	6年1組教室

▼ 帰国子女教育学習指導（13:00～13:45）

3～6年 3組合同	国 際 交 流 タ イ ム (総合)	つくろう！ 3組 ワールド マネー ミュージアム	清 水 隆一郎 脇 本 孝 枝 高 良 祐 治	子どもスタジオ
--------------	-----------------------	-----------------------------	-------------------------------	---------

▼ 障害児教育学習指導（13:00～13:45）

ふく くら 組 組	合同生活単元学習	つくろう！なかよしガーデンルーム	園田 洋一、下川 勝彦 原田 敏男、諏訪原佳子	特殊棟中庭
--------------------	----------	------------------	----------------------------	-------

動きの段階と系統から組織した物語の場面を選んで動き試すことを繰り返す体育科学習 第2学年1組 体育科学習指導案

指導者 久保勝美

単元 えらんで楽しもう！ドライブマット（基本の運動）

指導観

- 本単元は、車になりきって動きの系統と段階から教材科されたドライブコースをドライブするストーリー型の単元である。場面に応じた動きづくりや場面づくりに課題を見出し、いろいろな方向へ転がる基本的な動きを子ども自らが確かが多様にしていくことをねらっている。主な学習内容は、①マットや段ボールなどによって見立てる多様なドライブコースや動きを選択・工夫しながら進んでいくドライブマットを楽しむことができること、②いろいろな姿勢からいろいろな方向へころがる動きを変化させ、いろいろな形状のマットの上で上下軸や左右軸を中心に横や前、後ろにころがる確かが多様な動きをつくり出すことなどである。このことは、自分に合った活動の場や動きを自分で選び運動する子どもを育てる上で意義がある。
- 本学級の子どもたちは、体を動かすことが好きで、思いついた動きを試し、様々な動きを経験することができている。特に、マットを使った運動遊びのなかでいろいろな姿勢の体を手で支えたり、方向や回転軸を変えながらころがったりする動きの経験を積んできている。しかしながら、思いつきの動きばかりで、これから出会う運動の基礎となる多様で確かな動きを身につけることができていない子どもが目立つ。また、与えられた運動を楽しむことはできるが、自分に合った新たな運動をつくり出すことについても同様である。
- 本単元の指導にあたっては、これまでに身につけた運動知をもとに、いろいろな姿勢からいろいろな方向へころがって楽しむ場面によって構成されるドライブコースを楽しむなかで動きと場面づくりの課題を追究し、確かが多様なころがる動きとともに自分に合った場面や活動の場をつくり出していくことで価値ある運動を生み出していく文化の学びを展開する。そのために、まず、コースを試し、動きと場面づくりの課題を設定する。次に、教師がつくった場面に応じて基本となる確かな動きをつくる。そして、子どもが場面を選び、場面に応じてころがったり手で支えたりする動きを多様で確かなものとしながら自分に合った運動を生み出していく。最後に、生み出した動きや場面、活動の場を友達と交流し、そのよさを味わわせるとともに、運動にかかわる自己を新しく生み出すことができた自分や自分の動きについての認識を確かにさせる。

目標

- 1 マットや段ボール、クッション材などの器械・器具、用具によって見立てる多様なドライブコースやころがる動きを選択・工夫しながら進んでいくドライブマットを楽しむことができる。
- 2 いろいろな姿勢からころがったり体を手で支えたりする大きさやリズム、力加減を変化させ、いろいろな形状のマットの上でころがったり、体を手で支えたりする確かが多様な動きをつくり出すことができる。

計画（約7時間）

階	みいだす段階（2時間）	うみだす段階（4時間）	あじわう段階（1時間）
活動と内容	1 ドライブマットの様々な遊び場を試し課題を設定する。 (1) 活動の場を試す。① ○ 興味・関心を高めること (2) 単元について話し合う。① ○ 課題を設定すること	2 ドライブマットを共通に楽しむ。 ○ ころがる基本的な動きをつくること 3 ドライブコースを選んで楽しむ。 (1) 広場① (2) 山② 本時2/2 (3) 岩場① ○ 横ころがり ○ 腕で支える前ころがり ○ 後ろころがり	4 つくった動きや遊び場のよさを交流する会を開く。 (1) 交流会を開く。 ○ 多様な動きの経験 (2) 学習を振り返る。 ○ 確かな自己認識
支援	※ 現在の動きで楽しめる易しさである多様な遊び場を進んでいくドライブマットを試す場の設定	※ 基本的な動きにつながる教師が提示したドライブマットで動きをつくる活動の設定 ※ 多様で確かな動きにつながる子どもが場面と動きをつくり出す活動の設定	※ 生み出したコースを交流できる場の設定 ※ 学びのよさを明らかにする自己相互評価の場の設定
評価規準	● ドライブマットに興味・関心をもっている。 ● ドライブマットへの課題を設定している。	● 提示されたドライブコースに応じて自分に合ったころがる動きをつくらせている。 ● ドライブマットの場面や活動の場、多様で確かな動きを新たにつくり出している。	● 友だちのドライブコースを楽しんでいる。 ● 体の動かし方や能力・可能性を確かにしている。

本時の授業仮説

山ステージを楽しむ場面において、前にころがる動きを系統と段階から構成したコースや遊び方を選択させれば、自らいろいろな姿勢からマットの上でころがる動きにともなう手の位置や方向、ころがりの大きさ、ころがる姿勢、起き上がりの姿勢などについて自分に合った動きや活動の場をつくり出すことができるであろう。

本時の目標

- 1 マットや段ボール、クッション材などによって見立てる「短い坂道」、「長い坂道」、「丸太道」、「滝下り」の場を選択・工夫しながら進んでいくドライブコース「山ステージ」を楽しむことができる。
- 2 左右の回転軸に沿って前にころがる動きにつながる動きの大きさやリズムを変化させ、ころがるために適した体を丸めた姿勢を保ったまま腕で体を支えて前後にころがる確かで多様な動きをつくり出すことができる。

準備

ドライブマット「山ステージ」の場、遊び方を示すボード、遊び方を選べるメニュー、学習ノート

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 ドライブマット「山ステージ」を試し、楽しむなかで、これまでにづくり、広げた動きや活動の場について話し合う。 ○ いろいろな方向へころがる基本的な動きや活動の場を選び、つくり出して楽しむ本時学習のめあてを把握すること (めあて) ドライブマット「山ステージ」でのコースをえらび、自分に合ったときどきドライブを楽しもう。 ※ ドライブマット「山ステージ」での活動の場を絵図により提示し、遊び方を把握させるとともに、目的意識を高める。 【ストーリー】自分を車に見立て、「広場ステージ」、「山ステージ」、「岩場ステージ」といった複数の場面で構成された活動の場をドライブコースに見立てて車のタイヤのようにころがる動きを中心にして場に応じた動きで進んでいく。	○ 今日はドライブマット「山ステージ」だ。今日も楽しみだな。 ○ 「山ステージ」の遊び場を全部、何回もクリアしてポイントをたくさんゲットしたいな。 ○ 今日もまずはコースを順番に回らな。順番に回って、もっと楽しみたいコースを見つけたいな。
2 ドライブマット「山ステージ」での活動を楽しむ。 (1) 教師が提示した基本的な「山ステージ」での活動を楽しむ。 ○ いろいろな方向にころがる動きの基本的な動きをつくる。 【ドライブマット「山ステージ」での遊び場】 〈短い坂道〉 真っ直ぐに手を着く。 ↳ 正しく手を着き、体を支える動きをつくる。 〈長い坂道〉 傾斜がついたコースを連続してころがり進む。 ↳ 体を丸めころがる動きをつくる。 〈丸太道〉 腕で体を支える。 ↳ 頭が下にある体を腕で支える動きをつくる。 〈滝下り〉 滝を下っていく。 ↳ 足を着いて起き上がる動きをつくる。 ※ いろいろな方向にころがる動きの系統から吟味したコースを段階に沿って配置しておき、順番に体験させる。 (2) もっと楽しみたい「山ステージ」の場面とそれぞれの場面設定を選び、「山ステージ」での活動を楽しむ。 くぼみ 着手・着頭の幅 位置と向き 傾斜の大きさ 回転感覚 体の丸め 丸太の大きさ 逆さ感覚 腕支持 段差の大きさ 足による起き上がり ○ 自分に合った多様で確かな動きをつくり出す。 ※ 前へころがる動きの段階から吟味して選択肢を提示する。	○ まずは、崖崩れからだ。うまく足と手で挟んでボールを右から左に移せるかな。 ○ 滝下りコースでうまくいかなかったから、選んでやってみたよ。段差があまりないコースを選んでみてもうまくできるようになったよ。 ○ 腕を伸ばしてぐっと力を入れ、おへそを見るとうまくできたよ。
3 「山ステージ」での活動について話し合う。 ○ ドライブコース「山ステージ」に適したころがる動きに応じる姿勢を保ったままいろいろな方向にころがる動きや自分に合ったコースを選んで活動したことについての気づきを確かに行うこと ※ できるようになった動きや活動の場についてよかったことを絵図を用いて整理することで、本時学習のよさを味わわせる。	

豆電球のおもちゃ博覧会をつくるため、必要な電気のきまりを見出す理科学習

第3学年1組 理科学習指導案

指導者 今 泉 伸 一 郎

単 元 つくろう!豆電球おもちゃ博覧会

指導観

- 本単元のねらいは、電気が流れていることと電気を通すものについて豆電球と乾電池、導線を用いて調べ、電気についての考えをもつことである。主な学習内容は、①豆電球が点灯するつなぎ方、点灯しないつなぎ方を調べ、回路ができると電気が流れること、②物には、電気を通すものと通さないものがあることである。本単元は、回路の途中にさまざまな物を入れたとき、豆電球の点灯によって電気を通す、通さないという観点から物を分類することができるという見方や考え方を育てる上で意義深い単元であるといえる。
- 子どもたちにとって電気は身近であるが、直接的に観察できないため視覚可能な現象によって推測的に電気の存在を確認している。子どもたちの多くが、電気＝光のようなものとしてとらえている。電気の流れについては、水のように流れるものとしてとらえている子どももいて、導線を折り曲げたり、豆電球を高い位置に置くと電流が流れに違いがでると考えている子どももいる。物の分類については、用途における分類はできるが、素材に着目した判断ができない子どももいる。
- 本単元の指導においては、豆電球おもちゃ博覧会をつくりたいという求めをもち、そのために必要な伝記のきまりを見出していく文化の学びで展開していく。そこで、回路のきまりや身近なものが電気を通すものと通さないものがあるというきまりを使ったものづくりを教材化する。であう段階では、電気のきまりを生かした豆電球のおもちゃを提示し、遊んだり豆電球のつき方を調べたりする試しの活動を設定することで豆電球のおもちゃ博覧会を作りたいという求めをもつようにする。追究する段階では、自分が作りたい豆電球のおもちゃを点灯させることで回路の考え方に気付くようにするとともに、電気を通すもの、通さないものという視点でものを分類することができるようにする。いかす段階では、電気のきまりを適用した豆電球を用いたおもちゃづくりの活動を設定する。そして電気のきまりごとに豆電球のおもちゃ博覧会を行い、電気のきまりの有用性に気付くようにする。

目 標

- 1 豆電球と電池を導線でつないで点灯する回路の仕組みと電気を通すものと通さないものがあることを適用した豆電球のおもちゃ博覧会をつくりたいという求めをもち、電気のきまりを調べることができる。
- 2 豆電球、乾電池、スイッチと導線が1つの輪になっている回路ができると電気が流れ豆電球が点灯すること、物には電気を通すもの、通さないものがあることがわかる。

計 画 (約10時間)

階 段	であう段階 (2時間)	追究する段階 (4時間)	いかす段階 (3時間)
活 動 と 内 容	1 数種類の豆電球のおもちゃを観察し、実験の計画を立てる。 (1) 豆電球を使ったおもちゃの面白さについて話し合う。① ○ 求めをもつこと (2) 実験の計画を立てる。① ○ 豆電球のおもちゃ作りのための実験の計画を立てること	2 おもちゃ博覧会をつくるために電気のきまりを追究する。 (1) 回路をつくり豆電球をつける。② ○ 回路の仕組みがわかること (2) 豆電球で電気を通すものと通さないものについて調べる。本時2/2② ○ ものには電気を通すもの電気を通さないものがあること	3 豆電球のおもちゃの仕組みを調べ、おもちゃづくりをする。 (1) 電気のきまりから豆電球のおもちゃの仕組みを調べる。① ○ おもちゃが電気のきまりを適用していることに気付くこと (2) おもちゃを作って遊ぶ。② ○ 学びの価値に気付くこと
豆電球を用いたおもちゃ作りのために電気のきまりを見出し、適用していく文化の学び			
支 援	※ 電気のきまりを適用した数種類のおもちゃを提示する。 ※ 2つの電気のきまりについて調べる計画書を用意する。	※ 豆電球、乾電池、ソケット付き導線のつなぎ方に着目させる。 ※ 実験計画から調べたい素材を選択して調べるようにする。	※ サンプルを観察させ、電気のきまりの適用に気付かせる。 ※ 作りたいおもちゃを選択した根拠をもって作るようにする。
評 価 規 準	● 豆電球のおもちゃ博覧会をつくる求めをもっている。 ● おもちゃの仕組みの共通点から調べる視点に気付いている。	● 回路ができれば電流が流れ、豆電球に明かりがつくことがわかる。 ● ものを電気を通すものと電気を通さないものとに分類している。	● 豆電球のおもちゃの電気のきまりに気付いている。 ● おもちゃを作り、電気のきまりの有用性に気付いている。

本時の授業仮説

前時学習した電気を通すものについて調べる場面において、豆電球のおもちゃ博覧会から構想した実験計画をもとに長さや形状の異なる素材を選択し、実験の結果の共通点について整理すれば、素材が電気を通すものであれば、ものの長さや形状に関係なく電気を通すという考えをつくることができるであろう。

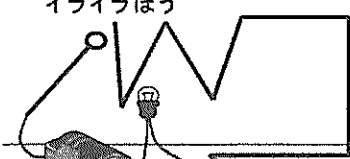
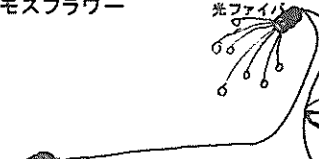
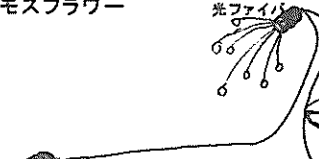
本時の目標

- 1 豆電球おもちゃ博覧会で自分の作りたいおもちゃから構想した実験計画をもとに調べる長さや形状の異なる素材を選択し、豆電球の点灯によって電気を通すものであるかを調べることができる。
- 2 電気を通すものについて、ものの長さが変わっても、ものの形状が複雑に折れ曲がっていたり、繊維状になっていたりしても金属でできているものは電気を通すことがわかる。

準備

複雑に折れ曲がった針金 1 m, 滑らかな弧を描く針金 1 m, 3 m の導線, スチールウール, 豆電球のおもちゃ 3 種類

展開

活動と内容 (※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 実験計画の電気を通すものについて調べたいことを話し合う。 ○ 電気をとおすもの、電気をとおさないものについて自分の実験計画をもとに調べる本時学習のめあてをつかむこと (めあて) 豆電球おもちゃ博覧会でつくりたいおもちゃを調べる実験計画で、電気を通すものは、長さや形が変わると電気を通すかどうか調べよう。 ※ 前時学習した電気を通すもの通さない物について想起させ、おもちゃによって電気を通すものの形状が変わっていることに着目させる。 2 長さや形状の異なる電気を通すものについて調べる。 (1) 電気を通すもののうちで長い導線や形状の異なる素材を選択して、電気を通すかについて調べる実験の予想や方法について話し合う。 ○ 長さや形状の異なる素材を選択し電気を通すかどうか予想すること	○ 僕は、おにが何かの上に着地すると角が光るおもちゃを作りたい。スチールウールは、中味がつまっていないから電気を通さないはずだ。実験で豆電球が点くかどうか試してみよう。 ○ スチールウールも電気を通すものでできているから、電気を通すはずだと思います。 ○ 折れ曲がっている針金は電気を通さないか、通しても電気は弱いと思う。それは、折れ曲がっているところでは電気が流れにくいから。
鬼が〇〇に着すると角が光るおもちゃ  スチールウール  イライラぼう  マンモスフラワー 電気を通すことについて素材の形状について調べる実験に向かうおもちゃ 電気を通すことと素材の形状について調べる実験に向かうおもちゃ 導線の長さが変わっても電気を通すことができるのかという実験に向かうおもちゃ	 マンモスフラワー 導線の長さが変わっても電気を通すことができるのかという実験に向かうおもちゃ
※ 長さや形状の異なる素材を提示し、自分が調べたいものを選択し、なぜ調べてみたいのかを自分の実験計画を根拠に明確にさせる。 (2) 自分の調べたい素材を選び、豆電球のおもちゃを点灯させることで電気を通すもの電気を通さないものを調べる。 ○ 豆電球おもちゃ博覧会で、自分が作りたい豆電球のおもちゃの仕組みを調べる実験計画をもとに、見通しをもって電気を通すもの電気を通さないものを調べる実験を行うこと ※ 素材の形状に着目できるように、実験コーナーを設置する。予想と違う結果になった場合は、つなぐ場所を変えてみたり、削ったりして再度実験を行い、納得のいく考えをもつように助言する。 3 実験結果をもとに電気のきまりについて交流する。 ○ 電気を通すものは、長さが長くなっても、形状が繊維状になったり複雑に折れ曲がっても電気を通すことができること ※ 個別に追究したことについて予想と実験結果を出し合い、共通点と差異点から電気を通すことに着目させて整理していく。	○ 短い導線なら電気を通すけれど、3 mもある導線は長すぎて電気を通さないか、もし、通ったとしても光があまりつかないと思います。それは、乾電池 1 個だけでは、パワーが足りないと思うからです。 ○ 前の時間に学んだ電気を通すものであれば、導線の長さが長くなっても、形がふわふわであっても、複雑に折れ曲がっていても電気を通すことがわかりました。 ○ 電気を通すものであれば形が変わっていてもいいんだ。このことを使って、博覧会に出すおもちゃをいろいろと工夫して作ってみよう。早くおもちゃを作りたいなあ。

第3学年2組 国語科学習指導案

指導者 光 延 正 次 郎

単 元 ウイルソンの研究を読み取ろう～段落と段落とをくらべて～

指導観

- 本単元は、ありの行列ができるわけをウイルスンはどのようにして解き明かしていったのかという課題をもとに、文章を意味段落に分け、意味段落を比べて要点をとらえることをねらいとしている。具体的には、①ウイルスンの研究過程に対する課題をもち、文章を実験・観察1、実験・観察2、研究の大きく3つの意味段落に分けること、②その3つの意味段落を比べて要点をとらえることが主な学習内容である。「ありの行列」は、問題を提示し、それを解明するための実験・観察から考察が述べられ、それに基づく研究から結論を導き出している、問題提示－実験・観察－仮説－研究－結論という構成の尾括型の説明文である。そこで、意味段落を比べて要点をとらえる読み方を身に付けるのに適した教材である。
- 本学級の子どもたちは読書を好み、科学的な読み物にも興味を示している。また、読み方に関しては、文章をたどりながら順序よく書かれている事柄を読むことはできるようになりつつある。しかし、文章をまとまりごとに分けたり、まとまりの要点をとらえて読むまでには至っていない。そこで、意味段落について知
- り、文章を意味段落に分けることや、意味段落を比べて要点をとらえることを本単元の重点とする。このことは、説明的な文章にも読書の範囲を広げ、幅広く読書しようとする態度を育てる上からも意義深い。
- 本単元の指導にあたっては、文章を意味段落に分け、意味段落を比べて要点をとらえる読み方を身に付け、ウイルスンの研究過程に対する自分の読みを創る文化の学びで展開する。そのために、つかむ段階では、ありという存在に問題意識をもたない自分と、ありの行列はなぜできるのか疑問をもちそれを解明したウイルスンという人物を比較させ（自分の情報と文章内の情報の比較）、課題を設定させる。つくる段階では、意味段落に気をつけて読みながら、ウイルスンの研究過程をとらえ（文章内の情報の比較）、ウイルスンがどのような方法でありの行列の解明に当たったのか認識の過程にまでせまらせる。見出す段階では、「クロクサアリのひみつ 行列するのはなぜ？」（山口進、アリス館）に出合わせ（文章内の情報と文章外の情報の比較）、ウイルスンと他の研究者とのありの行列に対する研究の違いについて読み深めさせる。

目 標

- 1 「ありはものがよく見えないのに、行列ができるわけをウイルスンはどのようにして解き明かしていったんだろう」という課題をもとに、ウイルスンの研究経過を文章に即して追究することができる。
- 2 文章を実験・観察1と実験・観察2と研究の大きく3つの意味段落に整理し、それを比べながら各意味段落の要点をとらえることができる。

計 画（約8時間）

階	つかむ（2時間）	つくる（4時間）	見出す（2時間）
活動と内容	1 自分と、ウイルスンという人物を比べて気付いたことについて話し合う。 ○ ウイルソンの研究過程をとらえたいという課題意識をもち、文章を大きく3つの意味段落に整理すること	2 ウイルソンの研究に打ち込んだ過程を読む。 ○ 意味段落を比べながら要点をとらえ、ウイルスンの研究過程を正しく読むこと (1) ウイルソンの実験・観察1を読む。① (2) ウイルソンの実験・観察2を読む。本時① (3) ウイルソンの仮説・研究を読む。① (4) ウイルソンの結論を読む。①	3 ウイルソンと他の研究者の研究のちがいにについて読み比べる。 ○ ウイルソンと他の研究者との研究のちがいを読むことができた自分に自信をもつこと
意味段落を比べて要点をとらえる読み方を身に付け、ウイルスンの研究過程に対する自分の読みを創る文化の学び			
支援	※ 子どもたちのもつありの行列に関する情報を分析し、それと食い違う情報を提示	※ 意味段落ごとにさし絵と文章を比較提示し、さし絵とことばを結んでウイルスンの実験・観察や研究の違いについて説明させること	※ 「クロクサアリのひみつ 行列するのはなぜ？」の活用
評価	● 自分と、ありの行列はなぜできるのか疑問をもちそれを解明したウイルスンとの違いに目を向け発表している。	● 段落で一番大事な文を見つけて段落に何が書いてあるかをとらえ、ウイルスンがどのような方法でありの行列の解明に当たったのかという、ウイルスンの研究過程に気づき発表している。	● 本からウイルスンと他の研究者の研究の違いを見つけ、堂々と発表している。

本時の授業仮説

実験・観察2を読み取る段階において、実験・観察2と実験・観察1のさし絵と文章を比較提示し、実験・観察2は実験・観察1を比べながら「やり方がどう違うのか」、「結果がどう違うのか」の2点から書きまとめさせて、拡大したさし絵と文章を指し示すなどしながら話し合わせれば、道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎっても、まただんだんにありの行列ができてきたという実験・観察2の要点を読み取ることができるであろう。

本時の目標

- 1 どうしてウイルソンは実験・観察2をやったのかという課題をもって、実験・観察2の意味段落を読み取り、実験・観察2の意味段落についての自分の読みを書きまとめたり話し合ったりすることができる。
- 2 ウイルソンの実験・観察2を実験・観察1と比べ、道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎっても、まただんだんにありの行列ができてきたという実験・観察2の要点を読み取ることができる。

準備

拡大教材文、学習プリント、学習の流れ図、文カード、さし絵

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 実験・観察2と実験・観察1の違いや、ウイルソンが実験・観察1で終わることなく実験・観察2までしたわけについて話し合う。 ○ ウイルソンが実験・観察2をしたくなるような出来事があったのではないかという見通しをもち読んで確かめたいという思いをもつこと (めあて) ウイルソンが実験・かんさつ1で終わることなく、実験・かんさつ2までしたわけを読みとろう。 ※ 実験1と実験2のさし絵を提示し、つながりについて考えさせる。 2 ウイルソンの実験・観察2と実験・観察1の違いを読み取る。 (1) さし絵と文章をもとに、ウイルソンの実験・観察2と実験・観察1を比べ、違いを書きまとめる。 ○ ウイルソンの実験・観察2と1の違いについて読み取ること ※ 実験・観察2は実験・観察1と「やり方がどう違うのか」、「結果がどう違うのか」の2点から学習プリントに書き込ませる。 (2) 実験・観察2と実験・観察1の違いについて話し合う。 ○ ウイルソンの実験・観察2の段落の要点をとらえること	○ ウイルソンは、はじめにありの巣から少し離れたところに、ひとつまみのさとうを置く実験をしている。 ○ ウイルソンが実験・観察1で終わることなく、実験・観察2までしている。どうしてウイルソンは実験・観察2までしたんだろう。 ○ 今日は、ウイルソンが実験・観察1で終わることなく、実験・観察2までしたわけを読み取っていこう。 ○ 実験・観察2は、実験・観察1と「やり方がどう違うのか」、「結果がどう違うのか」を学習プリントに書き込もう。 ○ ウイルソンは実験・観察1では、ありの巣からはなれた所に、ひとつ
実験・観察1 ウイルソンがしたこと はじめに、ありの巣からはなれた所に、ひとつまみのさとうを置きました。 実験・観察2 ウイルソンがしたわけ さとうの所まで行った列がはじめてのあたりが巣に帰るときに通った道筋から外れていないことをウイルソンが不思議に思い、道筋に大きな石を置いてありの行く手をさえぎると、どうなるか知りたくなった ウイルソンがしたこと つぎに、道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎってみました。 分かったこと まただんだんにありの行列ができてきました。 比較	実験・観察1 ウイルソンがしたこと はじめに、ありの巣からはなれた所に、ひとつまみのさとうを置きました。 実験・観察2 ウイルソンがしたわけ さとうの所まで行った列がはじめてのあたりが巣に帰るときに通った道筋から外れていないことをウイルソンが不思議に思い、道筋に大きな石を置いてありの行く手をさえぎると、どうなるか知りたくなった ウイルソンがしたこと つぎに、道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎってみました。 分かったこと まただんだんにありの行列ができてきました。
※ 話し合いのなかで、さし絵だけをもとに実験・観察2と1の違いについて発表している子どもがいたときは、「そのことはどこに書いてあるかな」と問い返し、教師がことばに引き戻していく。 3 ウイルソンが実験・観察1で終わることなく、実験・観察2までしたわけについて吹き出しに書きまとめ話し合う。 ○ 実験・観察1をしてはじめてのあたりが巣に帰るときに通った道筋から外れていないことをウイルソンが不思議に思ったことが、道筋に大きな石を置く実験・観察2をする動機となったことを書きまとめること ※ 実験・観察2と1の間にウイルソンがつぶやいたことを吹き出しに書きまとめさせる。	まみのさとうを置いたけど、実験・観察2では、道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎっている。 ○ 実験・観察1をして不思議に思ったことが道筋に大きな石を置く実験・観察2をする動機となったんだ。 ○ ウイルソンが実験・観察2で道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎっても、まただんだんにありの行列ができてきた。

意味のまとまりを比較して、文章の中心をとらえる国語科学習

第4学年2組 国語科学習指導案

指導者 平 川 洋 一

単 元 「かむ」ことの力をさぐろう! ～段落を相互に関係づけて～

指 導 観

- 本単元は、主教材『「かむ」ことの力』を段落相互の関係に気を付けながら文章の中心的な内容を明確にとらえる読み方を身に付けさせることをねらいとしている。具体的には、①問題提示文の答えを探しながら、段落相互の関係と筆者の伝えたい内容をとらえること、②筆者の伝えたい内容の中心を、それを支える段落と関係づけながら自分のものとしてとらえる読み方を身に付けること、③獲得した読み方を適用して他の文章を読み、段落が相互に関係合っていることを確かめながら、自分の体に対する見方・考え方の広がりや深まりをまとめることが主な学習内容である。これらの活動は自ら文章にかかわり、主体的な読み方を獲得させるという点において意義深い。
- 本学級の子どもたちは、第3学年時の説明文の読みの学習で段落の存在を知り、段落の要点をまとめ、その並び方が時系列や並列になっていることをとらえてきた。その中で段落をまとまりとして見ることができるようになってきているものの、文章全体が大きな意味のまとまりで構成されていることに着目する学習はまだ経験していない。また、事例に示された内容から
- さらに他の事象を調べ読みを広げる読み方や、ひとつの文章に向き合い、他の文章と比べながら考えを深めていく読み方は経験していない。
- 本単元の指導にあたっては、読む必要感を大切にしながら、段落相互の関係を見つける読み方をつくっていく文化の学びで展開する。具体的には、第1次において題名や冒頭、問題提示文をもとに生み出した読みのめあてに対する答えを子どもたち一人ひとりにまとめさせ、友だちと読みを交流させる中で、曖昧な点をくわしく読み深めていく学習課題をつくる。第2次では、学習課題をもとに、明らかにしたい内容を選択したり、段落と段落とを比較したりする活動を取り入れながら、「かむ」ことの力のよさを説く筆者の伝えたい内容を確かにとらえることができるようにしたい。さらに、第3次においては、段落構成が同様で、体の他の部位の素晴らしい仕組みを扱った説明文に出合わせる。主教材で獲得した読み方を使いこなし、自らの生活経験とつないで自分の体に対する見方・考え方をまとめる活動を位置付け、学習の前後の変容を実感させるようにし、充足感を味わわせたい。

目 標

- 1 筆者の問いかけや体についての関心から読みの課題をつかみ、友だちと読みや考えを交流させたり関連する文章を読んで情報を付加したりしながら、体に関する見方・考え方を深めていこうとすることができる。
- 2 文章の中心となる段落を、それを支える説明の段落と関係づけながら筆者の伝えたい内容を明確にとらえるとともに、その読み方のよさを実感し、つなぐ読み方として身に付けることができる。

計 画 (約10時間)

階	第1次(3時間)	第2次(4時間)	第3次(3時間)
活 動 と 内 容	1 『「かむ」ことの力』に出 合い、段落のつながりに目を 向けた学習課題をつかむ。 ○ 題名・問題提示文を受け 読みの課題をもつこと ○ 読みの課題の答えをさら に追究する課題をもつこと	2 『「かむ」ことの力』を読み深める。 (1) ②③④段落を読み深める。 ② ○ 歯の与える直接的な力をとらえること (2) ⑥⑦⑧段落と②③④段落を中心段落と 関係づけながら読み深める。 ② ○ 歯の与える間接的な力をとらえ文章全体 の段落相互の関係をとらえること 本時2/2	3 副教材「体を守る仕組 み」を読む。 ○ 副教材の段落を相互に関 係づけて中心をとらえ、読 み方のよさを実感すること ○ 体に関する見方・考え方 の変容をまとめること
段落を比較しながら「かむ」ことの意味をつくりだす文化の学び			
支 援	※ 主教材との出合わせ方の工 夫(体のもつ意外な力の具体 的内容の提示)	※ 段落相互の関連づけて説明するための具 体物・読み取りプリントの準備と提示 ※ 読みの相違に応じた話し合いの展開	※ 体に関する興味・関心に 応じた文章の準備・提示 ※ 書きまとめ方の個別指導
評 価 規 準	● 一読後、読みの答えをまと めたり、読み返す箇所をとら え、確かめていく計画を話し 合っている。	● 段落相互の関係を自分なりの表し方で書 きまとめたり説明したりしている。 ● 自分の読みと友だちの読みとの違いをは っきりさせながら話し合っている。	● 副教材の段落相互の関係を とらえ主教材との重なり に気づき、読みの技能の高 まりを実感している。

本時の授業仮説

筆者が伝えたい内容の中心を示した段落とそれを支える段落を関係づけて読み深める場面において、追究したい内容に応じて具体化の方法や説明の仕方を選択したり意味段落を比較したりする活動を位置付け、交流する場を設定すれば、かむことの体全体に与える大切な働きを確かにとらえ自分の読み方に自信をもつことができるであろう。

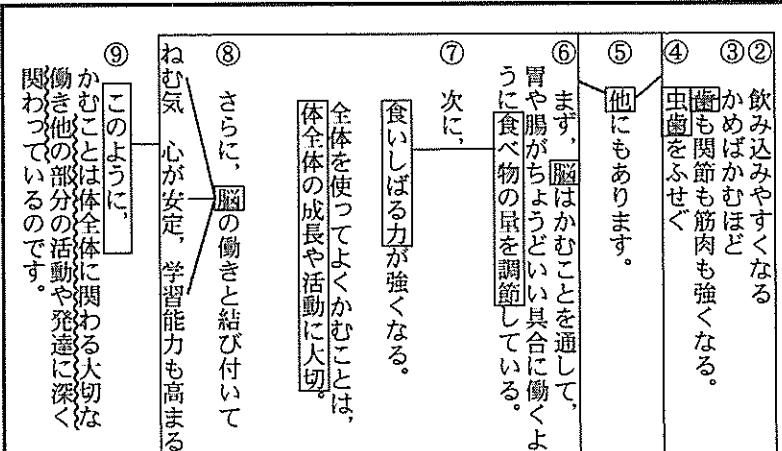
本時の目標

- 1 一人読みの交流から生み出した読み深めの必要感をもとに、筆者の伝えたい中心とそれを支える内容を関係づけて読み返し、友だちと読みと交流させながら体に関する見方・考え方を深めていこうとすることができる。
- 2 まとめの⑨段落に示された「かむことと体全体のかかわり」を意味段落の前後半に書かれている内容とつないでとらえ、要点カードや段落の組み立てカード、人体図などの中から自分に合った方法を選択して説明することができる。

準備

拡大教材文 学習プリント 拡大挿絵 要点カード マジック 人体図 拡大人体図

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 前時学習を想起し、本時学習のめあてを確かめる。 ○ 段落と段落を関係づけて読む必要感をもつこと ○ 3つの事例のどこに着眼するか見通しをもつこと (めあて)「かむこと」と「体全体」との関わりを段落と段落をつないで読み深め、よくかむことのよさを確かめよう。 ※ 学習計画表や流れ図をもとに、前時までにまとめた前半段落の要点のひとつひとつをおさえ、何に目を付けるとよいか交流させる。 2 意味段落の内容を丹念に読み返し、前後半を比較しながら、まとめの段落の意味を読み深め、話し合う。 ○ ⑥⑦⑧段落の内容を、自分の追究したい内容に合った方法を選んで具体化し、自分の言葉で説明すること ※ 「挿絵に言葉や矢印を入れる」「カードにキーワードを書き込み、線でつなげる」「人体図に矢印や線、絵を書き入れる」など、自分の追究内容に合った具体化の方法・説明の仕方を選択させる。	○ 前の時間は、②③④段落に書かれているかむことの力がよく分かるようになった。今日は⑥⑦⑧段落も明らかにしたいな。 ○ 「かむこと」がどこにつながっているのかに目を付けていけばよく分かりそうだ。 ○ ぼくは、昨日の書き込みの時に⑧段落とのつながりが納得できないので、今日話し合ってみみんなの考えを聞いて明らかにしていきたいなあ。 ○ 脳とのつながりは図では分かりにくいから、カードにキーワードをまとめてみよう。 ○ 体の左右のバランスを人体図に表して考えてみよう。 ○ 活動のところは、教科書の挿絵がぴったりだからそれでやってみよう ○ なるほど、〇〇さんの経験では、ねむ気もさめるんだなあ。⑧段落のことがよく分かってきたぞ。 ○ 前半から後半にかけて、よさが体中にひろがっているぞ。。 ○ 前半はかむことに直接関係することで、後半は間接的に関係することが書かれているようだ。 ○ 筆者は段落の順序にも気を付けて書いていたんだなあ。 ○ 「学習能力が高まること」の説明がみんなにうまく伝わったぞ。カードにキーワードを書いた方法がよかったからだろう。 ○ ねむ気のところがはっきりしなかったけど、〇〇グループの説明でよく分かったから、全体で話し合っよかったなあ。
 ○ 意味段落の前半②③④意味段落と後半⑥⑦⑧意味段落を比較して、それぞれの働きをとらえること ※ 2枚の挿絵を比べたり、各段落の内容がどこに影響を与えているか人体図で確認させたりすることで、意味段落の関係に気づかせる。 3 本時明らかになった段落の関係と学習の感想をまとめる。 ○ 自分の課題解決の方法や説明の方法に自信をもつこと ※ 追究と交流の推移を板書で確認し、本時の高まりを自覚させる	

民間・行政・地域一体の取り組みから福岡のよさを発信する意義を高める文化総合学習 第5学年2組 総合的な学習の時間学習指導案

指導者 藤野俊明

単元 がんばろう福岡 つくろう福岡のじまん

指導観

- 本学級の子どもたちは、再生に向けた福岡の人々の努力を実生活や映像などを通してとらえてきている。しかし、その営みにはさまざまな人々のボランティア的な動きがあったり、組織的な動きがあったりすることをとらえてきていない。そこで人々の取り組みと願いを追究し、地域のすばらしさを見出させていく。これは地域のよさをとらえ伝承し、地域の未来を創り出そうとする子どもに高めるうえで意義深い。
- 本単元は、福岡の人々が福岡のエネルギーと人々の思いを発信した「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンを取り上げ、福岡に脈々と受け継がれている「博多っ子の心意気」や「人々のつながり」の素晴らしさをとらえ、地域の一員として受け継ぎ発信しようとすることをねらいとしている。「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンは民間の願いから始まり、民間・行政・地域が一体となり、20日間で計画実施を行ったプロジェクトで、「元気な福岡をアピールしよう」「人々の思いを集約して新しい福岡へ」という人々の願いとそれを実現できる人々のつながりであり、これは子どもたちに受け継がせていきたい歴史的一幕である。そこで福岡の人情やつながりを追究させ、発信させることは自分の地域の素晴らしさを実感的に見出すとともに、地域への愛着を高めることにつながり、意義深い。
- 本単元の指導にあたっては、「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンの素晴らしさや人々の願いから見出し、発信するプロジェクトを創ることをねらいとする。そのためにみいだす段階では「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンを自分の生活とつなげたりする追究を行わせていく。そして追究内容を出し合うなかで人々が復興をめざして民間・行政・地域が一体となって組織的に活動を起こしている営みから福岡の街を元気にしたいという願いを見出させ学ぶ意義を見出させる。次につくりだす段階では福岡を元気にしていくプロジェクトを地域の人々に情報収集をしたり共に検討したりしながら検討吟味を繰り返させていく。その際に有効性と実現性の視点から吟味させていく。そしてプロジェクトを発信したり提案したり行事に参加したりして学習の有用感を味わわせていく。

目標

- 1 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンでの人々の取り組みや願いを調べることを通して、元気な福岡を発信したり、福岡そのものを元気にしていこうする意義をもってプロジェクトを創り出していくことができる。
- 2 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンを可能にした理由を組織面や心情面からとらえるとともに、人々の活動の根幹には地域への愛情とつながり、受け継がれている心意気があることを実感的にとらえることができる。

計画(約11時間)

階	みいだす段階(4時間)	つくりだす段階(5時間)	ひろげる段階(2時間)
活動と内容	1 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンの取り組みを調べ、福岡のよさを追究・発信する計画を立てる (1) キャンペーンを調べ、取り組みのよさや願いを話し合う。4/4本時 ○ 営みや心意気のよさを発信する意義を見出すこと	2 「がんばろう福岡」プロジェクトを作成する。 (1) 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーン関連の機関や人々について調べる。⑤ ○ 人々の営みと願いをつなげること (2) プロジェクト検討会議をする。② ○ 有効性実現性から検討修正すること	3 「がんばろう福岡」プロジェクトを発信し、学習のまとめる② ○ 学習の有用感を味わい、郷土への愛着を深めること
	福岡の人々のつながりの素晴らしさや心意気を見出し、元気な福岡を発信していこうとする文化の学び		
支援	※ 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンの様子や経過の資料提示 ※ 願いを伝えるGTと出逢い	※ 福岡のまちを元気なものにしていこうするボランティアの人々や組織計画を創り出している人々への取材や検討活動	※ 発信を評価するGT ※ 発信の場の設定
評価基準	● 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンのよさを実感している。 ● 福岡のまちを元気にするプロジェクトの意義をとらえている。	● GTへの取材からプロジェクトの有用性を強化して感じている。 ● GTとともにプロジェクトの有効性と実現性を検討している。	● 学習を振り返り、郷土への思いをノートなどにまとめたり、発言したりしている。

本時の授業仮説

「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンのよさを追究する場面において、短期間で大きなプロジェクトを行えた理由について話し合ったり、キャンペーンにかかわった人に取材する場を設定すれば、子どもたちは人々の願いをとらえ、福岡の街を元気にしていくプランを創り出そうとする意義と方向性を見出すことができるだろう。

本時の目標

- 1 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンを自分の生活とつなげたり、調べたことをもとに出し合ったりすることを通して、福岡のまちを元気にしていこうとする学習の意義を見出すことができる。
- 2 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンの取り組みの素晴らしさを経過と人々の協力からとらえ、福岡の人々が地域を元気に立ち上げようとする取り組みと願いから、「がんばろう福岡」プロジェクトの方向性を見出すことができる。

準備

「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンまでの経緯を示す資料 キャンペーンの組織の資料 学習プリント 流れ図

展開

活動と内容(※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ
1 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンの効果について取材したことから本時学習のめあてについて話し合う。 ○ キャンペーンが短期間で実施できた理由をさぐるめあての設定 (めあて) なぜ「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンはわずか20日間で実施できたのかを話し合おう。 ※ 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンについて地域で取材したことや参加者の人数などから本時学習のめあてをとらえさせる。 2 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンが20日間で実施できた理由について話し合う。 (1) 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンの経過や人々の協力体制について調べる。 ○ 「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンの取り組みの素晴らしさを経過と人々の協力からとらえること キャンペーン立ち上げ4月8日 キャンペーン開始 4月29日 キャンペーンへの協賛数 地元企業やアーティストや店舗 ↓ 地域を早く元気にしたいという願いと、やりとげようとする行動力や人々の協力が強くあったからなんだ。 (2) 「元気バイ!!ふくおか」の取り組みと願いについて話し合う。 ○ 地域をよりよいものにしようとする人々の願いから学習の方向性を明らかにすること 福岡を元気にしたいという人々の願い 【キャンペーンの題字をデザインした長谷川法世氏の話】 キャンペーンの題字を書くことを自分は後で知って驚いた。しかし、今の福岡にできることは何かと考え、題字を書くことにしました。どんたくでも山笠でも中止せずにみんなで力を合わせて福岡を盛り上げる。それが博多っ子の心意気。福岡の心意気を全国に知らせたかった。 ↓ 同じ福岡に住むものとして元気な福岡をもっと知らせたい ※ 題字デザインの依頼を受けた経過から地域への願いを見出させる。 3 どんなことを追究すれば、元気な福岡を発信できるかを話し合う。 ○ 福岡を元気にしようとする人々の営みの追究に意義をもつこと ※ イベントに参加した人々の様子を示す写真などを提示したり、追究の内容や方法のよさを評価してもらうことで意義を明らかにさせる。	○ ぼくの地域の人には「元気バイ!!ふくおか」キャンペーンのことを知っていたよ。CMも見たそうだよ。 ○ お店に元気君があって、頑張ろうとメッセージが書かれていたよ。 ○ 取材したら「よし頑張ろう」という気持ちが湧いてきたと言われていたよ。全国に知らせるだけでなく、地域の人を元気づける効果もあったと思います。 ○ でもたった20日間でキャンペーンができたのはすごいな。どんたくでもパレードしているし、ドームでもイベントをしているよ。 ○ スポーツ選手も参加していたし、キャンペーンに賛同してくれた人が多かったんだね。1週間で10個のイベントが開催されているよ。 ○ それだけ福岡を元気にしたいと人々が考えて参加したのだろうな。でも、つながりがないとできないよ ○ 法世さんもはじめは驚いただろうな。自分だったら断るかもしれないけれど、でもきっと福岡の人を元気にしたいという願いが強かったからこそ引き受けたのだと思うよ。 ○ 法世さんが言われた心意気。キャンペーンのことを取材してみて、福岡のことを考えている人たちと本当に似ていたし、ぼくたちも取材を通して同じように思ったね。やはり福岡の人間なんだな。 ○ ぼくも福岡の心意気やつながりを法世さんたちのように広げたいな。 ○ キャンペーンに参加した人に取材してもっとよさを見つけようよ。

つくるパズルピースを選択し、展開図に対する問題分析を行う算数科学習

第6学年2組 算数科学習指導案

指導者 田 中 健 悟

単 元 ブロックパズルのピースをつくろう

指 導 観

- 本単元は、直方体や立方体について理解すること、直方体に関連して、直線や平面の平行及び垂直の関係について理解すること、三角柱、四角柱などの角柱及び円柱について知ることなどをねらいとしている。文化の学びで展開する本単元では、直方体や立方体を分割した複合立体図形のピースを組み合わせてつくるパズル遊びを教材化する。子どもたちはパズル遊びに必要なピースをつくるという目的をもち、その展開図の作成を行っていく。この展開図を作成する活動は、底面が凸凹の形や多角形の立体図形にも、それまでに学習した垂直・平行の関係を適用し、その結果、数理をより複雑な場面に発展させていくことができるという点で学ぶ意義があると考えられる。
- 本学級の子どもたちは、第3学年において、箱の形をしたものを観察したり、つくったりして立体図形の構成要素に着目することを学習してきている。そこでは、画用紙に写し取った面を中心として面と面とを組み合わせ、箱を作成しながら、構成要素に着眼することをねらいとしていた。第6学年においては、特に、立方体や直方体について、辺や面の平行、垂直などの
- 観点から考察し、それらについての理解を深めることをねらいとしている。子どもたちは、辺と面とのつながりの部分や相等する面の位置関係については理解してきているが、まだ、辺や面の位置関係などを含め、垂直や平行といったことから立体図形を考察するには至っていない。
- 本単元の指導にあたっては、ブロックパズルのピースづくりを学習課題として設定し、画用紙に複合立体の展開図をかきピースをつくる活動の中で、面の垂直・平行の関係をさぐる文化の学びに重点化する。そのために、まず、第1次では、立体図形を分割したブロックパズルのピースに出合わせ、「もっと複雑なピースのブロックパズルをつくりたい」という目的をもたせる。そして、直方体や立方体の基本的な構成を学習するとともに、簡単な場合の複合立体のパズルのピースを作成する。次に、第2次では、角柱や円柱を取り上げ、そのピースづくりを行う。最後に、第3次では、複雑な複合立体のピースづくりの活動を行う。各段階のピースをつくる活動では、うまくできなかつたら再度製作を試みるようにしていく。

目 標

- 1 ブロックパズルのピースをつくるという目的的な活動を通して、直方体や立方体の見取図や展開図がわかるとともに底面と辺との間にある平行・垂直の関係がわかる。
- 2 ブロックパズルのピースづくりの中で、いろいろな図形の見取図がかけられるようになるとともに、辺や平面の平行・垂直の関係をとらえ、複合立体の展開図をつくることができる。

計 画 (約9時間)

階	第1次(3時間)	第2次(3時間)	第3次(3時間)
活動と内容	1 立方体を同じ形を分解したブロックパズルに出会い、学習の見通しをもつとともに、直方体や立方体のピースをつくる。③ ○ 底面の形と垂直な面の数との関係や、展開図における底面と側面の位置関係の把握	2 角柱や円柱のブロックパズルのピースをつくる。 (1) モデルを見て展開図をかき、三角柱等のピースをつくる。② ○ 底面と辺の数や位置関係 (2) 円柱のピースをつくる。① ○ 底面と側面の関係の把握	3 分割するピースの形を変化させた複合立体のピースをつくる。 (1) モデルを見て展開図をかき、複雑なピースをつくる。本時① ○ 面の数や垂直関係の把握 (2) 残りのピースを作る。② ○ 面の数や垂直関係の把握
支援	※ 簡単な場合のブロックパズルとそのピースのモデル提示 ※ 選択可能な展開図作成シート	※ 見取図や実物の角柱や円柱のパーツのモデル提示 ※ 選択可能な展開図作成シート	※ 複雑な場合のブロックパズルの完成図とピースのモデル提示 ※ 選択可能な展開図作成シート
評価標準	● ブロックパズルのピースの作成において、隣り合う面の辺の長さの関係や位置関係について考えている。	● ブロックパズルのピースの作成において、底面の角数と側面の枚数の関係や、底面と側面との垂直関係を捉えている。	● 変化した底面の形から、底面の中にある辺の長さとのつながりを考えて側面の枚数や側面の中の辺の長さを決めている。

本時の授業仮説

複雑なブロックパズルのピースをつくる場面において、底面の形が異なる3つの見取図から選択させれば、底面の形に着目し、底面の形と側面の数との関係や、底面と底面との位置関係について考え、展開図を正しくかくことができるであろう。

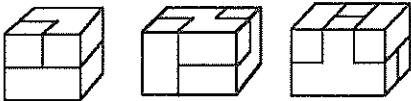
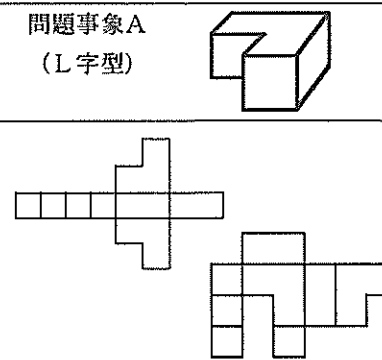
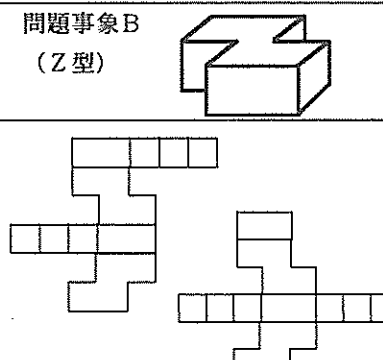
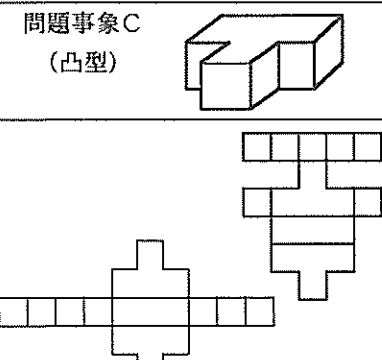
本時の目標

- 1 形が複雑になった場合の複合立体の図形づくりにおいて、底面に垂直な位置関係にある側面の数や形をもとにその展開図を意欲的に追究し、展開図を組み立てて複合図形のピースを作成することができる。
- 2 展開図を作成する場面において、面の合計数や底面と側面等の位置関係を考える中で、展開図上での底面と垂直な関係にある面と、平行の関係にある面との位置関係がわかる。

準備

ブロックパズルのピース、展開図をかくための方眼入りの用紙（選択）、展開図作成の際の支援としての面カード

展開

活動と内容（※は、評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ	
1 複雑な立体図形のピースを含む立方体のブロックパズルに出会い、見取図をもとに、展開図を作成する方法について話し合う。 ○ 複雑なピースの底面の形に着目し、側面の部分にあたる面の数やその形を取り出し、展開図作成への見通しをもつこと （めあて） 底面の形と側面の数との関係を考え、複雑なピースの展開図をつくろう。 ※ 前時までの直方体や立方体の展開図を提示し、展開図作成の際に考えたことを想起させる。 	○ 今度は、前の時間につくった立方体や直方体と比べて、形が随分複雑になっているな。 ○ どうやってこのようなパズルのピースをつくったらいいんだろう。底面の形に合わせて、側面の面の枚数を調べたらよさそうだな。 ○ 直方体や立方体の展開図をかくときに面の枚数や形を考えたけど、今度の場合も同じ考えが使えるかな。 ○ 3つのピースがあるけど、どれから展開図をかいてみようかな。 ○ どれから取りかかろうかな。わたしは、難しそうなので3つのうち、一番簡単なAからしよう。 ○ BとCは側面の数が多いな。Cの方は、側面の形が1つだけ違うから難しそうだな。	
2 見取図や実物の立体モデル、前時までの立体図形の展開図での底面と側面の関係を手がかりに3つのピースの展開図をかく。 （1）展開図の作成の前に見取図やモデルを観察しながら追究する順序を決め、簡単な計画を立てる。 ○ 展開図に必要な面の枚数や底面に平行な面の枚数を特定すること ※ 見通しが見つからない児童には、見取図だけでなくモデルの立体図形を見せ、展開図の作成で必要な面の形や枚数等を具体化できるようにする。 （2）追究するピースの順序を決め、それぞれの展開図を作成する。		
問題事象A （L字型） 	問題事象B （Z型） 	問題事象C （凸型） 
○ 面と面の垂直・平行の位置関係や辺の長さに着目して作成すること ※ 活動が停滞しないよう、展開図の作成についても展開図の続きをかくシートに難易度をつけて選択できるようにしておく。 3 自分たちが作成した展開図を出し合い、展開図を見比べることによって、その中にある共通点について話し合う。 ○ 底面と垂直な関係にある側面は、底面と隣り合う関係にあること ※ 底面と側面とに色分けさせ、視覚的に把握させる。	○ 面の数は、見取図で予想した数と同じだけ展開図の中にかいたけど、かいた場所は、これでいいのか、組み立てて確認してみたいな。 ○ 展開図がいろいろありそうだけど自分ののはあっているのかな。 ○ 底面と平行な関係にある面はすべて、側面を挟んだ位置にあるな。	

世界のお金を比較し、調べながら、世界の文化にふれる総合的な学習の時間

第3・4・5・6学年3組 国際交流タイム学習指導案

指導者 清水 隆一郎 脇本 孝枝 高良 祐治

単 元 つくろう！ 3組 ワールド マネー ミュージアム！

指導観

- 本単元は、子ども達が滞在した国のお金と日本のお金を調べることで、文化の独自性や共通性をとらえるとともに滞在していた国に対する愛着と誇りをもたせることをねらいとしている。具体的には、①日本のお金を調べたことをもとに、滞在した国のお金について調べる課題設定をすること、②自分の滞在していた国のお金についてその種類や歴史的なもの、デザインのもの、作り方、使い方などを知り住んでいた国への一層の愛着と誇りをもつことである。この単元は、お金を調べることを通して他国文化に関心をもち、調べたいという学ぶ意義を感じ日本や滞在国の文化のよさを自分なりにまとめて自信をもつことが可能になる。
- 本学級の子どもたちは、複数の学年が集まった帰国子女の学級集団である。滞在国内、滞在国内、滞在国内帰国してからの期間は様々である。滞在地での経験は現地にとけ込んだ生活をしている子どもや、日本人学校に通学しほとんど現地の生活にとけ込んでいない子どももいる。帰国後も外国での体験を生かしてみたいという願いをもっている。これまでの学習で子ども達は、民族衣装や特産品、お菓子などから世界の文化を調べてきている。お金に関する関心は高く、国によって図柄等が違うことに興味をもっている。このような子ども達に、滞在していた国のお金を追究させることで、自他国の文化を多面的に理解していこうとする態度を育成する上でも意義深いと考える。
- 本単元の指導にあたっては、自他国のお金を調べることを通して、その国の文化を理解しようとする文化の学びで展開する。つかむ段階において、日本のお金に対する気がかりを持たせ、それを子どもの実態に応じて歴史、デザイン、作り方、使い方の視点から課題を把握させる。追究する段階において、子ども達が滞在していた国のお金を、つかむ段階で学んだ追究方法を生かして調べる。調べ方として滞在国内の知人へのメール、日本在住の滞在国内の方をゲストティチャーに招く等本学級らしい方法も活用し、お金から見た文化の特徴をとらえさせる。つくる段階では、調べ考えたことを再構成し「3組ワールドマネーミュージアム」を発信することで、達成感や効能感を味わわせたい。

目 標

- 1 日本や滞在国内のお金について、気がかりをもとに自分の課題を設定して追究し、友達と交流することで自他国の文化を尊重し理解を深めることができるようにする。
- 2 自分の課題を解決するために、様々な方法で情報収集を行い、相手に伝わるようにまとめ、表現し「3組 ワールドマネーミュージアム」を作ることができる。

計 画 (約18時間)

階	つかむ (6時間)	追究する (8時間)	つくる (4時間)
活動と内容	1 お金に関する気がかりを話し合い追究課題と計画をつくる。 (1) 日本のお金を調べる。 ④ ○ お金への理解を深めること (2) 滞在国内のお金を調べる課題を設定し計画を立てる。 ② ○ 調べていく内容と方法の見通しをもつこと	2 日本と滞在国内のお金を比較しながら特徴について追究する。 (1) 滞在国内のお金について調べる。 ⑥ ○ 自分の国や滞在国内していた国のお金の特色をとらえること (2) 調べたことを交流する。本時2/2② ○ 各国のお金を通して各国の文化の独自性や共通性に気づくこと	3 「ワールドマネーミュージアム」について話し合い調べたり考えたりしたことをまとめる。 ④ ○ 目的に応じた表現方法を工夫し、滞在国内のお金の特色が分かるようなまとめ方をすること
	日本のお金と滞在国内のお金を視点を持って比較追究し、自他国の文化に対する誇りを創る文化の学び		
支援	※ 家庭と連携による情報収集 ※ 滞在国内からの留学生の紹介	※ 課題や実態に応じた追究グループ分け ※ 伝える方法の提示	※ ゲストティチャーによる肯定的評価
評価基準	● 4つの視点に迫る日本のお金の追究課題を設定している。 ● 追究する観点と追究の見通しをもって計画を立てている。	● 海外生活の経験を生かし、追究活動をしている。 ● 自国と他国の文化に自分なりの考えをもち、自分の調べたことが相手に分かるように表現をしている。	● 各国の文化を尊重したまとめをしている。 ● お金に対する世界の人々の考え方から自分の生き方について深めている。

本時の授業仮説

調べたことを4つ視点から発表し、考えたことを関係づけながら交流することで、各国のお金の特徴や共通性を認識し、自分たちの「3組 ワールド マネー ミュージアム」を創り出すことができるであろう。

目 標

- 1 自分が調べた滞在国のお金について分かりやすく発表したり、友達の発表を滞在国のお金の共通点、差違点に気をつけながら聞くことができる。
- 2 他国のお金の文化を理解したり、自分が滞在していた国のお金の文化を再認識することができる。

準 備

拡大世界地図、調べ学習ファイル、発表資料

展 開

活 動 と 内 容 (※は、評価を生かした支援)	子どもの思考の流れ								
1 お金についてそれぞれの課題に合わせて追究してきたことから、「ワールド マネー ミュージアム」について話し合う。 ○ 何のために「ワールドマネーミュージアム」に取り組むのか確認し本時のめあてを確かめること (めあて) 各自の課題追究をもとに、「ワールド マネー ミュージアム」について話し合い、もっと追究していくことや新たに追究していくことを考えよう。 ※ 課題追究の4つの視点(歴史、デザイン、作り方、使い方)と、それをもとに本時話し合い考える全体課題について確かめさせる。 2 各自が調べたことをもとに、「ワールドマネーミュージアム」に必要な情報について話し合い、自分の課題追究について見直す。 (1) それぞれが調べたことをもとに、各国の「お金」について共通点や差違点等気付いたことを話し合う。 ○ 各国のお金は、歴史や人々のお金に関する考え方などさまざまな特徴があることに気付くこと ※ 各自が調べた内容については事前に閲覧させておく。	○ ぼくはオーストラリアのコインの図柄について調べたよ。カンガルーやエリマキトカゲなどオーストラリアに住んでいる動物たちが書かれていたよ。他国のコインはどうか。 ○ お金にも、その国の歴史や考え方が込められていたよ。他のグループはどんなことを調べてきているのかな。知りたいな。 ○ みんなが調べたことをまとめて、「ワールドマネーミュージアム」を作ろう。もっとみんなに世界のお金のことを分かってもらうために、どんなことを調べたらいいかな。わかりやすくまとめる方法も考えよう。 ○ お金からその国の特徴がいろいろと見えてくるね。								
(予想される子どもの課題) 「つくろう! 3組 ワールド マネー ミュージアム!」 <table border="1"><thead><tr><th>歴史的なもの</th><th>デザイン的なもの</th><th>使い方</th><th>作り方</th></tr></thead><tbody><tr><td> ○ お金の歴史 ○ お札にのった人物 (なぜお札にのったのか) ○ 価値の変遷 </td><td> ○ 図柄、さわった感じ、大きさ ○ お金に描かれたもの ○ お金の形 </td><td> ○ お小遣いの国による違い ○ 世界のハンバーガーの値段の違いなど </td><td> ○ お金の材料 ○ お金が出来るまで ○ 偽札防止の方法 </td></tr></tbody></table> 		歴史的なもの	デザイン的なもの	使い方	作り方	○ お金の歴史 ○ お札にのった人物 (なぜお札にのったのか) ○ 価値の変遷	○ 図柄、さわった感じ、大きさ ○ お金に描かれたもの ○ お金の形	○ お小遣いの国による違い ○ 世界のハンバーガーの値段の違いなど	○ お金の材料 ○ お金が出来るまで ○ 偽札防止の方法
歴史的なもの	デザイン的なもの	使い方	作り方						
○ お金の歴史 ○ お札にのった人物 (なぜお札にのったのか) ○ 価値の変遷	○ 図柄、さわった感じ、大きさ ○ お金に描かれたもの ○ お金の形	○ お小遣いの国による違い ○ 世界のハンバーガーの値段の違いなど	○ お金の材料 ○ お金が出来るまで ○ 偽札防止の方法						
(2) 足りない情報を収集するための方法を見直し、「3組ワールドマネーミュージアム」のまとめかたについて話し合う。 ○ 4つの視点で調べ考えたことを関係付け、世界各国のお金についての方・考え方を深めること ※ ゲストの話からお金に対する思いを出してもらい考え方を深める。 3 本時の学習を振り返りながら、これからの学習について話し合う。。 ○ 「ワールドマネーミュージアム」を滞在した国のお金の特徴を生かしながらつくることを確かめること ※ ゲストの方から追究過程や結果について肯定的な評価と今後の活動への示唆・助言をしてもらう。	○ どこの国のお金も、その国の自然や歴史が関わっていてその国オリジナルのお金ができあがっている。 ○ どの国のお金もその国の人達の考え方が現れているんだね。 ○ 「ワールドマネーミュージアム」を作って、いろいろな人に見てもらいたい。そのためには、まとめ方を工夫して、見に来た人が一目で分かるようにまとめたらいいね。僕たちがいた国のことも知ってほしいな。								

共通の目的をもとに友達とのかかわりを生み出す合同生活単元学習

ふじ・さくら・梅組 合同生活単元学習指導案

指導者 園田 洋一 下川 勝彦
原田 敏男 諏訪原 佳子

題材 つくろう! なかよし ガーデンルーム

指導観

- 本校特殊学級の子どもたちは、精神年齢3歳から7歳程度の低学年6名、中学年7名、高学年6名の計19名で構成されている。子どもたちは、これまでの合同での学習において、異学年の友達と一緒に活動する中で、自分の要求や意志を相手に伝えたり、友達の働きかけに応じたりするなど、人とのかかわることを経験してきている。その中で、高学年の子どもが下学年の子どものお手伝いをしたり、下学年の子どもがそれらの働きかけに応じて一緒に活動したりするといった、異学年集団における人とのかかわりが芽生えてきている。また、集団で活動するときに必要な活動への目的や役割の意識などについても、もつことができるようになってきている。
- 本単元は、ハーブ園の活用や池作りなどの活動を通して、みんなが楽しめる場になるように継続的に働きかけてきた特殊学級棟の中庭にテーブルやベンチを作ることに取り組み、みんながくつろげる憩いの場を作っていく。本単元における主な学習内容は、①テーブルやベンチのある憩いの場（なかよしガーデンルーム）に興味・関心をもち、それらに愛着をもつこと、②ルーム作りの目的をもち、友達とかかわりながらルーム作りに取り組むこと、③ルーム作りの課題をとらえ、見通しをもって活動すること、④ルーム作りに必要な知識・技能を身につけること、⑤ルーム作りへの満足感や達成感を味わうこと、などである。これらの内容を身につけることは、課題解決の力や社会性、生活に生きる知識・技能といった生活を作り出す力を育む上で意義深いと考える。
- 本単元の指導にあたっては、異学年の友達とかかわりながらルーム作りに取り組むことができるように、子どもたちどうしのかかわりを促すグルーピングの工夫、個に応じた教師の声かけやモデル演示、友達と力を出し合わないとうまくいかない活動の設定などの観点から支援を工夫する。具体的には、課題解決や人とのかかわり方の傾向性をもとにしたペア作りや友達の様子を意識させる声かけや、力の合わせ方のモデル演示、木材のカットやベンチの天板運びなどの活動を設定し、支援していく。

目標

- 1 ガーデンルーム作りの目的を友達と共有し、異学年とかかわりながらガーデンルーム作りに取り組んで、目的達成の喜びを友達と分かち合うことができる。
- 2 ガーデンルーム作りを通して、憩いの場としてベンチやテーブルのあるガーデンルームを大切に作る気持ちをもつとともに、木材の切り方や木材の留め方などの知識や技能、人とのかかわり方を身につけることができる。

計画（約8時間＋課外）

階	であう段階（2時間）	ころみる段階（5時間）	いかず段階（課外＋1時間）
活動と内容	1 中庭で行ってきたことを振り返り、ガーデンルーム作りについて話し合う。 ○ テーブルやベンチへの興味・関心をもちこと ○ 中庭にルームを作る目的や課題をもつこと	3 異学年の友達とルーム作りをする。 (1) 材料や道具を準備する。② ○ 友達と力を合わせて、材料を運んだり道具の使い方を知ったりすること (2) ルームのベンチやテーブル、看板などを作る。本時2/3 ③ ○ 友達と協力をして作ること	3 なかよしガーデンルームをランチタイムで利用し、活動をまとめる。 ○ ガーデンルーム作りの喜びを、友達と分かち合うこと ○ 達成感をもつこと
ガーデンルーム作りを通して、人とのかかわり方を身につける実際の・総合的な学び			
支援	※ 憩いの場としてのルームに出合う場（公園の写真や活動の様子など）	※ 友達と力を合わせて使う、のこぎりやトンカチなどの道具と使い方の提示 ※ 作った物を所定の位置に運ぶ活動の設定	※ ルームでのランチタイムの活動の設定 ※ 個に応じた表現の提示
評価基準	● 友達と一緒にルームを作ることを発言している。 ● ルーム作りに必要な活動について発言している。	● 異学年の友達に働きかけたり、受け入れたりしながら道具を使っている。 ● ペアと同じグループの友達に、自分の意志を伝えながら活動している。	● みんなで作ったから、ガーデンルームができたこと生活が前よりたのしくなったことを表現している。

本時の授業仮説

仲良しガーデンルーム作りのベンチや看板を作りたいと思っている子どもたちに、個の課題解決や人とのかかわりの傾向性をもとに、異学年のかかわりを促すペアや、友達の行動や活動の状況などを意識させる声かけやモデル演示をすれば、友達にやり方を教えたり手伝ったり働きかけに応じたりできるであろう。

本時の目標

- 1 同じ班の友達とかかわり合いながら意欲的にルーム作りに取り組むことができる。
 Aグループ：友達の様子を見て声かけしたり、応じて行動したりすること
 Bグループ：友達と一緒に行動すること
 Cグループ：手順表をもとに友達に声をかけたり、進んで応じたりすること
- 2 ルーム作りに取り組む中で、ベンチなどの作り方や友達とかかわり方を身につけることができる。

準備

ルーム作りの計画表、木材、のこぎりやトンカチなどの道具類、軍手など

展開

活 動 と 内 容			個の活動を促す支援
1 ガーデンルーム作りの計画表や前時まで作ってきたものを見て、本時の活動について話し合う。 ○ 班ごとの活動への意欲と見通しをもち、ルームのベンチや看板を作ることを意識すること ○ 作るための道具や使い方をとらえること (めあて) ベンチやかんばんをつかって、みんながあつまれるガーデンルームにしよう。			1 活動への興味・関心を喚起し、目的意識や見通しをもたせる支援 ○ ガーデンルーム作りの工程を示した計画表の提示 (材料切り→材料留め→設置) ○ 道具の使い方や切り方などのモデル演示
2 同じ班の友達とベンチや看板をつくる。 [A班：低学年2名，中学年2名，高学年2名] [B班：低学年2名，中学年3名，高学年2名] [C班：低学年2名，中学年2名，高学年2名] (1) 二人組でベンチや看板などをつくる。 【木材の切り方】			2 意欲的に仲良しガーデンルーム作りに取り組むための支援 ○ 友達とかかわりを生み出す活動の設定 ・二人組で材料を切る活動の提示 ・課題解決や人との関わりの傾向性による異学年や友達とのペアリングの設定 (高学年と低学年，中学年どうし) ○ 押さえる位置のマーキングの設定 ○ 友達へのかかわり方を示すモデル演示 (Aグループ) ・友達の様子をみるようなモデル演示や声かけ (Bグループ) ・友達の行動を教えたり一緒に行動したりすることを促す声かけ (Cグループ) ・手順表を見て、友達への働きかけを促すような声かけ
Aグループ	Bグループ	Cグループ	
○ 材料を切って、看板の支えを作ること	○ 材料を切って、椅子の天板を作ること	○ 材料を切って、椅子の支えを作ること	
【友達とかかわり】			
○ 活動の様子を見て声かけしたり、それに応じて材料を支えたりすること	○ 友達に声をかけたり動きをあわせたりして一緒に行動すること	○ 手順表をもとに友達に声をかけたり、進んで応じたりすること	
(2) 木材どうしを留める。 ○ 個に応じてトンカチでたたいたり、ドライバーで差し込んだりすること ○ 個に応じて木材を直接支えたり、押さえ板を使って支えたりすること (3) できたベンチや看板を所定の位置に運ぶ。 ○ 一人では運びにくいベンチなどをみんなで運ぶこと			
3 作ったベンチに座ったり、看板を掲げたりして、ルームのできばえや今後の活動について話し合う。 ○ 座るときに安全か確かめながら座ること ○ 友達を手伝ったり、声かけに応じたりして、みんなで作ったこと ○ 友達と力を合わせてベンチや看板ができた喜びを味わうこと			3 満足感や達成感を味わわせるための支援 ○ ベンチに座ったときの気持ちを表現させ価値づける賞賛のことば ○ 次の活動の意欲付けの励まし

テーマ別協議会

全体講演

演 題

子どもの学力を保障する
教師の授業力

講 師

上智大学総合人間科学部教育学科

教 授

奈 須 正 裕 先生

研究紀要の部

研究紀要目次

＜ふくおかプラン＞の全体枠組み

課程	低学年	中学年	高学年
文化の学び	算 数		
	音 楽		
	図 画 工 作		
	国 語		
	体 育		
生活の学び	生活科	保 健 理 科	
		文 化 総 合 社 会	
			家 庭
		特 別 活 動	
		生 活 総 合	
人間の学び	道 徳 の 時 間		
	人 間 総 合		

研究主題構想 9 0

豊かに生きる子どもをはぐむ教育課程の創造

－自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する＜ふくおかプラン＞の展開－

算数科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 1 6

－自ら筋道立てて考える算数科学習－

音楽科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 2 0

－音楽的な思考力を発揮し楽心をもつ音楽科学習－

図画工作科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 2 4

－創造的な技能を駆使し新たな表現を創り出す図画工作科学習－

国語科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 2 6

－文章とかかわり自分の考えを創り出す読むことの学習－

体育科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 3 0

－価値ある動きをつくり出す体育科学習－

－自ら健康生活をつくり出す保健学習－

理科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 3 8

－科学する楽しさを味わう理科学習－

社会科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 4 4

－社会形成者として見方・考え方を確かにする社会科学習－

家庭科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 4 8

－家庭生活を工夫する喜びを生み出す家庭科学習－

生活科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 5 2

－自分たちで楽しい生活をつくり出す生活科学習－

特別活動の＜ふくおかプラン＞ 1 5 6

－集団への関与を強めよりよい学校生活を築く特別活動－

道徳学習の＜ふくおかプラン＞ 1 5 8

－道徳的な価値を主体的にとらえる道徳学習－

総合的な学習の時間の＜ふくおかプラン＞ 1 6 2

－自己の生き方を創る総合的な学習－

障害児教育＜ふくおかプラン＞の枠組み

課程	低（ふじ組）	中（さくら組）	高（梅組）
文化	算 数		
	国 語		
	音 楽・図画工作・体 育		
生活	生活単元学習		
	合同生活単元学習（異年齢・縦割り）		
	特別活動（クラブ・委員会）		
	日常生活指導		

障害児教育部主題構想 1 7 0

豊かな生活を営む子どもをはぐむ教育課程の創造

国語科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 7 2

－言葉を確かに理解し表現する国語科学習－

算数科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 7 6

－数に確にかかわる算数科学習－

体育科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 8 0

－状況に応じた動きを身に付ける体育科学習－

帰国子女教育＜ふくおかプラン＞の枠組み

課程	4 年	5 年	6 年
文化	国語・算数（個別のカリキュラムをもとに）		
	社会（帰国子女教育独自のカリキュラムで）		
	理科・音楽・図画工作・家庭科・体育		
	（通常学級との交流学习で）		
生活	国際交流タイム（総合的な学習の時間）		
	特別活動（学級活動帰国子女学級合同で）		
	道徳学習（体験に応じて柔軟に扱う）		

帰国子女教育部主題構想 1 8 4

自信と誇りをはぐむ帰国子女教育

算数科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 8 6

－数量や図形の意味理解を確かにする算数科学習－

社会科学習の＜ふくおかプラン＞ 1 9 0

－社会的事象についての知識を獲得する社会科学習－

豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 —自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉の展開—

I 今、学校に求められること

1 社会の現状に見える人間

ニート(Not in Education, Employment or Training)と呼ばれる、仕事に就いていないだけでなく、仕事に就こうとする希望すら失っている無業者が25歳未満に限定しても、我が国には40万人はいると言われている。単に自分がしたい仕事に就けないとか、自分に合う仕事を探しているといった失業者、あるいはフリーターと言われる状態ではなく、仕事をするそのものへの拒否的な傾向が見られるようになってきている。このような状況は確かに社会的な体制としての問題もあるが、学校が育ててきた子どもの結果として突きつけられているのである。これらは、学校教育への警鐘として受け止めなければならない。このような状態を生み出した背景には、自分の外側とのかかわりと、自分自身の内側に対するかかわりのどちらか、あるいは両方に課題をもっている場合が多い。外側へのかかわりとは、自分が社会の一員として生きていることの自覚の欠如である。人間は何らかの集団に所属し、そのなかでの役割を担いながら生きている。最も基本的な集団である家族でもそうであるし、地域社会でも同じである。集団や社会のなかで、生き、生かされているという感覚や学んだことが他に役立つという実感のないままに過ごしていることが大きな原因と言える。また、自分の内側に対するかかわりとは、自分への自信である。学校や社会の場で、かけがえのない「個人」としての自分を見出すことができずにいる。自分にはどんな特徴があり、そのことがいかに大切であるか、自分が自分自身の能力を開発できる存在であるという自覚等が身に付きにくい状況なのである。テストの点数や学校の評判、他人との比較等、一面的な個人の能力のとりえ方をされたり、他との比較において優劣を付けられるといったことが少なくない現状である。また、自分の進むべき道を自分で決めるという体験が少なくなり、大げさに言えば、他人によって、人生を決められることも起こりうる。自分で自分の目標を設定、自分を管理し、試行錯誤しながらも、自分の目標に近づいていくような体験なしでは、自分に対する自信やこれからの将来に対する期待感等ももちようがない。

このように、学校や社会において、自分自身や自分のまわりとのかかわりが薄れてきている現代において、求められていることはどんなことであろうか。それは、他に役立ったり自分のことは自分で決めたりするといったような体験だと考えるのである。

2 学力低下論争の末に

現在、学習指導要領の見直し論が叫ばれるようになった。この背景には、OECDによる学力調査、学習到達度調査(PISA)の結果が公表され、全国的に、また社会的に「学力低下」が認知されたことに拠る。このことは、同時に「学力低下→基礎学力の重視→ドリル学習」という短絡的な構図を生み出している。しかし、PISA調査のもともとの趣旨は、このような構図では言い表せないところにある。最近の学力調査は、数年前まで我が国やいくつかのアジアの国々が上位にあった学力調査とは異なるように作りかえられている。今後の世界情勢を鑑みてつくられた学力調査は、積み上げ、訓練として身に付いたり、暗記したりする学習で身に付くような、いわゆる知識、技能のみを測るものではない。それらの知識技能を場や状況に応じて使ったり、積極的に自分の考えをつくったり表現したりすることを評価しようとする、新しいPISA調査の目的がある。この調査結果を本当の意味で活かすためには、調査自体が生涯学習社会を見据え、変わっていることを理解しなければならない。積み上げや訓練を否定するわけではないが、単に練習したり、覚えたりするだけではどうも身に付かない、実の場に応じた、また必要に応じてつくり変えていくことができる能力が今、求められていると言えるのである。

3 これからの学校に求められること

かつて日本が、近代化を図ろうとしていた時代、学校教育に求められていたことは、学校の教育を終えた子どもたちが、将来の労働力として生産性を高めるように準備することであった。しかし、ポスト近代化と呼ばれる現代においては、人間として、よりよく生きることにつながる教育が必要とされている。子どもが将来にわたって「意味のある<生>」を獲得し、実現できるように生きることが目的とされる。人間は絶えず、人間とは何か、自分はどんなよさや可能性をもっているのか、どうすればよりよく発揮できるか、人間や社会はいかにあるべきか、自分は他の人や社会と、どのようにかかわっていくべきか、そうしたことを考えることを通して、よりよく生きるために、自らに問いかけ、模索しながら学び続けていく存在である。

このように、「生きる」ことを大切にしたい教育がまさに今、求められているのである。

Ⅱ-1 研究主題設定のために

人間が生きるということ ―生きる側面から考える―

1 人間が生きるとは

▼ 自然と人間

近代社会は、科学技術の飛躍的な発展を遂げた。このことは、人間の生活を快適・便利にし、効率的な生活を可能にした。その意味では、科学の進歩が人間の生活を豊かにするうえで大切なことであった。事実、人間がつくりだした様々な機械は、労働にかかる時間を削減し、危険を回避させ、圧倒的な生産性の向上へとつながった。また、人と人との間においても、メディアや通信技術、交通手段等の進歩がその距離を近づける結果となった。これらの進歩は、人間の英知によってつくり出されたものであり、それ自体を否定するものではない。しかし、人間生活を確かに豊かにしてきた科学技術等の進歩は、他方では、いろいろな弊害も生み出している。例えば、機械を動かすエネルギーや生産するための資源は、使い尽くされ、枯渇に近づく一方であり、廃棄物は自然はおろか、そのなかで生活している人間自身をも危うくしている現状がある。自然と人間とのかかわりがうまくいっていないのが現状なのである。

▼ 人間と人間

人間と人間の間を関係を考えてもそうである。人間は、人間とのかかわりにおいてしか、人間になることはできない。しかし、核家族化や地域住民の関係が希薄化、少兄弟化等は、人間関係づくりにも影響している。他人の気持ちを理解したり、ときには我慢したり、自分の気持ちを相手に伝えたりする自分をコントロールする側面と相手を理解したり、尊重したりしていく側面の両方を十分に育たなくしている現状がある。人間の自分自身とのかかわりについても大きな課題がある。

▼ 自分と自分

人間は、自分自身が自分の人生の主人公であり、夢や希望をもち、個性を発揮して生きる存在である。しかし、多くの子どもたちが様々なストレスを受け、欲求不満をつのらせたり、自分の力の発揮によって感動したりする場が少ないことが自分自身に価値を見出し、自尊感情をもつことができないことへとつながっている。

人間という動物は、自分を取り巻く自然・社会とのかかわりのなかに生き、形成されるとともに、自分自身を生きる存在である。今こそ、人間が生きるということを真っ向から考えなければならない時代に来ていると言える。このことは、人間が生きるとは、どんなことなのか、これからの時代を豊かに生きていく人間に必要な力は何かを明らかにすることである。

2 人間が生きる3つの側面

元来、人間は、その個人がもっている能力を最大限に伸ばしていきながら、人間同士や人間をはぐくんでくれている自然と互いによりよい関係を築きながら、生きていく存在である。これらのことから考えると、人間の本質は、自分自身を生きる存在であることを基盤として、自分自身を生きるために必要な諸能力を獲得していく存在であり、他とかかわりながら生きていく存在であると言える。このように、「生きる」ということを人間の存在から考えてみると、次のような3つの存在として考えられる。

<人間が生きる側面>

I 人間は、文化的存在である。

II 人間は、現実的存在である。

III 人間は、意味的存在である。

「人間は、文化的存在である。」とは、二つのことを意味している。一つは、人間が、自分自身の感性や理性をもとに、事象から事実を取り出し、その法則や原理を抽象化して数学や物理学をつくり出したり、構想力によって美を取り出して芸術をつくり出したりする存在であるということである。もう一つは、人間が生きていくためには、先人がつくりあげてきたそれらの文化について理解し活用したり、自分自身がその必要から文化をつくり出したりすることが必要である。

「人間は、現実的存在である。」とは、人間には、毎日毎日の具体的、現実的な生活のなかで生きているということである。人間が生きていくためには、目の前の自分の生活や他者や社会、自然とともに生活する現実を認識したり、生活自体をよりよくつくりかえたりすることが必要である。

「人間は、意味的存在である。」ということとは、最も人間らしい精神的な次元を表している。人間が生きていくためには、自分の成長を自分で感じ、自分が生きていく価値のある存在であることを自覚するとともに、自分の価値観をつくり、よりよい人間として生きる方向性を定めていくことが必要である。

このように、人間が生きることを考えたとき、これら3つの側面があることを理解し、そして3つの側面で生きることを保障していくことが必要なのである。これら3つは、どれか一つが欠けても人間として生きることにはならない。どんな人間も文化のなかで生き、生活のなかで生き、人間として生きているのである。これら3つの側面が調和されて生きるということが豊かに生きるということに他ならないと考える。

Ⅱ-2 研究主題設定のために

学びとは何か ―「学び」を大切にする意味―

1 「学び」を大切にする意味

「生活」、「文化」、「人間」という生きる3側面のキーワードをもとに、子どもの経験としての「学び」を位置付けることにする。「学ぶ」ことについて、ジェリー、H、ギルは、3つの意味があることを示している。

一つは、「～ということを知る」という学びであり、主として情報を獲得していく学びとして定義している。二つめは、「～することを学ぶ」というものであり、徒弟制度に見られるような特定の修業を通してある技能を獲得していくことを表している。そして最終的には、三つ目の「生きることを学ぶ」があり、人間的な成長を経験して、人間が生きることを学ぶというものである。このように、「学び」という言葉に込められた意味は価値高いものである。本校が、この「学び」を大切にしているのは、次のような理由からである。

▼ 「もつ」から「つかえる」へ

たくさん知識の保有、記憶している量が大切ではない。単にある知識や技能が身に付いた、できるということが大切なのではない。あくまでも「わかる」「つかえる」という役立つものでなければならない。学びは、子ども一人一人が内側で構成する個性的で個別的な「意味の経験」に他ならず、子どもがもっているのではなく、子どもが深く理解し、場や状況に応じて「使える」という状態に高めていくことを意味している。

▼ 「受け身」から「能動」へ

学びとは、一定の知識や技能を受動的・機械的に習得することではなく、対象であるものや事柄、社会に対して問題を構成し、思考を展開して対象の意味を構成し、自分の中に世界を構成するという問題解決的思考を前提としている。いわゆる「勉強」ではなく、自分が進んで対象とかかわって学ぶことを示しているのである。

▼ 学ぶことの意義を求めて

「学ぶ」という言葉に類似した言葉に、「学習」がある。学習は、知識や技能を獲得していく個人の能力や意欲に収束するのに対して、「学ぶ」は、文化の伝承と再創造という社会的過程を基盤とする活動を意味する。学ぶことで、自分の世界が広がったり人間的な成長を可能にしたりすることができるのである。このことは、学び続ける存在としての自分づくりにつながり、生涯学ぶことを通して、自分の能力を高めていく、可塑的な自分づくりができるようにしていく。

このように「学び」を大切にすることで、教育課程を与えられるものではなく、子どもが学んでいく履歴、コースとして考えるのである。

2 学びとは

▼ 学びは具体的な対象をもつ

子どもたちが学ぶということは、具体的な対象とのかかわりにおいてである。言葉や概念といったものを抽象化して学ぶことは、子どもにはあり得ない。どんな対象を子どもたちに教材として提示していくのか、その対象の在り方を明らかにすることが必要なのである。

▼ 学びは過程を表す

学びは、子どもたちが対象にかかわって学びをつくり、学びから得たものからまた新たな学びをつくり出していくという連続を表している。対象によって、あるいはねらうべき知識や技能、知的な能力の獲得によってその過程は自ずと変わるべきである。このことを「生活」、「文化」、「人間」という3つの学びとして具体化していくことが大切である。

▼ 学びによって得られる知

「生活」、「文化」、「人間」という3つの学びを考えたとき、それらの学びから得られる知は異なってくる。言い換えれば、生活者として生きるための知「生活知」と文化の担い手として生きるための「文化知」、人間として生きるための「人間知」には違いがあるということである。では、この「知」をどのように考えればよいのだろうか。本校では、「知」を2つの視点から分類する。

○ 知識・技能としての「知」

対象とかかわって学びを展開していったときに獲得される知識・技能である。ここでいう知識は、2つの意味がある。一般に宣言的知識と呼ばれるもので、言語による記述として表したり人に伝えたりすることが容易な知識である。定式化された科学の概念や法則、芸術の価値等が挙げられる。もう1つは、手続き的知識と呼ばれるものである。何かを明らかにするためには、一定の原理に基づいて解き明かしていく探究方法を必要とし、宣言的な知識を獲得する経験や活用する経験を通して身に付けられていく。

○ 知的能力としての「知」

知的能力としての知は、知識や技能を獲得していくための思考や判断といった能力(インプットの知的能力)と獲得した知識・技能を状況に合わせて使いこなそうという能力(アウトプットの能力)に大別される。

これら2つの知が獲得されることで、生きていく態度が形成され、進んで対象とかかわり、自分が生活や文化、人間のつくり手として主体的に生きていこうとすることができると考える。

Ⅲ 豊かに生きる子どもとは

生き生きと生きるということは、自分の生命力を十分に発揮し、生きる喜びを実感しながら生きていることである。人間らしく生きる喜びを実感していくためには、それぞれの生きがいをもっていることが大切な要件となる。ここで言う、生きがいとは、単に「〇〇になりたい」という到達型の目標ではなく、「こんなふうに生きたい」という向上目標的な生き方を示している。自分なりの使命を生き抜いている人々は何か一つの考えに情熱を感じていてこんなふうに生きたいという自分自身を有意義で有能な存在である認める理想をもっている。このことが、「生きがい」のある人生の出発点である。この理想は、意欲、こだわり、自尊心、自発性という形で現れる。

○ 生きがいを考えなければならない時代

豊かに生きるという、生きがいについて考える必要がでてきたのは、今日的な課題によるものである。これは「成熟社会」と呼ばれる社会に変化したことによる。「成長社会」であった過去の時代においては、人間としてのよりよい生活を物質的な視点からとらえ、物、地位、名誉等を獲得し、所有していることが「豊かさ」の象徴であった。そのため、その意味での豊かさをめざして、人々は欠乏欲求に駆られて働き続けた。いわゆる「パンのために働く」という状態を表している。しかし、今日、その様相は変わってきている。「右肩上がり」の世の中ではなく、個人個人の生き方が問われている時代となってきた。このことは、それぞれに「生きる目標、人生の目的」を考えなければならないときに来ていることを表している。

○ 生きがいをもつことが困難な時代

しかし、生きがいという自分の理想をもつことに対する障害が多いのも現代的な課題である。大きくは、2つの問題点がある。1つ目は、理想を描く主体者にかかわる問題である。自分の人生の理想を描くという作業を他人に委ねてしまうことが多いことである。親や教師、あるいは世間が考える人生の目的をなぞる人生になってしまっている。自分が何をしたいのかを明らかにしていく必要がある。自分自身が生きる主体性をもたなければならないということである。2つ目は、脆弱な自尊心をもっていることである。このことは、言い換えると、プライドが高すぎて他人に弱みを見せることを拒絶したり、あくまでも完璧にこなさなければならないということに囚われてしまったりすることである。豊かに生きるとは、学校で学んだことが単に獲得されるというだけでなく、自分が生きることとつなげて、生きることに適用したり、生きていくうえでの諸問題に応じて活用したりできることである。

このことは、すべての子どもに一定水準以上の知識、理解、技能を必ず習得させるという側面と現在及び将来にわたっての個性的な学習を、さらには生き方を支えていく諸能力を獲得させる側面の両者を大切にしていくことである。この両者が大切にされることによって、生き

て働く学力として子どもたちのなかに形成され、生きがいをもち生き生きと生きる基盤をつくるものである。

豊かに生きる子どもとは、自分の身の回りの生活や文化、人間と深くかかわることを通して、それらへのかかわり方を高め、生きていくうえで必要な知識・技能を獲得するとともに、自分の生き方を自分が願う方向へと主体的に形成し、自分への強い信頼をもって生きる子どもであり、次の3つの視点から具体的に考える。

▼ 学ぶ意義＝学ぶ意味と価値を感じる力

そのことを学ぶことが子どもたちが現在、及び将来にわたって、どんな意味や価値があるのかということである。このことを各教科等において分析して、子どもたちがそのことを実感していく必要がある。そのためには、学んでいることに対する目的意識を明確にもつことと、学んだことが活かされるという実感をもつことが大切である。

▼ 学ぶ力＝思いや願いの実現に活用できる力

学ぶ力には、2つの力を3つに分類して整理していく。AとBの学力は文部科学省の「確かな学力」として提唱されているものである。

Aは学力保障の対象であり、Bは成長保障の学力である。

A	B
実体的学力 (見える学力) 知識・理解 技能	機能的学力 (見えない学力) 思考力、表現力、 判断力、意欲、 課題発見能力、 問題解決能力

▼ 生きる自分のよさへの自覚・自信

自分自身が生きていく価値のある存在、成長し続ける存在、何かを成し遂げることができる存在であるということを実感していくことである。このことを自己効力と呼んでいる。自分の能力に対する肯定感をもたせることが大切なのである。自信は、自分の能力についての自信(私は～できる)と自分の特性についての自信(私は～な人間)に大別されるが、いずれにしても、自分の能力や特性に対して、肯定的なセルフイメージをもつ自己主導的な自信が大切である。

■ 具体的な子どもの姿

- 自分が今、学ぼうとしていることへの強い求めをもつとともに、学んだことを生かすことによって、学ぶ意義を実感している子ども
- 生きるために必要な知識・技能とともに、知識・技能をつくりだす機能的な学力や、生活や次の学習へと転移させることができる能力をもつ子ども
- 自分ができる存在であるという自覚をするとともに、成長し、やり遂げる力があると考え自分に自信をもつ子ども

Ⅳ 豊かに生きる子どもを育てる論理

豊かに生きる主体としての子どもをはぐくむためには、次の2つの側面からの論理が必要である。この2つの側面が両立することによって、「生きる主体を強化できる。

- 外的側面…自分の外界に対して、自分がかかわり、意味や価値を獲得していく論理
- 内的側面…自分の内面に対して、深くかかわり自己の深化や拡大を図る論理

主として外的側面から大切にされることは、「わかる」ことである。本校では、わかるということを次の3つとしてとらえる。

- ・ 学習している対象についてわかる

学習していく対象の内容が、子どもたちに解釈できるものとして概念形成されていく、精緻化という働きを表す。確かに自分が考え、証明できるという自律的、実証的な「わかる」である。

- ・ 学習の進め方がわかる

どんな追究の仕方、あるいはどんな考え方でわかるのかということを自覚的にとらえていくことである。

- ・ 学習している意味がわかる

何のために、今、この学習をしているのか、どんなことに役立っていくかということがわかるということである。

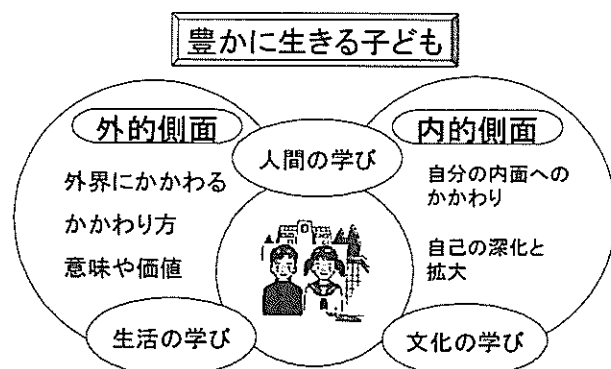


図 豊かに生きる子どもを育てる原理

外的側面は、自分の外側にあることがらに積極的ににかかわり、その意味を自分で解釈し、その知識や技能を必要に応じて使えるようになることである。つまり、「わかる」「できる」という言葉で表すことができる。現在、我が国の小学校では、指導方法の工夫改善についての研究が進められ、習熟度別の少人数指導や T、T 等、効果的な位置付け方が報告されている。しかし、ややもすると、「できる」ということが重視されがちになっている。これは、学力低下が叫ばれ、読み・書き・算に代表されるより基礎的な学力に目が向けられたことと、学校の外部評価や説明責任等が積極的に取り入れられたことで、測定しやすい学力を重視したこと等によると考えられる。また、与えられた問題に対して正しい答えを導く、

「できる」という意味での学力は、我が国の子どもたちは大変高いことが、各種の国際的な学力調査からも明らかである。もちろん、それ自体は批判されるべきことではないが、「日本型高学力」と揶揄されているところでもある。

大切なのは「できる」だけではなく、「本当にわかる」に支えられる関係でとらえることである。

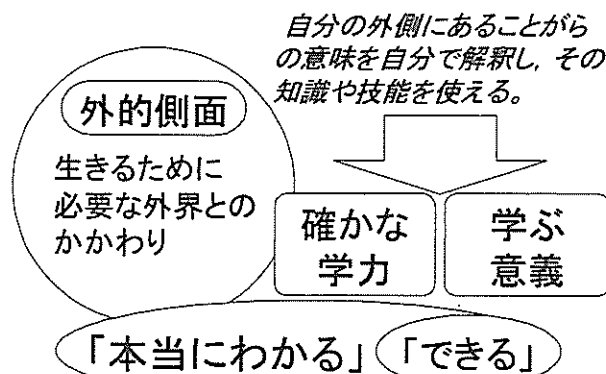


図 豊かに生きる子どもを育てる論理① 外的側面

主として、内的側面から大切にされることは、自分の内面を耕すということである。

子どもが、学習対象とのかかわりを通して、まだ表出されていない可能態としての自己との対話を積極的に起こすことで、自分自身と深くかかわり、自分の内面世界を深化・拡大させることができる。外的側面では、子どもが学ぶ対象に向かうベクトルと、対象から自分に向かうベクトルの双方向が大切にされる。なかでも、「自ら、主体的に」等といった言葉を遣う場合は、特に自分から対象に向かうベクトルを強めようとする研究がなされてきた。しかし、自分への強い信頼、つまり生きていく自分への自信を高めていくためには、ここにもう一組のベクトルが必要だと強く感じる。それは、学習対象とのかかわりを通して、まだ表出されていない可能態、すなわち、まだ自分に自覚されていない自己との対話であると考えられる。

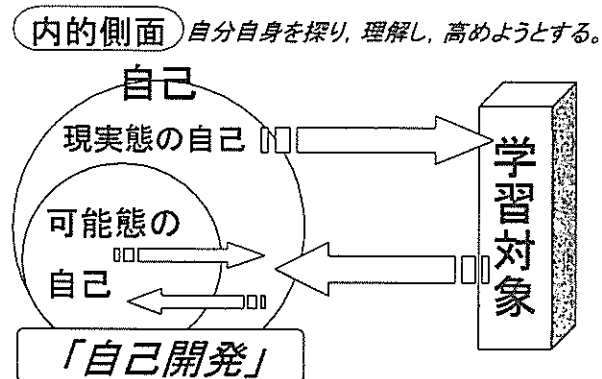


図 豊かに生きる子どもを育てる論理② 内的側面

V-1 副主題の意味

ー自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合するー

1 学びを意義化するために

自分の学びが意義在るものとして学習者に認識されるためには、自分の外界とのかかわりが、学んだことによって望ましい方向へ変容することが不可欠である。すなわち、学んだことが「使えた」「役立った」と認識したり、学ぶことそのものの楽しさを感じたりすることである。そこで、学ぶことが役立つ方向を、人間として必要な次の3つの方向から考える。

▼ 「生活者として」生きる

子どもが、自分の身の周りの生活をはじめとして、所属する集団、地域や国家での生活者として、生活現実のなかでの適切な判断や行為をつくりだすことである。

子どもたちは、自分自身の生活習慣や家族、あるいは学級集団、学校、地域といったいろいろな範囲での生活を送っている。それぞれの場面での子どもの役割は異なり、集団とのかかわり方も違う。自分自身の生活を考えたときには、自分の生活実態を把握し、更新すべき目標を設定し、そこへ向かう過程が重視されるが、集団に依拠した生活となれば、そこにいる人間とのかかわりや自分の集団での立場も考えなければならない。生活者として生きるということは、このように、常に現在よりも生活自体をよりよくしようとする意欲や他者とのかかわりが重視されるとともに、何より具体的な子どもの生活自体を変えていく経験が必要なのである。

▼ 「文化の担い手」として生きる

子どもが、言語や論理、数量、運動、芸術、人間的価値といった文化を継承し創造していくことである。

カール・ポPPERは、文化の世界をつくる人間の様相を世界Ⅰ、世界Ⅱ、世界Ⅲの3つとしてとらえている。世界Ⅰは、目に見える、ふれることができる生物や人工物等の具体的な世界である。世界Ⅱは、世界Ⅰでの事象にかかわるなかで生起する知識や知覚、思考、想像や創造といった各個人の内面意識をさしている。そして、世界Ⅲにおいて、世界Ⅱでの内的な活動の結果、客観的に存在する知識や概念、科学や芸術、学問等の理論体系が形成されるとしている。このことから、文化の担い手として生きるためには、具体的な諸事象と深くかかわることを通して、思考や想像を働かせ、子どもなりの科学や芸術といった文化をつくる経験が必要なのである。

▼ 「人間として」生きる

子どもが、人間としての生き方、すなわち人間性を身に付ける学びであるとともに、自分自身を客観的に見つめ、自らの目標を設定して生き続ける自己形成ができることである。子どもは人間として生きていることに対して無自覚なことが多い。改めて「自分は人間である」等

と考えることはほとんどないであろう。また、自分自身を客観的に見つめ、そのときどきの自分の判断や考えを想起して顧みたりすることは大変難しいことである。そこで、必要なことは、人間というものの特質や在り方について考える場を設けたり、自分自身を内省したりする機会を準備したりすることが必要なのである。

このように、人間が生きていくことを「生活」、「文化」、「人間」という3つの側面からとらえることができる。このことは、前述した様々な現代の人間をめぐる問題事象の解決へと向かう人格形成の方途に寄与することができる。これら3つの生きる側面が獲得された状態を示し、子ども自身が文化をつくる、生活をつくる、自分自身の人間をつくるといった3つの側面から豊かに生きることを考えるのである。

そこで、本校では人間が生きる「文化」「生活」「人間」という3つの側面からの学びを子どもたちに保障するように、人格の基礎を培う教育課程を考えていくこととする。「生活者」として、「文化の担い手」として、「人間として」生きる側面を獲得させていくためのそれぞれの学びの経験が必要であり、この豊かに生きる3つの方向から教育課程を編成していくことが大切である。

このことが本校の特色ある教育課程であり、めざすべき教育課程全体の目標像を表しているのである。

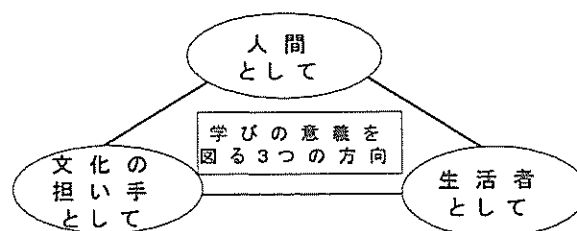


図 学びを意義化する

2 「生活・文化・人間の学び」とは

「生活の学び」、「文化の学び」、「人間の学び」という3種類の単元や題材のつくり方である。

- 「生活の学び」は、子どもが自分の生活を変えていく方向で、学びを展開するというものである。子ども自身が自分の生活の現状について考えたり、工夫したりするように単元をつくる。
- 「文化の学び」は、子ども自身が文化を受け継ぎ、子どもなりにつくり出すという方向で、学びを展開させるものである。子どもが自分にとって新しい文化をつくりだす、文化に参加する学びとして単元をつくる。
- 「人間の学び」とは、他者の生き方を見つめたり、自分自身の生き方を見直したりして、生き方を向上させる方向で学びを展開することである。

V-2「生活・文化・人間の学び」

1 「生活の学び」とは

▼ 学習対象は、子どもの本物の「生活」

生活の学びでかかわる対象は、「生活」自体である。そして、大切なことは、子ども自身が生活をよりよく変えることである。生活に密着した問題を解決し、価値ある生活をつくり出す経験が必要である。

▼ 「生活の学び」の過程＝生活を変える(生活更新)

「生活の学び」の過程は、子ども自身が学級、学校、地域社会等での生活をよりよく変えていく過程である。

① 生活にかかわる問題の発見と目標設定

子どもが自分の生活を見つめ直し問題を明らかにしたり、望ましい生活と出合ったりすることを通して、理想の生活をつくり出すことを目標として設定する。

・ 問題解決型の活動構成

生活の諸問題を解決する過程として構成する学び

・ 課題達成型の活動構成

生活更新の課題を達成する過程として構成する学び

② 原因の分析

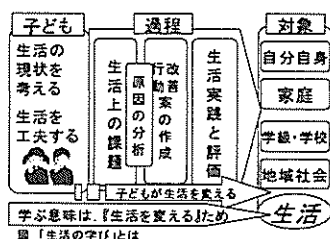
問題を引き起こしている原因を分析したり、よりよい生活となるための諸要因を取り出したりする。

③ 行動案の立案

よりよい生活を実現するための行動を模索し、自分自身や集団の行動案を決定していくことになる。

④ 生活実践と評価

具体的な生活の在り方を求め、実践し評価して行動をつくり変えるという往復を大切にします。



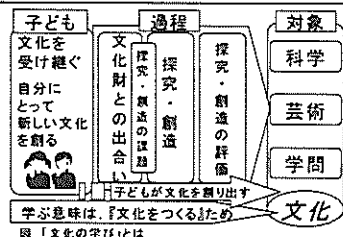
2 「文化の学び」とは

▼ 学習対象は、すぐれた「文化財」

文化財・文化遺産は、人間が英知と経験をもとにつくったものである。それは、人類の真理探究の成果とされる諸科学、学問、芸術の基本である。文化の継承を知識・技能のみでとらえず、文化を「わかり」、「つかい」、自ら「創り出す」経験が必要である。

▼ 「文化の学び」の過程＝文化をつくる(文化創造)

「文化」の学びの過程は、子ども自身が文化を受け継ぎ、子どもなりにつくり出す過程



である。

① 文化財との出会い

すぐれた文化財と出会い、そのよさを自分でも実現したいという思いの疑問、気がかりをもつ。

② 探究・創造の課題設定

「文化の学び」の課題設定と活動構成には、次の2つが考えられる。

・ 探究型

疑問や気がかりを探究する過程として構成する学び

・ 創造型

創造的な課題を実現する過程として構成する学び

③ 探究・創造

課題について調べたり考えたり、自分が文化を創造したりしていくなかで、知識・技能を獲得していく過程。

④ 探究・創造の評価

最終的には、自分にとって新しい文化をつくり出す。

3 「人間の学び」とは

▼ 学習対象は、人間そのもの

「人間」の学びで対象とするのは、具体的な人間、他者の生き方と自分自身である。人生の意味を問い続け、生き方を見つめる人、生きていこうとする自分自身を対象とし、具体的な人間を通して学ぶことが必要である。

▼ 「人間の学び」の過程＝よりよい自分に高める(自己向上)

「人間の学び」の過程は、他者の生き方を見つめたり、自分の生き方を見直したりして、よりよい生き方に高める学びである。

① 自分・他者との出会い

自分の生き方を見直したり、他者の生き方と出会ったりすることから学びが始まる。

② 自分・他者への問い・願い

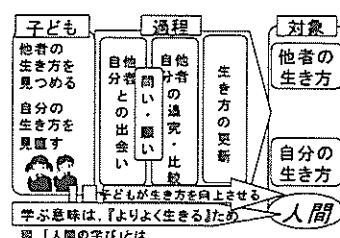
自分の生き方に対する問いや、他者がなぜ、そのようなことをできたのかといった問いをもつ段階である。

③ 自分・他者の追究・比較

自分の考え方を問い直し、他者の生き方を観察・分析し、その考え方を理解・共感しながら、多面的に追究する。また、他者と自分の生き方とを比較して、よさを取り入れ、生き方を明らかにする。

④ 生き方の更新

自分の生き方を見直し、よりよい生き方への心構えや考え方を応えとして見付けていく。そして、自分自身への見方が高まり、自分の人間としての成長へとつながる。



V-3 自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する

1 自己開発の原理とは

子ども一人一人が自らの決着・納得の世界をつくりだすために自らの学びを自分自身との対話を旺盛にしながら構成していくことである。

自己開発の学習条件として、次の3つを考えている。

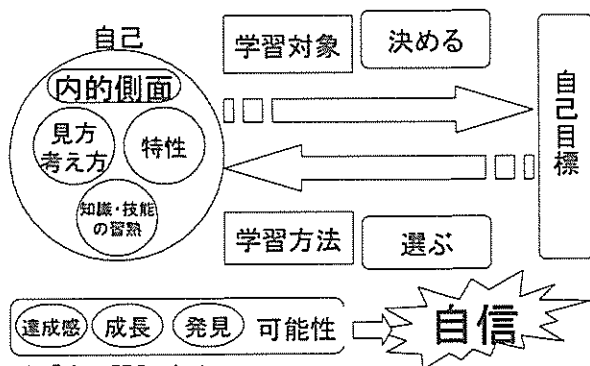
- ① 学習の目的や手段に対する他者からのコントロールに対する独立性
- ② 自分が主導権をもち、学習目標から学習の見通し、実施、学習成果の評価までへの学習過程全体への自己主導性
- ③ 学習の意味や学習を通して実現する価値にかかわる理解や自覚の中心にある自律性

具体的には、学習目標の設定や、その達成のための学習の見通し、すなわち、学習していく対象や方法、順序を考える、等の一連の学びのいずれかの場面を、子どもに任せ、子どもが自分で計画を立てたり、選んだりすることができるようにする。

このことで、自分の見方・考え方や特性等の実態を省察しなければならない状態を引き起こすことができ、その学びの過程や結果から、自分でできたという実感をもって、自分の変容や成長を自覚したり、今まで気付かなかった新しい自分を発見したりして、自分の可能性を理解し、強い自信へと高めていくことができる。

このような学習のシステムは、ピーター・ドラッカー氏も、その著書のなかで、「これからの知識社会を生き抜くためには、強い自己規律、継続的イノベーション、継続的学習、質的生産性への理解であり、教科内容そのものよりも学習継続の能力や意欲の方が大切である」とし、提唱している。

「生活・文化・人間の学び」に共通の学習原理として



図「自己開発」とは

2 自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合するとは

外的側面と内的側面の両面を大切にしてきた「3つの学び」に、「自己開発」という内的側面からの学習方法を取り入れることによって、子どもがさらに自分の内面を探ったり、見つめ直したりできるように働きかけ、自分の外に対する育ちと内に対する育ちを両立させることである。

自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する具体的な単元・題材づくりの水準レベルの着眼点として次の4つの点を考えている。

- ① 見通しをもとに、自分で学習活動をつくる。
- ② 自分で追究対象や方法を選択する。
- ③ 自分の特性を自覚し、学習を工夫する。
- ④ 他と自分を比較し、自我関与を旺盛にする。

1つ目は、「問いや願い、見通しをもとに自分で学習活動をつくる」という着眼点である。

具体的には、子ども自身が「明らかにしたい」という問いや「こうしたい」という願いを、自分のものとしてもち、自分の追究計画を立てることを大切にする。

2つ目は、「子どもが追究する対象や方法を選択させる」という着眼点である。

これは、単元全体としての学習の見通しが、子ども自身だけでは、できにくい教科等や内容に有効な方法である。学習内容の補充・発展の方向等で、教師が意図的・計画的に選択場面を準備し、子どもに意味をもって選択させる方法である。

3つ目は、「子どもが自分の特性を自覚し、学習を工夫する」という着眼点である。

子どもは、追究するときの方法を考える力や速さ、既存の諸能力等、それぞれの特性をもっている。これらを自分で生かし、高めることができるように、自分の特性を自覚する活動を取り入れる方法である。このときに教師は、学習の場等を工夫できるように意図的・計画的に活動の準備・設定を行う。

4つ目は、「学習対象や他者への自我関与を旺盛にさせる」という着眼点である。

これは、学習対象や他者のような豊かな生き方にかかわるモデルと自分とを比較させる活動を取り入れることで、他と自分との違いを見出し、自分自身を深く振り返り、自分自身を明らかにする方法である。

以上のように、各教科等で単元・題材をつくるときに4つの着眼点を具体化し、方法論として取り入れ、支援を考えることで、自分への自信を深めると考える。

Ⅵ 自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉の展開

－教育課程編成における基本的な考え方－

1 教育課程編成で大切にすること

本校の教育課程は「生活の学び」「文化の学び」「人間の学び」の3つの学びを位置付けて編成される。このことを実現するために、次の3つの原理を大切にすること。

本校の教育課程編成の原理①

3つの学びに共通する「自分自身が学びの主人公であること」

「学び」については前述したように、生きることと学ぶことをつないでいくこと、真の学びとして成立させるためには、子どもが与えられる、強制される存在であってはならないということである。子ども自らが強い求めをもち、自分の力で学んでいくことが、生きることにつながるのであって、学び続ける存在として生きていくことにつながると考える。

本校の教育課程編成の原理②

人間が生きる側面から考えた、3つの学びそれぞれを大切にすること

3つの学びは、文化の継承者・創造者、生活者、人間自身というように、子どもの学びにおける立場が異なるとともに、めざすべき知の内容が違っている。そうすると、当然子どもたちの学びの過程もその学びとして特徴のあるものとなるはずである。文化を継承し創造していくためには、その文化の崇高さや巧みさに感動したりその仕組みを明らかにしていこうとしたりする知的な追究を中心とする。生活者として学ぶためには、現実生活にできるだけ近い形で学びを進め、自分の生活をよりよいものにするための工夫が施され、生活の質によっては他者と協同する等の姿も考えられる。よりよい人間となるためには、具体的な人間や自分自身を対象として、その人間の思いや願いにふれていくような学びが展開される。このように、ねらう学びによって学びの過程もゴールも異なってくると考えられるため、現行の教育課程におけるそれぞれの教科等では、3つの学びのどこ、あるいはどこどこを大切にしてい進めるか考えることが必要である。

本校の教育課程編成の原理③

3つの学びの関係を明らかにすること

3つの学びは、それぞれ違った側面をもっている。しかし、それらが互いに何のかかわりもなく展開されたのでは、学んだことが生活、文化、人間という3つの殻に閉じこもってしまっていて、生活、文化、人間を学ぶ意味を感じたり、3つの人間像へと調和的にはぐくんではいることは難しい。そこで、3つの学びの関係を考える必要がある。

○ 教育課程全体としての調和

現行の教育課程全体を見渡したときに、「生活の学び」、「文化の学び」、「人間の学び」の3つがそれぞれ重点

にされる教科等群で構成され、6年間の教育課程という縦軸の時間の流れと学年での教科群という横の広がりとして、3つの学びが保障されることが大切である。

○ 各教科等内で、縦・横の流れを考えること

各教科等で、学びを重点化したとき、教科等の領域や内容によっては、異なる学びを用いた方が有効である場合が考えられる(各教科等内での横の流れ)。各教科等で重点とする学びが、全領域・内容にわたって言えるのか、領域・内容によって異なるのかを明らかにすることである。また、各教科等内で考えたとき、学年によって重点を置く学びは変わらないのかという視点である。学年の系統性から見た学びの重点化の妥当性を検討する。

○ 各教科等での関連

各教科等から、3つの学びを見たときに、それぞれ大切にしたい学びの重点は置くものの、重点以外の学びの視点から各教科等の内容や単元づくりを見直して、意図的に関連を図ることである。もちろん、その教科等において、3つの学びすべてを網羅することはできないし、3つの学びにかかわる内容をすべて1つの教科等で位置付けることは不可能である。しかし、領域や内容、学年に応じて、重点としていない他の学びとの関連を考えることは、それぞれの学びの意味を深めるうえで大切であると考えられる。

2 本校の教育課程編成の手順

「生活・文化・人間」の3つの学びを位置付けた教育課程を編成するために次のような手順を設定する。このような考え方の全体構想及び、その結果、編成されるのが、本校の〈ふくおかプラン〉である。

【〈ふくおかプラン〉編成の手順】

ステップ1

○各教科等で大切にしたい「知」(本校の基礎基本)を設定する。

ステップ2

○各教科等で大切にしたい「知」の獲得に最適な「学び」に重点化する。
○他の学びとの関連も考えて、各教科等の内容の編成、系統化を図る。

ステップ3

○自己開発と重点化した学びを統合して単元をつくる。

ステップ4

○重点化した学びから評価規準を作成し、個に応じた支援について想定する。

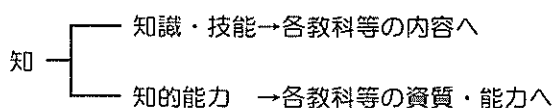
ステップ1 各教科等で大切に「知」を設定する

— 本校の基礎基本をつくる —

1 各教科等で大切に「知」とは

現在は、学習指導要領が大綱化・弾力化されて内容として曖昧になったように見られる各教科等も存在する。これは逆に考えると、各学校で基礎基本を設定することが求められ、それが許容されたということである。本校では、各教科等の本質から、とりわけ大切にしなければならない内容や能力を「知」として設定し、本校の基礎基本を割り出そうとするものである。

この「知」は、知識技能と知的能力に大別される。知識技能は学びの結果として獲得される学んだ知である。各教科等によって、その知識・技能は異なってくるものである。また、知的能力としての「知」を設定する。これは学ぶ過程で働く力であり、学んだことを生かそうとする力である。この2つの知を各教科等においてそれぞれ「資質能力」と「内容」として明確にする。



しかし、ここで考えておかなければならないことは、学習指導要領をもとに考えると、各教科等によって内容のとらえ方に違いがあるということである。内容の系列には、通常「螺旋型」と「階段型」と言われる系列が存在する。「螺旋型」とは、国語科や音楽科、体育科、図画工作科等に見られるように、能力として内容を割り出す場合に見受けられる型であり、学年や単元によって同じ内容が重点を変えながら繰り返し出てくるような場合である。一方の「階段型」とは、算数科に代表されるように、1つの内容の上位の段階として次の内容が設定されるという型である。これは内容が単元によって繰り返し出てくることはない。また、別の型としては、「タイル型」と言えるような内容の系列がある。これは理科や社会科のように、個別の内容が設定されるがそれらの内容どうしが順序性や系統性といった関連性はあまり高くないような場合である。生活科は、螺旋型とタイル型の両方の要素をもつような内容の系列をもっている。この内容系列に合わせて、知の設定を配慮する必要がある。

表 内容系列について

系列の型	各教科
螺旋型	国語科、音楽科、図画工作科 体育科、家庭科、道徳、特活
タイル型	社会科、理科
階段型	算数科

▼ 螺旋型の教科等の「知」の設定

螺旋型の教科等の場合、同じ観点の内容が何度も繰り返し出てくることになる。解説書に表記されている内容をもとに「知」を設定しようとするとき、能力的な姿として内容を設定しているために、知識・技能が明確にされない特質がある。そこで、具体的な知識・技能の内容として何を獲得すべきかという点を配慮して設定する必要がある。

▼ 階段型の教科等の「知」の設定

階段型の教科等では、知識・技能の面から系列が明確になされているため、その内容、あるいは具体的な単元での知識・技能については設定しやすい。しかし、逆に能力についてはその系統が大まかに設定されているために、知的能力の観点から何をどのような系統で設定するかを一層明確にすることが大切になってくる。

▼ タイル型の教科等の「知」の設定

タイル型の教科等は、知識・技能に関しては内容の系列を強く意識することが必要ではないため、知識・技能を具体化することで事足りる。しかし、階段型の教科等と同様に能力については系列が大まかふれられている程度であり、各教科等の本質として必要な資質能力を割り出すとともに、順序付けて設定することが大切である。

2 学びとの関連を考える

各教科等で大切に「知」を知識・技能と知的能力の両面から設定することは、生きることとつないで「活かすべき知識・技能」と、「活かせるようにする知的能力」を明らかにすることである。このことは、豊かに生きる子どもをはぐくむ本校の基礎基本として設定できるということである。「知」を設定したうえで、最適な学びに重点化することを考える。これは、獲得したことを活用させる、すなわち学んだことを生きることにつないでいくことを可能にすることである。

設定した「知」がより確かに獲得できる学びは、「生活の学び」「文化の学び」「人間の学び」のどれがよいのか、また、活用し生きることとつないでいくためには、どの学びがよいのか考えていくことが必要なのである。

つまり、学びを重点化するということは、獲得すべき知を確かに身に付けさせるとともに、よりよく活用できるように学びを保障することなのである。

「知」の設定と学びの重点化、この2つが本校の特色ある教育課程編成の根幹をなすものである。

ステップ2 各教科等で重点化する学びを考える

1 各教科・領域では

豊かに生きる3つの側面から考えて、教科・領域、総合的な学習の時間をどのような役割・立場で展開するかということは、各教科等の本質から設定した「知」を、「生活」、「文化」、「人間」のどの学びで展開すれば獲得・活用できるかを吟味しなければならない。そのときに各教科等を背景にしている親学問の体系や設立の趣旨、新学習指導要領の改訂の基準や歴史的変遷等からも考え、重点化することが大切である。もちろん、それは各教科等の内容領域や学年の発達によっても異なるのである。つまり、「この教科等は、この学び」と単純に割り切れるものではないのである。

たとえば、国語科や算数科は、文化を理解し、創造する能力の育成を重視した教科であり、数学や言語といった世界のすばらしさを感じ取ることが大切である。

理科では、自然のきまりという法則性を見付けていくという教科特性から「文化」を中心に学びを考える。しかし、内容領域によっては、身の回りの生活環境を科学的な視点でつくり変える学びを考えることができる。

社会科や家庭科は、もともと社会生活、家庭生活をつくることを目的としてつくられた総合的な教科特性をもっている。しかし、「生活の学び」だけでは事足りない。家庭生活そのものを科学的に見たり、社会生活が営まれている特色や意味を考え、社会科学的な見方を育てたりする意味からも「文化」も重視する必要がある。

音楽科は、音楽美を感じ取り、自分の思いを表現できることをねらう意味から、「文化」を中心に展開することが考えられる。

図画工作科は、芸術そのものの楽しみ方や自分でつくり出す能力の育成を大切にしている。その意味では、「文化」の学びを中心に位置付けられる。しかし、環境とのかかわりという視点に立つと、生活更新をめざす学びとして、位置付けることも考えられる。

体育科は、内容領域によって重点化する学びが異なる。運動としての内容は、子どもに獲得させるべき動きや運動自体を構想する力が求められ「文化の学び」を中心に展開するが、保健領域では科学的な認識とともに生活を変えていくことが期待される。

道徳の時間は、「人間の学び」を中心に重点化する。指導内容とする道徳的価値そのものは人間として身に付けるべき内容であるが、同時に道徳的な判断を求められる場面において、人間がもっている弱さや気高さ等にふれて、人間の特質を多面的に見つめさせることができるものである。

特別活動では、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事等様々な学びの場が展開される。それらは、直

接的に学級や学校の生活向上をめざす特質から生活の学びで展開することができる。個性の伸長を図る観点からは人間の学びとしても展開できる。さらには、儀式的行事や学芸的行事等、平素の学習での文化性を拡充したり、儀式という文化のなかに身を置いたりすることになる。

生活科は、生活に必要な知を獲得していく学びである。身近に自然や社会、そして自分自身にかかわっていくことから、生活の学びを重点としながら、自分自身についてかかわる内容においては人間の学びを重点化できる。

2 総合的な学習の時間では

本校の総合的な学習の時間の目標は次の通りである。

生活や文化、人間に出会うことで見いだした自分の課題を追究するなかで、各教科等で獲得した認識や技能を総合化したり生活化したりして、自分の見識を高めるとともに自分への自信や将来への夢や希望をもとにして、自己の生き方を創ることができるようにする。

総合的な学習の時間は、3つの学びのいずれでも展開できる特質をもっている。「文化の学び」から考えると、子どもたちは、各教科の学習を通して、文化財が意図的、系統的、計画的に教材化された学習対象や学習活動によって文化を継承・創造することを学んできている。このことから、子どもたちは文学や芸術、科学技術、社会基盤、歴史事象、運動文化等にふれ、興味関心を高めるとともに、文化を継承・創造する知を獲得してきている。また、生活科や特別活動等、子どもたちの身近な生活事象を取り上げて学習してきたことで、自分たちの手で生活を変えていくことができることを実感するとともに、生活実態を分析して生活の目標を設定したり、その目標に応じた生活行動を模索し実践したりする力も身に付けている。さらに、道徳の時間や各教科等の学習において、様々な人々の生き方や生命について考えたり、自分自身の生き方について考えたりすることができるようになってきており、人間知も獲得してきていると考える。そこで、これら3つの学びの観点から、「生活総合」「文化総合」「人間総合」という3つの総合的な学習の時間を立ち上げる。もちろん、教科等同様、文化総合が文化の学びだけを総合するというわけではない。生活や人間についても同様である。総合をあえて3つに分けることによって、今日言われている学習対象の選定や学習過程の在り方、最終的には行き着く目標や内容を明確に打ち出そうとするものである。分けることによって、各教科等で獲得された知識や技能を総合化させさせることを意図的にし、学習方法の違いも明らかにして、教師の指導性をより発揮することができるようになると思われる。

ステップ3 自己開発と3つの学びを統合し単元を構想する

単元づくりにおいて、3つの学びで共通に大切にすることと、それぞれの学びで大切にすることの2つがある。

1 自己開発との統合での単元づくり

自己開発と3つの学びを統合する具体的な単元・題材づくりの着眼点として次の4つの点を大切にすること。

- ① 見通しをもとに、自分で学習活動をつくる。
- ② 自分で追究対象や方法を選択する。
- ③ 自分の特性を自覚し、学習を工夫する。
- ④ 他と自分を比較し、自我関与を旺盛にする。

1つ目は、「問いや願い、見通しをもとに自分で学習活動をつくる」という着眼点である。子ども自身が「明らかにしたい」という問いや「こうしたい」という願いをもち、自分の追究計画を立てることを大切にする。

2つ目は、「子どもが追究する対象や方法を選択させる」という着眼点である。単元全体の学習の見通しが、子どもだけではできにくい教科等や内容に有効である。子どもの学習状況に応じて、教師が意図的・計画的に選択場面を準備し、子どもに意味をもって選択させる。

3つ目は、「子どもが自分の特性を自覚し、学習を工夫する」という着眼点である。子どもの追究には個々の特性がある。それを自分で生かし、高めることができるよう、自分の特性を自覚する活動を取り入れる。子どもが学習を工夫できるように活動の準備・設定を行う。

4つ目は、「学習対象や他者への自我関与を旺盛にさせる」という着眼点である。学習対象や他者のような生き方にかかわるモデルと自分とを比較させる活動を取り入れることで、他と自分との違いを見出し、自分自身を深く振り返り、自分自身を明らかにする方法である。

4つの着眼点を具体化し、方法論として取り入れ、支援を考えることで、自分への自信を深めると考える。

2 3つの学びからの単元づくり

▼ 「生活の学び」で単元をつくる

「生活の学び」は、子ども自身が自分の生活をつくりかえることを大切にする。

○ 子どもにとって更新が可能な生活か

教材として取り上げる生活の質を考えることである。対象である生活の多種多様な側面をどれでも取り上げてよいというものではない。子ども自身の足下の生活、子ども自身の知的能力、知識技能を基盤として変えられる生活事象であることを問うべきである。

○ 自分が変えたい生活を意識できるか

子どもが自分自身の生活を振り返る場面を位置付けることが必要である。子どもが生活を振り返ったときに何も更新の必要を感じなければ、一人称としての追究や生活更新はあり得ない。ぜひ、変えたい、こんな生活にしたいという目標をもてるようにすることが大切である。

○ 生活を変えることが価値があるか

生活を変えていくこと自体に価値があるのかということである。子どもが試行錯誤し、他者と協同しながら生活を変えていくこと自体にはそれだけで価値はある。しかし、つくり出した生活の質が問われなければならない。前よりもよくなるのか。現代社会が抱える子どもの身の回りの生活を変えることにつながるのかを吟味する。

▼ 「文化の学び」で単元をつくる

「文化の学び」は、子ども自身が文化を理解し、味わい、新しくつくり出すことを大切にする。

○ 取り上げる「文化」の質を問う

文化は、子どもたちに文化遺産を継承、創造するための知識・技能や知的能力を与えてくれる。そこで、取り上げる文化に内在する概念や法則、感受性、それらを追究する過程で必要とされる能力等が、現在及び、将来にわたり価値があるかということを吟味する必要がある。

○ 文化の再創造を図る過程を

諸概念や法則等について、単に教授されるのでは意味がない。子ども自身が探究したり、発見したりするなかで、それらの知識・技能とともに知的能力の獲得がされていく。自分が解き明かしたい、味わいたい文化を明らかにする営みとして単元を構成しなければならない。

○ 文化をつくり出すところまでが単元である

文化の担い手として生きることとを保障するためには、自分が自分の文化をつくることという経験が何よりも大切である。このことが、文化創造の主体者意識の自覚や、文化へ親しみにつながるのである。単元当初から自分の文化を創ることを前提としたり、追究した文化の概念や法則等を生かして自分のオリジナルの文化をつくったりするところまでを単元に位置付ける必要がある。

▼ 「人間の学び」で単元をつくる

「人間の学び」は、人間の生き方を通して自分自身の生き方を見つめていくことである。

○ 取り上げる人間はどんな人間なのか

子どもたちがあこがれをもったり自分と比べて親近感を覚えたりすることが必要である。前者は取り入れたい生き方としてモデル化することが可能になり、後者は自分への自信や人間理解につながるからである。

○ 自分を客観的に見つめる工夫を

自分自身を見つめることは難しい。そこで自分を客観視できる具体的な活動や教材等を工夫する必要がある。

ステップ4 豊かに生きる子どもの評価と支援を考える

1 「豊かに生きる子ども」の評価

「豊かに生きる子ども」の評価は、単元末の総括的評価にまかせる部分と形成的に行う評価に分けられる。

- 学ぶ意義・自信→単元の総括的な評価として行う。
- 学ぶ力（能力・学力）→その都度、形成的評価を行い、学びに応じて個に応じる支援を想定し行う。

学ぶ力のうち、実体的学力については、知識・技能として見える学力なので、評価は容易にできる。むしろ特に大切にするのは、機能的学力である。評価規準を具体的に作る必要がある。→参考：平成 14・15 年度紀要

2 3つの学びへの評価

学びを重点化したことで、基礎基本となる「知」を明確にできた。このことは、評価規準を作成するときに、その「知」から評価すればよいということになる。このことで、規準作成もしやすくなり、そのための評価方法の開発へとつながっていくのである。

－重点化した学びの評価規準－

▼ 目標の達成状況をとらえる「視点」として評価規準を作成する

評価規準は、子どもの学習状況から、目標の達成度を確かに見取っていくための視点であり、目標を細分化したものではない。〈ふくおかプラン〉では、「生活・文化・人間の学び」から重点化した学びをもとに、知識・技能と知的能力の面で具体化した評価規準を作成する。

▼ 具体的な評価規準の作成

以上のような基本的な考え方から、本校の評価規準の作成のポイントは、次の3点である。

＜評価規準作成のポイント＞

- 評価規準は、「生活」、「文化」、「人間」の3つの学びから重点化した知識・技能、知的能力を観点にして設定する。
- 評価規準は、目標以上に結果像ではなく、過程像（学習状況の姿）を評価するよりどころとして作成する。
- 知識・技能等の見えやすい力よりも、思考力や判断力等の知的能力につながる見えにくい力を重点化・具体化して設定する。
- 評価規準は、概ね達成のレベル（B 基準）をもとに設定する。

3 評価と指導の一体化

重点化した学びの評価は、個に応じる支援の想定が容易になる。つまり、評価規準の作成→評価→補充・発展→評価といった一連の指導と評価が具体化し、一体的にできるのである。

▼ 3つの学びと個に応じる支援

「生活」、「文化」、「人間」というそれぞれの学びの違いによって、めざす知識・技能や知的能力は異なる。そこで、必然的に個に応じる支援の想定の仕方も変わる。以下3つの学びの評価によって想定する個に応じる支援について、その基本的な考え方を述べる。

○ 「生活の学び」の評価と個に応じる支援

「生活の学び」は、大きく2つの方向がある。1つは、学級や学校等の共通課題として設定された生活更新へ向かう場合と個人の生活更新に向かう場合である。

- 共通課題→個の役割に応じた支援
- 個人課題→個の生活実態に応じた支援

「生活の学び」は、自分自身の生活をつくり出すことを究極のねらいとしている。この生活の範囲によっては、学級集団や家族といった他者の協力を求めながら、子どもの生活をつくる支援をする必要がある。また、意図的に他教科等での学習で得たことを活用する場面を設定すること等も考えられる。

○ 「文化の学び」の評価と個に応じる支援

「文化の学び」は、子どもが文化をつくり出す経験を目的とする。そこで、自分の文化を作品等で表現し、その作品をつくる過程での考えや作品の自分の理想とする文化とのかかわりから自己評価したり、他者からの評価を受けたりして修正することができるよう支援する。また、リサーチして焦点化した知識・技能の面について個別的な支援を構想することも考えられる。

○ 「人間の学び」の評価と個に応じる支援

「人間の学び」は、他者の生き方についての見取りと自分自身の内省を評価する。他者の生き方を見取りが十分に図られない場合の支援と自分自身の内省を図ることができる支援を個に応じて展開することが大切である。

「人間の学び」は、子どもが人間そのものを理解したり、自分自身を見つめたりすることを目的とする。そこで、直接的な他者とのかかわりでは、他者対話し、気がかりを解消することができるようにする。また、自分自身を見つめることでは、具体的な活動や表現物等を利用したりして、自分の行為や体験の足跡を振り返ることができるようにする。また、他者の目を活用することも考えられる。学級内の友達や家庭での家族の話等、自分自身を明らかにすることができるような材料を教師で用意し、自分を客観的に見つめることができるようにする。

VII 障害児教育研究・帰国子女教育研究について

1 障害児教育研究部の取り組み

障害児教育研究部においては、「豊かな生活を営む子どもをはぐくむ教育課程の創造」～生活を創り出す意味ある学びを位置づけた特別支援プランの展開～を研究主題に研究を進めてきた。本年度は、特に一人一人の子どもの将来の自立的な生活を見通し、将来の豊かな生活を次の3つの様相からとらえて研究を進めている

- ① 主体的な生活…自ら考え、判断する子ども
- ② 社会的な生活…意思疎通や役割、マナーの獲得
- ③ 文化的な生活…事象の意味を理解し、活用する

具体的には、

- ① 各教科及び領域・教科を合わせた指導における「豊かな生活を営む子ども」を育てるための指導内容の重点化と関連化
(個別の指導計画のバージョンアップ)
- ② 領域・教科を合わせた指導と各教科別の指導における指導原理の確立(教材開発・学習過程)
- ③ 障害の状況や個の特性に応じた指導内容や指導形態、学習形態、学習空間、教材・教具の工夫

を取り上げて研究を進めている。また、障害児学級と通常学級との交流学習も推進しているところである。

障	低(ふじ組)	中(さくら組)	高(梅組)
教科別	国語・算数		
	音楽・図画工作・体育		
領域・教科合併	生活単元学習		
	合同生活単元学習(異年齢・縦割り)		
	特別活動 (クラブ・委員会活動のみ)		
	日常生活指導		

図 障害児教育<ふくおかプラン>の枠組み

2 帰国子女教育研究部の取り組み

帰国子女教育研究部においては、主題「自信と誇りを育む帰国子女教育」のもと、各教科での実体的な学力と機能的な学力を確実に身に付け、海外での生活経験をもつという特性を肯定的にとらえ、伸ばしていく方向で教育課程の編成の研究を進めている。

教育課程編成については、次の2側面から、教育内容・方法の設定・改善を進めている。

- ① 学習適応を主眼とする
 - ・国語科、算数科、社会科のカリキュラム
- ② 生活適応や特性伸長を主眼に置く
 - ・国際交流タイム、学級活動のカリキュラム

特に本年度は、学習適応を主眼とする教科を中心に研究を進めてきている。帰国子女は、入級時期も海外での履修内容も様々である。そのため、当該学年での学習にスムーズに編入することは難しい。そこで、特に国語科、算数科、社会科において個別のカリキュラムを作成している。その個別カリキュラム作成の手続きとその留意点について本年度、明らかにした。主な手順は次のようなものである。

【個別カリキュラムの作成手順】

- ① 各教科等の指導内容表を作成する。
- ② 指導内容表から、一人一人の未習内容と既習内容を明らかにする。
- ③ その教科等の柱となる領域の内容について系統性に配慮して配列する。
- ④ 柱となる領域の他の領域との関連を考慮して、関連付けられる内容について検討する。
- ⑤ 関連付けられる内容については柱の領域の内容と合わせて指導する。(内容のパッケージ化)
- ⑥ 卒業までの残日数から配当時間を決める。
- ⑦ 学習内容が、通常学級に追いついた場合は、通常学級との交流を図る。

(研究主任 岩 城 一 磨・教頭 高 野 誠 一)

参 考 文 献

- | | | |
|--|---------|-------|
| (1) 中野和光・飯田慎司・大坪靖直・堺 正之/福岡教育大学附属福岡小学校「評価で変える カリキュラムづくりー未来を拓く教科・総合の学びー」 | 明治図書 | 2003年 |
| (2) 佐伯胖 「わかり方」の探究 | 小学館 | 2004年 |
| (3) ジェリー,H.ギル著 「学びへの学習」～新しい教育哲学の試み～ | 青木書店 | 2003年 |
| (4) 安彦忠彦 著 「カリキュラム開発で進める学校改革」 | 明治図書 | 2003年 |
| (5) 今谷順重 総合的な学習で人生設計を育てる | ミネルヴァ | 2000年 |
| (6) 梶田敬一 〈自己を育てる〉真の主体性の確立 | 金子書房 | 1996年 |
| (7) 倉戸ツギオ 編 発達と学習の心理学 | ナカニシヤ出版 | 1994年 |
| (8) 北尾倫彦、速水敏彦 わかる授業の心理学 | 有斐閣選書 | 1986年 |
| (9) オリビエ・ルプール著 「学ぶとは何かー学校教育の哲学」 | 勁草書房 | 1984年 |

第1学年の〈ふくおかプラン〉 (平成16年度 構想プラン) ～～ 生活の学び — 文化の学び — 人間の学び

【文化の学び】

算数科、音楽科、国語科、体育科については、主に「文化の学び」を重点として位置付ける。第1学年の子どもたちにとって「環境による教育」を教育原理とする幼稚園教育から徐々に分化させ、各教科等の資質能力と内容、学び方の面においての基盤となるようにしていく。幼稚園との連絡を考え、教科学習に「遊び」等を取り入れながら、文化に出合えるような単元づくりを工夫していく。

【生活の学び】

生活科では、生活の学びに重点化して進めていく。第1学年では、学校生活での自立の基礎を養っていくことを中心に考え、主たる学習対象を学校生活として位置付ける。学校での生活の仕方や学級の友達との協力関係、学校生活を中心とした対象とのかかわりを位置付けていく。ただし自分自身への内容については人間の学びとして展開する。

【人間の学び】

道徳の時間を人間の学びに重点化して展開する。自己中心性が強く、他律期である子どもたちにとって、望ましいモデルとなる人物と出会い、そのよさを取り入れていくような授業づくりを行う。このとき、人物を共感的に取り扱い自分にも同じような気持ちがあること、道徳的価値の実現が図られたときの心地よさの二つを大切にしていく。

【文化・生活の学び】

図画工作科は、文化や生活の学びに重点化する。子どもは身近な素材をいかしながらも、美しさを感じ取れるように配慮する。

【生活・文化・人間の学び】

学級活動は、全ての学びから題材を開発していく。第1学年の段階は、題材を身近なものに求め、話し合い方が身に付くように配慮する。

教科等		時数	4 月		5 月		6 月		7 月			
文化の学び	算数	114	なかよしの はなしを つくろう (5)	10までの かずを かぞえよう (10)	いくつといく つでこうりゃ く、バックン ゲームをしょ う (6)	たしざ んえほ んをつ くろう (7)	ひきざんえほんを つくろう (10)					
	音楽	68	うたとともだちに なろう (8)		わくわくりずむで たのしくあそぼう (6)		どれみとともだちに なろう ※こんにちはけんばん はあもにかを含む(10)					
	図画 工作	68	すきなも のがつま ったポケ ット(2)	しげん なかよし (2)	ここは、ぼくの わたしのいきもの ランド (6)		キラキラゆらゆら かぜのおまつり (6)		くしゃくしゃがみ から生まれたもの は (6)			
	国語	272	えをみて はなそう (16)		おはな しきか せて(10)		うたに あわせ てよも う (10)		よんでみつけよ う「いろいろな くちばし」のひ みつ (14)		みんなに おしえよ う (12)	ほんよみ はっぴょう かい (14)
	体育	90	うんどうの てすと (4)		てつぼうで あそぼう (8)		なかよくあてよ う！かわそう！ ごろびよんボー ル (6)		ウォーターランドで あそぼう (11)			
生活の学び	生活科	102	ふぞくしょうを花いっぱいになろう (20)									
			みんなだいすき ふぞくしょうがっこう ～ふぞくしょうのわくわくたんけん コースをつくろう～ (10)					にしこうえんのむしと ふれあおう (12)				
人間の学び	学級活動	34	○学校のいきかえり (1) ○学校のきまり (1)		◎係を決めよう (1) ○給食のようい (1) ○よいあいさつ (1)		○虫歯きんを やっつけろ (1) ○雨の日の すごし方 (1) ◎教生先生さよなら集会Ⅰ (2)		◎学級の歌をつく ろう (2) ○水はこわいぞ (1) ○はじめての 夏休み (1)			
	道徳の時間	34	・みんなの学校 (1) ・時間のきまり (1) ・元気な声で「おはよう」 (1)		・わきでる力 (1) ・ともだちパワー をあつめよう (1) ・さいごまで がんばろう (1)		・学校ってすてき なところだね (1) ・きまりは だれのもの (1)		・思いやりの心 (1) ・自分の成長 (1)			

9 月		10 月		11 月	12月	1 月	2 月	3 月
20までのかずをかぞえよう (7)	3つのかずのけいさんをしよう (6)	かたちげえむをしよう (10)	たしざんをしよう (12)	ひきざんをしよう (13)	わかざりをつくろう (ながさ) (9)	かずづくりゲームをしよう (11) (100までのかず)	かずづくりゲームをしよう (8) (100までのたしざん・ひきざん)	
どんなようすかおもいうかべてえんそうしよう ※「うみ」 (10)		あそびうたをえらんであそぼう (8)	にっぱんのうた みんなのうたランド ※「おしょうがつ」 (6)	すてきなおとをみつけよう (6)	おんがくでおはなししよう (8)	みんなであわせて (6)		
ペーパーボットでおもちゃづくり (8)	べたべたどろどろへんしんねんど (8)	みんなあつまれ! どうぶつランド (6)	つづきえ どんどん (6)	すてきな かたちがあつまると (4)	たまごばっくが たくさんあつまると (8)	かみのつづがうたって おどって (6)		
げきをしよう 大きなかぶ (22)	よみくらべよう、じどう車くらべ (16)	おんどく はっぴょうかい (16)	あつめたふゆのことばで カルタをつくろう (18)	ふじだなぶんしゅうをつくろう (10)	おみせやさんごっこをしよう (20)	どうぶつの赤ちゃんのちがいをかんがえて よもう (20)	かみしばいを つくろう (読書活動) (20)	
おもちゃはっぴょうかいをしよう (16)			本はともだち (10)					
忍者リレーを楽しもう (4)	リズムにのってあそぼう (7)	とびっこランドであそぼう (7)	どれに変身する? あらつランド (7)	マットとびばこランドであそぼう (8)	おにをかわして たからをゲット (8)	なわとびあそび かけっこあそび (10)	ゲーム大かいをしよう (10) ※けりっこあそびをふくめて	
わくわく おもちやらんどであそぼう (9)	大すきかぞく (9)	にしこうえんのあきとあそぼう (6)	学校のお正月をつくろう (10)	花いっぱい そつぎょうをおいおいしよう (12)	みんな大すきにしこうえん (4)	せいちょうにつきをしようかいしよう (5)		
		みんなであつろう あらつフェスタ (5)						
○2学期のめあてを決めよう (1) ◎2学期の係をきめよう (1) ○はじめての運動会 (1)	○みんな友達 (1) ◎教生先生さよなら集会Ⅱ (1) ○正しいせい (1) ○きれいな片付け (1)	○本の借り方返し方 (1) ◎好きな本のしょうかいをしよう (2)	◎クリスマス集会をしよう (2) ○冬休みのくらし (1)	◎3学期の係を決めよう (1) ○ありがとう給食 (1)	○もし火事になったら (1) ◎ありがとう6年生 (2) ○もうすぐ2年生 (1)	◎さよなら1年生集会をしよう (1) ○春休みのくらし (1)		
・危険から身を守る (1) ・わがままな行い (1) ・黙って いかないで (1)	・いつも正直に (1) ・大すきかぞく (1) ・ありがとうの気持ち (1)	・美しい心 (1) ・ぼくの町 (1) ・命の温かさ (1)	・温かい心 (1) ・自分の成長 (2) ・大切に使う (1)	・何度もねばり強く (1) ・礼儀正しい生活 (1) ・お世話になっている人 (1)	・正直で素直な心 (1) ・正しい行い (1) ・きまりを守って使う (1)	・家族の人の願い (1) ・自分の成長 (1) ・星への願い (1)		

第2学年の〈ふくおかプラン〉 (平成17年度 構想プラン) ~~~~~ 生活の学び —— 文化の学び ==== 人間の学び

【文化の学び】

第1学年と同様、国語科、算数科、音楽科、体育科の5教科については、主に「文化の学び」を重点として位置付ける。しかし文化の学びとはいえ、抽象的な思考は十分ではないことや興味関心や実感などの情緒的な特性に左右されることから、ものづくりや遊び作りなどの活動をふんだんに取り入れていくことが大切である。

【生活の学び】

生活科では、第1学年において、人や物に対しての認識が発達していく。そのうえに立って環境への認識もできるようになってくる時期である。そこで自然や社会といった環境を一体的にとらえながら取り上げる対象を学校内の対象から徐々に地域へと空間を拡げていくようにする。ただし、自分に関する内容を扱う場合には、人間の学びで展開する。

【人間の学び】

道徳の時間を人間の学びに重点化して展開する。自己中心性から次第に他者の心情を推し量る能力が発達してくる時期である。他者の気持ちについて、他者の言動や表情などをもとに考えさせることで、改めて自分自身を振り返ることができるようになってくる。自分と他者との関係について深く考えさせるような主題を重点として設定し、思いやる心をはぐくむようにする。

【文化・生活の学び】

図画工作科では、芸術そのものの楽しみ方や自分で創り出す能力の育成を大事に文化の学びで展開する。しかし、自分の生活から出発し、よりよい環境に変えていく生活の学びで展開する単元も必要に応じて開発していく。

【生活・文化・人間の学び】

特別活動は、全ての学びから題材を開発していく。

教科等	時数	4 月	5 月	6 月	7 月
文化の学び	算数	とけいを見ながら生活しよう (7)	つかみ取りゲームをしよう (7)	たし算をしよう (8) ひき算をしよう (10)	へんしんかたちづくりゲームをしよう (5) ものさしを作ってみよう (12)
	音楽	歌と友だちになろう (8)	わくわくりズムやドレミであそぼう (12)	夏をかんじて歌おう (6)	
	図画工作	ローラーから生まれたカラフルせかい (8)	あつまれ! みんなのおばけカーニバル (8)	ぼくのわたしのすてきなぼうし (8)	
	国語	よんで楽しもう「ふきのとう」 (20)	仲間とふれあう生き物の話を読もう「スイミー」ほか《選択読書》 (20) とっておきニュース (20)	読書をつなごう～たんぼぼのちえを比べて～ (20)	作り方を教えます私のすてきなアクセサリ (20)
	体育	うんどうのテスト (4)	てつぼうチャンピオン (8)	たからじまをぼうけんしよう (8)	ウォーターランドであそぼう (10)
生活の学び	生活科	あらつ町をたんけんしよう (10)	おおきくそだて、みんなの野さい (継続15) つくろう! 附小リサイクルステーション (9) おもちゃランドを作ってみよう 1年生とあそぼう (10)		
	学級活動	○学級目標を決めよう (1) ◎係を決めよう (1) ○学習中のやくそく (1)	◎学級のシンボルマークをつくろう (2) ○さそいにのらない (1)	◎教生先生とお別れ会 (2) ◎友達のよさを見つけよう (1) ○雨の日の遊び方 (1)	◎七夕集会をしよう (2) ○もうすぐ夏休み (1)
人間の学び	道徳の時間	・自分できちんと (1) ・きまりをまもる (1) ・町のひみつをしょうかいしよう (1)	・楽しい家族 (1) ・気持ちのよいあいさつ (1) ・小鳥たち元気でね (1) ・進んできれいに (1)	・みんな一生懸命生きてるね (1) ・生きるよろこび (1) ・たった一つの命 (1) ・自分の成長 (1)	・やりぬく心 (1) ・やさしい心 (1) ・相手を思いやって (1) ・自分の成長 (1)

9 月	10 月	11 月	12月	1 月	2 月	3 月
たし算と ひき算を しよう (16)	かけ算をしようⅠ (23)	かけ算をしようⅡ (26)		かけ算をしようⅢ (14)	長いものさしを 作ってくらべよう (10)	大きい数 をかぞえ よう (10)
						形パズルを つくろう (7)
音を合わせて えんそうしよう (10)	あそび歌めぐりをしよ う (8)	にっぽんの歌 み んなの歌ランド (6)		すてきな音を 見つけよう (5)	音楽でおはなし しよう (8)	ようすを思いうかべて 歌おう (7)
にじ色のせかいへ ようこそ (8)	あきをあつめて たのしくあそぼう (8)	おしゃれな すてきな 紙テープ (8)	きらきら シャボンから 何が見えた (4)	ねん土 であそ ぼう (2)	すてきな ペンケース ～おりぞめ和紙～ (10)	ありがとうの 気持ちをこめて (6)
はっぴよ う名人に なろう (21)	海の生き物シリーズを読もう 「サンゴの海の生き物たち」 ㉒	めくんとかえるくん シリーズを読もう ㉒	ふじだな文集を 書こう (10)	ことば大会を しよう (25)	2年生の思い出 を書きまとめよ う (25)	お話を楽しもう 「スーホの白い馬 ほか」 (22) (選択読書)
お話大好きはっぴょうかいをひらこう (35)						
まねっこ パークで あそぼう (9)	ジャングル リレーを 楽しもう (9)	おしあい ひきあい あそび (5)	ころころドッカ ン！ターゲットゲ ーム (9)	マット・とび ばこランドで あそぼう (8)	なわとびあそび かけっこあそび (7)	チャレンジラ ンドであそぼ う (6)
ボールけりゲームを 楽しもう (7)						
おおきくそでて、みんなの秋野さい (継続13)				あらつ博物館をつくろう (13)		
あんしんがいっぱい！ ぼく・わたしのつうがくろ (13) あつまつフェスタをもちあげよう (5)				ぐんぐんのびる、 ぼく・わたし (6)		
ぼくの・わたしのちゃんこ まつり をつくろう (11)						
○2学期のめあて を立てよう (1) ◎楽しい係を 決めよう (1) ○チャイムの合図 (1)	◎学級オリンピック 集会をしよう (1) ◎2の○ランドに 1年生を招待 しよう (4) ◎教生先生との お別れ会 (1)	○言葉のひみつ (1) ○学習への心がまえ (1) ◎2の○読書 まつりを しよう (2)	◎仲良し集会を しよう (2)	◎新年の係を 決めよう (1) ○楽しくなる食事 (1)	○心の鬼を おいだそう (1) ◎さよなら6年生 (1)	○もうすぐ3年生 (1) ◎お別れ会を しよう (2)
・心を結ぶあいさつ (1) ・動植物にもやさ しい心で (1) ・友達への親切 (1)	・うそと正直 (1) ・健康を守る (1)	・感謝の気持ち (1) ・助け合う友達 (1) ・勇気をもって (1)	・清らかな心 (1) ・自分の成長 (1) ・学級の仕事 (1)	・上手に使う (1) ・ねばり強く がんばる (1) ・みんなのものを 大切に (1)	・生き物の気持ち を考えて (1) ・たのしい お父さん (1) ・美しさに 感動する心 (1)	・命のありがたさ (1) ・やさしく親切に (1) ・自分の成長 (1)

第3学年の〈ふくおかプラン〉 (平成16年度構想プラン) ~~~~~ 生活の学び —— 文化の学び —— 人間の学び

【文化の学び】

算数科、音楽科、図工科、国語科は文化の学びを重点として位置付ける。文化総合を立ち上げて、総合的な学習の時間の学び方を意図的に指導していくことを大切にする。

【生活の学び】

生活総合は生活の学びとして位置付け、イベントを子どもたちがつくることを通して、生活を楽しむことを学ぶことができるようにする。

【人間の学び】

道徳の時間を人間の学びに重点化して展開する。モデルとなる人物の生き方を取り上げる際に、特に人間の自然性としての弱さを見つめさせたり、葛藤に打ち克とうとする強さについて考えさせたりすることができるようにする。そのことで、規範として大切にすべきであるという考えから徐々に相対的で自律的な価値観を形成させる。

【文化・生活の学び】

体育科、理科、社会科では文化の学びに重点を置くが、単元や領域によって生活の学びで展開する。理科は、自然事象を対象とした具体的な活動を展開するなかで、科学的な追究力の基礎を養う必要がある。社会科では、教科目標から考えても生活の色彩が強いが第3学年では、生活事象をそのまま追究するのではなく、自分が生活する地域の社会的事象に対する理解を重視するとともに、観察や調査などの具体的な学び方の獲得を大切にしながら生活の学びへと近付けるようにする。

【生活・文化・人間の学び】

学級活動では、生活の学びを中心にしながらも全ての学びで単元を創り、より多くの友達と協力し合う体験ができるようにする。

教科等	時数	4 月	5 月	6 月	7 月	
算数	150	たし算とひき算を ひっ算でしよう (12)	生活の時間や 時こくを 調べよう (8)	全部でい くつ(かけ 算九九) (11)	わり算を かたちで 考えよう (6)	調べたことをわ かりやすくあら わそう (13)
音楽	60	楽き大好き！うたうの大好き！ みんなで合唱そう (※学芸会) (7)		旋律でつなぐ木の 詩物語 (7)	リコーダーと 友だちになろう (5)	
図画 工作	60	くねくね、ぐによ くによ絵の具のダ ンス (4)	絵の具とテー プのファンタ ジー (4)	つくろう！教室の なかのふしぎな世界 (8)	水の世界を描こう カッパ アーティスト (4)	
文 化 語	235	3 学年の 読書計画 をつくろ う (13)	西公園のひみつを伝えよう (20) てっていついきゅう！ウィルソ ンの研究を読みくらべよう (8)		昔話から読書 を広げよう -日本の話・ 世界の話- (選択読書) (25)	
体 育	90	スポーツテスト (4)	あらつ障害物リレー (9) キックハンドボ ールを楽しもう (8)		めざせ！ カッパ大賞 (10)	
理 科	70	草花を育て よう (種から ら発芽へ) (2)	昆虫のひみつを さぐろう (10)	つくろう！豆電球 おもちゃ博覧会 (8)	草花を育てよう (花の咲くころ の様子) (3)	
社 会	70	あらつの町たんけん！ 附属小のまわりの特色を 見つけよう (6)	福岡の町たんけん！福岡市 や県のある場所を 見つけよう (6)	福岡新ブランド 「えびすかき」探検隊 (9)		
文化 総合	60	あらつカッパ伝説～昔話から探検 あらつの町～(18)				夏休み自由研究
		英語 いっしょにダンスを楽しもう(10)				
生 活 の 学 び	学級活動 35	○ ぼくは ○○です (1) ○ 学級目標を 決めよう (1) ◎ 仲良しドッジ ボール集会を しよう (1)	○ 健康な歯とは (1) ◎ 係を決めよう (1)	◎つくろう！めざ そう！3の○ スピリッツ(3) ◎教生先生との さよなら パーティー(2) ○ 雨の日の すごし方(1)	○ 確かめよう。 3の○スピリッ ツ (1) ○ 夏休みの生活 (1)	
生活 総合	45					
人間の 学び	35	・新しい気持ちで (1) ・きまりのある 生活 (1) ・正直のよさ	・すばらしい お母さん(2) ・生き物を大切に (1)	・わたしたちの ふるさと (2) ・ふしぎなものに 感動する心 (1)	・身の回りを きれいに (1) ・自分の成長(1) ・命を大切に(1)	

9 月					10 月					11 月					12 月					1 月					2 月					3 月																			
長いものさし作り をしよう (11)					水のかさを 調べよう (9)					ばたばた絵 をつくろう (12)					かけ算九九 をひろげよう (11)					大きな数 を調べよう (9)					同じ数ず つ わけよう (10)					宝箱を つくろう (10)					いろいろな重さ を調べよう (10)					かけ算をひっ 算でしよう (11)					そろばんで 計算しよう (7)				
曲の気持ちを感じて・リコー ダーとともにだちになろうⅡ (7) (※学芸会)					場面を音楽で表そう ふしの流れやリズムに のってうたおう (8)					日本と世界のあそび歌集を つくろう (8)					リコーダーと 友だちになろうⅢ (6)					ふしや音をえら んで表そう (5)					6年生への思いを こめて歌おう (7) (※卒業式)																								
とう明カップから 生まれたものは (6)					光とかげの ハーモニー (6)					とうめいカップか ら生まれたものは (6)					ダンボール アーティスト (8)					集まれ！ すてきなカラフルなかま (8)					にじ色花畑をつくろう ※卒業式をかざろう (6)																								
めざせ プレゼン ターⅠ (15)					身の回りの 食べ物のひ みつを読み 取ろう (25)					あらつフェスタの パンフレットをつ くろう (20)					物語から命の 大切さを考え よう (20)					ふじだな文集を つくろう (10) 詩を読もう (10)					「健康な過ごし方」説 明書に書きまとめよう (20)					想ぞうを ふくらませて 書こう (20)					自分の力で読も う (選択読書活 動) (29)														
楽しく表現・ ダンスをしよう (9)					つくって楽しもう チャレンジマット (9)					パウンドゲーム を楽しもう (10)					チャレンジとび 箱 (10)					つくろう！わたしの元気もりもり ブック (4) ちょうせん！なわとびかけっこ遊び (10)					つくろうラグハ ンドボール (7)																								
草花を育てよう (種取り) (3)					昆虫や植物の成長 図鑑をつくろう (8)					磁石の不思議で つくって遊ぼう (11)					太陽時計のふしぎ (12)					さぐろう！日光のはたらき (12)					自分たちが育て 虫や草花は… (4)																								
(年間を通じて帯单元的に展開)																																																	
出発！あらつお店探検隊 (14)					福岡市の仕事を まとめよう (5)					あらつの今と昔 ～あらつ昔探検～ (15)					福岡市のごみはどこへ (15)																																		
(7)																																																	
英語 ハロウィンパーティーをしよう (15)																																																	
○ 2学期のめあて を決めよう (1) ◎ 2学期の係を 決めよう (1) ○ 運動会に 向けて (1)					○ 正しい 言葉づかい (1) ○ 忘れ物を なくそう (1) ◎ 教生先生との さよならパー ティー (1)					○ ぼくわたしの いいところ (1) ◎ 3の○学芸会 をしよう (3)					◎ チョボラ 作戦を行おう (4)					◎ 3学期の係を 決めよう (1) ○ 給食への感謝 (1)					◎ チャレンジな わとび集会 (2)					○ 6年生への 感謝 (1) ○ 4年生に 向けて (1) ◎ 3の○ジャン プ集会をしよう (2)																			
つくろう！あらつの音楽祭 (20)																																																	
あらつフェスタ (10)																																																	
・めあてに 向かって (1) ・お年寄りに 感謝して (1) ・ほんとうの友達					・みんなの 使うもの (1) ・真心からの行い (1) ・励まし合う友達 (1)					・困っているだれ かのために (2) ・みんなが使う 場所 (1) ・美しくやさしい (1)					・正しい心、 強い心 (2) ・自分の成長 (1)					・友達のよさ (1) ・命を大切に (1) ・礼儀正しく (1)					・みんな クラスの仲間 (3) ・わたしたちの ふるさと (1)					・くじけない心 (2) ・自分の成長 (1)																			
ぼく・わたしの健康プランをつくろう (15)																																																	

第4学年の〈ふくおかプラン〉 (平成16年度 構想プラン) ～～ 生活の学び ―― 文化の学び ―― 人間の学び

【文化の学び】

算数科、音楽科、図工科、国語科及び文化総合については、「文化の学び」を重点として位置付ける。思考の抽象性が増し、学ぶことに対する意欲や自分にとっての意味づけをすることが可能になってくる時期である。そこで、文化に内在する価値や美徳といったものにふれることができる題材を設定することが大切である。また自己評価力も高まってくることから、学習するコースを選択するなどの複線的な学習を構想することもできる。

【生活の学び】

生活総合を生活の学びに重点化して進めていく。身近な自然や社会対象をテーマとしたプロジェクトを立ち上げ展開していく。

【人間の学び】

道徳の時間を人間の学びに重点化して展開する。結果論的な見方から動機論的な見方へと高まってくる。このことから、行為の裏側にある人物の考え方を推し量ったり、そのよさについて評価したりする学習が可能になる。また、ある程度、自分自身に対する見方が客観的になる時期である。このことを生かして、肯定的に自分自身を評価し、自信がもてるように配慮していくことが大切である。

【文化・生活の学び】

社会科、理科、体育科は、文化の学びが中心である。ただし生活事象に働きかけ自分の生活を更新していくようなものについては、生活の学びとして展開していく。

【生活・文化・人間の学び】

特別活動では、全ての学びから題材を立ち上げる。学級活動だけでなく、クラブ活動や児童会活動など、新たな活動を大切に展開する。

教科等	時数	4 月	5 月	6 月	7 月		
文 化 の 学 び	算 数	150	大きな数を表そう (9)	コマをつくらう(14) もようにかくされた数のひみつをさくらう (7)	整数のわり算をしよう (15)	およその量を表そう (10)	
	音 楽	60	みんなのアンサンブルをつくりだそうⅠ ※さくらさくら (8)		曲の感じをとらえて歌おう (6)	ふしやりズムの流れにのって演奏しよう (7)	
	図 画 工 作	60	形や色から生まれたものは (6)	唐人町ランタンフェスティバル (10)	色のサンドイッチ (4)		
	国 語	235	4 学年の読書計画を立てよう (10)	詩を読もう (15)	「かむ」ことの力をさくらう ～自分に必要な文章を読んで～ (10)	松井さんの人柄を読み広げよう (25)	バリアフリーについて考え発表しよう (20)
	体 育	90	スポーツテスト (4)	2 種競技に挑戦しよう (5)	挑戦！鉄棒名人 (7)	かわそう！つなごう！オリジナルタグラグビー (9)	いろいろな泳ぎに挑戦しよう (9)
理 科	90	春の生き物を調べよう (9)	飛ばそうロケット！発射台改造大作戦 (12)	夏の生き物を調べよう (5)	夏の星の神秘にふれよう (7)		
生 活 の 学 び	文 化 総 合	70	夏休み自由研究 英語 英語でトランプゲームをしよう (10)				
	社 会	85	これからの福岡市の水 (12)	つくろう！わたしの防災マニュアル (13)			
人 間 の 学 び	学 級 活 動	35	○学級目標を決めよう (1) ○係を決めようⅡ ○はじめての委員会 (1)	○学級のシンボルをつくらう (3) ○学習のかまえ (1)	○教生先生 さよならパーティーⅠ (2)	○樹木ウォークラリーを企画しよう (3) ○チャレンジ夏休み (1)	
	生 活 総 合	35	附属小樹木調査隊 (15)				
道 徳 の 時 間	35	・ 4 年生になって (1) ・ みんなのために (1) ・ まっすぐな心 (1)	・ 友達の大切さ (1) ・ 身近な動植物を大切に (1) ・ あたたかい思いやり (1)	・ 生きた礼儀 (1) ・ 目標をもって生きるⅠ (1) ・ 命を守る仕事 (1)	・ 自然や動植物へのやさしさ (1) ・ ふるさとを思う (1)		

9 月		10 月		11 月		12月		1 月		2 月		3 月	
考え方を式 に表そうⅧ	はしたの数の表し 方を調べようⅦ	変化をグラフに表そう (11)	三角形のスタンド グラスをつくろうⅣ	いろんな数で同じずつ 分けようⅠⅧ	表を表して 調べようⅤ	角の大きさを はかろうⅩ	はしたの数の表し方を 調べようⅡ(分数)Ⅷ	つくろう! 面積 ウルトラクイズⅩⅥ					
みんなのアンサンブルをつく りだそうⅡ (10)		お祭りの音楽めぐり をしよう (9)		にっぽんの歌 みんなの歌ランド (4)		音楽で北風こぞ うを表現しよう (6)		オーケストラの 音楽を楽しもう (5)		気持ちをこめて 歌おう「卒業式 の歌」 (5)			
ストローと針金でおも ちをつくろうⅥ		スタンドグラスを つくろう (8)		心の四季を版に込めて (10)		オリジナルタングラムを つくろうⅩ		かんしやの気持ちを色と形に込めて (6)					
めざせ プレゼンター Ⅱ (10)	読書リレーをしよう (選択読書)ⅡⅤ		目的に合わせた伝 え方について読み 深めようⅡⅥ		ふじだ文庫Ⅹ 調べたことを報告しようⅡⅤ	話し合っ てよりよい意見に まとめようⅡⅢ		言葉遊びを作っ て遊ぼうⅡⅤ		自分の力で読もう (21)			
リズムダンス レボリューシ ョンⅥ	チャレンジ マットⅦ	あらっ 相撲Ⅴ	セストボールを 楽しもうⅩ		君も 跳び箱 マスターⅦ	私たちの成長ブックをつくろうⅣ なわとび・持久走に挑戦しようⅧ		スリーゴールサッカー を楽しもうⅨ					
電池を使ったミニ遊園 地をつくろうⅩ	月の不思議を 調べようⅥ	秋の生き物を 調べようⅣ	ものの温度と体積の関係を 調べようⅡⅡ		そのしんぱ の風の神 伝に ふれようⅣ	冬の生き物を 調べようⅦ		自然の中の水の行方を探ろうⅡⅣ					
(7)		アジアのひみつを探ろうⅡⅧ		あらっフェスタⅩ				英語 トランプゲームをしようⅩ					
				英語 クリスマスカードをつくろうⅡⅤ									
福岡いろいろ探検隊 (3)	星野村み力探検隊 (10)	大島不思議隊 (11)		小石原不思議 探検隊Ⅴ		ひきつがれる 博多の行事Ⅹ		黒田節を伝えた 二川相近Ⅹ		福岡県魅力紹介 ツアーⅡⅠ			
◎めあてをもった 生活Ⅰ	◎係活動バージョ ンアップⅢ	◎友達 のよいところⅠ		◎年忘れパーティ ーをしようⅡ		◎3学期の係を 決めようⅠ		◎なわとび集会に 向けてⅠ		◎4の○さよなら パーティーを しようⅡ			
◎2学期の係を 決めようⅠ	◎目を大切にⅠ	◎4の○スポーツ で仲良くなろうⅡ				◎ボランティア作戦 をしようⅢ				◎もうすぐ高学年 (1)			
	◎姓姓さよならパーティⅡ												
みんなにやさしい町プロジェクトⅡⅩ													
・自分のことは 自分でⅠ	・進んで活動する (1)	・日本の すばらしさⅠ		・高め合う友達 (2)		・何が大切かを 考えてⅠ		・目標をもって 生きるⅡⅡ		・真心の美しさ (1)			
・古いものを大切に するⅡ	・思いやりの心を もってⅡ	・家族みんなで (1)		・勇気ある行動 (1)		・みんなのために 働くⅡ		・おとしよりを 大切にする心 (1)		・自然を大切に (1)			
・目標に向かって (1)	・学校のよさⅠ	・きまりを守る心 (1)								・目標をもって 生きるⅢⅡ			

第5学年の〈ふくおかプラン〉 (平成16年度構想プラン) ~~~~~ 生活の学び —— 文化の学び ===== 人間の学び

【文化の学び】

算数科、音楽科、図工科と文化総合については、文化の学びとして位置付ける。これらはより文化を追究する教科としての役割を担い、教材となるものやことの文化を味わうことの楽しさと同時に、自分も文化をつくる存在として、文化を継承するだけではなく、創造する自分づくりを含めた学習を考える必要がある。

【生活の学び】

家庭科、生活総合は生活の学びに重点化して進めていく。家庭科では科学的な追究を大切にしながらも、自分の家庭を見つめ直し、実践的な解決を図ることで生活を更新する学習へとつなげる。生活総合では、他との協働だけではなく、自分自身の生活を見つめつくりかえる学習を意図する。

【人間の学び】

道徳の時間及び人間総合を人間の学びに重点化する。第5学年から人間総合を立ち上げ、人間を多面的総合的に取り上げて学習するなかで、生命や人間としての特質などについてふれるとともに、自分自身の生き方と比較して、よりよい人間になるために大切な見方や考え方を獲得させる。

【文化・生活の学び】

理科・社会科・体育科は文化の学びが中心であるが、環境や生活を創造する理科や社会科、科学的認識をもとに生活を変える体育科保健領域については単元領域によって生活の学びで展開する。

【文化・人間の学び】

国語科では文化の学びに重きを置くが、生命や生き方を扱う単元では人間の学びで展開する。

【生活・文化・人間の学び】

特別活動では、領域の特質から全ての学びで題材を創るようにする。

教科等	時数	4 月	5 月	6 月	7 月		
文化の学び	算数	150	整数と小数の関係を調べよう (14)	四角形を調べよう (20)	つくろう！分数カードゲームの攻略書 (14)	小数のかけ算や割算をしよう (13)	
	音楽	50	『かなはね』をつくり出そう！ (5)	楽器で表そう！私たちの世界 (6)	歌い継ごう！博多の歌・博多の心 (5)		
	図画工作	50	ギザギザベッタンから生まれたものは (6)	ステロールのカーニバル (6)	附小のわたしの自慢 (6)		
	国語	180	5学年の読書計画を立てよう (10)	詩を読み味わおう (13)	生物のつながりを読み探めよう「ナクラソウとトラマルハナバチ」 (13)	葉の研究 レポートⅠ (15)	千年前の不思議を読み探めよう (16)
	体育	90	スポーツテスト (4)	フリーコースリレーを走しもう (7)	心の健康 (4) リラックス運動をつくろう (8)	あらつ水泳 距離に挑戦 (10)	
文化総合	理科	95	植物の成長の秘密をとくろう 観察と質問 (8)	植物の成長の秘密を探ろう 肥料と日光 (7)	てこを使ったリフトゲーム！高得点をねらう作戦を立てよう。 (8)	メダカの住みやすい環境をつくろう (12)	
	50		がんばろう福岡つくろう福岡のじまん (11)			夏休み自由研究	
生活の学び	社会	90	国土に生きる人々Ⅰ・発見！日本の地形③ (3)	国土を生かし、食料生産に励む人々② (1) ・開催！福岡いちご生産会議⑫ ・大きく育て！福岡のとらふぐ⑨	われら食料安全調査隊 (4)		
	家庭	60	見つめよう！家庭生活 (14)		つくろう！さわやか生活 (9)		
	学級活動	35	○学級目標を決めよう (1) ○学級の組織をつくろう (1) ○学級成長記録をつづろう (1)	○学級イベントをつくろう (1) ○学級のシンボルをつくろう (2)	○学級成長記録を見直そう (1) ○雨の日サークルをつくろう (2) ○教生先生お別れ会 (1)	○僕らのアドベンチャーサークル (1) ○夏休みの計画 (1)	
	生活総合	40	つくろう健康！マイヘルスプロモーション (7)				
人間の学び	道徳学習	35	・ふるさとを大切に (2) ・友達のために (1) ・5年生の私 (1)	・男女の理解 (1) ・自分に誠実に (1) ・約束や規則の尊重 (1)	・美しい真心の大切さ (1) ・命の尊さ (2) ・生きがいを見つけて (2)	・公共の広場を大切に (1) ・自分の成長を見つめるⅠ (1) ・あいさつの大切さ (1)	
	人間総合	20	かがやけ いのち (10)				

9 月				10 月				11 月				12 月				1 月				2 月				3 月			
三角形や多角形の角の大きさを調べよう (9)				計算ゲームで小数のかけ算を考えよう (15)				小数のわり算をしよう (15)				面積ハンドブックをつくろう (15)				割合をグラフで表そう (21)				きょうり測定器をつくろう (8)				形を作って面積取りをしよう (6)			
豊かな表現をつくり出そうⅡ (6)				音楽の形や仕組みを生かそう (7)				「子守歌」の旅をつくり出そう (6)				音楽でえがこう (4)				ふしとリズムを組み合わせて (6)				6年生への思いをこめて歌おう (5)							
夏の思い出を絵手紙で届けよう (2)				秋の葉から飛び出す世界 (8)				みんなでつくろう！ライトセラピーの世界 (10)				ペットボトルとスチレンボールから (10)				美しい色、楽しい形 (2)											
めざせ！プレゼンターⅡ (10)				筆者の意図を読み取ろう～新聞と放送～(25)				人とのとのつき合い方 (23)				藤だ文庫を作ろう (10) わらくつの中の神様(選択読書) ～人物の生き方を読もう～ (15)				言葉の研究レポートⅡ (15)				本の世界を旅しよう！ぼくの・私の読書ツアー (15) (選択読書)							
ダンスを楽しもう (7)				ソフトバレーボールを楽しもう (9)				ハイジャンプのひみつをさくろう (6)				安全マップをつくろう(4) つくろう！オリジナルパスハンドボール (9)				クロスカントリーに挑戦しよう (10)				サッカーを楽しもう (10)							
生命のつながりを探ろう植物 (9)				天気の変化と自然災害(6)				流れる水のはたらき(6)				つくろう！ミネラル結晶美術館(14)				おもりの動きや働きを探ろう (14)				ジャガイモを植えよう (4)							
(7)				英語 おばけパンプキンをつくろう(10)												英語 外国人さんとレッツクッキング(9)											
国土を生かし工業生産に励む人々(20) ・発見！くらしの中の工業製品⑤ ・探ろう！これからの自動車生産⑮				国土を結ぶ人々(20) ・発見！情報を活用する私達⑧ ・探ろう！これからの情報産業⑫				日本列島探検旅行(14)				未来への財産へ福岡の川と海 (8)															
いためたりゆでたりしよう～家族のために朝食の一品を～ (15)				家族がそろう場所をコーディネートしよう (10)				工夫しよう！かしこい生活 (10)				できるようになったことを生かして (2)															
○2学期の計画を立てよう (1) ◎2学期の学級組織をつくろう (1) ○男女の協力 (1)				◎県新聞コンクールをしよう (1) ○健康について考えよう (1) ◎学級成長記録を見直そうⅡ (2)				◎これがぼくらのリサイクル (2) ◎すもう大会にむけて (2)				○清掃班長としての自覚 (1) ○これが5の0連行会 (2)				○学級目標にどこまで近づいたか (1) ◎3学期の学級組織をつくろう (1)				◎学級成長記録発表会をしよう (2) ○最上級生に向けて (1)							
				あらつフェスタ(10) 見直そうお菓子とのかかわり方(23)																							
・工夫して新しいことを (1) ・困難を乗り越えて (2)				・力強く生き抜く (2) ・日本人のすばらしさ (1) ・広い心 (1)				・私の学校 (2) ・本当の親切とは (2)				・高い目標に (1) ・温かい家族 (1) ・自分の成長を見つめるⅡ (1) ・役割を果たすⅡ (1)				・公平な心 (1) ・大切に思う心の美しさ (1)				・希望をもって (1) ・健康と安全Ⅱ (1) ・自然を愛する心 (2)				・本当の思いやり (1) ・自分の成長を見つめるⅢ (1)			
人間らしさってどんなこと (10)																											

第6学年の〈ふくおかプラン〉 (平成17年度 構想プラン) ~~~~~ 生活の学び —— 文化の学び ==== 人間の学び

【文化の学び】

算数科、音楽科、図画工作科及び文化総合については、主に「文化の学び」を重点として位置付ける。小学校での学習の集大成として、子どもが自分の文化づくりにつながるような単元を開発していく必要がある。

【生活の学び】

家庭科及び生活総合を生活の学びに重点化する。家庭科は、家庭生活を変えていく目的をもたせることで単元を立ち上げていく。また生活総合では、卒業をテーマとしてプロジェクトを立ち上げる。

【人間の学び】

道徳の時間及び人間総合を人間の学びに重点化して展開する。人間総合では、これまでの成長や自分自身に対する理解が深まるような学習を考えることで、自分への自信や将来に向けた夢や希望をもつことができるようにする。

【文化・生活の学び】

社会科・理科・体育科は、自分で文化を見出し、創り上げていく文化の学びが中心であるが、環境とかかわり生活を更新していく理科、自分の生活を絡めて展開する社会科政治学習、科学的な認識のもとに生活を変えていく体育科保健領域については、領域・単元によって生活の学びで展開する。

【文化・人間の学び】

国語科では、言語文化を理解し創造する能力の育成を重視した文化の学びを重点にするが、人間の生命や生き方など見つめ見直す契機となるような活動で展開する人間の学びの単元も位置づけていく。

【生活・文化・人間の学び】

特別活動では、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事などそれぞれの特質から全ての学びで題材を創る。

教科等		時数	4 月	5 月	6 月	7 月		
文化の学び	算数	150	整数のなかまづくり (12)	見張もって調べよう (5)	ブロックバスターのピースをくわえよう (9)	分数的たし算・ひき算をしよう (15)	立体の大きさを調べよう (17)	
	音楽	50	日本の歌 (4)	豊かな表現をつくり出そう (8)	世界の音楽めぐりをしよう (6)			
	図画工作	50	ばくの私のすてきなフェイス (4)	ベニヤ板のカーニバル (6)	思い出の一枚をかざろう (8)			
	国語	175	6 学年の読書計画を立てよう (5)	短歌俳句を読み味わおう (8)	卒業研究を書き始めよう	文章を選んで考えよう ～イースター島から考えること (12)	広げよう！読書ネットワーク本の楽しさお届け隊 (18)	卒業研究をまとめて中間報告会を開こう
	体育	90	スポーツテスト (4)	ワープリレーを楽しもう (7)	つくろう！ユニバーサル・ホッケー (9)	あらつ水泳記録に挑戦 (10)		
	理科	95	私たちの周りの環境を見つめよう (4)	食料のつくられ方について考えよう (4)	正体ズバリ解明！ ～水溶液ガイドブックを使って～ (11)	生きるために必要な養分のつくられ方について考えよう (10) (植物)	生きるために必要な養分のつくられ方について考えよう (6) (動物)	
生活の学び	文化総合	87	夏休み自由研究 英語活動 レッツ！ブレイクファースト ほか					
	社会	100	I 日本のあゆみ (67) 時代を創った人々Ⅰ 福岡市博物館 (4) 板付遺跡 (4) 時代を創った人々Ⅱ 聖武天皇 (4) 藤原道長 時代を創った人々Ⅲ 武士の条件 (10) 北条時宗 (4) 文化を創った人々Ⅰ 日本文化の源流をさぐる！ (8) 時代を創った人々Ⅳ 天下統一 (4) 時代を創った人々Ⅴ 徳川家光 (4)					
人間の学び	家庭	55	私にできることを見直そう (2)	快適な住まい方を工夫しよう (9)	和風の朝食にチャレンジしよう ～私のじまんのふくらごはんを熱くみよう (9)			
	学級活動	35	○最高学年としての役割 (1) ○学級目標を決めよう (1) ○学級組織をつくろう (1)	◎1 年生のお世話をしよう (1) ◎わたしたちの委員会活動をつくろう (4)	◎さよなら教生先生Ⅰ (2) ◎電子アルバムをつくろう (2)	◎ぼくらのアドベンチャースクール (2) ○夏休みの計画 (1)		
	生活総合	13						
人間の学び	道徳学習	35	・最上級生として出発 (2) ・役割と責任の自覚 (1)	・生命の尊重 (2) ・何のために生きるⅠ (1)	・本当の友達とは？ (2) ・深い思いやり (1)	・素直な反省 (1) ・尊敬感謝の心 (1) ・男女の友情と協力 (1)		
	人間総合	10	生きる輝きを求めて (10)					

9 月		10 月		11 月		12 月		1 月		2 月		3 月	
ならして調べよう (11)		単位量あたりの大ききさで比べよう (16)		分数のかけ算・わり算の仕方を調べよう (29)		比を使って比べよう (4)		比例するものを調べよう (9)		算数のまとめ (23)			
豊かな表現をつくりそうⅡ (8)		音楽の発展につくした音楽家たち (6)		日本の歌 みんなの歌ラウンド (4)				室内楽の音楽を楽しもう (4)		音楽でえがこう【海の音楽】 (5)		気持ちをこめて歌おう「卒業式の歌」 (5)	
伝えよう！私のポスターメッセージ (4)		すてきなオブジェ展を開こう (8)		広重・歌麿に挑戦 木版画アーティスト (8)				形と色のファンタジー (6)		お世話になった方に絵手紙をおくろう (6)			
めざせプレゼンターⅣ (10)		二十一世紀を生きる生き方を考えよう (15)		ふじだな文集をつくろう (10) 表現を味わおう「やまなし」 (15)		文化について発信しよう (18)		卒業するあなたたちに（選択読書活動）「海の命」、「生きる」ほか (10)		情報を使って考えよう～人類よ、宇宙人になれ～ (24)		卒業研究を書きまとめて最終報告会をしよう (10)	
テーマ表現2Ⅰ (5)		スピード・ジャンプの秘密を探ろう (7)		ソフトボールを楽しもう (8)		リラックス運動をつくろうⅡ (5) 健康な生活をしよう（病気の予防） (8)		器械運動発表会を開こう (7)		縄跳び・持久走に挑戦しよう (10)		サッカーを楽しもう (10)	
電磁石パワーアップ作戦 (13)		ものを燃やす仕組み (14)		私たちの体の不思議を探ろう (13)				土地のつくりと変化 (12)		私たちの周りの環境を見つめよう (8)			
あらつ金融道～お金ごだわり大百科をつくろう～ (20)				つくろう！あらつ座 (20)									
(7)		あらつフェスタ (10)											
※英語活動として年間30時間													
文化を創った人々Ⅱ 日本文化の源流を探ろうⅡ 町人文化 (5)		時代を創った人々Ⅲ 伊藤博文 (5) 日本文化の源流を探ろうⅢ 文明開化 (5)		文化を創った人々Ⅳ 陸奥宗光 (5) 15年戦争 (5)		Ⅱ 生活と政治 (15) ふくふく日本国憲法 (8) プラザができるまで (7)		Ⅲ 世界の中の日本 (18) 世界の国を訪ねよう (8) スポーツ交流会 (4) 世界は一つ 国際連合の働き (6)					
我が家のオリジナルバッグをつくろう (15)				健康な食卓をコーディネートしよう (12)				家族の一員としての自分 (2)		伝えよう！ありがとうの気持ち (6)			
○2学期のめあてを立てよう (1) ◎2学期の学級組織 (1) ◎最後の運動会・月見学芸会 (1)		○学習環境をつくらう (1) ◎さよなら先生Ⅱ (1) ○思い出をつくる修学旅行 (2)		◎相模大会に向けて (2) ◎修学旅行を自分たちで (1)		○心も体もリラックス (1) ◎冬休みやるぞ集会 (2)		◎3学期の学級組織をつくろう (1) ○自分を見つめて (1)		○中学校へむけて (1)		◎後輩へ思いを伝えよう (4)	
卒業プロジェクト (13)													
・明るく生きる (1) ・公德を守る心 (1) ・自分らしさを生かす (2)		・深い思いやり (2) ・世界の中の私 (1)		・奉仕する心 (2) ・環境と資源を大切に (2) ・集団の中での役割 (1)		・生きることの素晴らしさ (1) ・過ちを許す (1)		・家族の一員として (2) ・何のために生きるⅡ (1)		・地球を救う (2) ・人間の力を超えたもの (1)		・何のために生きるⅢ (2) ・礼儀は心の表れ (1)	

算数科学習の〈ふくおかプラン〉

I 自ら筋道立てて考える算数科学習

1 算数科での学ぶことと生きること

算数科が究極的なねらいは、高次に抽象化した記号や数値を用いた論理的な思考力の育成とその活用である。算数科学習では、今日、学力低下が叫ばれる中、基礎・基本として計算などの知識・技能ばかりが重視されがちである。しかしながら、単に知識や技能を身につけておくだけでは今日の変動の激しい社会の中で起きる複雑な問題の状況に柔軟に対応することができない。算数科で身につける知識・技能は、論理的な思考力と絡み合うことで柔軟な対応が可能となり、効率的で正確性のある生活が送れるのである。したがって、未来をよりよく生きるために算数科では論理的な思考力の育成を目指さなければならない。

2 算数科部主題についての説明

自ら筋道立てて考えるとは、子どもが問題事象に出合ったとき、「この問題には、あの考え（数理）が使えるのだ」といった問題事象の構造を見抜き既習の数理内容と関係づけようとしたり、「ここまではわかっているが、ここからはよくわからない」「この方法はよく使えるが、もう一方の方法はよく使えない」といった自分の学習の理解度や考えの傾向性を分析したりしながら、自己の追究課題を明確にもち、その解決へ向けての見通しを立て、自力解決活動を行っていくことである。

自ら筋道立てて考える算数科学習とは、問題事象に出合ったときに、「問題を分析する思考」と「自己を分析する思考」の双方向の思考を働かせ、自己の実態に応じて学習の計画を立てながら問題事象を追究し、数理を発展させていく学習のことである。ここでいう発展とは、既習の数理を可逆的に用いたり、幾つかの既習の数理を組み合わせる用いたりすることによって、身につけた数理の活用範囲が広がっていくことである。

自ら筋道立てて考える算数科学習は、自分で学習計画を立て、追究した結果、数理を発展させる文化の学びで展開する。その過程においては自己効力感が生み出されていき、学びに対する自信へとつながっていく。この学びへの自信を大切に学習展開では、学習を自分自身の力でつくり出している感覚を十分にもたせなければならない。そのためには、ある程度の基礎的な内容を理解した段階で、発展的な問題場面に出合い、自分のそれまでの学習における理解度や考えの傾向性に依拠して、いくつかの問題事象や追究方法の中から自分に適したものを選択できる場が設定されていなければならない。

- 数理を身につけた結果、どのようなことに活用できるのかがわかり主体的に取り組む子ども（学ぶ意義）
- 問題分析と自己分析を行い、そこから見通しをもって解決に取り組む、数理を発展させる子ども（能力）
- 自分の計画に沿った問題解決を繰り返す中で、自分の解決への満足感と充実感をもつ子ども（自信）

【表1 豊かに生きる子どもをはぐむための算数科の基礎基本】

		学 ぶ 意 義		
		・身の回りの問題事象を抽象化した記号や数値を用いて考察・処理し、それを実生活に戻して活用できるといったよさの実感を積み上げていくことで、抽象化、具体化して考える力を育成できたり、数理を生活に生かすことのよさを感じ取り、効率のよい、誤差の少ない生活を求めたりすることができる。		
能 力	A学力 実体的 学 力	観 点	低 学 年	中 学 年
			簡単な整数の計算、簡単な外延量についての測定、図形の仲間分けが正しくできる力	整数の計算、簡単な小数・分数の計算、外延量の測定、簡単な図形の作図、簡単な統計処理が正しくできる力
	B学力 機能的 学 力	論理的 思考力	推論を働かせ、見通しを具体的にもち、問題解決に取り組むことができる力	演繹的推論や帰納的推論を旺盛に働かせ、解決活動に向けた見通しを具体的にもつために、文や図で学習ノートに説明できる力（設計図等で見通しを具体化する力）
		追究力	前の時間に使った見方や考え方が別の問題でも使えるか試し、結果を得る力	前の時間に使った見方や考え方が様々な場面になっても使えるか試し、結果を得る力
		表現力	順序を表す言葉を使って、解決の過程を文章にして説明できる力	順序を表す言葉で解決の過程を詳しく文章にし、絵や図、式などを交えて説明できる力
		問 題 分析力	教師が焦点化して提示する問題事象の比較から相違点を見つけ出せる力	教師が提示する複数の問題事象の比較から問題事象どうしの関係や構造を見抜き、選択したり順序を決めたりすることができる力
		自 己 分析力	自分の理解度や傾向性に依拠して複数の問題事象から必要な問題を選択できる力	これまでの学習での自己評価と問題事象とを結びつけて選択の理由づけまで説明できる力
自 信	・発展的な問題事象に対する問題解決を繰り返す中で、既習の数理を組み合わせたり可逆的に用いたりして解決できた満足感や解決の過程での自分の考えのよさを実感したり、自分の可能性への信頼をもったりすることができる。			

II 問題事象の選択場面を位置づけた算数科学習プラン

算数科部 田 中 健 悟

1 副主題の意味

問題事象とは、単元全体のなかで課題を解決させていく際に部分的に存在する、子どもが必然をもって追究したくなるような課題のことである。問題事象の選択場面を位置づけるとは、問題事象の具体的な追究対象が存在する中で、「問題を分析する役割」と「自己を分析する役割」との2つの役割を果たすことをねらいとして、複数の問題事象を設定することである。人間は問題事象を選ぶ状況が生じたとき、自然に問題事象間の違いを分析したり自己の理解度や考えの傾向性を分析したりする。

問題事象の選択を位置づけた算数科学習プランとは、問題事象の選択場面の位置づけを工夫し、既習の数理を用いて個に応じて数理を発展させていく学習過程のことである。算数科での自己開発は、選択の中で学習を自分で制御し、数理を発展させていくものである。

2 学習プランの具体的構想

● 発展的な問題事象を生みだす教材化

練習問題ではなく、既習の数理を可逆的に用いたり組み合わせたりして解決を図るような発展的な問題事象に出合ったときに初めて、必然的に自己のこれまでの学習の理解度や傾向性を振り返ろうとする。そこで発展的な問題事象の設定が必要となるが、発展的な問題事象を教材化するにあたっては、次のような特性を踏まえる。

【段階性】事象のもつ属性の変化によって、数種類の段階をつくることのできるもの

【可逆性】身につけた数理の活用場面として可逆的に思考できることが可能なもの

● 問題事象の選択場面の類型化

問題事象の選択場面の設定においては、その目的の違いに応じ、次の2つの類型で行う。

(ア) 難易度重視型

難易度重視型では、既習内容に対する理解度を振り返り、自分にあった選択ができるように難易度の違いによる複数の問題事象の設定を行う。難易度の違いは、そ

の問題事象に含まれる属性のうちの数値、形、位置、大きさなどを変えたり、可逆的な思考になる条件に変えたりしてつくり出す。

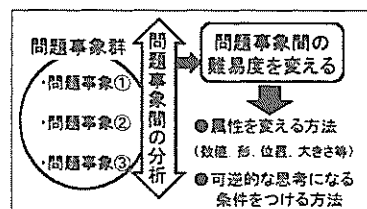


図1 難易度重視型の構成

(イ) 傾向性重視型

傾向性重視型では、これまでの自分の考えの傾向性を振り返り個の課題にあった選択ができるよう、難易度に加え、傾向性の違いも考慮し問題事象の設定を行う。その際、考え方の違いを視点として、問題事象の選択肢をつくること（群の構成）や、各選択肢毎に、既習内容の上での共通点と発展性の違いによる差異点をもって設定し、結果として難易度に差がある問題事象をいくつか並べる（要素の構成）ことに留意する。問題事象群をつくることによって、自分の得意な方法をあてはめたり、自分に足りない方法を試したりといった目的での選択が可能となる。

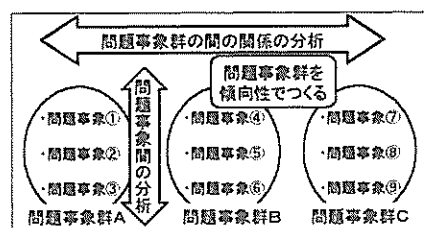


図2 傾向性重視型の構成

● 自己分析の場を重視した活動構成

自己分析とは、自己に対するこれまでの学習の理解度や傾向性を振り返ることである。必然的に自己分析する場をつくるためには、発展的な問題事象に出合わせる必要がある。そこで、単元を数理の高まりや広がりによって3段階で構成し、各段階の終末に発展的な問題事象を設定する。従来のように単元の終末のみに自己分析の場を設けるのではなく、学習を進めながら自己分析することが大切であると考えている。この問題事象の選択場面に出合わせることで、問題分析や自己分析も始まる。その後子どもたちは、自己分析の結果に合わせ問題事象を選択して追究していくと考える。

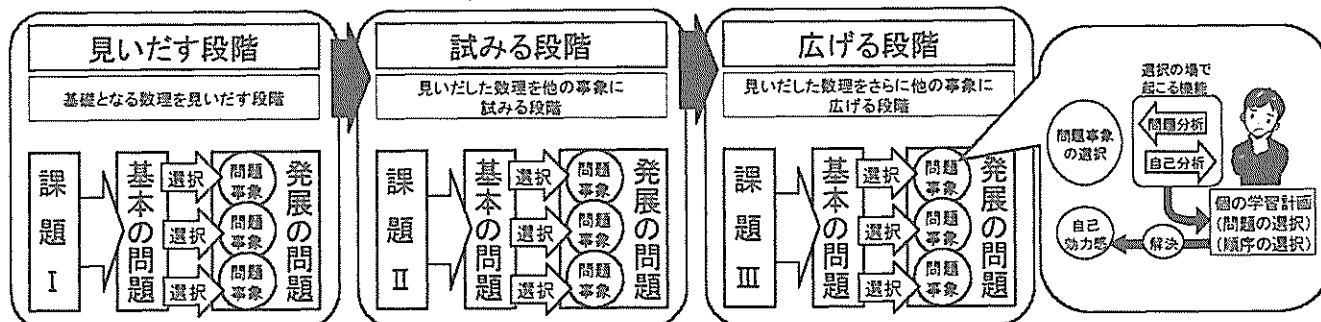


図3 自己分析の場を重視した活動構成

3 指導の実際

第4学年 単元

つくろう! 面積ウルトラクイズ ～クイズのパーツづくりを通して～

(1) 単元の目標

- 1 面積クイズづくりにおいて、広さの比較方法を追究したり、測定方法を工夫したりしながら、クイズのパーツづくりを意欲的に追究することができる。
- 2 広さを数値化して比べたり、分割や補完の考えを用いて複合図形の面積を求積したりできる。

(3) 学習の流れと考察

第1次: 1～4/10時

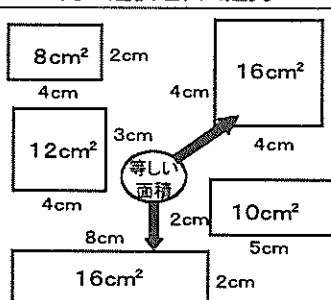
面積クイズに出会い、広さの比較方法について追究した後、クイズの条件に合うパーツをつくり出す。



- (1) 面積クイズを試し、長方形や正方形のパーツの広さの比較方法について、カードを用いて追究する。
- (2) 自分がつくりたい面積クイズを選択し、クイズの条件に合う長方形や正方形のパーツをつくる。

資料1 クイズをつくる場面でのA児の選択理由と追究

わたしは、「同じ広さ見つけクイズ」を選びました。そのわけは、同じ面積のパーツのペアを1つだけつくったらいいからです。そのほかは面積をそろえなくていいからです。



考察1

資料1の「同じ面積のパーツのペアを1つだけつくったらいい」という反応から、2つのクイズの難易度の違いを見抜いていることがわかる（問題分析力）。また、資料2からは、既習の長方形の面積の公式を可逆的に用い、縦と横の長さの積が24になる組み合わせを考え、長方形や正方形のパーツをつくっていったことがわかる（仮説を検証する力）。このように、前時までの学習をもとに見通しを立て、追究する姿が引き出されたのは、難易度の違いが分かりやすい問題事象を設定し、選択させたことによるものと考えられる。

第2次: 5～7/10時

面積クイズづくりにおいて、複合図形のパーツづくりの課題をもち、そのつくり方を追究する。

- (1) 面積ウルトラクイズの見本に含まれるし字型のパーツの求積方法について追究する。
- (2) 面積ウルトラクイズの見本に取り入れたいパーツ

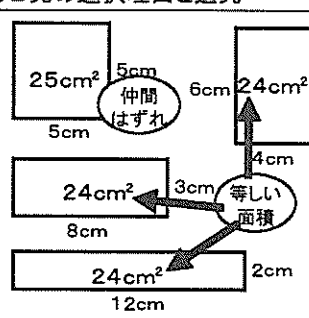
(2) 単元の考え方

文化の学びで展開する本単元は、面積クイズのパーツの形や面積を自分自身でつくり替え、最後にクイズ大会を開くという目的をもち、広さの比較方法や測定方法の工夫を追究していく。具体的には、単位面積を用いた数値化による広さの比較方法を理解したり、複合図形の求積場面で分割や補完などのアイデアを見つけ、パーツづくりに生かしたりすることをねらいとしている。この面積クイズづくりの追究活動は、自己開発の視点に立ち、個の理解度や傾向性に応じて子どもが自分で問題事象を選択し、学習を展開していくことを重視している。そのために、①長方形や正方形のパーツで構成する面積クイズづくりの追究活動、②複合図形のパーツづくりの追究活動、③複合図形で構成する面積ウルトラクイズづくりの追究活動、の3つの追究活動において問題事象の選択場面を設定している。

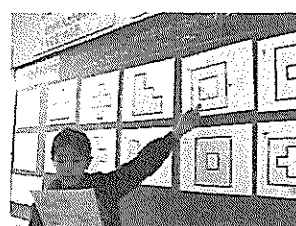
第1次は、広さの比較方法として単位面積を用いた数値化のよさに気づくこと、辺の長さを用いた計算による効率的な求積方法に気づくこと、などをねらいとしている。そのためまず、広さのクイズに出合わせ、パーツのもつ広さの比較方法について課題をもたせた。次に、カード操作を通して出された幾つかの比較方法のうち、一番手際のよい方法はどれかを考えさせ、順番当てクイズでの測定を通して、数値化による比較のよさに気づかせていった。最後に、面積の公式を可逆的に用いて、長方形や正方形のパーツづくりを行った。その際、条件が異なることで難易度も異なる2つの面積クイズの中から作成するクイズを選択させた。（資料1と資料2）

資料2 クイズをつくる場面でのB児の選択理由と追究

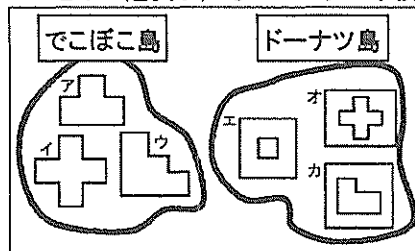
わたしは、「仲間はずれクイズ」を選びました。そのわけは、まわりの長さがちがっているのに同じ広さになるパーツをつくってみたいかったからです。同じ広さのパーツは、たて×よこの答えが同じ数になるときを見つけたらいいです。



第2次では、複合図形の求積方法や、その求積方法を可逆的に用いることをねらいとしている。そのために、面積クイズのパーツである複合図形をクイズの条件に合わせてつくり、面積クイズを完成させる活動を設定



を3つ選択し、そのパーツの求積方法を追究する。



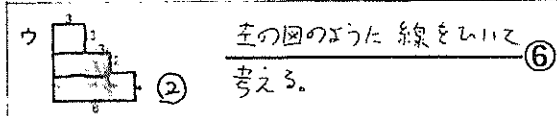
ここでは、凸凹型と穴あき型の2つの問題事象群をつくっている。そしてそれぞれの群の中に3つの問題事象（ア～ウ、エ～カ）を位置づけている。問題事象アは前時に取り扱ったL字型のパーツとほぼ同じ形で、イやウは凸凹の数を増やしたものである。エは穴あき型の基本であり、オはイの図形をくりぬいたもの、カは前時のL字型の図形をくりぬいたものという関係をもたせ設定している。

した。先にL字型の求積を行い、次に複雑な形のパーツづくりの順序で活動を行った。L字型の求積では、分割や補完などの考えが導き出された。複雑なパーツづくりでは、広さの仲間はずれクイズに埋め込む3つのパーツを選び45cm²になるというクイズの条件に合わせてつくる活動を行った。

資料3 選択場面での問題事象とその事象間の関係

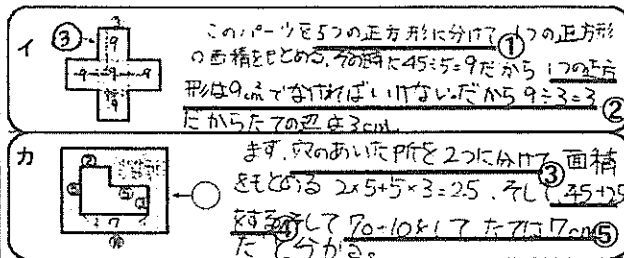
資料4 イとウとオの問題事象を選んだA児の理由と追究

正確な形じゃなくて、でこぼこした形や階段のような形を使って45cm²はできるのか？という疑問をもったし、でこぼこでまだ1度も成功したことがなかったからです。ウ→イ→オの順にしようと思った理由は、まず、切り分け方ができるものからやると、イとオのやり方もわかってくるかもしれないし、イを2番目にやったらイの形をくりぬいたオもわかるかもしれないからです。



資料5 イとエとカの問題事象を選んだB児の理由と追究

まずイはつけ加え方をうまく利用できればできるかなと思ったからです。エも同じようにつけ加え方でできると思いました。カは切り分け方とつけ加え方の両方を利用してできると思ったからです。



音楽科学習の〈ふくおかプラン〉

I 音楽的な思考力を発揮し楽心をもつ音楽科学習

1 音楽科での学ぶことと生きること

「生きる」ということから、音楽科の役割をとらえると、「音楽を学ぶ」と「音楽で学ぶ」ことを両立させ、音楽の美しさやその価値を学びながら、自らもその美しさを求め、めざす音楽を実現させていく心情と能力の調和のとれた子どもをはぐくむことにあると考える。そのためには、まず音楽や音楽活動が自分にとって「楽しいもの」「意味のあるもの」になっておかなければならず、これまで大切にされてきた創造的な音楽活動の実現を、より一層目指すことが必要になってくる。創作表現においてはもちろん、音楽作品としての楽曲を再表現する活動においても、「与えられたもの」ではなく、子ども自身が「自分のもの」として音楽をとらえる学習を展開しなければならないのである。そうすることによって、子どもは音楽美を求め、それを実現するために音楽活動に没頭し、自分にとっての価値を見出しながら、また新たな音楽美を求めるといった学びへと発展していくものであると考える。

2 音楽科部主題についての説明

音楽的な思考力とは、音楽とであい、その構成や要素を感受したことをもとに、音楽へのイメージを持つときに必要となる直観的に思考する力と、思い描いた音楽のイメージに向けて「どのような表現の工夫をすればよい

のか。」を決める際に必要となる分析的に思考する力とを示すものである。音楽とであうと、まずは直観的に音楽を思考し、その次に分析的に思考ようになる。この2つの思考力が働くことによって、音楽が与えられたものに終わるのではなく、音楽文化を創造し、自分自身のもの、新たな価値あるものとして音楽をとらえることになる。この2つの思考力をさらに具体化すると、表1のようになる。また、楽心とは、「～しよう」という音楽活動に向かう「音楽する心」と、音楽活動に夢中になり没頭する「音楽を楽しむ心」、そして、自分の音楽的な成長や他者と音楽を共有したことの感動から「音楽の価値をとらえる心」の3つから成り立つものである。この楽心は、音楽的な思考力を発揮させる音楽活動によってもたらされるものである。つまり、音楽的な思考力を発揮し楽心をもつ音楽科学習とは、音楽を直接体験することを通して、音楽的な思考力の働きをうながすとともに、心情面と能力面の調和的な育ちを大切に、次のような子どもの姿をめざした学びを示している。

- 音楽の価値をとらえ、音楽美にふれたり他者と音楽を共有したりする感動を味わう子ども（学ぶ意義）
- 音楽的な諸要素を感受したことから、めざす音楽像を思い描き、それを実現するための方法を工夫し、自分の音楽文化を創造する子ども（能力）
- 自己の音楽的な成長を自覚し、さらなる音楽活動や音楽との出会いに求めをもっている子ども（自信）

【表1 豊かに生きる子どもをはぐくむための音楽科の基礎基本】

		楽		心	
		学ぶ意義		自信	
		・音楽と夢中になって繰り返しかかわり、音楽や音楽活動への求めをもっている。 ・音楽が自分や他者に快の感情をもたらすものであることや音楽活動を通して他者と心を合わせ、一体となったり世代を超えて心を通わせることができる音楽の価値を感じ取る。		・つくり出した音楽のよさを確かめ合い、何がどのようによいのかを確かめ合う。 ・「できるようになったこと」が増えたことを喜び、それをもっと伸ばしたいという想いをもつ。 ・もっとこんな事にも取り組んでみたいという次の活動や活動へ向かう自分自身の伸びへの期待感をもつ。	
		能力			
		低学年		高学年	
能力	A 学力 実体的 学力	観点	低学年	高学年	高学年
	表現の 技能	表現の 技能	正しい発音、きれいな発音に気づいて、丁寧に歌う。 ・母音、子音 手にもつことができる身近な旋律楽器や打楽器の正しい奏法（持ち方や指づかいを含む）をする。	呼吸や発音の仕方に気をつけて自然で無理のない声で歌う。 ・母音、子音、濁音、鼻濁音 旋律楽器や打楽器の正しい奏法（持ち方、指づかい、姿勢を含む）、強弱や速度の変化を表すための奏法をする。	楽曲の様式に合う声や自然で無理のない声で歌い、豊かな響きをつくり出す。 我が国や諸外国の旋律楽器や打楽器の正しい奏法（持ち方や姿勢を含む）、速度や強弱の変化を表すための奏法をする。
力	B 学力 機能的 学力	直観的な 思考力	楽曲の気分の違いや音楽を特徴づけている音楽的な要素を感受し、楽曲が表す様子を思い浮かべる。	感受した楽曲を特徴づけている音楽的な要素や理解した楽曲の構成から、楽曲に込められた思いや情景を想像する。	感受した楽曲を特徴づけている音楽的な要素や理解した楽曲の構成から、楽曲に込められた思いや情景を想像する。
	分析的な 思考力	楽曲の気分に合った表現方法を選択したり、自分が表現したいイメージと声や音のイメージを結びつけたりしている。	曲想に合った表現方法の工夫をしたり、自分が表現したい音楽を実現する方法を工夫したりして、表現技能を運用して自分の音楽表現をつくる。	音楽の構成や曲想に合った表現方法の工夫をして、自分が表現したい音楽を実現するための表現技能の運用の仕方や音楽的な要素の工夫の仕方考え、自分の音楽表現をつくる。	

Ⅱ 個の求めからの活動選択を位置づけた音楽科学習プラン

音楽科部 原 ク ミ

1 副主題の意味

個の求めとは、次のような2つの思いをもつことをさしている。

① めざす音楽像に向かう求め

子どもが音楽とかかわる中でもつ音楽美への憧れから起こる「こんな音楽にしたい。」「こうすればもっと音楽がよくなるぞ。」という思い。

② 自分に向かう求め

めざす音楽をつくりあげるために「上手に演奏できる自分になりたい。」「きれいな声で歌える自分になりたい。」などの自分に向かう思い。

この2つの求めは、音楽活動をする際に関連づけられる。めざす音楽像に向かう求めがあるからこそ、それを実現するために音楽的な思考力が発揮され、自分に向かう求めが生まれる。この2つが切り離されてしまうと、音楽が「与えられたもの」になる。個の求めからの活動選択とは、めざす音楽像を実現するために、どのような音楽活動をすればよいのか、どのような表現方法を用いればよいのかを考え、音楽活動を選択することである。そのため、選択する前には、自分の音楽活動のあり方や実現の状況、自分の音楽的な特性を診断する場を設定する必要がある。よって、個の求めを実現する活動選択を位置づけた音楽科学習プランとは、個の音楽的な特性に応じた学びの創造をめざし、音楽的な思考力を発揮させながら、自分自身の力で音楽をつくり出すことができるようにすることをねらった学びの過程を示している。

2 学習プランの具体的構想

● 鑑賞した内容を表現に生かす教材化

一題材の中で、鑑賞教材として用いた楽曲で感受したことをもとに、表現活動で工夫する内容や鑑賞する観点

をつくり出すことができるように教材化を図る。

①鑑賞教材として用いる楽曲

楽曲とその背景にあるものとを同時に出合わせる。その文化的な背景と関係づける音楽的な要素を重点化し、演奏形態表現媒体、編曲を吟味する。

②表現教材として用いる楽曲

ア。「範唱や範奏」と「学習活動としての音楽表現」の表現形態や表現媒体、イ。教師が提示する伴奏のリズムや構成、ウ。子どもの読譜力の実態に応じた楽譜での提示、エ。楽曲の全体的な構成や調性をアレンジする必要性の点から楽曲分析し、それをもとに活動を設定する。

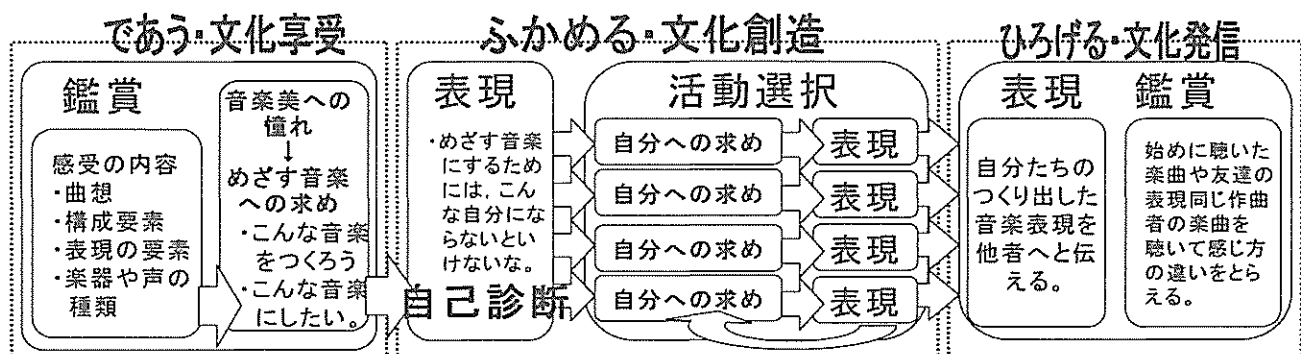
● 個の求めを生み出す鑑賞活動の設定

子どもは、音楽文化にであったとき、音と音が織りなす「美しさ」に魅力や憧れを感じ、音楽活動への意欲をもつ。導入の鑑賞活動の際に、次のような点をふまえた活動を設定し、2つの求めが関連づけられるようにする。

	鑑賞のための主な活動	表現活動へのつながり
低	模倣・行進などの身体表現やリズムうち	感受したリズムを自分の音楽表現へと用いる。
中	旋律の流れをとらえ、自た指揮や思い浮かべた情景を絵で表現	感受した内容から、自分の音楽表現の内容や方法への求めを見出す。
高	楽譜で旋律の流れや音楽の構成をとらえる。鑑賞教材を表現する	感受した内容や楽曲に込められた作曲者の思い・文化的背景から音楽表現の内容や方法への求めを見出す。

● 活動の複線化を図る基本的な活動構成

個の求めに応じた音楽活動を展開するためには、音楽を創造する活動を複線化する必要が出てくる。そこで、図1のような学習段階と活動を設定する。複線化を図る際には、内容が複線化しないように活動を吟味する。



【図 活動選択を位置づけた基本的な活動構成】

3 指導の実際

第5学年 題材

つくろう!滝廉太郎の歌曲演奏会 ～自分の声のよさを生かして～

(1) 題材の目標

- 1 滝廉太郎の歌曲の美しさをつくり出す旋律の流れや構成などの要素を感受し、長く親しまれてきている楽曲をつくり出した作曲者の思いと音楽とを関係づけながらその価値を見出すことができる。
- 2 自分の声の特性をとらえ、自分のめざす音楽を実現するための調性や楽曲を選択して、自然で無理のない声でのびやかに歌い、歌曲のよさを味わう。

(3) 学習の流れと考察

第1次：1～2／7時

「荒城の月」が表している情景を想像しながら聴くとともに、歌詞の意味を調べたり楽譜を見たりしながら、聴いてその美しさを味わい、これからの音楽活動の方向性を話し合う。

- (1) 「荒城の月」を鑑賞し、滝廉太郎が作曲した幼稚園唱歌と聴き比べたり、読み物資料を読んだりする。
- (2) 楽譜を見ながら、声種の異なる「荒城の月」を鑑賞し、題材全体のめあてについて話し合う。

声の高さや声の感じが変わると、同じ「荒城の月」でも、その思い浮かべる様子が変わるような気がするので不思議だなと思いました。ぼくの声の感じはどんな感じなのか、調べてみたいなと思いました。

資料1 声種の異なる「荒城の月」を鑑賞した後の感想

第2次：3～5／7時

自分の声のよさを生かすために、根拠をもって「荒城の月」の調性を選択して歌ったり、「花」「箱根八里」のどちらかや演奏形態（独唱と斉唱）を選んで歌唱したりする。

- (1) 自分の声のよさを診断するために、友達と歌声を聴き合ったり、旋律曲線をもとに、実際に歌ってみて自分の声の高さをとらえたりする。

イ短調、ニ短調、ト短調の3つの調性を取り上げ、ト短調とニ短調については、1オクターブ下げた音高も用いてどれが一番合うかを診断する。

(2) 題材の考え方

文化の学びとして展開する本題材では、滝廉太郎の歌曲演奏会を開くという目的をもち、自分の憧れる歌声にするために、自分の声の特性を生かす方向での音楽活動に没頭し、滝廉太郎の歌曲のもつ価値や自分自身にとっての滝廉太郎の歌曲の価値をとらえるとともに、世代を超えて、他者とともに音楽を共有することを感じ、音楽そのものに対する価値のとらえ方を更新することをねらっている。そこで、①滝廉太郎や彼がつくり出した楽曲への興味をもたせるとともに、自分自身の声の特性はどのようなものなのかに関心をもつための鑑賞活動②自分の声の特性を診断し、とらえるための歌声の聴き合い活動③とらえた声の特性を生かすための音高を選択する活動④自分の声の特性を生かす方向での曲想をもった楽曲を選択する活動を設定する。本題材の主な活動は鑑賞である。滝廉太郎の歌曲のよさを自分たちも表現することで味わうという「表現を鑑賞の手だてとして用いる」という考え方で題材を構成する。

第1次は、滝廉太郎の歌曲である「荒城の月」の鑑賞を通して、彼がどのような思いでこの曲を作曲したのかということへの興味をもったり、声種の異なる演奏でのそれぞれの表現のよさを味わい、自分の声への関心を高めたりして、自分の声のよさを生かして歌いたいという「音楽しようとする心」をもつことをねらいとしている。そのために、滝廉太郎の歌曲の文化的な背景となる彼の音楽に対する思いや生き方をとらえる読み物資料を提示したり、声種の異なる（アルト、テノール、バリトン）「荒城の月」を鑑賞する場を設定したりして、音楽美への求めやこれからの活動への求めを持たせることができるようにした。

考察1

資料1の反応のように、声の違いによるイメージの違いをとらえ、自分の声の特性に関心をもつとともに、「荒城の月」の美しさと滝廉太郎の思いとを関連づけて楽曲のよさを味わう姿が見られた。楽曲だけではなく、滝廉太郎の読み物資料と同時に出会わせたことや声種の異なる「荒城の月」を鑑賞する場を設定したことの有効性が明らかになった。

第2次では、自分の声のよさをとらえ、その「自分の声のよさを生かして歌いたい」という自分への求めと、「荒城の月の美しさを表現したい」というめざす音楽像への求めを実現するために、自分の声のよさを生かす方向で活動を選択し表現することを通して、音楽しようとする心と音楽する心を育むことをねらっている。そのために、まず、自分の声の特性をとらえるための歌声の聴き合い活動を設定した。ここでは、「荒城の月」の3つの調性（ト短調、イ短調、ニ短調）にしたものを提示し、どの調性で歌うと自分の声のよさを生かすことができそうかという観点で聴き合うようにした。このことによって、見られた反応が写真1である。この声のよさを生かすために、3つの調性の中から一つを選択し、実際に表現していった。この表現の際に、自分のめざす「荒城の月」にするために、音楽的な要素をどのように変化させてい



〈声の診断〉

ぼくの声は、
高くて透き通
っているよさ
があるのだな。
じゃあ、ト短
調の高さで歌
うのが、いい
な。ト短調を
選ばう。

写真1 ぼくの声には、どんなよさがあるのだろう

- (2) 自分の声のよさを生かすことができる調性を選び、自分のめざす「荒城の月」を歌唱する。



〈調性の選択〉

ぼくの声は、
ハッキリしてい
て、明るい声だ
ということがわ
かったよ。言葉
をハッキリさせ
て、たっぶり
ゆっくりめに
歌うよ。

写真2 ハッキリしたぼくの声のよさがいかせるぞ



資料3 H児が工夫を記述した楽譜の一部

- (3) 「花」と「箱根八里」のどちらが合うかを選択したり、斉唱か独唱かを選択したりして歌う。

第3次：6～7／7時

滝廉太郎の歌曲演奏会を開いて、自分たちのつくり出した表現を他者へと発信するとともに、「憾」を鑑賞して、本題材でとらえた滝廉太郎の姿や音楽そのものの価値について話し合う。

僕たちが歌っているとき、近くにいたおばあちゃんが、少したけ一緒に歌っていました。なんだかとても気持ちよくて、一緒に歌える歌があるっていいなと思いました。涙を流している人がいて、歌ってよかったなと思いました。

先生が弾いているピアノを聴くと、力強い生命力を感じました。廉太郎さんは、きっと、もっと音楽をしたかっただろう。亡くなったけれど、僕たちがこうやって歌っていけば、廉太郎さんの思いはかなえられると思います。

資料4 演奏会を終えての感想(一部抜粋)

資料5 「憾」を鑑賞した子どもの感想(一部抜粋)

【全体考察】

本題材では、個の求めからの活動の選択を、「自分の声の高さに合う楽譜を選んでの音楽活動」と「自分の声の質(感じ)に合う曲想をもった楽曲を選んでの音楽活動」としている。どちらも、めざす音楽像をもったあとに、実際の表現を通して、自分の声の特性を診断し、どのようなよさがあるのかをとらえてからの選択であったため、考察2のように、自分の特性を生かす方向での音楽活動を行う姿が見られ、自分の声の特性と音高との関係や曲想との関係をとらえて選択する分析的な思考が行われていることがわかる。また、子どもたちの中には、大勢の前で独唱を希望する子どもも出てくるようになり(音楽を楽しむ心の育ち)、特性を生かす方向で活動を選択することが、考察3のように、音楽する心と音楽心の価値をとらえる心を育む上で有効であることが明らかになった。しかし、楽曲の美しさを味わうことを主なものとしていた本題材において、歌うことへの自信、歌う自分への自信を高めることや、滝廉太郎の歌曲のよさも表現を通して味わってはいたが、鑑賞を主なものとする場合に、選択する活動を鑑賞の方法としてつくり出すことができないかを再考する必要があると考える。表現と鑑賞の活動と選択する活動の関係を類型化する必要がある。

けばよいのかを思考し、表現の工夫をすることができるように、何をどのように変化させればよいのかをモデル提示によって明らかにしていった。写真2に示している反応のように、強弱・速度を中心として変化させながら、重い感じの声や優しい感じの声など、自分の声のよさを生かす方向での声の感じを工夫する姿も見られるようになった。その工夫の内容を示したのが、資料3である。「荒城の月」の表現をつくり出した後、第1次に提示した読み物資料の中にあつた他の歌曲を歌う場を設定した。ここでは、「花」と「箱根八里」を選定し、自分の声のよさにこだわって楽曲を選択することができるようにした。写真2のH児は、自分の声のよさは「はつきりしていて力強い感じがするところだ」ととらえていたため、力強さを出すために「箱根八里」を選択し、自分の声のよさを生かせることができることに、自信をもち、独唱で歌うことにも取り組んでいった。

考察2

ここでは、写真1や写真2の反応から「自分の声に合う活動」を選択することができたことがわかる。子どもが自分の声の特性(よさ)をとらえるために、少人数での聴き合い活動を設定し、互いの声のよさを発見しようという活動を設定したことが、「自分の声」への理解を深め、それまで自分の歌声に自信をもてなかった子どもの自信を高め、資料3のような工夫をするために有効であった。また、活動の選択肢として、「荒城の月」の音高を変えた3つの楽譜を提示したことは、自分の声を生かそうとする態度を養うとともに、音高に対する感覚をも育てることにつながった。さらに、「花」と「箱根八里」を提示し選択する活動を設定したことは、声の高さだけではなく、その2曲の曲想から自分の声の感じを生かす方向での選択をする上で有効であったと考える。

第3次は、演奏会を開いたり、滝廉太郎の最後の作品「憾」を鑑賞して、「滝廉太郎が音楽に込めた思い」をさらに感じ取り、音楽そのものの価値へのとらえを更新していくことをねらいとしている。そのために、世代を超えて音楽の共有化を感じることができるよう老人福祉センターでの演奏会の場を設定した。そして、本題材の最後には、滝廉太郎が最後に作曲した「憾」を教師のピアノ演奏によって鑑賞する活動を設定した。その際の反応が資料5である。

考察3

資料4のように、音楽の共有化や自分の活動のよさを感じる姿が見られたのは、高齢者を対象とする演奏会を設定したからであり、最後に「憾」を鑑賞させたことは、資料5のように、楽曲に込められた作曲者の思いへの理解を深め、音楽の価値に対する考えを深めることにつながったと考える。

図画工作科学習の〈ふくおかプラン〉

I 創造的な技能を駆使し新たな表現を創り出す図画工作科学習

1 図画工作科での学ぶことと生きること

図画工作科の究極の目標は“豊かな情操を養う”ことである。美しいものを美しいと感じる心、これは人が人として豊かに生きていくために必要不可欠なものである。人は美しいものを創り出していきたくと根源的に求める。それは未来志向的な求めであり、それを創り出すプロセスにおいて、あるいは創り出した結果について、自らも他からも認められたとき、それは自信となって自分の人間としての価値(自己効力)を見いだしたり、人間として生きることの喜び(生きがい)を見いだしたりするのである。そこに、図画工作科と人間が「生きる」ということにつながりを見いだせる。そこで、これから子どもたちにとって大切なものの一つになるのが、材料や造形対象と深くかかわり、造形的な自分の求めをもとに、新たな美を創造していくクリエイティブな創造性である。よって図画工作科では、創造性をはぐくみ美の文化の継承や新たな創造の基礎を培っていくものである。つまり、美の文化の継承や創造を通して、創造的な思考力や創造的な技能をといった創造性を育成し、さらに新たな文化創造への感性を高めていくことが大切である。

2 図画工作部主題についての説明

「創造的な技能を駆使する」とは、造形的な自らの求めを実現していくために、材料や造形対象に働きかけ合

いながら色や形の構成や方法を発想し、美の創造に対する実現の見通しをもって技能を用いていくことである。「新たな表現を創り出す」とは単に①作品を創る(作品創造)ことではなく、②自分のとって新たな表現の方法(方法創造)をあみだしていく、③新たな表現の意味(内容創造)を見いだしていく、④自分にとってあるいは他にとって造形的な価値を創り出す(美の創造)ことである。これまで自分がもっている創造的な思考力や技能を、自分の求めに応じて選択したり、総合的に生かしたりして、自分にとって新たな表現方法や表現内容を発見しながら自分の美の文化をつくりあげていく。そして、その表現のプロセスにおいてそれらを活用し、自らの表現を練り上げていくことで、一人一人の創造性を高めていくことができるのである。

- 材料と造形対象とかかわり合うことを通して、自分にとってあるいは他者にとって、美しいもの、心地よいものを創り出していく目的と価値を見いだしている子ども (学ぶ意義)
- 材料と造形対象に対して多面的に特徴をつかみ、その特徴から表現の見通しをもって、形や色を構成したり、材料や用具を効果的に用いながら表現する子ども (能力)
- 自分の表現過程や作品をふり振り返り、自分の表現の意味や価値を見だし、これからの自分の造形的な表現に生かしていく求めをもつ子ども (自信)

【表 豊かに生きる子どもをはぐくむための図画工作科の基礎基本】

図画工作科を学ぶ意義					
○ 材料と造形対象とかかわり合うことを通して、自分にとってあるいは他者にとって、美しいもの、心地よいものを創り出していく目的と価値を明らかにし、造形活動することを通して、美しいものを求め自ら創り出す求めをもつことができる。					
能力	A 学力 実体的 学力	観点	低 学 年	中 学 年	高 学 年
		構成力	並べる、積む、色や形を組み合わせるなどして、思いにあった形や色をつくることができる。	表したいことをもとに、形や色などの材料の特徴を生かし美しさや用途を考えて構成できる。	表現意図や、伝えたいことに合わせて、材料を組み合わせ、色や形を効果的に構成できる。
	活用力	身近な材料や用具について、手や体全体の感覚を働かせながら、自分の表現したいことから使うことができる。	これまで経験のある材料や用具にあわせて、目的や用途にあった材料や用具を選択し、使うことができる。	これまで経験のある材料や用具を自分の表現にあわせて、その特徴を生かし効果的に使うことができる。	
	B 学力 機能的 学力	発想力	材料や造形対象に体全体でふれ、つくりたいものやつくりかた、表し方を思いつくことができる。	材料や造形対象の特徴をとらえ、その特徴や目的からつくりたいものや方法を思いつくことができる。	材料や造形対象の特徴と、自分の思いを比較して、効果的な表現方法を思いつくことができる。
		構想力	自分がつくりたいものや、好きな材料、好きな色、つくる方法などを考えることができる。	色や形の組み合わせの面白さや美しさを考えながら、材料やつくりかたの見通しをもつことができる。	表現の目的や意図、方法から形や色、材料や用具を選択し、表現の見通しをもつことができる。
		鑑賞力	自分や友達作品の美しさやおもしろさに関心をもって、それらを見つけることができる。	自分や友達作品の表現の過程や作品の見方・感じ方・表し方の違いや美しさに気づき、自分の表現と比べることができる。	友達やその他の芸術作品の表現のよさを感じ取り、その違いを認め合いながら自分の表現に生かしていくことができる。
自信	○ 自分の表現の過程や表現物をふり振り返り、表現の目的や他者の評価と合わせながら、自分の表現の意味や価値を見だし、自らの造形活動に対する効力感や達成感を味わうことができるとともに、これからの自分の造形的な表現に生かしていく求めをもつことができる。				

Ⅱ 対話的造形活動を促進するコラボレーション学習プラン

図画工作科部 北 田 尚 雄

1 副主題の意味

「対話的造形活動」とは、造形活動において、自分や自分の身近な人や身の回りの環境(自然物、場所)と、以下のように双方向に対話していくことである。

表1 新たな表現を創り出す対話活動

他の人との対話	表現内容や表現方法、あるいは作品について友達や先人など他の人に伝えたり、他の人の考えを聞いたりしながら、新たな表現を生み出していく。
環境との対話	自分に身近な生活のなかの自然物や人工物、光や風、場所の様子など空間に造形活動を通して働きかけることで、そのまわりの環境は形や色、雰囲気などの空間の変化から、また自分に働きかけてくれる。
自分との対話	これまでの自分の表現をふり振り返り、これまでの知を選択・統合しながら、これまでとは違った新たな表現を生み出しながら表現を練り上げていく。

「造形的コラボレーション」とは、自分の身の回りの人や環境を、自分の表現に取り入れながら、新たな表現内容や表現方法を生み出していくことで、自分にとって美しいもの、おもしろいもの、心地よいものを創り出していく協働的な学びを大切にしたい造形表現活動のことである。これまでは、自分だけの表現を追求する制作や、一人一人が部分部分を受け持ち、役割分担をされた共同制作がほとんどであった。しかし、これからの創造は自分だけが満足するのではなく、他にも受け入れられる創造が必要である。人や環境とのかかわりをもつことで、今まで気付かなかった自分の表現の特性や新たな発想に気付く造形的な自己開発を行い、個人の知を、組織全体に共有化させながら、自分や他の人や環境と対話し、そこでつかんだ知をさらに個人の表現に活用し自らの美の文化を創造していく。これが造形的コラボレーションにおける「自己開発」と「文化の学び」の統合である。

2 学習プランの具体的構想

● 対話的造形活動を促進するコラボレーション学習の題材の条件

文化の学びを具現化していくために、「学力」では思考と技能、「学ぶ意義」では人と環境、「自信」では自己と情操をキーワードに、題材もその視点で選択する。

表2 対話的造形活動を促進する題材の条件

- 造形活動を行う上で、学習者全体に共通の目的(テーマ)や共通の造形空間があり、それぞれの学年にあった、創造的な思考力や技能が高まるような材料を用いていく題材
- 学習者どうしや造形活動にかかわる人と相互の表現について積極的な情報交流が期待できる題材
- 身の回りの場所や環境とのかかわりから、新たな表現内容や表現方法が生まれるような題材
- 創り出す表現や作品が、生活のなかに生かされるとともに、その美しさや心地よさが造形的な感性を高めていくような題材

学年系統については、子どもの造形活動の傾向から、情報交流や造形環境を考えて以下ようになる。

表3 対話的造形活動の学年系統

○導入期(低学年)	活動に遊び性があり、友達と作品をつないだり組み合わせたりできるような造形場所の設定とそれに適した材料を用いた題材
○習得期(中学年)	グループの成員で共通の目的をもち、共通の材料や用具を用い、展示場所などの環境と組み合わせで話し合っ制作できる題材
○発展期(高学年)	学級の成員で、共通の目的のもと共通の造形空間をもち、材料や用具を総合的に用いるとともに、身の回りの環境との組み合わせが期待できる題材

● 対話的造形活動を促進するコラボレーション学習の活動構成

題材全体を通して、「学ぶ意義」については「価値創造」の活動から、「学力」については「学力形成」の活動から、そして、「生きる自分のよさへの自覚(自信)」のそれぞれを高めていく活動を下図のように構成する。

	表現構想段階	作品制作段階	作品展示段階
学力形成	◎ 自分の表現のテーマに合わせて、材料や表現方法の構想を考える。 ○ 表現内容や方法を発想し、表現の見通しをもつこと	◎ 自分が決めた表現構想にしたがって、材料や表現方法を選択しながら表現する。 ○ 材料や表現のテーマに合わせて、形や色の構成の美しさを考えながら表現すること	◎ 自分の表現テーマや作品をさらに生かすような作品構成や展示表現をする。 ○ 作品のストーリーや表現テーマに合った飾り付けや展示方法を考え表すこと
価値創造	◎ 身の回りの自然や環境にある美と出会い、表現テーマを設定する。 ○ 身近な生活のなかにある美しさに気付くこと ◎ 表現テーマや表現の方法について友達と情報交流する。	◎ 作品と身の回りの場所や環境との調和を考える。 ○ 場所や環境を考えながら、新たな表現を発想すること ◎ 表現方法について、お互いのよさを交流する。 ○ 自他の表現のよさに気付くこと	◎ 作品と場所や環境との調和やテーマ性を話し合い、新たな展示方法を考える。 ○ 場所や環境との調和を考えた展示をしたり、自分たちの作品のよさを認め合ったりすること
自信	◎ 美に対する思いや、自分たちの作品、表現活動の過程をとおして、美しいものや、心地よいもの、おもしろいもの、自分たちの表現の価値や意味について考える。		
支援	※ 表現についての自他(友達や先人)の考えの交流活動 ※ 生活のなかの美について気付く、ヒント資料提示	※ 表現テーマに合った方法を、選択するための材料提供 ※ 場所や環境との組み合わせを、試しながら表現する活動設定	※ 作品を引き立てていくための、装飾材や展示環境の提供 ※ 自他の作品や表現の価値に気付く鑑賞会の設定

図 対話的造形活動を促進するコラボレーション学習の活動構成

国語科学習の〈ふくおかプラン〉

I 文章とかかわり自分の考えを創り出す読むことの学習

1 国語科での学ぶことと生きること

国語科が究極のねらいとしているのは、言語能力を育成するとともに、国語を尊重する態度を育てていくことである。つまり、日常の言語生活を豊かに充実させ、それを通して人間を高めていく子どもの育成である。国語科を学ぶということには二つの側面がある。一つは認識の側面である。認識とは、言語を通して何かを感じたり考えたり物事をつかみ取ったりする、思考を推し進めていくのになくてはならぬ働きである。もう一つは伝達の側面である。伝達とは、言語を通じて自己の自分の思想・感情を表し互いに意志を通じ合う働きであり、社会生活に不可欠な働きである。この二つ側面を高めていくことは豊かに生きることにつながる。

2 国語科部主題についての説明

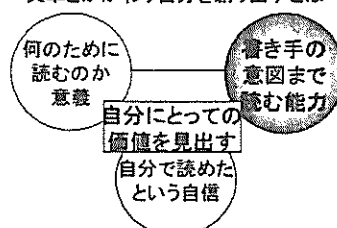
文章とかかわるとは、「何かを解決したい」「何かについて知りたい」という課題意識をもって読むことである。課題意識をもつことにより、何のために読むのか読む意義を感じながら主体的に読むことができる。そのためには、文章を一読してわかったつもりになっている子どもたちに、実はわかっていなかったということを気付かせることが必要である。そのことが、読み手にとっての課題となる。

自分の考えとは、書き手の考えをきちんと受け止めたうえで、それが自分にどういった価値があるのか考えた結果である。このような自分の考えは、文章と読み手との「相互作用的な」かかわりの中で生み出される。

文章とかかわり自分の考えを創り出すとは、課題意識をもち、子どもたちが何のために読むのか意義を感じながら、ことばとことばを関係付け、書き手の意図まで読

み取って、自分にとっての価値を見出すことである。書き手の意図まで読み取るとは、書き手が伝えようとしていることだけでなく、自分の考えを読み手に伝えようと工夫した述べ

文章とかかわり自分を創り出すとは



【図1 文章とかかわり自分を創り出すとは】

方まで含み込んだものである。

文章とかかわり自分の考えを創り出す読むことの学習とは、自分の考えと書き手の考えを常に比べながら自分にとっての価値を見出す学習である。子どもたちは、書き手の考えが他の事象や自分に当てはまったとき、なるほど書き手の伝えたいことはこういうことだったのかとよくわかり納得する。そうすることで、本当に自分自身で文章を読むことができた自分に自信をもつことができる。つまり、自分にとっての価値を見出すためには、書き手の考えをとらえ、とらえた書き手の考えを他の事象や自分に当てはめてみる必要があるのである。

このような読むことの学習をすることで、次のような子どもの姿をめざす。

- 課題意識のもと、文章とかかわり、書き手が伝えようとしていることをとらえながら、自分の考えをもつことができ、学ぶ意義を実感している子ども(学ぶ意義)
- 書き手が伝えようとしていることが意図まで含めてわかり、書き手の伝えたいことはこういうことだったのかと納得する子ども(能力)
- 書き手が伝えようとしていることをとらえ、自分の考えをもつことができる存在であることを自覚し自分に自信をもつ子ども(自信)

【表1 豊かに生きる子どもをはぐくむための読むことの基礎基本】

観点			低 学 年	中 学 年	高 学 年
学ぶ意義			事柄と事柄の違いにかかわる課題意識をもって文章を読むこと	段落と段落との関係にかかわる課題意識をもって文章を読むこと	事例を取り上げた筆者の意図にかかわる課題意識をもって文章を読むこと
能 力	A 実体的学力	読む力	事柄の順序や場面の様子に気づき内容の大体を読む力	段落相互の関係を考え、内容の中心をとらえて読む力	主題や要旨、文章の構造を考えながら読む力
	B 機能的学力	思考力	言語を比べながら意味付けくわしく考える力(具体化)	言語を比べながら関係付け考えをまとめる力(具体化・抽象化)	言語を比べながら構造化し考えを広げ深める力(概念化・一般化)
自信			読む力と知識が量的に拡充した自分に自信をもつこと	読む力と知識が質的に拡充した自分に自信をもつこと	読む力と知識が質・量ともに拡充した自分に自信をもつこと

II 情報比較を位置付けた説明文の学習プラン

国語科部 光 延 正 次 郎

旨を把握しながら読むことができるよう論証型・論説型の教材を選定する。

【表2 情報比較によりねらいを達成する教材選定】

年	ねらい	比較の仕方	教材の特質
低学年	事柄の順序に気付く	事柄と事柄との比較	読み手にある事柄を説明したり紹介したりする説明型・紹介型
中学年	段落相互の関係を考える	段落と段落との比較	読み手にある事柄について証明して真実を伝達する実証型・論証型
高学年	要旨を把握する	朝と朝、朝と暮、全体と部分との比較	読み手にある事柄について理詰めで説明する論証型・論説型

● 観点や情報を選択する場の設定

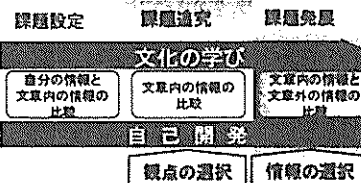
自ら学びを構成して、自分で読めたという実感をもつことができるよう、自分が比較したい情報を選択したり、自分が情報をどの観点から比較するか比較したい観点を選択したりする場を設定する。

【表3 情報の選択の仕方とその使い方】

年	選択の仕方	選択する情報	選択した情報の使い方
低学年	みんな	いくつかの事柄から選択	詳しくした考えが選択した事柄に当てはまるか確かめるため
中学年	教師の助言により	いくつかの事例から選択	まとめた考えで選択した事例を見つめるため
高学年	自分の力で	いくつかの自分の生活事象から選択	広げ深まった考えで選択した自分の生活事象を見直すため

● 情報比較を位置付けた活動構成

説明文の単元を課題把握(つかむ)、課題追究(つくる)、課題発展(見出す)の3段階で構成する。



【図3 情報比較を位置付けた活動構成】

1 副主題の意味

情報とは、あることについての報せと発信者の思いである。情報の種類は、自分がもっている情報、文章に書かれている情報、文章外にある情報の3つである。情報比較とは、これら3つの情報を①自分の情報と文章内の情報の比較、②文章内の情報の比較、③文章内の情報と文章外の情報の比較の3通りの組み合わせで比べ、情報の意味を吟味していくことである。情報比較を位置付けたとは、以上のような情報比較を①→②→③という順に説明文の学習に位置付けることである。それは、主体的に文章にかかわり、自分で読みや考えを創ったりするためには、次のような展開が欠かせないからである。まず、自分の内からの気がかりや疑問を生み出し文章を追究しようという課題をもたせるために、自分と文章とのズレを起こさせる。つまり、自分の情報と文章内の情報の比較である。そのズレから生み出された課題を解決するために、文章内の情報を比較する。さらに、読み取った筆者の考えを自分の立場から価値付けるために、文章内の情報と自分が選んだ文章外の情報と比較するのである。このように、3つの情報比較で、自分の課題をもとに文章を追究し、筆者の考えを自分の立場から価値付けて自分の考えを創っていく文化の学びとして展開する。そして、自分で情報を選択したり比較したりして学習を創っていく自己開発を重視する。

【図2 情報比較を位置付けるとは】

2 学習プランの具体的構想

● 情報比較によりねらいを達成する教材選定

情報比較により発達段階ごとのねらいを達成できる教材を選定する。低学年では事柄の順序に気付きながら読むことができるよう説明型・紹介型の教材を選定する。中学年では段落相互の関係を考えながら読むことができるよう実証型・論証型の教材を選定する。高学年では要

【表4 情報比較を位置付けた活動構成の詳細】

段階	課題把握(つかむ)	課題追究(つくる)	課題発展(見出す)
情報比較	自分の情報と文章内の情報の比較	文章内の情報の比較	文章内の情報と文章外の情報の比較
習熟	教材との出会い ○教材との出会い、通読 ○自分の情報と文章内の情報を比較することによる課題設定	教材の読み ○文章内の情報を比較することによる課題追究	自分の考えの明確化 ○文章内の情報と自分が選んだ文章外の情報との比較による自分の考えの書きまとめ
ねらい	・文章内の情報を比較せざるをえない課題の設定	・筆者の意図までのわがりの強化	・筆者の考えに対する自分の考えの明確化
支援	・分析しておいた子どもたちが既にもっている情報と文章内の情報の比較提示	・比較する方法の明確化(何と何を、どのように) ・比較する観点を選択する場の設定	・写真や映像や実物や文章など新しい情報の提示 ・情報を選択する場の設定

3 指導の実際

第5学年 単元

新聞と放送の事例を取り上げた 筆者の意図を考えよう

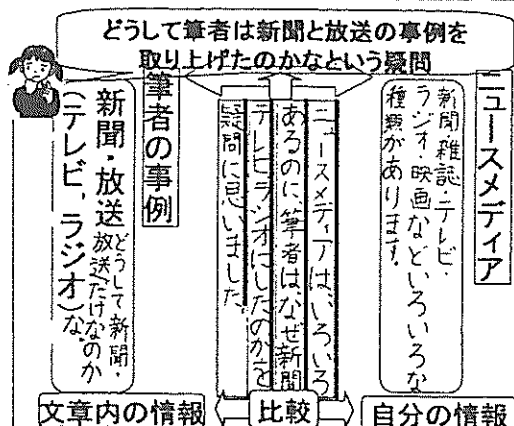
(1) 単元の見目標

- 1 どうして筆者は新聞と放送の事例を取り上げたのか知りたいという課題意識のもと、意欲をもって「ニュースを伝える」を読むことができる。
- 2 筆者が新聞と放送の事例を取り上げた意味を考えながら要旨をとらえ、要旨に対する自分の考えを明確にすることができる。

(3) 学習の流れと考察

第1次：1～2 / 7時

ニュースを伝える多くのメディアの中で新聞と放送の事例が選ばれていることについて話し合い（自分の情報と文章内の情報の比較）、課題を立てる。



資料1 H児の学習ノートへの記述

第2次：3～5 / 7時

新聞記事の工夫と放送の記事の工夫はどちらがうのか読み比べ（文章内の情報の比較）、2つの事例を取り上げた筆者の意図を読み取る。

- (1) 新聞と放送の工夫はどちらがうのか読み比べる観点を選択する。

T どのような面から新聞と放送の工夫の違いを読み比べていったらいいかな。
H児 （話し合いの後）伝達形式の違い、分かりやすい文の書き方という二つから比べたい。

資料2 H児の読み比べる観点

- (2) 選択した観点で新聞と放送の工夫はどちらがうのか読み比べたことを表にまとめる。

(2) 単元の考え方

本単元は、どうして筆者は新聞と放送の事例を取り上げたのか知りたいという課題意識のもと、筆者が新聞と放送の事例を取り上げた意味を考えながら要旨をとらえ、要旨に対する自分の考えを明確にすることをねらいとしている。具体的には、①ニュースを伝える多くのメディアの中で新聞と放送の事例が選ばれていることについて話し合い（自分の情報と文章内の情報の比較）、ニュースの工夫について伝えるために2つの事例を取り上げた筆者の意図に向かう読み深めの課題を立てること、②新聞記事の工夫と放送の記事の工夫はどちらがうのか読み比べ（文章内の情報の比較）、伝達形式が違う新聞の事例と放送の事例を取り上げた筆者の意図を読み取ること、③新聞の事例と放送の事例を比べて読むことにより読み取ったそれぞれ工夫と、実際の新聞やニュース番組を比較し（文章内の情報と文章外の情報の比較）、読み取った工夫を納得することが、主な学習内容である。

第1次は、「どうして筆者は新聞と放送の事例をあげたのか読み深めたい」という課題意識をもたせることをねらいとしている。そのために、題名を提示しニュースメディアにはどんな種類があるか話し合った後に、冒頭の文章を提示し筆者がニュースを伝える多くのメディアの中で新聞と放送の事例を取り上げた理由について話し合わせた（自分の情報と文章内の情報の比較）。そのときのH児の学習ノートへの記述が資料1である。

考察1

資料1の記述から、H児はニュースメディアはいろいろあるのに、筆者はなぜ新聞、テレビ、ラジオを取り上げたのか疑問に思っていることがわかる。これは、ニュースメディアに対してこれまで自分がもっていた情報と文章内の情報にズレが起き、疑問が芽生えたことの現れである。このことから、ニュースメディアにはどんな種類があるか話し合った後、ニュースを伝える多くのメディアの中で新聞と放送の事例が選ばれていることについての話し合い（自分の情報と文章内の情報の比較）から課題意識をもたせることができたと考える。

第2次は、新聞と放送の事例を取り上げた筆者の意図を読み取らせることをねらいとしている。子どもたちは、「筆者が新聞と放送の事例をあげたのは、新聞と放送では工夫の違いがあるからではないか」と予想し、新聞と放送の工夫はどちらがうのか読み取っていかうとする思いをもった。そこで、新聞と放送の工夫はどちらがうのか読み比べる観点について話し合った。そのときのH児の反応が資料2である。H児は、資料3のように、話し合いの中で出た観点の中から、伝達形式の違い、分かりやすい文の書き方という観点を選択し、新聞と放送の工夫はどちらがうのか読み比べたことを本文から書き抜き、表にまとめていった（文章内の情報の比較）。そして、書きまとめたことを交流していった。そのときのH児の発表内容が写真1の吹き出しである。

考察2

資料3の記述から、H児は、伝達形式と分かりやすい原稿

分かりやすい原稿の書き方	伝達形式	
・読者がゆとりで読むこと ・文が長くても ・読み取れる ・逆三角型に ・し、要旨を ・みとらす	・読者がゆとりで読むこと ・文が長くても ・読み取れる ・逆三角型に ・し、要旨を ・みとらす	新聞 印刷された 活字を読む が読む
・聞き間違い を防ぐ「医 療品」「薬 品」 ・聞き間違い を防ぐ工夫が 必要だとなら ・いが生まれ ・くる	・読者がゆとりで読むこと ・文が長くても ・読み取れる ・逆三角型に ・し、要旨を ・みとらす	放送 アナウンサー が読む話を 聞きとる
		ちがい 伝達形式の違い が生まれている ことがわかって いる

資料3 H児が読み比べてまとめた表

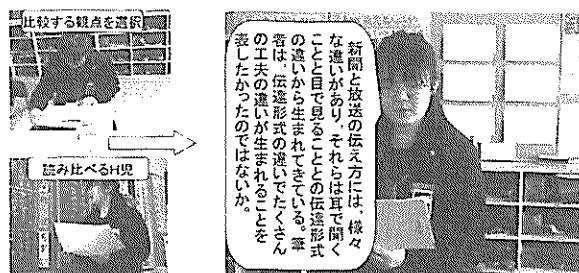


写真1 読み比べたことを発表するH児

第3次：6～7/7時

読み取った工夫と、実際の新聞やニュース番組を比較し（文章内の情報と文章外の情報の比較）、読み取った工夫を実感し納得する。



写真2 実際の新聞記事を読んだ感想の発表

の書き方という2つの観点をもとに、新聞と放送はどう違うのか読み比べたことを本文から必要な部分を書き抜いていることがわかる。また、資料3の「ちがい」の欄への記述や、写真1の吹き出しから、H児は、新聞と放送の伝達形式の違いから様々な工夫の違いが生まれることが表しかつたからという、筆者が新聞と放送の事例を取り上げた意図までとらえていることがわかる。これは、新聞と放送の事例を比較したことにより創り出された読みである。このことから、新聞と放送の工夫はどちらがうのか比較すること（文章内の情報の比較）から、伝達形式が違う新聞と放送の事例を取り上げた筆者の意図を読み取らせることができたと思う。

第3次は、筆者の伝えたかった新聞と放送の工夫がよくわかり納得させることをねらいとしている。そのために、実際の新聞やニュース番組では、筆者の伝えたかった新聞や放送の工夫が本当になされているのか確かめたいという思いがふくらんでいた子どもたちに、実際の新聞記事とテレビのニュース番組を提示した。すると、子どもたちは、実際の新聞記事とテレビのニュース番組のどちらで確かめたいか選択し、読んだり見たりしながら工夫を確かめていった（文章内の情報と文章外の情報の比較）。H児は、実際の新聞記事を選択し確かめていった。そのときの実際の新聞記事を読んだ感想発表が写真2である。その後H児は、「ニュースを伝える」の学習後の感想を資料4のようにまとめていった。

考察3

写真2の吹き出しから、新聞は逆三角型の構成になっているからわかりやすいことを納得していることがわかる。これは、実際の新聞記事を読んだことにより生まれた姿である。このことから、読み取った新聞の工夫と実際の新聞を比較させたこと（文章内の情報と文章外の情報の比較）から、新聞の工夫がよくわかり納得させることができたと思う。

資料4から、H児は新聞と放送の事例を比べて読んだり、新聞や放送の工夫を実際の新聞やニュース番組から選んで確かめたりしたことで、新聞や放送の工夫がわかったという感想をもっていることがわかる。このことから、3つの情報比較を位置付けたことは有効であったと思う。

これからのニュースとわたしたち
ニュースは、ただ単に世間の出来事を人々に知らせるものだと思っていた。しかし、わたしは、普段、なんとなく見ていたニュースに対しての考えをこの「ニュースを伝える」の文章を読んで改めた。
「ニュースを伝える」の学習では、まず、新聞と放送の事例を比べて読んだ。そのことにより、新聞には読みやすくなるよう逆三角型の構成の工夫がされているし、放送では聞きやすいように、文を二つに分けたり、聞き間違いを防ぐため言葉の使い分けをする工夫がなされていたりすることが分かった。つまり、放送と新聞は、一見同じようだが、中のニュースを伝える仕組みは全く違うのである。次に、新聞や放送の工夫を実際の新聞やニュース番組から選んで確かめた。そのことで、新聞と放送では、「読む」という伝達形式と、「聞く」という伝達形式の根本的な違いがあることに気付いた。そして、これらの新聞や放送のニュースメディアに対してされている工夫は、それぞれの伝達形式に応じて、より人々に伝わりやすいように、うまく使われていることが納得できた。
わたしは、この「ニュースを伝える」の文章を読んで本当に良かったと思った。

資料4 H児の「ニュースを伝える」の学習後の感想

【全体考察】

以上のような実践を通して、子どもが情報を比較したいと思うような必然性をもたせることが重要であることを感じた。そのためには、一つの事例ではなく複数事例を通してある事柄について説明してある教材が、事例と事例を比較したいという子どもの必然性が起こることや、いくつかの情報の中から比較する情報を選択させる必要があることも痛感した。今後は、文章内の情報を比較する活動での、低中高の発達段階に応じた具体的な比較の仕方を開発していきたい。

Ⅱ 場面に応じて動きを生み出す活動を位置づけた学習プラン

体育科部 久保勝美

1 副主題の意味

場面とは、基本の運動領域における子どもが想像の世界に身を投じて展開する学習において、器械・器具や用具によって構成される状況のことである。場面によって活動の場の意味や動きが規定される。場面に応じて動きを生み出すとは、子どもが必然をもって設定された活動の場の意味に合った動きへと自分の動きを変化させていくことである。場面に応じて動きを生み出す活動を位置づけた学習プランとは、基本となる動きをつくった上で場と動きの相互作用から子どもが自分で動きをつくり出していく主体的な学びを意図的に形成することである。

2 学習プランの具体的構想

● 価値ある動きを楽しくつくり出す教材化

価値ある動きをつくり出していくには、健康や体力といった面から意味がある動きをつくり出させることが必要である。また、単にトレーニング的なやらせる、やらされる活動ではなく、子どもにとって意味をもった目的的な活動でなければならない。そのために、動きと場面、物語をねらう動きのかたちのつながりである系統と易から難への方向にある段階から吟味し教材化する。(表1)

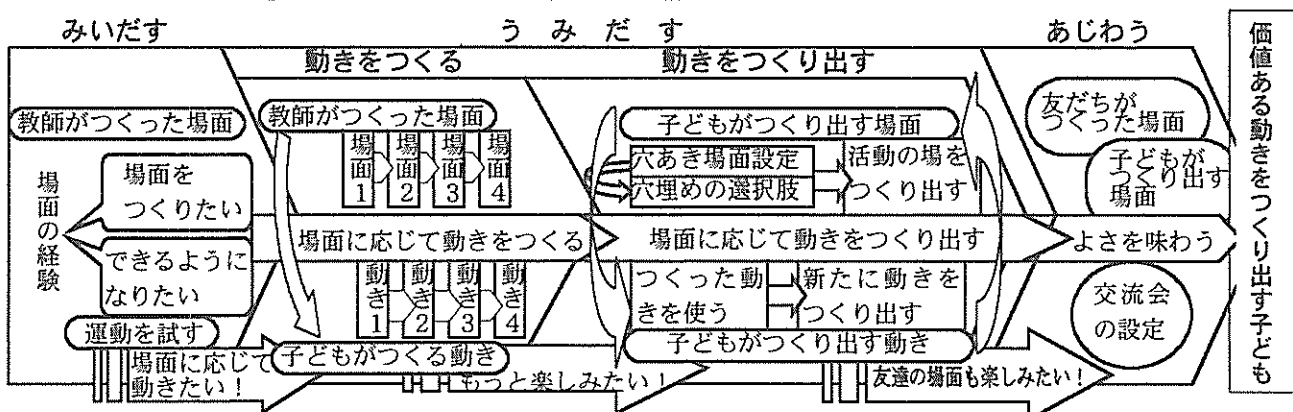
【表1 動きの系統と段階の例(壁の姿勢を変える時)】

系統→	這う、四つ足歩行→	腕支持跳躍→	倒立
段階 難 ↓ 易	壁を付けない四つ足歩行	壁より頭が低い位置	壁倒立などのほぼ垂直の姿勢
	壁を立てての四つ足歩行	壁と頭が同じ位置	壁や台を用いた斜めの逆さ姿勢
	お腹を付けて這う	壁より頭が高い位置	かえる倒立など頭の位置を下げた姿勢

①動きを教材化する。

運動の特性に応じた系統的な動きを、易しい動きから難しい動きへと段階的に配列する。このことで、様々な運動の素地となる基本的な動きを、確かで多様な動きとなるようにする。そのために、発達段階と運動の特性を考慮し巧みさにかかわる3点から動きを教材化する。

【図1 場面に応じて動きを生み出す学習プランの基本的な活動構成】



ア 動きのかたち

逆さ感覚であれば這う、四つ足歩行、腕支持跳躍、倒立等の体を支える系統にある動きを段階的に配列する。

イ 動きの大きさ

逆さ感覚であれば姿勢の傾きの大きさを変化させ、徐々に頭と腰、足の位置を倒立状態へ近づけていくことにより強い逆さ感覚を味わえるとともに、段階的に体をささえる腕にかかる体重の割合を増やしていく。

ウ リズムと方向

逆さ感覚であれば手足を動かす位置を遠近や左右の視点から変化させたり、間隔を違えたり、動かす手足の左右の順序や組み合わせを変化させたりして、多様なリズムや方向を易から難へ段階的に経験できるようにする。

②物語や場面を教材化する。

「冒険や探検のスリルなどのなりきる楽しさ」と「系統的な動きを段階的に続けて行う場面の連続」、「活動の場を操作できる場面の発展」、以上の3つの視点から吟味し、物語や場面を教材化する。このことで、物語の状況に身を置き、活動の場を場面に見立てて活動することそのものを楽しむことができるようにする。

● 子どもの学びを保障する活動の場の設定

動きをつくり出す段階において、ねらいとする動きの系統と段階に沿って子どもが場面をつくり出していけるよう選択・工夫できるようにする。そのために、物語の場面を変化させる内容を示し、制御するために穴埋め式の文と選択肢を提示する。選択肢は動きの系統と段階からかたちや大きさ、方向・リズムなどの視点から吟味し、活動の場を構成する器械・器具、用具とともに提示する。

● 活動の個性化を図る基本的な活動構成

自分の動きを運動に近づけたり、運動を自分に近づけたりする両面から学習活動を選択・工夫しながら課題を追究していく学習を基盤とする。そのためにまず、図1に示すように教師が系統と段階から動きを吟味して提示した場面と活動の場の下で全員が共通に活動し、効率的に基本的な動きをつくる「つくる段階」を位置づける。次に、共通に活動の場を経験する中でつかんだ自分像をもとにして、子どもが主体性を発揮して自分に合った活動の場や活動の場に応じた多様で正確な動きをつくり出す「つくり出す段階」を位置づける。これら2つの段階からなる「うみだす段階」を柱として活動を構成する。

第3学年 単元

つくって楽しもう!探検マット ～楽しく確かな体力づくり～

(1) 単元目標

- 1 探検を楽しむために必要なめざす動きに自分の動きを近づけたり、自分の動きに場面である活動の場を近づけたりすることを楽しみ、作り出した価値ある動きのよさを味わうことができる。
- 2 いろいろな姿勢を腕で支えたり逆立ちしたりする方向や回数、速さを変化させ、いろいろな姿勢を腕で支える価値ある動きをつくり出すことができる。

(3) 学習の流れと考察

第1次：1／6時

探検マットの動きを試し、もっと探検を楽しみたいという意欲とともに、場に動きを合わせることや自分に場を合わせる学習の進め方について話し合う。

- (1) 「逆さの国につながる道」と「逆さの国」の場面からなる探検マットを試す。
- (2) 試した探検マットの感想と単元全体のめあてについて話し合う。

もっと岩うつりの場を楽しみたいです。なぜかという、まだ岩うつりの動きができていないので、もっとやってむずかしいのにチャレンジしてできるようになりたいからです。また、今日のお話では、坂をのぼっていく所がないから岩うつりの場で岩にのぼるための坂が出てくるお話をうたって、もっと楽しめるようにしたいです。

資料1 探検マットを試した後のA児の感想

第2次：2～5／6時

活動の場を探検コースに見立てて進んでいく探検マットを楽しむなかで、いろいろな姿勢を腕で支える大きさやリズム、力加減を変化させ、いろいろな姿勢を腕で支える価値ある動きをつくり出させる。

(2) 単元の考え方

文化の学びとして展開する本単元では、まず、逆さの国をめざす探検をつくって楽しむという目的意識をもたせる。そして、いろいろな姿勢を腕で支持する動きができるようにするために、場面に応じて動いたり、場面をつくったりすることを楽しみながら繰り返すなかで、価値ある動きをつくり出すことをねらっている。そこで、①見通しと意欲をもたせる探検マットを試す活動、②教師が提示した場面に応じる動きをつくりながら探検を楽しむ動きをつくる活動、③選択・工夫しながら自分で場面をつくり、場面に応じる動きをつくり出す活動、④友達がつくった場面に応じる動きのよさを味わう活動を設定する。本単元の主な活動は場面に応じて動きをつくり出すことである。場面をつくり、つくった場面に応じて多様で確かな動きをつくり出すという「場面づくりを価値ある動きをつくり出す手だてとして用いる」という考え方で単元を構成する。また、「逆さの国につながる道」から「逆さの国」へ王様の宝を目指して進む物語が貫く。

第1次は、探検を楽しみたいという意欲とともに、場に動きを合わせることや自分に場を合わせる学びを見通させることをねらっている。そのために、探検マットの場面である活動の場、動き、活動の場づくりを試す活動を行わせた。

探検マットの主な場面

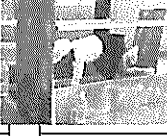
《逆さの国につながる道》手をついて進む岩くぐり、平均台に手をつき左右に跳び越す「丸太橋」、高い位置から低い位置へ頭から移動する「岩移り」、手をつき腰を上げる「証明」
《逆さの国》手をつき足を引き寄せる「アメンボ池」、蛙跳びを行う「蛙池」、足を鉄棒にかけける「こうもり谷」、手押し車で進む「庭」、壁倒立し足を的に当てるチャイム、壁倒立で足じゃんけんを行う「王様の部屋」などの場面

考察1

資料1からA児は、「もっと探検マットを楽しみたい。」という探検マットの目的意識をもち、動きの不十分さや探検のお話づくり、場の魅力から課題と場面や動きをつくる学習活動の見通しをもたえたことがわかる。これは、魅力ある探検の世界を繰り返し試したからである。つまり、物語の状況に身を置き、活動の場を場面に見立てさせることと、自分でお話とともに活動の場をつくる教材化が有効であった。

第2次では、探検マットを楽しむなかで、いろいろな姿勢を腕で支える動きを腕にかけける体重の割合や逆さの度合いを変化させても対応できる価値ある動きをつくり出させることがねらいである。そのために、まず、動きをつくる段階では、資料1に示すように逆さの姿勢を腕で支持する動きの系統と段階から構成した探検の場面と場を提示した。

【物語】 わずかな隙間しかない岩の間をくぐり抜ける「岩くぐりの場」、川に架かっている丸太橋と岩を使って進む「丸太橋の場」、毒がある枝に当たらないように岩から岩へ移る「岩移りの場」、逆さの国に入るために体を逆さにできることを証明する「証明の場」がある逆さの国につながる道を進んで逆さの国をめざす。

場面1 岩くぐりの場  膝をつかないことで腕にかかる体重を腕で支えながら進む動きをつくった。	場面2 丸太橋の場  平均台に手を着き、左右に跳び移る体を瞬間的に腕で支える動きをつくった。	場面3 岩移りの場  頭が下になる逆さの姿勢を数秒間、腕で支える動きをつくった。	場面4 証明の場  逆さの度合いが強く、倒立に近い姿勢を腕で支える動きをつくった。
---	---	--	--

資料2 探検マットを試してみよう。

【岩うつりの場】

じしんが起きて岩が（高い岩に）なりました。

《高い岩に》 《はなれて遠くに》 《2つに》

A児の求め

逆さになるのがどきどきして楽しい岩移りの場で、もっと自分に合った難しい探検をしたい。

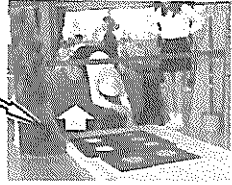
4つの場面を通して、徐々に逆さの具合を強くするとともに、胸にかかる体重の割合も増えて難しくなっていく姿勢の変化に対応させ、胸で体を支えるといった場面に応じる動きをつくった。

資料3 場面を選択してつくる学習ノート

岩うつりの大きな岩が高くなりました。

跳び箱を2段から3段にする。

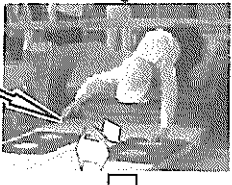
逆さの度合いが強くなった姿勢を腕で支える動きをつくり出す。



手をつく先の岩が2つに離れて遠くなりました。

ミニマットの位置を変える。（遠く・右左）

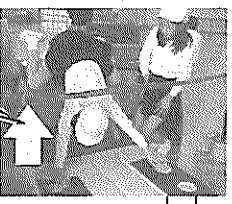
遠くに腕を広げ、伸ばして支える動きをつくり出す。



岩うつりの大きな岩がさらに高くなりました。

跳び箱を3段から4段にする。

逆さの度合いがより強くなった姿勢をしっかりと腕で支える動きをつくり出す。



資料4 場面と動きをつくり出すA児の活動の様子

今日の学習で、前よりもっと高い岩（とび箱2だんから3だん、4だんへと高くした）からえだに当たらずにさかさになって通れるようになりました。できるようになったのは、岩うつりの場で、とび箱をだんだん高くしたり、わたる先の岩を遠くにしたお話をどんどんつくり、自分にあうかどうかためしながらチャレンジしたことがよかったからです。最初はむずかしくて、何回もえだに当たりこまりました。けれど、自分に合ったお話をつくることで、岩うつりもとくになりました。だから、次のさかさの国でもお話づくりをがんばってたんけんを楽しんでいきたいと思います。さかさの国につながる道のたんけんはとても楽しかったです。

資料5 A児の学習後の感想

第3次：6／6時

まよめの探検マット交流会を開き、つくった探検の場面や活動の場、動きを楽しむ。

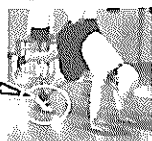
第3次は、これまでにつくった探検の場面や動きのよさを味わわせることがねらいである。そのために、まよめの探検マット交流会を開き、これまでにそれぞれがつくった探検の場面を友だちと互いに紹介し合って楽しませたり、発展させたりした。このときの反応が資料6、7である。

【友達がつくった探検の場面（アメンボ池）】

足を乗せる草が雨で1つなくなりました。

足を乗せる用具を1つにする。

片足で体を支える動きを楽しむ。



【友達の話参考に自分でつくった場面】

水草が雨で集まってしまいました。

障害物（水草）を置く。

腕を広げて進む体を支える動きを楽しむ。



友達がつくった片足で進むお話は腕がきつかなかったけれどできました。そしてお話を自分でつくりました。水草を越えるとき腕がきつかったです。何度かチャレンジしてできるようになりました。友達のお話が参考になりました。今日もとても楽しかったです。

資料7 まよめの探検交流会後のA児の感想

考察3

資料6、7に示すように、A児は友達や自分がつくった場面を楽しむなかで、新たな動きをつくり出した。これは、これまで経験していない友達がつくった探検の場において活動する探検交流会を設定したことが、新たな場面づくり、ひいては、新たな動きをつくり出すことにつながったと考える。

資料6 A児のアメンボ池での活動の様子

【全体考察】

ねらう動きの系統と段階から吟味し、提示した場で動きをつくる段階と探検の場面づくりによって子ども自ら動きをつくり出す段階を位置づけた活動構成を仕組んだことは、自己観察と自己決定を促し、いろいろな姿勢の体を腕で支えるなど活動の場に応じて多様で確かな動きをつくり出すことにつながった。特に、めざす動きの系統と段階に沿って場面をつくる穴埋め式の場面設定が、動きをつくり出す楽しさを味わわせるとともに価値ある動きをつくり出させることに有効であった。課題としては、子どもの自由な発想を取り入れた場面づくりの条件をさらに具体化していきたい。

体育科（保健）学習の〈ふくおかプラン〉

I 自ら健康生活をつくり出す体育科(保健)学習

1 体育科(保健)での学ぶことと生きること

経済の発展、交通・通信システムの急速な整備などさまざまな分野の大きな発展により、生活はますます便利になってきている。しかし、一方で子どもたちを取り巻く社会環境や生活様式の著しい変化は、心身の健康に様々な影響を与えている。また、人間関係の希薄化や精神的なストレスの増大といった心の問題も、学校現場をはじめ地域や家庭での大きな課題となっている。子どもの余暇の過ごし方からは、野外での集団遊びの減少や体力の低下が顕著になってきている。このようななか、子どもが自ら健康な生活を送るうえにおいて、体育科(保健)学習は、とても重要な位置にあるといえる。自分の体や心に関心をもち健康生活課題に気づき、自分にあった生活の方法を追求し健康生活を実践していく力を育むことに重点を置かなければならない。そのことにより、さまざまな問題や困難に出会ったときでもそこに立ち止まり、自分を振り返り、そこからよりよい生活の方法をつくり出していくことができるようになる。これらの態度や能力は将来につながり、生きて働く力となる。

2 体育科(保健)部主題についての説明

自ら健康生活をつくり出すとは、これまでの自分の生活を振り返り、自分の健康課題に気づき、その課題解決に向けて自分にあった方法を考え出し、実践していくこ

とである。自分は今、健康といえるかどうか自分の生活を見つめ気付くこと。どのように改善すればよりよい生活を送れるのかについて考えること。自分で情報を集め自分にあった方法をつくり出すこと。それを実際に試してみても自己評価し、さらに方法をつくりかえて実践しながらより健康な生活を送ることができることである。

自ら健康生活をつくり出す体育科(保健)学習とは、これまで何となく過ごしていた日々の生活について、子どもが自ら考えたり工夫しながら身近な生活における健康課題に気づき、どうすればその課題を解決することができるのかについて考えること。それを実際に試してみること、さらに改善点を見出し、実際の自分の生活において実現可能な解決方法をつくり出す課程を通して、健康・安全の大切さに気付くこと。そして、健康課題を解決したことによって「自分でできた。」という喜びやこれから先の生活に向けて「自分ではできる。」という自信をもつことができる学習のことである。

- 自分でつくり出した方法によって、自分にあったよりよい生活をつくり出そうとする子ども (学ぶ意義)
- 自分の生活の振り返りから健康課題を見つけ出し、解決に必要な知識を獲得し、それを活用し実践することのできる子ども (能力)
- 自分でつくり出した方法を試行し、さらによい方法へとつくりかえて実践し、課題を解決することで、肯定的な自分像をもつ子ども (自信)

【表 豊かに生きる子どもをはぐむための体育科(保健)の基礎基本】

学 ぶ 意 義			
自分の生活における健康課題に気づき、よりよい健康生活を送りたいという願いをもって必要な知識を獲得し、自分でつくり出した方法を実際に試して、自己評価してみることでよりよい生活をつくり出すことができる。			
	観 点	中 学 年	高 学 年
能 力	A 学力 実体的 学 力	健康生活に必要な4つの項目(栄養、運動、休養・睡眠、環境)について分かる力 体の成長、発達について分かる力	健康生活に必要な4つの項目(栄養、運動、休養・睡眠、環境)の関係とそれぞれの具体的内容について分かる力 けがや病気の予防について分かる力 心や体の成長、発達について分かる力
		自分の生活や環境を含めて、健康な生活について判断できる力	自分の生活や環境を含めて、健康な生活について判断できる力
	B 学力 機能的 学 力	学習した知識をもとに、自分の生活を振り返り、課題に気付く力	学習した知識を活用し、自分の生活を振り返り、課題に気付く力
		よりよい健康生活に向けて、習得した知識をもとに自分にあった生活の仕方を考え出す力 習得した知識をもとに、実際の生活で実践し、健康生活をつくることのできる力	よりよい健康生活に向けて、習得した知識をもとに自分にあった生活の仕方を考え出す力 習得した知識をもとに実践し、再構成することにより、健康生活の課題を解決し、あたらな生活をつくることのできる力
自 信	自己の健康課題に気づきその改善方法を追求し、実生活で試行し解決することができたことを実感させることにより、自分の力で健康生活をつくり出せるという自信を育むことができる。		

Ⅱ 自分の心と体を見つめる試し活動を位置付けた保健学習プラン

体育科(保健)部 養護教諭 昌 山 佳 子

1 副主題の意味

子どもたちは、日々の生活の中で、何らかの支障がなければそれが当たり前のこととして過ごしている。ケガや病気をして体調が悪くなって初めて、健康について考える機会となることが多い。健康に過ごすために必要な栄養、運動、休養・睡眠についても、親や教師から言われて知識的には知っている。しかし、生活の中で意識して実践している子どもは少ない。子どもが健やかに毎日を送るためには、自分の日々の生活の現実を認識し、健康に過ごそうという意識と、そのための知識、そしてよりよい生活をつくり出す実践力が必要である。自分の心と体を見つめるとは、このように、生活を健やかに過ごすために、日頃意識せずに過ごしている毎日の生活のなかで、ケガや病気になってから気付くのではなく、生活のなかで立ち止まり、心と体の状態に気付いて行くことで、見過ごしていた健康生活の課題を捉えたり、逆によさについても意識することができ、それを生活に生かしていこうとすることである。自分の心と体を見つめる試し活動とは、前述のような心と体への気付きを実感し、よりよい健康生活を実践したいという求めをもたせるための活動である。具体物を用いて自分の心や体の状態をイメージしたり、アクティビティーで体を動かしたりすることや、さらには自分で作りだした生活実践法を、実際に行ってみて自己評価することである。よって、自分の心と体を見つめる試し活動を位置付けた保健学習プランとは、今現在の自分の心と体の状態に目を向け、健康な生活を送るために、自分にあったライフスタイルをつくりあげ実践していくことである。よりよい健康生活をつくるための生活実践において、日々の生活のなかで自分の心と体の状態を見つめる機会をつくり、一日の自分の心と体の様子から自分の行動に気付いたり、そこからよりよい生活のために自己の生活を改善していこうとすることである。

2 学習プランの具体的構想

● 単元設定の視点

保健学習は、知識の習得や理解が実践化につながることを前提として行われている。しかし、現実には知識が生活実践までに至らないことが多い。そこで、次のような視点で単元を設定した。①生活実践を子どもたちの実態を踏まえ保健学習で学んだことを毎日の生活で実践する。その記録を行う場を設定し、実践と自己評価活動の繰り返しが続いて行えるようにすること。②自分の心と体の状態について実感しやすいように、気付きの場を大切にしたい試し活動を全体を通して取り入れ、実践の継続に向ける意欲を高めること。このことにより、保健学習で積み重ねた知識や理解が学校生活や家庭生活でよりよい健康生活をつくっていくことにつながると考えた。

● 心と体を見つめる活動構成について

図1のように、気付く、深める、生かすの3段階とした。各段階に次のような活動を位置付ける。

気付く段階では、まず自分の心や体へ意識を向けさせるため、①アンケートやチェックシートを活用し、結果から自分の心と体の実態を見つめ、気付く。②気付きをさらに実感へと結びつけるためにアクティビティーなどの試し活動を行い、よりよい健康生活をつくろうとする意欲を高める。深める段階では、主に知識の習得を行い、何をどのように改善すればよいかを考える。そのために、①ここでも試し活動を取り入れ、知識を自分のこととしてとらえやすいような場を設定する。②「作戦ブック」づくりを行いながら、実践と評価を繰り返す。生かす段階では、実践方法がそれでよいのかを評価し、さらに改善し実践していく。そのために、教師や友だちからの他者評価と、アドバイスと励ましの場を設定し強化する。

	気付く (1時間)	深める (2時間)	生かす (1時間)
活動と内容	1 自分の健康課題に気付く活動 ○ 自分の心や体の様子について意識を向けること ○ 改善すべき課題や、よいところに気付くこと	2 課題から、対処方法を考え試行する「作戦ブック」づくりの活動 ○ 健康な生活を送るための知識・理解 ○ 自分にあった望ましい生活を見つけるために「作戦ブック」をつくり実践すること	3 実践を評価し合い、よりよい対処方法を継続して実践していく活動 ○ 実践を振り返り「作戦ブック」を完成させること ○ アドバイスを受け、よりよい方法を実践し続けようとする
手だて	※ 健康アンケートやチェックシートの結果を提示する。 ※ アクティビティーなどの体験活動を取り入れ、気付きがより実感しやすいようにする。	※ 自分のこととしてイメージし実感をもてるようにいくつかの方法を提示した、 <u>試し活動</u> の場を設定する ※ 自分で作り出した方法を、「作戦ブック」にまとめさせ、実践と評価を繰り返して行う。	※ 毎日の実践を「作戦ブック」に記入できるようにしておく。 ※ 「作戦ブック」の実践に対し、教師や友だちからの評価の場と、 <u>アドバイス</u> をうける場を設定する。

【図1 自分の心と体を見つめる試し活動を位置付けた基本的な活動構成】

第5学年 単元

ストレス、すっきり大作戦！

(1) 単元の目標

- 1 心と体は密接な関係があることに気付くとともに、不安や悩みは誰もがもっており、それにはストレスが関係していることを理解することができる。
- 2 自分の心と体の状態に気付き、対処法を実際に試しながら、日常のストレスに対して自分にあったよりよい対処法をつくり出すことができる。

(3) 学習の流れと考察

第1次：1／3時

誰もが不安や悩みをもっていることを知り、心と体のつながり体験（アクティビティー）を通して心と体は深くつながっていることに気付き、健康な生活を送るためにストレスへの対処法を身に付けたいという求めをもつ。

- (1) 事前に行ったアンケート結果から、誰もが不安や悩みを持っていることを確認する。
- (2) 3種類のアクティビティーを体験し、心と体の状態に気付き、単元全体のめあてについて話し合う。

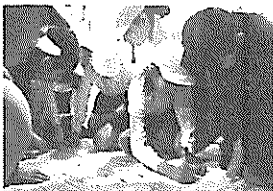


写真1 あせると、ドキドキするよ

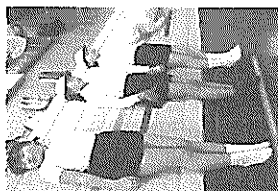


写真2 心も体もゆったりとなるな

緊張すると心も体もかたくなった。リラクゼーションをすると、体の力がぬけて、心も「スーッ」となった。それまで速かった脈や呼吸がゆっくりになった。

資料1 T児の心と体についての気付き

第2次：2／3時

心や体に影響を与えているものは、ストレスであることを知り、いろいろな方法のなかから、これまでの自分の対処法も含めて、自分にあったストレスに対処する方法を見つけ出し、実際に試してみる。

- (1) 風船を使いながら、ストレスとストレス反応について理解する。
- (2) いろいろなストレス対処法を試し、自分にあった

(2) 単元の考え方

生活の学びが中心となる本単元は、日常生活のなかで行うことができる自分にあったよりよい対処法を身につけることがねらいである。そのために「ストレス、すっきり大作戦」として、①不安や悩みについて関心をもたせ、心の状況に変化があると体も変化をすることを実感するためのアクティビティーとリラクゼーションの体験活動②心に影響を与えているストレスと心の状態について理解するために風船をつかって理解する活動③ストレスについて理解した後、自分にあった対処法をつくりだすために、色々なグッズや方法を試す活動④自分でつくりだした対処法を毎日の生活で実践したことを報告しあい、うまくいかなかったことについてアドバイスをしあったりはげましあったりする活動を設定する。

また、学習のなかで自分のストレスについて理解する活動において、「日常イライラ尺度（Daily hassles scale）」（2000 大野太郎他）を用いた。

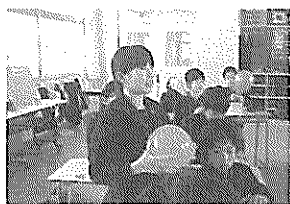
第1次は、不安や悩みは誰にでもあり、心と体は深くつながっていることに気付くとともに、心も体も健康に過ごすために対処法を身に付けていこうとする求めをもつことをねらいとしている。そのために、事前に行った「日常イライラ尺度」の結果を提示し、どの項目が多くなっているかという視点から誰もが不安や悩みをもっていることを確認し、「心と体のつながり体験」として①＜心の緊張＞一番遅いチームにはペナルティーがあるクロスワードパズル（写真1）②＜体と心の活動＞チームで心を合わせ、体を使って行う人間いす③＜心と体のリラックス＞リラクゼーション：あなたの特別な場所（写真2）の3つの試し活動を設定して心と体の関係に気付くことから、心も体も健康に過ごすためのよりよい方法を知りたいという求めをもたせるようにした。

考察1

グラフをもとに不安や悩みについて考えることで、多かった悩みが自分の回答と重なっていたことを知り、安心している様子が見られた。心と体のつながりについては、資料1の下線部のように心と体の状態へ意識が向き、心と体のつながりに気付き実感していることがわかる。3種類のアクティビティーを行い、各アクティビティー毎に脈拍数と気分や体の状態の振り返りを行ったことが、心と体を見つめることに有効であった。この実感をもとに、これから心も体も健康に過ごすための求めをもち、その方法を探ろうとする第2次の深める段階へつなげることができた。

第2次では、心と体に影響を与えているものはストレスであり、ストレスとは何かについて知ることから、その対処法を見つけていこうという求めをもつと共に、自分にあったストレスの対処法を見つけ出し、日常生活での実践へ結び付けていくことをねらっている。そのために、まずストレスについて理解する場面において、自分の心と体のイメージをもちやすくするために、風船を膨らませながら息を吹き込む回数によってストレス反応を実感する試し活動を設定した。ここで、ストレスが存在しなければ生活に張り合いが無くなってしまうし、多すぎても心と体に不調をきたしてしまうこ

対処法を作り出し、「ストレス、すっきり作戦ブック」をつくる。



たくさん息を吹き込むと、風船はパンパンで弾力がなくなりました。突くとすぐ割れそうで、虫の空気をぬくと弾力がもどってほっとしました。

写真3 資料2 ストレスについてのT児の発言

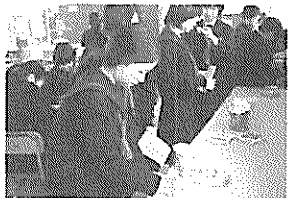
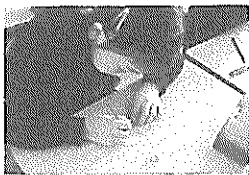


写真4 この方法を新たに 写真5 空を飛んでいる
取り入れよう ような気分になる

これまで自分がやっていた方法の他に、お茶を飲むのもリラックスになるということがわかりました。私は、本を読むのがいつもだったけれど、その時によい香りをそばに置いたりすることを試してみます。

資料3 新たな方法を取り入れようとするT児の感想

第3次：3／3時 実際に自分でつくった「ストレス、すっきり作戦」をもとに、ストレスの対処法を実践したことを報告し合い、教師や友だちから評価してもらう。また、うまくいかなかったことについてはアドバイスをもらい、よりよい対処の仕方を見つけ出すとともに、お互いに励まし合い、実践を継続していく。



イヤな事があったら相談してね！一緒に考えるからね！これからも一緒にがんばろう。
写真6 「はげましカード」で
応援してあげよう

私は、ストレス、すっきり作戦のリラックス作戦がよくできていると思いました。そして、発散作戦も時々組み合わせてやると心も体もとてもすっきりすることがわかったので、これから先も使おうと思います。

資料4 今後もよりよい対処を実践していこうとしているT児の感想

とを確認した。このことから、ストレスを程よくコントロールするために必要な方法を見つけ出す試し活動の場を設定し、①発散作戦②気分転換作戦③リラックス作戦④相談作戦と対処法をグループに分けながら、板書に位置付けていった。さらに、それらの方法の中から、自分がこれまで行っていた方法とともに、それ以外にもよりよいと考えられる方法を「ストレス、すっきり作戦ブック」にまとめていった。

考察2

資料2の発言から、ストレスと心と体の関係について実感していることがわかる。風船を使ったこと（写真3）で自分の心や体についてイメージでき、ストレスに対する対処法が必要であることを強く認識する上で有効であった。また、T児の下線部分からこれまでの自分の方法に、新しい対処法を取り入れ試そうとしていることがわかる。これは、いろいろなストレス解消法を提示し、実際に試してみる活動を取り入れたことで、これまでの対処法を見直し、さらに新たな「自分にあったストレスの対処方法」を見つけ出し、やってみたいという意欲が表れている姿である。対処法毎に作戦としてグルーピングをしたことも、ひとつのことができなくてもそれに変わる多くの方法があるのを知ることになった。さらに、「ストレス、すっきり作戦ブック」として、自分のオリジナルなストレス対処法のブックを作っていくことで、日常生活で実践したいという意欲をもつことにつながったと考える。

第3次は、自分のストレス対処法を報告しあい友だちや教師から評価やアドバイスをもらいながら、よりよい対処法をさらにつくりだし、実践していこうとする意欲をもつことをねらっている。そのために、実際に日常生活で試したことを振り返りながら、報告しあいアドバイスを参考にして「ストレス、すっきり作戦ブック」を作り上げていった。さらに、今後も実践を続けていくことに対して、「はげましカード」をお互いに書き、交換し合う活動を設定した。

考察3

T児の感想から、試した実践を振り返り新たな対処法による心と体の状態を見つめている姿がわかる。また、今後も実践を続けようとする態度がみられた。これは、その効果を報告し合うことによって、客観的に自己評価ができるとともに、教師や友だちから他者評価される場を設定したことで子どもが自信をもつことができたと考える。さらに、うまくいかなかったことに対しても、アドバイスを受ける場を設定したことで、よりよい対処の方法が友だちや教師から具体的に示され、実践の意欲が高まったと考える。

【全体考察】

本単元では、「生活の学び」に重点を置き、心と体を見つめるための試し活動として、「心と体のつながりに気付くこと」、「ストレス状態の心と体の状態を実感すること」「よりよいストレスの対処法を行ったときの心と体の状態を見つめること」などを行うことによって、ストレスにさらされた際の対処する力を身に付けることを目指した。その結果、考察2、3のように、心と体の状態を見つめることから、自分のストレスを自分にあった方法で解消し、実践を継続しようとする姿が見られた。このことから、気付く段階、深める段階、生かす段階を通して試し活動を行ったことが有効であったことが明らかになった。さらに「ストレス、すっきり作戦ブック」をつくるというめあてをもたせて取り組むことで、実践の継続につながったと考える。また、実践を報告し合い教師や友だちから評価されたり「はげましカード」をもらうことは、さらに実践への意欲を高める上で有効であったと考える。しかし、実践前、実践中、実践後に自分のストレス度をじっくり確かめるためのストレスチェックを取り入れておれば、日々の対処法の実践効果が子ども自身によりとらえやすかったのではないかと考える。また、今回は教師や友だちの評価にとどまっているが、家庭での実践も多くを占めているため家庭からの評価も取り入れて、対処法をより実践しやすい環境に設定する必要がある。

理科学習の〈ふくおかプラン〉

I 科学する楽しさを味わう理科学習

1 理科での学ぶことと生きること

理科で生きる実感を得るとは、子どもが、自然に対する尊敬や強い感動を抱くことであると考えられる。しかし、科学技術の進歩により便利で快適な生活が行われるようになった一方で、自然とじかに触れ合う機会が減少し、自然に対する見方や考え方が以前に比べて薄れてきていると言われている。理科では、科学的な見方や考え方を育成することが主なねらいである。しかし、これからの理科においては、子どもが生きる実感を得るために、自然とじかにふれあい、自分が見出した問題を解決することで自然のきまりをつくり出す能力と、自然に対する感じ方を育むことに重点を置かなければならない。そのことで、子どもは、これから出会うであろう様々な問題や困難なできごとへの解決に向けて、正しい知識や情報の選択から合理的に判断し、主体的に行動する力と自然への興味・関心を高めることができ、自然を大切にすることを育んでいくことができると考える。

2 理科部主題についての説明

子どもは、活動をするなかで感じたり考えたりすることに伴って「楽しい」という感情を味わっている。科学する楽しさとは、自然現象を対象として、思考したり、はたらきかけたりする活動を通して得られる、知的快感のことである。科学する楽しさを味わうとは、①自然現象と自分の認識とのズレの修正を行ったり、考えの対立における自分の考えを主張したりするといった考える

楽しさ、②予想や仮説における期待感をもち、観察の視点を明確にし、実験方法にこだわりをもつ楽しさ、③自然のきまりをつくり出し、価値を実感したり、目的を達成したりする楽しさのことである。科学する楽しさを味わう理科学習とは、子どもが自然を対象に問題を見出し、主体的に追究していくことで、自然のきまりや科学の方法を身につけていく学習のことである。そのためには、子どもが目的をもって自然を追究する活動を行っていること、子どもが、問題をつかむことや予想の結果や方法の見通しをもつこと、検証していく活動に子どもの意思が反映されていることが大切である。このような自然を追究していく活動は、子どもにとって楽しいものであり、それゆえに、主体的な活動になっていくのである。そして、自分が観察・実験したことから得られた結果が、学級の中で整理され、自然のきまりとして承認されていくことで、自分の追究に自信をもつことができるのである。また、ここでつくった自然のきまりは、自分で調べ、自分の考えをつくり変えて獲得されたことであるため、確かな知識として獲得され、自然を大切にすることを育むことができるのである。このような科学する楽しさを味わう理科学習で育つ子どもの具体的な姿を以下に示す。

- 自然に働きかけ、思考することで科学する楽しさを味わい、自然を大切に子ども（学ぶ意義）
- 自然現象から問題を見出し、解決する方法を身につけ、自然のきまりをつくる子ども（能力）
- 自然のきまりを発見したことに自信をもち、適用することで価値を実感している子ども（自信）

【表 豊かに生きる子どもをはぐくむための理科の基礎基本】

理科を学ぶ意義		観 点			
自然現象の中から問題を見出し、課題を設定することで、これからの追究に対して、期待感をもち、きまりや規則性を追究していく中で、科学やその方法のよさをとらえ、科学の方法や手続きを行うことに楽しさを感じ、自然を大切にすることができる。		3 年		4 年	
能	A 学力 実体的学力	自然のきまりの知識理解と実験の技能	自然現象の共通性や性質、特徴についてとらえる。	自然現象の変化、規則性、関係性をとらえる。	生命の連続性や変化の規則性をとらえる。
	B 学力 機能的学力		器具や材料の特性を理解し、自分の予想にそって、安全に注意し、正しい操作（実験）や観察ができる。	適切な器具や材料を使い、要因の意図的な操作（実験）や仮説を視点としての観察ができる。	自然現象の相互関係や要因の意図的な操作（実験）や仮説を視点としての観察ができる。
力	問題の認識	仮説の設定	自然現象と既存の考えとのズレや友達との考えの対立から疑問をもち、自分の問題をもつことができる。	自然に意図的に関わり、問題となる現象とその要因となる現象を抽出し自分の問題として把握することができる。	自然に意図的に関わり、問題となる現象とその要因となる現象を抽出し自分の問題として把握することができる。
			自分の問題について、その要因を既存の体験や情報から根拠をはっきりさせて予想できる。	自分の問題について体験の交流やモデル化から、仮説を設定することができる。	自分の問題について体験の交流やモデル化から、仮説を設定することができる。
自信	実験や観察の構想		実験装置や材料、実験方法や手順を自分の予想をもとに決定している。	自分の仮説をもとに、実験の条件を明確にし、条件を制御した実験方法や実験順序を設定する。	自分の仮説をもとに、実験の条件を明確にし、条件を制御した実験方法や実験順序を設定する。
			自然のきまりのよさを実感したり、きまりを発見したことに満足感を感じたりし、それらを自分で見出したことに自信をもつ。	自然のきまりのよさを実感したり、きまりを発見したことに満足感を感じたりし、それらを自分で見出したことに自信をもつ。	自然のきまりのよさを実感したり、きまりを発見したことに満足感を感じたりし、それらを自分で見出したことに自信をもつ。

Ⅱ 観察・実験を工夫する活動を位置付けた理科学習プラン

理科部

清水 隆一郎・今 泉 伸一郎

1 副主題の意味

観察・実験を工夫するとは、子ども自らが観察・実験の方法を考え、個別の追究を行うことである。観察・実験を工夫していくためには、問題に対する、子どもひとりひとりの考えが予想や仮説、観察の視点や実験の方法にあらわれていなければならない。視点とは、変化を見取るために、量、質、位置関係に着目することであり、方法とは、器具や材料の組み合わせと手順、記録・表現方法のことである。これらの視点や方法を選択したり変えていったりすることが観察・実験を工夫していくことである。観察・実験を工夫する活動とは、①追究の求めをもつ活動、②問題を見出す活動、③仮説を確かめ、きまりをつくる活動のことである。このことにより、求めを達成するための問題を追究していくことに意味を見出していくことができる。また、自分の追究だけでなく、他の視点からの追究にも意味を見出していくことができる。つまり、自ら学んでいる意識をもち、主体的に問題を解決していくことができるのである。観察・実験を工夫する活動を位置付けた理科学習プランとは、自然事象との出会いによって、求めをもち、求めを達成するために必要となる問題を見出し、予想や仮説をたて、子どもが主体的に活動する中できまりをつくり出す「文化の学び」のことである。そのために、単元の「出合う段階」と「追究する段階」に観察・実験を工夫する3つの活動を位置付ける。この活動により、子どもは科学する楽しさを味わうことができるのである。

2 学習プランの具体的構想

● 教材化の視点

子どもが科学する楽しさを味わうために、目的をもち、自ら方法を考えていくことのできる教材化を行う。具体的には、以下の点に留意して教材化の工夫をはかる。

- ・ 認識のズレや意見の対立が予想され、追究活動に求めをもち、熱中できるもの

観察・実験を工夫する活動を位置付けた活動構成

出合う段階	追究する段階			いかす段階
追究の求めをもつ活動 身近な自然事象と出合う	問題を見出す活動 事象提示や実験 (問題の明確化) (要因の抽出)	仮説を確かめきまりをつくる活動 仮説A → 個別追究A 仮説B → 個別追究B 仮説C → 個別追究C	自然のきまりの発見	きまりを生かした活動 自然のきまりの適用
観察・実験を工夫する活動				
※ 事象提示の工夫 ※ 気づきについての交流	※ 量、質、位置関係に着目させる。 ※ 変化の起点と終点、変化の過程に着目させる。	※ 既有体験の交流 ※ モデル図による表現方法の工夫 ※ 同質グループによる実験・観察の見通しの相互評価		※ 量や事象、位置や方法を変えて、確かめる。 ※ 身の周りにある、きまりを適用している事象の提示 ※ ものづくりにおける、サンプルの提示と選択 ※ 観察・実験の相互評価

- ・ 複数の要因をもとに、多様な予想がもて、追究方法を子どもが選択・変更できるもの
- ・ 子どもの求めと自然のきまりの価値が合致すること

● 観察・実験を工夫する活動の支援

(1) 仮説設定における支援

子どもが自分の仮説を明確に設定していくために、異なる自然事象の様子をくらべたり、変化のはじめと終わりの様子やその過程を観察したりし、問題を見出し、見出した問題を解決するために、問題となる事象から要因を抽出することができるようにする。そして、「○○が～なのは、△△が～だからだ。わけは～。」という仮説を立てる。そのために、既有的体験、既習内容、情報についての交流を行う。また、モデル図・概念地図により、考えの具体化を行う。

(2) 観察・実験計画における支援

子どもが問題を解決する方法を自ら考えるために、対象の量や種類、材料や手順を選択できる観察・実験を行う。そのために、事象提示を工夫し、子どもが自分の考えをもつことができるようにする。また、条件制御に対する話合いを行い、正確なデーターが得られるようにする。

(3) 個別追究を具体化する支援

子どもが行っていく個別追究は以下の条件が含まれたものでなければならない。

- ① 問題を明確に意識した予想や仮説があること
- ② 観察や実験の結果について定量的・定性的な変化を見取り、自然のきまりが導き出せること
- ③ 「いかす段階」における個別追究の活動が、自然のきまりを適用し、価値を実感することにつながっていること

このような個別追究において、観察・実験の方法や手順を自ら発想していくために以下のような支援を行う。

- ① 予想や仮説から実験や観察の結果について同質グループで相互評価させるようにする。
- ② 自然のきまりの価値を実感するものづくりや対象を提示し、選択できるようにする。

第4学年 単元

消える水?現れる水?水探し大作戦!

(1) 単元の目標

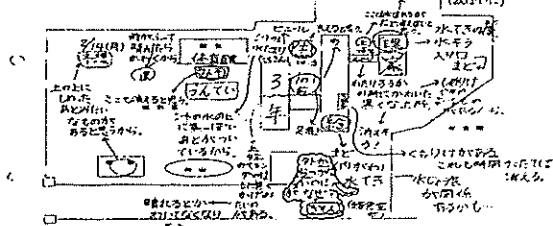
- 1 蒸発や結露の現象に問題を持ち、消えたり現れたりする水のマップを作るために、実験方法を工夫し、水の変化の原因を追究していくことができる。
- 2 水は蒸発して空気中に含まれていくことや、結露して再び水となって現れることと、水は温度を10度近く上げると水蒸気になり、0度に下げると氷になることをとらえるようにする。

(3) 学習の流れと考察

第1次: 1~2/11時

水たまりの水が消えたり、植物がぬれていたりする現象について話し合い、消える水や現れる水を探したり、探した水をマップに書き込んでいく活動を行い、水の変化に疑問を持ち、学習問題を設定していく段階。

水発見マップ



【資料①】 A児が書いた水発見マップと拡大水発見マップ】

現れる水や消える水は温度に関係あると思います。水が乾いていくのは、気温が高いときだからです。晴れた日に行けば今日の水も消えていると思います。

【資料②】 水発見マップの交流をもとに子どもたちがもった考え】

第2次: 3~9/11時

消える水や現れる水の仕組みや水と温度の係に着目して水の変化を調べる実験計画を立てて追究し、温度と水の変化のきまりをとらえていく段階



【写真①】 実験①「温度が高いと水が消える」

【写真②】 実験②「冷やすと水が現れる」

(2) 題材の考え方

本単元では、自然の中の消える水や現れる水に疑問を感じることができるよう、水マップを使った水探しの活動を位置付け、それらの現象の原因を調べ、調べた結果から水の温度を変化させたときの様子を調べるための実験計画を自ら考え、自然のきまりや規則性を自分自身で発見するだけでなく、それらを発見していくまでの方法もとらえることができるようにしたい。

具体的には、①自然蒸発や結露を確かめる実験、②水の沸騰の様子を調べる実験、③水が凍る様子調べる実験、という3つの実験を取り上げ、②の実験場面に実験を工夫する活動を位置付ける。水の温度を上げる、水の状態の変化を観察する実験場面で、子どもが、温度に着目し、温度を変化させるための方法を、今までの学習や生活の中の様々な経験をヒントに、実験器具を選んで実験装置を作り、再現方法を工夫し、実験に取り組んでいくようにする。このことにより、子どもは、自分の考えた実験に意味を見出し、自分の力で問題解決を進め、科学する楽しさを味わっていくことができると考える。

第1次では、水発見マップをもとに、身のまわりにある消えたり現れたりする水を探していく活動を設定した。子どもたちは、水たまりのあとや窓ガラスの曇りを探していった。また、発見した水を拡大水発見マップをもとに話合う中で、「他にもまだ見つけられそうだな」といった思いや、「何が原因で水が現れたり消えたりするんだろう」といった疑問がでてきた。A児は「水が現れたり消えたりするのは温度に関係ありそうだな」という考えをもち、「現れたり消えたりする水の仕組みを調べよう。」という学習問題を設定していった。

考察1

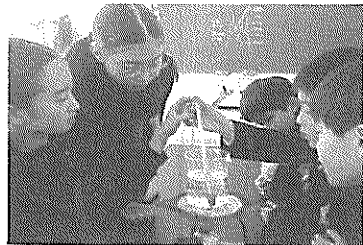
資料②のA児の「消える水や現れる水は温度に関係ある」という考えは、子どもが自然事象の中から要因を抽出している姿だと言える。また、「晴れた日に行けば今日の水も消えている」という考えは、自分の考えに対する期待感をもっている姿である。このような姿が出てきたのは、水マップをもとにした水探しの活動により、普段見過ごしている身のまわりの蒸発や結露の現象に子どもが着目し、自らの経験をもとに、疑問をもっていくことができたからだと考える。

第2次では、①自然蒸発や結露を確かめる実験、②水の沸騰の様子を調べる実験、③水が凍る様子調べる実験、を設定し、②の実験場面で、実験を工夫する活動の場を設定し、自分の考えをもとにした個別追究を行った。①自然蒸発や結露を確かめる場面では、水が消える要因として子どもたちが考えた「水の温度を上げる」実験を蒸発皿の水をアルコールランプで熱して行った。(写真①) また、結果をもとに消えていった水はどこに行ったのかを話し合い、空気を集めて冷やしていく実験を行い(写真②)、水が現れたり消えたりするのは温度に関係あることを確かめた。

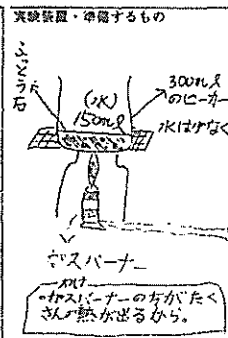
そこで、水蒸気を利用した調理器具やダイヤモンドダストの現象の提示をもとに、温度変化と水の関係を話し合ったところ、資料③のように、「水の温度はどこまで上がるのだろ

加熱水蒸気が水が変化したものと言うことに驚きました。いったい水の温度がどのくらいになればこんなことが起こるのか調べてみたいです。

【資料③ 水マップの書き加え後の子どもの感想】

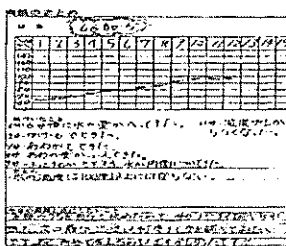
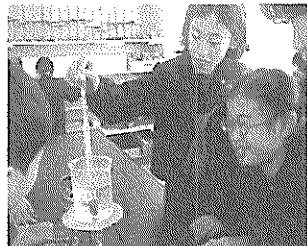


【写真③ 水の温度を上げる基本実験と実験計画】



水は、温度を上げると水中からあわが出てきたり、湯気が盛んに出てきたりすることがわかりました。私の予想ではもっと温度が上がると思っていたけどあまり上がりませんでした。次は、水の熱し方を工夫して温度がどこまで上がるのか調べてみたいです。

【資料④ 基本実験後のA児の感想】



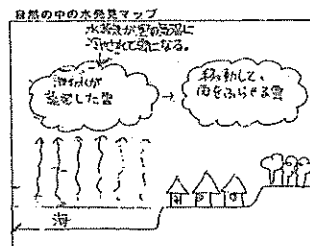
【資料⑤ A児のたてた実験計画とまとめのノート】

みんなの結果から、水はいくら熱しても100度以上にならないことがわかりました。

【資料⑥ 実験後のA児の感想】

第3次：10～11/11時

もののあたまり方のきまりをもとに、身のまわりのものを見直し、水マップに書きくわえをしたり、新たな水マップを作っていく段階



【資料⑦ 子どもの書いた自然の中の水マップ】

うか」という考えや「水の温度をもっと下げるとどんな変化が起こるのだろうか」という考えをもち、②の実験場面で観察・実験を工夫する活動を位置付けた追究を行った。

②水の沸騰の様子を調べる実験では、水の量と熱する時間を一定にして、水の温度を上げる共通の実験をおこなった。

(写真③) その結果、資料④のように、「水の温度はもっと上がるはずだ」「水の温度を上げてみたい」という考えや思いをもち、子どもたちは、個別の実験を考え、問題を解決していくために、追究を行っていった。A児は、「水の量を少なくしていけば、温度が上がるはずだ」という考えを証明するために、ビーカーの水の量を調節し、(資料④) 実験を行った。実験の結果、水は100度になると激しく沸騰することと水の温度は100度までしか上がらないことをとらえていった。また、③の実験場面では、沸騰の実験をもとに、水の温度を下げる実験を行い、水は0度になると凍り始めるというきまりをとらえていった。

【考察2】

資料④にあるように、子どもたちは、水の温度による変化に問題をもち、水の温度と変化を調べてみたいという思いをもつことができた。これは、要因を抽出し、問題を焦点化している姿であると考えられる。ここでは、水の変化と温度とを顕著に感じることでできる2つの事象提示をしたことにより、水の温度に着目することができ、温度変化と水の状態変化に疑問をもつことができた。また、資料⑤では、温度を上げるために熱し方を変えていく方法を子どもが考えている。これは、子ども自ら実験を工夫している姿だと考える。ここでは、条件を意図的に設定した共通の加熱実験によって、加熱方法や水の量に着目し、自ら実験を工夫することができた。その結果、資料⑥の実験後の感想に見られるように、自分の実験の結果と友達の実験の結果をもとに、水の温度変化のきまりをとらえていくことができた。

第3次は、今まで学んだ水の温度による状態の変化のきまりをもとに、新たな水マップを作っていくために、自然界の中での水の変化を調べ、温度と水の変化との関係を深めていくことをねらっている。そのために、新たに、自然の中の水マップを提示した。このことにより、子どもたちは、今まで学習した温度による水の変化のきまりを適用し、現象を説明していった。A児は、水の温度がどこまで下がるのかに疑問をもち、調べていく計画を立て、確かめていった。(資料⑦)

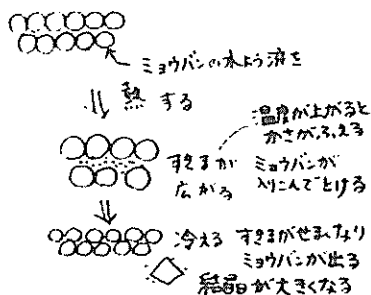
【考察3】

資料⑦に見られるように、子どもたちは、水の温度による変化のきまりを自分の身のまわりの自然にあてはめ、水マップに表現していくことが出来た。これは、きまりを適用している姿だと考える。これは、新たな水マップを作っていく場を設定したことにより、子どもたちが身のまわりの自然事象に着目したからだと考える。

【全体考察】

本単元での実践において、考察1の資料②のように、水の変化と温度とを関係づけて、現象に対する期待感をもった姿が見られた。また、考察2の資料⑤のように、課題を焦点化して、自分の問題をつくる姿や資料⑥のように自分で実験を工夫する姿が見られた。このことは、子どもが科学する楽しさを味わっている姿であると考えられる。このような姿が見られたのは、単元の追究する段階で事象比較のための共通の実験をもとにした個別の追究を設定し、子どもひとりひとりの考えをもとにした実験活動を保障していったからだと考える。この活動を通して、資料⑦にあるようにきまりをとらえていくことができた。今後の課題としては、基本実験におけるヒント提示の仕方や内容について、他の単元での学習内容も考え、さらにヒント提示の内容を精選していく必要があると考える。

ミョウバンの水溶液の温度を下げたら、結晶は大きくなる。それは水の粒のすき間が小さくなり、ミョウバンが結晶になって出てくるから。



資料2 A児の結晶を大きくする仮説



砕いた氷の中に容器ごとミョウバンの水溶液と種結晶を入れ、温度を下げると、結晶が大きくなる仮説を確かめられる。

写真3 自分の仮説を実験を工夫して確かめるA児

結果はたいして変わりはなかった。それは温度にあまり変化がなかった(12℃→2℃)ために、結晶の大きさにも変化がなかったのではないと思う。もっと高い水温から実験するとうまくいくだろう。

資料3 実験の結果についてA児の考察

(3) ミョウバンの結晶が大きく育った後の液体の中にもミョウバンは入っているかどうか調べる。

第3次: 10~12/12時

結晶を水溶液から摘出する方法のきまりを適用し、見出したきまりの価値を実感する段階

水よう液の中に種結晶を入れておくだけで美しい結晶ができることにおどろいた。ただ、水よう液に入れておくだけでなく、温度を上げてよりミネラルを多くとかすことや蒸発させて水の量をへらすことなど、結晶を作るときには、たくさんのコツがある。結晶作りに自然の不思議さを感じた。

資料4 学習後のA児の感想

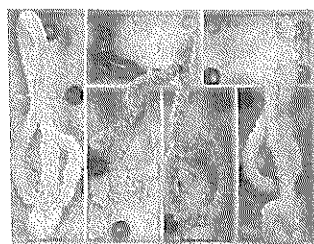
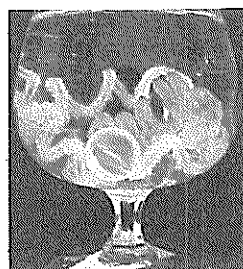


写真4 結晶の造形作品

【全体考察】

本単元の実践において、大きな結晶を作りたいという求めを達成する方法を問題としてとらえ、自分の仮説を手がかりにして主体的に問題解決していくことができた。これは、①求めの達成にやりがいを感じたこと、②ものの溶け方の違い等を比較し、問題解決の要因を見出したこと、③既有の体験を交流、考えのイメージ化によって仮説を立て、目的をもって追究できたからである。そして、仮説の交流から考えを主張したり、追究コースを選択したりしたことで、自分の考えが反映され、思考する楽しさを味わうことができた。また、子どもたちの求めが共通だったことで個別に追究したことの交流において、自分とは違う仮説である実験結果についても大切に受け止め、自分の結果と比較して大きな結晶を作るきまりとして整理することができた。単元を通して、子どもの求めの達成と個別の問題とがつながり、主体的に追究し、実験の方法を自ら考えたり再検討したりするなどの工夫を行うことができた。と考える。

とが結晶を大きくする要因として整理された。A児は、自分の温度を下げると大きな結晶ができる仮説を立て、結晶を大きくする要因を確かめる実験を行った。この結果をもとに自分の仮説を見直し、再構成していった。最後にA児は、結晶が十分大きくなった後の水溶液の中にもミョウバンが含まれていれば、水が自然に蒸散することで結晶が大きくなるのではないかとこの考えを実験で確かめた。

考察2

写真2から、A児は、溶け残ったミョウバンを溶かす仮説を立てたことがわかる。これは、既有の類似体験についての話合いが有効に働いたと考える。それは、体験をもとに問題を解決する要因を推し量ることができたからである。また、資料3から、A児は、話合いから整理された大きな結晶を作るための要因のうち、温度の低下を選択し、大きな結晶を作ることと要因との関係を意味付けたことがわかる。これは、濃度の異なる水溶液での種結晶の育ち方の違いを比較したこと、濃度の高い水溶液は、温度を高くすることでつくることができたことを実験によって確かめたことが有効に働いたと考える。つまり、結晶を大きくする要因を選択する際、既習内容である水の温度が高くなるとかさが増えることを水の粒とミョウバンの粒をモデル図で表現したことで、結晶のでき方と温度の低下との関係を意味付けたからである。そして、写真3は、A児が、自分の仮説について実験の方法を工夫して確かめている姿である。これは、仮説を立てることで大きな結晶を作る要因を明らかにしたことが有効に働いたからである。つまり、仮説を確かめる実験の工夫をする際、水溶液の温度を低くするにはどうしたらよいかという点に絞れたからであると考える。資料3から、A児は、仮説検証の実験の結果から仮説を見直すことができたことがわかる。このことで自分の仮説について温度変化の経過観察を始点の温度を高い温度に設定し、再度調べることにつなげることができた。考えが実験結果から反証されたことが有効に働いたからである。

第3次は、結晶を水溶液から摘出する方法のきまりを適用し、価値を実感することをねらいとしている。そのために①大結晶を作る。②モールドにミョウバンを付着させ造形作品を作る。③溶質の種類を変えて結晶を作る活動を設定した。

考察3

写真4から、A児は、これまで追究してきた結晶作りのきまりを使って結晶を作り、結晶作りのおもしろさや自然の不思議さを感じていることが読み取れる。これは、単元を通して、科学する楽しさを味わうことができた姿として考えることができる。これは、結晶を大きくするきまりを適用してもづくり(写真4)を行うことで、自分の考えが強化され、その価値を実感することが有効に働いたと考える。

社会科学習の〈ふくおかプラン〉

I 社会形成者として見方・考え方を確かにする社会科学習

1 社会科での学ぶことと生きること

社会科のねらいは創設以来公民的資質の基礎を培うことであり、このことは民主社会の形成者の基礎を培うことである。しかし現在、ニートが社会問題化している。これは社会に支えられている自分の自覚や社会に貢献しようという態度が培われていないことが原因とも考えられ、社会科への警鐘ととらえることができる。よって社会科はより一層社会に支えられている自分を認識させ、よりよい社会のためにと願ひ社会のために行動を起こす子どもを育てることが求められる。

これらのことから社会科の役割は大きく三つある。

一つが資料活用力を高めることである。社会的事象を分析的にみたり、立場を変えてみたりすることで、一つの事象を複数の観点から客観的に認識することになる。二つ目が社会的思考力・判断力を高めることである。社会的事象の関係や特色を見出したり、自分のあり方を公正に判断したりすることは激動の社会で自分のあり方を創り出すことにつながる。三つ目が実生活に対する参加の心情と技能を螺旋的に高めることである。社会的無関心が蔓延する社会で絶えず自分が支えられていることをとらえ、かわりを持ち続けることは、社会的無関心を排除し社会形成者としての自覚を高め貢献しようという態度を培うことになるからである。

このように社会科学習を通して、社会に対する見方・考え方を高めることが、社会形成者として生きることにつながると思う。

2 社会科部主題についての説明

まず社会形成者とは「市民・国民・国際人として行動するうえで必要とされる資質能力を身につけた人間」である。(表1参照)次に見方・考え方を確かにするとは、「社会的事象の仕組みを見る観点に関係づけ構造化されたり、社会的思考や判断力が社会の創造に向けて実感を伴い高まったりする」ことである。このことから社会形成者として見方・考え方を確かにする社会科学習とは、「社会的事象と自分とのかかわりから、よりよい社会の形成をめざしての課題を持ち、社会的事象の特色や人物のすばらしさを探りだし、それらを社会や自分の生き方に生かそうとする思考力・判断力を高めること」で、以下の子どもの姿をめざす。そのためには、資料活用能力、社会的思考力や社会や自分のあり方を決定する判断力、社会への参加技能を高める必要がある。そのためには、様々な事象に出会わせ、どの事象にも通用する法則性を見出させ、生活に生かしていく学びが大切になる。

- 社会に支えられていることを認識し、よりよい社会や自分の生き方を考え、参画することで社会の一員の自覚を深める子ども (学ぶ意義)
- 社会的事象の意味や特色を分析・関係づけて見出し、新たな社会に生かそうと判断する子ども (能力)
- 自分の追究が社会に役立ったと実感し、社会への愛情を深めよりかわろうとしたり、自分の生き方を見出したりできる子ども (自信)

【表1 豊かに生きる子どもをはぐくむための社会科の基礎基本】

社会科を学ぶ意義					
社会生活と自分の生活との関係を見出し、進んで追究することを通して、社会的事象の仕組みや働きをとらえ、自分が社会に支えられていることを自覚し、よりよい社会を形成していこうとする。					
資質能力		中学年	第5学年	第6学年	
能	実体的 学力	知識理解	地域の位置やひろがり、諸活動の仕組みと働きをとらえている。	産業の営みを社会生活と国土活用保全の面からとらえている。	歴史上の人物の業績や願い、政治国際社会の仕組みをとらえている。
		資料活用	具体的な取材や体験を通して、社会的事実や事実相互の関係を調べ、図や紹介文に表すことができる。	具体的な資料や取材をもとにして、社会的事実の関係や条件を調べ、図や新聞、啓発文に表すことができる。	具体的な資料をもとに、社会的事実の背景や意味を調べ、提案文や企画案などを図やグラフを使って表すことができる。
力	機能的 学力	社会的 思考力	比較 事実相互、複数事象を比べ、共通点や相違点から独自性を見出す。→		
			関連 事実や観点、事象相互の関係から特色を見出す。→		
			条件 自然的条件を見出したり、社会的条件に当てはめたりする。→		
			因果 社会的事象の原因と結果を結びつける。→		
			発展 広げて考える		
		社会的 判断力	生活や地域に身近な社会的事象の仕組みと働きから特色を見出す。	産業、歴史、政治、国際に関わる事象の特色を見出し、自分から関わろうとする。	
		社会参画 技能	生活や地域の社会生活に参画する観点と技能と願いを身につけている。	よりよい産業や国土の活用や参画のための観点と技能と願いを身につけている。	国家の歴史や伝統を大切に国際社会にむけての観点と技能と願いを身につけている。
自信	自覚や愛情		自分の生活が地域に支えられていることを自覚したり、生活を更新しての自信を持ったりする。	自分の生活が国土や様々な産業に支えられていることを自覚し更新のために行動しようとする。	自分の今の生活が歴史や世界とのつながりで成り立っていることから更新のために行動しようとする。

Ⅱ 複数事象の比較から参画の観点を見出させる社会科学学習プラン

社会科部教諭 藤 野 俊 明

1 副主題の意味

まず複数事象とは、「社会的事象の働きが類似して、仕組みが異なる事象」である。例えば、消防と警察の仕事は地域の安全を計画的・組織的に連携をとっている働きが類似し、その活動範囲から仕組みが異なるという性格をもつ。このように多様化し複雑化する現代社会において一つの社会的事象をもとに判断させることは一面的である。そこで様々な事象から事実をとらえさせ、そのなかから大切なものを判断させることが大切になる。

次に、複数事象の比較とは、「社会的事象の働きが類似している事象を仕組みや人々の工夫や努力といった観点から比べさせ、似ているところから法則性を、異なるところから独自性を見出す社会的思考が伴う活動」である。例えば、警察と消防を比較させるときに、「対処」「備え」という観点から比較させることにより、住民を守るために「早く」「協力して」という仕組みの働きを見出させることができる。

そして参画とは「社会の営みに自分の生活が支えられ、社会をよりよいものにしようという心情のもと、社会的事象のよさを生かしたり、課題を解決したりしようと企画・提案すること」である。

そこで、複数事象から参画の観点を見出させるとは、「類似し仕組みが異なる複数の事象を比較させ、共通する法則性を見出させ、それを社会的事象への企画・提案への観点として意識化させていくこと」である。

これらのことから、複数事象から参画の観点を見出させる社会科学学習プランとは、「自分の生活と社会的事象とのかかわりから複数の事象や観点から比べる課題を設定し、比較して追究することを通して、社会的事象の法則性をとらえたり、新たな社会や自分のあり方を考え社会の一員としての自覚を深めたりする学習」と考える。

2 学習プランの具体的構想

● 教材の条件を明らかにする

社会的事象の法則性を見出し、子ども自らが適用して社会的事象に参画できるようにするために教材化する。

- 生活発展性…参画を求める社会的事象のよさや課題があるか。
- 多様性…子どもが多様な調査方法を駆使して追究する複数の事象があるか。
- 双方向性…追究を生活と学習対象を比べたり、連続して追究したりできるか。

● 複線追究の活動構成の工夫

学習段階は「つかむ」「さぐる」「ひろげる」で構成する。「つかむ」「さぐる」段階では「わかる」ことを重点に見方・考え方の高まりを目指す。「ひろげる」段階では高まった見方・考え方を適用する「できる」ことに重点を置く。

「つかむ」段階では、生活や地域の調査や複数学習対象の概要から、複数事象を比べて追究する学習問題を設定し、学習問題の予想で共通の追究の観点を見出させる。

「さぐる」段階では、複数事象を共通の観点から追究させ、比較させる。そのことで各々の事象の独自性と法則性を見出させることができる。そこで複数事象と類似し、参画を求める事象を提示する。そうすることで追究の観点を参画の観点へ転移させ参画課題を見出させる。

「ひろげる」段階では参画課題を追究発信させ、学習の有用感効力感を味わわせていく。

● 類似事象を提示し法則性を定着させる。

比較追究後に類似した事象を提示し法則性が当てはまるか検討させ法則性を適用できるようにする。

	つかむ	さぐる	ひろげる
目的	自分の生活とのかかわりから課題を見出す。	複線の追究を行い、法則性を見出し参画課題をとらえる。	課題解決の結果を実行や発信し追究の有用感効力感を味わう。
学	1 家庭生活や地域の生活を調べる	4 複数事象の追究と比較から法則性	5 参画の結果を発信し、追究の有用感を味わう。
習	2 学習対象の概要から、生活更新に向けての学習問題を設定する。	性参画への観点を見出す。	(1) 家庭や地域への発信や実行
	3 学習問題解決の計画を立て、追究の観点を見出す。	(1) 複数事象の観点毎に追究する	(2) 他者評価や自己評価で学習をまとめる。
活	生活や地域の調査	事象A 観点 事象B 観点	参画課題と観点
動	複数事象の提示や体験	法則性見出し	参画課題と観点
	学習問題	類似事象の提示	参画課題と観点
	観点 観点 観点		参画課題と観点
支援	※ 学習対象の概要にふれる生活調査や資料提示、体験的活動 ※ 比較を生み出す資料提示	※ 複線の追究を支えるG・Tとの連携 ※ 対象相互を比較する場合 ※ 参画を見出す資料提示	※ 発信先の確保 ※ 発信先や実行先からの他者評価や自己評価の場の設定

【図1 複数事象から参画の観点を見出させる活動構成(中学年)】

3 指導の実際

第3学年 小単元

出発!あつお店探検隊

(1) 小単元の目標

- 1 地域の販売活動を進んで比較追究し法則性を見出したり適用したりする活動を通して、地域の販売活動や自分の消費生活を見直したりすることができる。
- 2 地域の販売活動の商品を他地域からの取り入れや商品の新鮮さの保持などの工夫は消費者の要望に応えるためであることをとらえることができる。

(3) 学習の流れと考察

第1次：1～2/14時

スーパーマーケットの販売の工夫を比較追究する計画を立てる。

- (1) 家族の買い物調べをし、スーパーマーケットの販売の工夫を調べる観点を話し合う。

スーパーマーケットで買い物をするのはねだんだと考えていました。それはよくお母さんがチラシをみて買い物をしていたからです。でも①聞き取りをするとねだんだだけでなく、品質やサービスも考えていることがわかりました。買い物にも工夫があることがわかってびっくりしました。②スーパーマーケットにはひみつがありそうなので調べてお母さんに教えたいです。

資料1 聞き取り調査後の〇児の感想

- (2) 販売の工夫を調べる学習問題を設定する。

私は両方のお店も値段や品質やサービスの工夫をしていると思います。①そのわけは一つは買い物調べをしたときにお母さんが買い物するときに気をつけることだからです。もう一つはお店のなかを見ると、冷蔵庫や、安売りの札があったからです。そのほかにも工夫があるのかを②比べてみてわかりたいです。

資料2 追究計画を立てた〇児の感想

第2次：3～9/14時

スーパーマーケットを比較して調べ、販売の工夫の法則性や参画の観点を見出す。

- (1) 観点毎に比較追究をする。

写真1

どんな工夫をしていますか。



(2) 小単元の目標

文化の学びを展開する本小単元では、地域の販売に関することを調べることを通して、販売の仕事に携わっている人々の工夫について考え、地域の販売活動の特色を明らかにすることをねらいとしている。具体的には、①販売の仕事が自分たちの生活を支えているということ②地域の販売の仕事の特色③販売活動を通して地域が他地域とかかわりをもっているということを明らかにし、生活地域である福岡市の特色をとらえるということである。

そのために①家族の買い物調査②2つのスーパーマーケットを同じ観点で追究する活動③追究したスーパーマーケットの販売の工夫を比較し、販売活動の法則性と独自性を見出す活動④見出した法則性を類似した販売活動に適用して追究する活動⑤適用した内容を地域に発信する活動を設定する。

このような活動によって、地域の販売活動の特色を実感的にとらえさせ、自分の消費生活を見つめ直させていきたい。

第1次は、家族の買い物調査をもとにスーパーマーケットの販売の工夫を2つのスーパーマーケットを比べて調べる学習の計画を立てることをねらいとしている。

そのためにまず、家族の買い物調べを行わせ、結果を出し合わせた。子どもたちはスーパーマーケットでの買い物が多いことをとらえ、スーパーマーケットでの買い物が理由を価格「品質」「種類」「サービス」「アクセス」「陳列」「量」という販売の工夫から観点を見出した。

そこで、附属小学校近くにスーパーマーケットが2店隣接している地図を提示した。子どもたちは2つのスーパーマーケットでどんな違いがあるのかと疑問を持ち、学習問題「附属小学校近くのスーパーマーケットはお客さんのねがいに答えるためにどんな工夫をしているのかを2つのスーパーマーケットを比べて調べよう。」を設定した。

さらに、2つの店舗の店内図や店内写真を提示し、それぞれにどんな工夫があるのかを予想させた。子どもたちは買い物調べで得た観点をもとにして追究の計画を立てていった。

考察1

資料1①2①から〇児が買い物調査の結果や家族への聞き取りから消費者の購入の観点を見出したり、自分の生活や聞き取り調査の結果を背景にして予想を立てたりしていることがわかる。これは実際に家族の買い物調査という生活から取り出して学習対象を見出した結果だと考える。また、資料1②資料2②から、学習の見通しを立てていることや比べて調べる追究の進め方を見出していることがわかる。これは追究の観点の定着とともに多角的に販売の工夫を追究しようとしている姿であると考えられる。このことから生活調査から複線事象に出会わせたことは、追究の観点の定着とともに比較して販売の工夫を追究する姿を生み出すのに有効だと考える。

第2次では、2つのスーパーマーケットの比較追究を通して、スーパーマーケットが消費者の願いに答えるための販売の工夫の法則性をとらえ、それらを参画の観点として見出し

(2) 観点毎に比較して法則性と独自性を見出す。

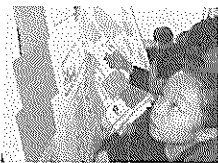


写真2
2つの店で似ている工夫とその
お店だけの工夫があるぞ。

二つのスーパーマーケットを比べると似ていたのは①「品質」と「サービス」です。両方ともお客さんに喜んでもらおうとしているのだと思いました。A店は「種類」、B店は「量」を工夫していて、②「お店によって工夫ところがちがうな。」と思いました。でも、「お客さんのことを考えているところは同じだ。」と思いました。③今度は私がいくスーパーも調べて、ちがうところや似ているところを見つけたり、お店の人がどんな工夫をしているか調べたいです。それをお家の人に教えて買い物に役立てたいです。

資料3 比較交流後の〇児の感想

(2) 商店街の工夫を調べ活性化案について話し合う。
わたしはもっとお客さんが来てもらうには①「サービス」「種類」「品質」を大切にしないとダメだと思います。それが私はスーパーマーケットと比べていいところだと思うからです。でも②お客さんに聞いてみないといい店にはならないし、それに商店街のいいところをなくさないようにしないとダメなので、実さにお客さんに聞いてみてもっと考えてみたいです。

資料4 活性化案作成に向けての〇児の感想

第3次：10～14/14時
活性化案を提案する。



写真4 提案しよう。

案	スポーツ専門店
根拠	地域の要望と取材 商店街のよさ
工夫	○ 客の要望を重視した品揃えと配列 ○ 基準をもとにした設備と検査体制 ○ 客との会話重視と割引やスタンプサービス

資料5 〇児の提案内容

①スーパーマーケットや商店街が品質や種類、お客さんに喜んでもらえるようにサービスをしたり、いろんな場所から朝早く新せんなものを運んできたりと工夫していることがわかって楽しかったです。②お店でちがうところもなるほどなと思いました。商店街のアイデアも③「品質を大切にしたい方がいよ。」とか話し合っって本当にお店の人になったようでした。④買い物するときは、品質などでえらんで、「このお店はこんな工夫をしているぞ。」と考えたいです。

資料6 学習後の〇児の感想

適用させることがねらいである。

そのためにまず、2つのスーパーマーケットを追究させた。次に、それぞれの販売の工夫をカードに表させ、比較して話し合わせた。子どもたちは2店の共通点を「品質管理」と「サービスの充実」としてとらえ、それが消費者のニーズに対応しているという法則性をとらえていった。(資料3) 次に、附属小学校付近の商店街の集客数をスーパーマーケットと比較させた。子どもたちは集客数が多いことから「スーパーマーケットとはどんな工夫をしているのかを比べてみたい」という新たな比較追究への意欲をもち、スーパーマーケットの追究から「価格」「品質」「種類」「サービス」「アクセス」「陳列」「量」の観点から追究の予想を立て、追究していった。

商店街の販売の工夫を調べた子どもたちに、商店街の集客数や店舗数が減少しつつあることや商店街を活性化したいという会長さんの願いや空き店舗区画の案を求めているVTRを提示した。子どもたちは、商店街を活性化したいという願いをもち、その活性化の方向性を既習から「サービスの充実」「種類の豊富さ」という参画観点を見出していった。

考察2

資料3①から〇児は二つのスーパーマーケットの販売の工夫について調べ、共通点と「お客さんに喜んでもらう」という願いを関係づけて見出している。また、下線部②③は、独自性と共に法則性を見出し、さらに自分の生活から法則性を見出そうとしている姿と考えることができる。このことは、子どもの生活に身近で類似する複数事象を取り上げ、比較をさせることで、社会的事象の仕組みを観点から分析したり、働きを願いと結びつけたり、自分の生活へと目を向けさせることにもなっていると考える。また資料4①から、スーパーマーケットと比較しての共通点を見出し、消費者のニーズに合わせてという法則性を見出すことができている。このことから複数事象の比較することで、社会的事象の法則性を強く意識化することができたと考えている。さらに資料4②を見ると、消費者のニーズに合わせたものでないといけないと考えていることがわかる。これらのことから、2つのスーパーマーケットの比較は販売の工夫を法則性を見出させ、さらに他の販売活動に出会わせたことは、販売の工夫の観点を定着させ、参画の観点を見出させるのに有効だったと考える。

第3次は、比較追究で定着した追究の観点を適用して商店街の活性化案をつくり提案させ、学習の有用感を味わわせることをさせるをねらいとした。

そのために観点をもとに原案をつくらせ、消費者に有効性をインタビューさせて検討させてジグソーグループで実現性や有効性の観点から吟味させたりする活動を行った。

考察3

資料4と資料5の比較から〇児の参画の観点が強化されていること、資料6④からは学習を通して自分の消費生活を追究の観点から見つめ直していこうとしていることがわかる。

【全体考察】

資料6の下線部①②から、〇児が販売活動の工夫を比較を通して消費者の願いと結びつけてとらえたり、店の独自性をとらえたりしていることがわかる。また下線部③からは〇児が追究の観点を参画の観点として位置づけていることもわかる。このことは比較追究を通して社会的事象の観点や法則性を見いだすことができたこと、また類似事象を提示することで観点や法則性を適用し参画活動により観点を定着できたことと考えることができる。今後の課題としては複数対象の追究の仕方を発達段階に即した形での複線化にすることと追究過程での自己評価活動の充実と考える。

家庭科学習の〈ふくおかプラン〉

I 家庭生活を工夫する喜びを生み出す家庭科学習

1 家庭科での学ぶことと生きること

家庭生活は時代の変化とともに日々進展している。しかし、家庭で体験すべき生活体験が乏しいために、生活への感性や他人の立場で考える感覚も希薄になってきており、生活技能そのものが身につけていない子どもも増えてきている。家庭科では、衣食住に関する実践的・体験的な活動を通して、家庭生活への関心を高めるとともに日常生活に必要な基礎的な知識と技能を身に付け、家族の一員として生活を工夫しようとする実践的な態度を育てようとしている。これらは、身に付いた知識や技能、自分が大事にする観点から自分や家族の生活を分析し、課題を見出し、習得した知識や技能を再構成したり総合したりして、家庭生活を課題を解決し家庭生活に活用できる力を育むことであり、これらの態度や能力は、生活の中で生きて働く力である。

2 家庭科部主題についての説明

家庭生活を工夫する喜びを生み出すとは、自分の生活の課題を解決するために、情報収集した中での知識から見通しをもとに仮説を立て、比較実験や観察を通してよりよい生活にするための仕組みが分かったり実際に試したことを実践したりして家族に役立つことに効力感をもつことである。自分の生活をよりよくしたいという強い思いをもち、そのために考えたり、作ったり、試したりして試行錯誤しながら家庭生活が実際によりよくなった喜びをもつことである。

【表 豊かに生きる子どもをはぐくむための家庭科の基礎基本】

学 ぶ 意 義				
・家庭科において豊かに生きるとは、家族の一員としての自覚をもち、家庭生活をよりよくしたいという願いをもつこと、そのための工夫について気づいたり、理解したりすること。自分と家庭生活を営む上でもの・人・こととのかかわりを見つめて、生活向上に必要な生活技能や知識を主体的に獲得し活用できること。				
		5 年 生	6 年 生	
能 力	A能力 実体的 能 力	生活を観察する 知識・理解・ 技能	家庭生活を構成している様々な要素が分 かる力 身に付いた知識や技能、自分が大事にす る観点から自分の生活を分析し、課題を 見出すことができる。	家庭生活を構成している要素の関係が分 かる力 自分に身に付いた知識や技能、家族が大事 にする観点から自分や家族の生活を分析し、 課題を見出すことができる。
	B能力 機能的 能 力	生活を構想する 力	よりよい家庭生活を計画する力 よりよい家庭生活に向けて、必要な情報 を多面的に収集・選択する力	よりよい家庭生活を計画する力 よりよい家庭生活に向けて、必要な情報 を総合的に分析する力
		生活を判断する 力	家族の一員であることから生活の工夫を 判断できる力	近隣の人々との関係から生活の工夫を判断 できる力
		生活の工夫を 自己評価する 力	自分の生活の仕方や自分なりに考えた工 夫を振り返る力	自分の改善した生活の仕方や場面に応じた 生活の工夫のよさを振り返る力
		生活実践力	習得した知識・技能を再構成し、家庭生 活の課題を解決して家庭生活に活用でき る力	習得した知識・技能を再構成したり、総合 したりして、家庭生活の課題を解決し家庭 生活に活用できる力
自信	・計画したり工夫創造したりする能力やものを創造する喜びや成就感も得られ、家庭実践を通して家族とのかかわりを深め、家族の役に立ったことから自分に有用感をもち、自分の生活や家族の生活をよりよくしていこうと対応することができる。			

家庭生活を工夫する喜びを生み出す家庭科学習とは、何気なく暮らしてきた家庭生活に自分も関わり、家庭生活のしくみや生活行為の意味に気付いたときに、「自分でもやってみたい」という思いをもち、よりよい生活の実現を可能にし、学習したことで生活がよりよくなることで自分に自信をもつことができる学習である。そのためには、生活を工夫する力として、生活を観察する力と生活を構想する力を重点として「なぜ」を追究する学習を位置づけることが必要である。日常生活の「なぜ」を解き明かすことで、生活の多様性につながりをもって見えてくるきっかけとなる。さらに多様で具体的な課題を解決する道筋を体験する学習を展開することにより、方法だけを知って応用できないのではなく、仕組みが分かっていることで柔軟に応用ができたり、自分が疑問に思ったことを比較実験等をしてよりよい方法を判断し使おうとする子どもが育つと考えられる。学習したことが場や状況に応じて「使える」ことで自分の学びに自信を持ち、生活が変わり家族に役立つことで有用感を味わうことができる。

- 家族の一員として家族や回りの人々と協力し、よりよい生活をしようとする子ども (学ぶ意義)
- 衣食住などに関する実習や観察・実験等を通して、自分の生活課題の解決に必要な基礎的な知識や技能を獲得し、それを活用できる子ども (能力)
- 自ら獲得した知識や技能を実践することで生活向上のよさや家庭生活の大切さを実感し、有用感や満足感をもつ子ども (自信)

Ⅱ 家庭生活を経科学的に見つめ・つくる試し活動を位置づけた家庭科学学習プラン

家庭科部 脇 本 孝 枝

1 副主題の意味

家庭生活を経科学的に見つめるとは、生活の営みについて、「なぜそうするのか」、「どうすればいいのか」と原因を追究することにより、その仕組みが分かたり見方が広がったりすることである。家庭生活を経科学的につくるとは生活上の問題を学習課題として設定し、その解決策を目指して計画を立て、資料の収集、調査、観察や実験、実習などの活動を通して解決を図っていくことである。追究する中で家庭生活を学校の中に再現したり（状況を再現する）、比較し分析しようとしたり（条件を変えて比べる）、定量的に見たり（方法を具体化する）して、複数観点からの考えの場が位置づき原因の分析が関係づけられる。科学的に見つめ・つくることにより、その事象や現象を確認しそこに働く原理や原則を理解して、生活場面に生かすことが可能になる。つまり、生活についての基礎的知識を理解させ生活に生かす力を身に付けることである。

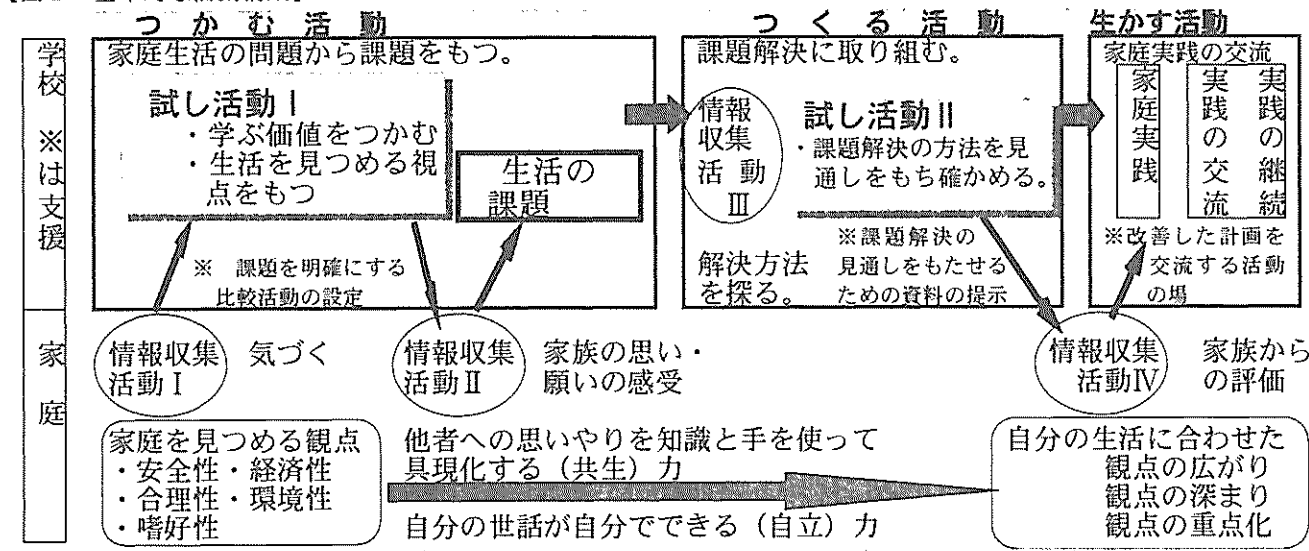
2 学習プランの具体的構想

● 家庭生活の更新につながる教材化

考えの根拠となる事実を調べる実験や調査などの試しの活動の中に、家族の観点が必要となる。家庭生活を『安全性・経済性・合理性・環境性・嗜好性』の観点から見つめ、家族の嗜好・健康・生活の様子などを多面的にとらえさせるために情報収集を学習過程の中に位置づけることが重要となる。子どもが生活を科学的に見直し課題意識をもって追究し、生活を見る観点を広げたり深めたりして生活を工夫する喜びを生み出す力を育てる教材として以下の条件を考える。

- ① 自分の家庭生活をよりよくしていく上で家庭生

【図1 基本的な活動構成】



活の実態から、見直し解決しなければならない必然性のある課題を含むもの

- ② 生活の事象の必然性を理解し、習慣的に行っている生活事象を科学的に解決の方法を考え、その実現に向かって取り組むことができるもの
- ③ 日常の生活の仕方を見直し、科学的な裏付けのある資料や実験を通して、日常の事象と関連させて理解し、生活をよりよく工夫していこうとする意欲を育てることができるもの

● 家庭生活へのはたらきかけを位置づけた基本的な活動構成

「つかむ、つくる、生かす」の3段階の問題解決学習の過程で構成する。つかむ段階には「試し活動Ⅰ」を設定し、実験や観察で学ぶ価値をとらえ生活を見直すことで自分の課題をつかむ。また、つくる段階に「試し活動Ⅱ」を位置づけ、自分が課題解決のために情報収集したことから自分の生活に生かせることを見通しを持って試し家庭生活へとつなげる。個々の生活体験を科学の論理を借りて普遍化し、それぞれの体験の枠組みの中に再構成させる。そのために、試し活動として、子ども自ら活動の手順や方法の意味を決定し、自分の課題を見つたり解決したりするための調べる活動を位置づける。

【試し活動Ⅰ】

なぜそうしなければならないのか考え、理由を追究し、自分の課題をつかむ活動である。科学的な視点を付加することにより、学ぶ価値を実感し生活を見つめなおすことができる。

【試し活動Ⅱ】

どうしたらいいのか自分なりの見通しをもち、解決に必要な情報を集めたり方法や手順を決め、実験・観察等を通して解決を図る活動である。生活が変わることにより、自分の学び方に自信をもつことができる。

第5学年 題材

気持ちのよい住まいにしよう ～スッキリ大作戦～

(1) 題材の目標

- 1 気持ちのよい住まい方するために、自ら課題を見つけ、計画を立て、工夫して実践する意欲を高めることができる。
- 2 家族が清潔で気持ちよく生活するために、清掃が大切であることが分かり、身の回りを快適に整えることができる。

(3) 学習の流れと考察

第1次：1～4／9時 【つかむ】

気持ちのよい住まいという目で自分の生活をふり返り、どのようにしたら気持ちのよい生活ができるのかについて話し合い学習の計画を立てる。

- (1) 家庭での情報収集をもとに、気持ちのよい住まいについて話し合う。
- (2) 教室の汚れ調べをし、汚れの原因について考え清掃の必要性について話し合う。(試しの活動Ⅰ)



写真1 試し活動1で児童玄関の汚れの原因と掃除の仕方を調べる児童

- (3) 「試しの活動1」をもとに家庭で情報収集し自分の課題をつかむ。

たたみのほこり、ごみ、食べかすを完全になくすため、たたみの掃除の仕方を調べたい。

資料1 住まいの汚れとA児の課題

第2次：5～7／9時 【つくる】

自分の課題を解決するための見通しをもつために材質や汚れの種類に応じた清掃の方法を調べる。

- ① 課題解決のために、掃除の仕方を考え計画を立てる。

(私がきれいにしたいのは、家のこんな場所)

・和室のたたみ

※ そこを選んだのは家では掃除機しかかけていないから拭き掃除としかしてたべかす・ごみ・しみなどのよごれをとりた。

(2) 題材の考え方

生活の学びとして展開する本題材では、日常の住まい方に関心を持ち、気持ちのよい住まい方をするために、自ら課題を見つけ、計画を立て、工夫し実践しながら家庭生活をよりよくしていこうとすることをねらっている。そこで、①家族のために気持ちのよい住まいにしたいという思いを大切に、家族の住生活に対する思いを受け止め課題をつかむための調査活動②仮説を立てそれを検証するために実験や観察をしたり、家庭から情報収集してたりして課題を解決するための活動③課題解決したことをもとに家庭実践をし、家族の一員であることを実感する活動を設定する。清掃など住まいに関する生活行為を主とし、そこでどのように生活しているのか家族と住まいとのかかわりに目を向けるようにする。住まい方を通して、自分の思いを家族に伝える手段を見つけ、清掃を通しての行動として表す。「どうやったらいいだろう」と事実を認識し、原因を追究し、試し活動で解決方法を考え家庭実践に活かすという考え方で題材を構成する。

第1次では、清掃を通して気持ちのよい住まい方に関心を持ち、汚れの原因について考え清掃の必要性について調査する「試しの活動Ⅰ」を通して、自分の生活を見直し課題をつかむことをねらいとしている。そのために、気持ちのよい住まいについて、自分の体験や家庭での情報収集をもとに話し合わせた。家族が楽しく気持ちよく過ごせるように、清掃を重点として住まい方を工夫したいという思いを大切に、一人一人が課題意識をもって学習に取り組むために、共通課題をして「スッキリ大作戦！」を設定した。次に「試しの活動1」として、住まいの汚れとその原因や清掃の必要性を観察や実習で調べたり、自分の家庭や学校ですっきりさせたい場所はどこかを見つめさせる調査活動を位置づけたりした

考察1

写真1のように、掃除の必要性の科学的データーをもとに学校の汚れを見つめ直し、交流する中で汚れの構造について気づき、材質や汚れと掃除の方法について目を向けることができた。資料1のように「汚れの分類・よごれの種類・場所」を考えて、家庭できれいにしたいところを情報収集して、自分の課題とし、解決に意欲をもっている姿が見られた。「試しの活動Ⅰ」で学校の汚れ調べをし、「汚れ方、場所、汚れの種類」の視点で観察することを通して、汚れの原因や清掃の必要性を考えることが家庭生活を見る目につながり、家庭生活の中から自分の課題をもつことができた。

第2次では、自分の課題に応じた場所や材質、汚れに応じた清掃の仕方が分かることをねらいとしている。そのために、まず子ども達が自分の生活の課題を明確にすることができるようにした。そして、自分の課題を解決する見通しをもつための「試しの活動Ⅱ」を設定した。課題を解決するために、仮説を立てそれを検証するために実験や調査の場を設定し、床や窓の材質に応じた清掃の仕方や掃除道具の使い方、場所に応じた清掃の仕方や掃除用具の使い方の実験、実習などをし課題を解決した。

〈どんな汚れ〉たべかす・ごみ・しみ

〈材質〉たたみ

〈どうしたいのか〉

たたみのしみをとって家族を喜ばせたい。

学校のこんな場所でこんなことを試します。

〈場所〉実験用たたみ

〈用具と手順〉

- | | | | |
|---------------------|---|---|---------------|
| ① | ② | ③ | 1週間前につけたしみ |
| ① | ② | ③ | 実験前につけたばかりのしみ |
| ①ソース②醤油③食べ物のしみ | | | |
| ※お茶がら、酢、水でとれ方を比較する。 | | | |

資料2 A児の課題解決のための計画



酢で畳がきれいになるのかな。ちょっと臭いよ。酢の方がよく落ちるよ。

写真2 比較実験をするA児

第3次：8～9/9時 【いかす】

「試し活動Ⅱ」で試行したことをもとに、実践計画を立て家庭実践に生かし、学習のまとめとして「年末お掃除大作戦」を作成し家庭実践の喜びを交流する。

・・・掃除をしなかったらごみやダニが増えて病気になるよ。」と言われたとき、僕はどきどきした。「じゃあ掃除をしなかったら病気になるのか」・・・さらに心を動かしたのは実践してからです。掃除の仕方を試して家で実践したとき、掃除をする前と後がすごく変わっていて、掃除をした部屋にずっといたくなりました。また、家族にも「とってもきれいになったね」と喜ばれ「やっぱり掃除はいいもんだな」と思いました。掃除はめんどくさいです。でも、掃除は積極的にしたいです。

資料3 家庭実践後のA児の感想

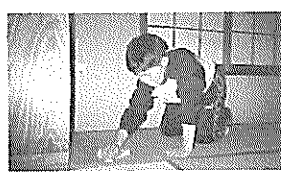


写真4 A児の家庭実践の様子

【全体考察】

本題材は、家族とのかかわりを通して内容に関連させ、科学的に見つめ、つくる試しの活動Ⅰ・Ⅱを位置づけたことで、家族とのかかわりを豊かにしながら自分の住生活を望ましい環境にしようとする姿を見取ることができた。

考察1のように、「試しの活動Ⅰ」で実習や観察をもとに掃除の必要性や材質・汚れの種類、場所による掃除の違いに気付かせ、その視点をもって家庭を見つめ情報収集したことで、自分の生活を見直す視点がはっきりとし自分の生活に根ざした課題をつかむことができた。

考察2のように「生活をこのように変えたい」という児童の強い思いは追究意欲となって自分の解決方法に自信をもち家庭実践へとつなげることができた。

また、考察3のように、自分の生活を正確に見る目を持ち、課題解決のための試行の場を設定することは、自分の働きかけの価値を実感させ自信をもって家庭実践に取り組むことができ、実践力を育むことに有効に働いたといえる。ただし、「科学的な見方をつくる」視点から、条件をそろえる実験方法等を意識させ取り組ませる必要があると考える。

考察2

試し活動Ⅱを設定し、資料2のように「自分がきれいにしたいのは家のこんな場所」と自分の課題をはっきりと意識させ、汚れの種類、材質等を考え代わりに学校でこんなことをするというように学校での試し活動Ⅱを位置づけた。このことにより、自分で考えた方法を実際に試し、自分なりに汚れの原因を考え「何のためにするのか」課題意識をもって学習に臨むことができたと考えられる。A児は課題解決のために、一週間前の①ソース②醤油③食べ物のしみと実験前につけたばかりの①②③を比較しすぐに汚れを取る必要性を実感した。また、酢を使ってシミを取る方法、お茶がらを使って掃除をする方法を試しその有効性について確かめ、経済性、環境配慮行動という観点を付加することができた。また、自分が情報収集したことを実際に試し、うまく汚れがとれない事例は、原因について追究し家庭実践に生かした。このことにより、自信をもって家庭実践に取り組もうとする意欲を高めることができ、「試し活動Ⅱ」の手だては有効であったと考える。

第3次は、気持ちのよい住まいにするために課題解決したことを家庭で実践することで、身の回りのことを自分の仕事としてすることは家族への協力になり、家族の生活を支える仕事になること、家族と心のつながりが深まっていくことを実感できることをねらいとしている。そのために、「試しの活動Ⅱ」で試行したことをもとに家庭実践の計画を立てた。また、家庭実践カードに家族からの感想コーナーを設定し、継続的な家庭実践へとつなげた。A児は失敗をもとに、水と酢を6：1で混ぜ酢のにおいを和らげぞうきんにつけて固く絞ったシミをこすこと、お茶がらを乾かしてまき、それをほうきではいて掃除機で仕上げることを付加し実践に臨んだ。試行したことに改善を加え家庭で自信をもって実践している。また、家庭からも「一生懸命やってくれて助かりました。・・・」と評価をもらい、年末に向けて他の場所もきれいにしてほしいという願いを受け止めている。

考察3

A児の家庭実践後の感想文より、「試し活動1」で掃除の必要性を調査したり科学的に捉え直すことにより、学ぶ価値が明確になりその後の学習意欲につながったことが分かる。

家庭で実践することにより新たな課題を見つけ追究意欲をもつことができた。また、実践カードの家族のコメントにより家族の思いが伝わり、家族に役立つ喜びを感じることができた。と考える。「年末お掃除大作戦」の作成は写真4のように自分の課題解決の場所だけでなく、家全体を見つめ掃除の実践範囲を広めるとともに、友達の実践に役立つ喜びを得、課題解決の達成感を味わうことができた。

生活科学学習の〈ふくおかプラン〉

I 自分たちで楽しい生活をつくり出す生活科学学習

1 生活科での学ぶことと生きること

生活科が究極的なねらいとしているのは、学習上の自立、生活上の自立、精神的な自立、この3つの自立への基礎を養うことである。また、生きるということは、自ら環境に働きかけることであり、子どもたちにとって環境とのかかわりが、その人間形成に大きな影響を及ぼすことはよく知られている通りである。これらのことから、生活科においては、子どもが身近な人々、社会、自然と直接かかわり合う中で、集団や社会の一員として、集団生活ができるようになり、身近な社会や自然の事柄に関心をもって、生きる主体として環境に積極的に働きかけることができるようにしていくこと、さらには、自分を見つめ自己形成を図り、自分たちで楽しい生活をつくり出す学びが大切になってくる。

2 生活科部主題についての説明

自分たちで楽しい生活をつくり出すとは、自分の目の前にある生活現実、自分の力によって主体的に働きかけ（主体的活動性）、友達や身近な人と協力して（協同性）、より望ましい課題解決をして対象への気付きを新たにしていくこと（価値志向性）である。この中核となるのは、価値志向性であり、それは、子どもの内面にある対象への気付きが、価値ある新たな気付き（社会的に認められている、活用できるアイデアである、自分とのかかわりの親密性）へと向かっていくことであると考え

る。具体的には、～をつくったり、〇〇会を開いたりしながら、対象への思いや願い、新たな気付きをつくりだしていくことである。

自分たちで楽しい生活をつくり出す生活科学学習とは、子どもたちにとって抵抗感はあるが追求する価値のあるもので、身近な人と協同することによって課題を解決し、思いや願いを膨らましながら学ぶ意義を感じて、自分の応えを見いだしていく学習である。また、身近な人と協同的に対象とかかわっていく中で、相互評価・他者評価・自己評価を行い、内なる自分への気付きとして「わかり、できるようになっていく自分」を見つけ、自信をもつことを大切にしていける学習である。さらに、自分で楽しい生活をつくり出していくためには、身近な生活現実に働きかけ、本物の手応えのある体験や活動をしていく中で、その対象とかかわりのある人と一緒に思いや願いを膨らませ、それを解決したり達成したりすることによって、より価値のある気付きを獲得することできると考える。そこで、次のような子どもの姿をめざした学びを展開していく。

- 積極的に身近な人々や社会、自然に働きかけて、自分自身や生活を見つめ直し、より楽しい生活をつくっていくことのよさを実感している子ども（学ぶ意義）
- 身近な人と協力しながら、課題解決を行う中で、よりよい気付きや生活上必要な習慣や技能を身につけている子ども（能力）
- 自分の活動や伸びを見つめ直し、自分の可能性を信じて意欲的に挑戦する子ども（自信）

【表1－豊かに生きる子どもをはぐくむための生活科の基礎・基本】

生活科を学ぶ意義			
具体的な活動や体験を通して身近な人々や社会、自然とかかわりに関心を持ち、自分自身や生活について考えながら自立への基礎をはぐくむことによって、これから豊かに生きていく勇気や希望をもつことができる。			
	観 点	第1学年	第2学年
能 力	A学力 習慣・技能	もの、人、ことにかかわっていく上で、また問題を解決していく上で必要な習慣や技能を身に付けることができる。	
	実体的 学力	対象の特徴をとらえたり関係付けたりして、社会性、活用性、自分とのかかわりが分かり、自分にとっての意味を見いだすことができる。 【直感的に・実感的に】⇒【振り返り、こだわりやその根拠をもって】	
	B学力 感じる力	身近な対象との出会いにおける驚きや感動、不思議さを素直に感じ取ることをすることができる。	対象に興味・関心を抱き、自分なりに追求する思いや、達成したいという願いをもつことができる。
	機能的 学力	追求力 自分を取り巻く身近な人々、社会及び自然に対する興味関心素朴な疑問などから、自分なりの思いをもって進んで対象に働きかけることができる。	自分自身にとってのもつ意味に気付き、身の回りにあるものをもう一度見直し、自分なりの切実な問題意識をもって対象に働きかけることができる。
自 信	表現する力	活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉や絵、動作、劇化などによって進んで表現することができる。	活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉や絵、動作、劇化などによって分かりやすく表現することができる。
	振りがえる力 (自己成長感)	できる自分、できるようになった自分、一生懸命頑張っている自分、友達と協力している自分など自分自身のよさや成長に気付き、未知の世界に向かってさらにチャレンジしていこうとすることができる。	

II 身近な人とのかかわり活動を位置づけた学習プラン

生活科部 北 島 孝 徳

1 副主題の意味

本研究で考える身近な人とは、子どもたちが追求しようとする対象に思いや願いをもってかかわっている人で、商店街の人や地域指導員などの子どもたちと一緒に活動して対象に触れてくれる人、公民館の主事さんやお巡りさんなどの子どもたちの求めに応じて情報を与えてくれて気付きや活動の善し悪しを判断して評価してくれる人、保護者や下級生など働きかけることによって自分たちの高まりを感じることができる人である。身近な人とのかかわり活動とは、図1のように、身近な人と一緒に新たな価値ある気付きをつくり出していく活動である。具体的には、思いや願いをもち、対象への働きかけの方向性を見通すために一緒に出会い触れ合うこと、対象への価値ある新たな気付きを獲得するために一緒に調べたり、調べたことをまとめてつくったりすること、できる自分に気付くために、一緒に実際に行動したり表現したりすることである。

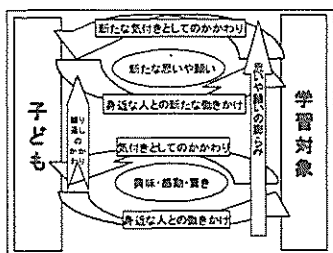


図1 身近な人とのかかわり活動

身近な人とのかかわり活動を位置づけた学習プランとは、3つの学習段階のなかに、対象に関係のある身近な人とのかかわり活動①②③を仕組んで、対象に対する思いや願いをもとに、追究していく観点を選択したり、かかわる人を選択したりして、「対象と自分の新たなかかわり」や「できるようになっている自分」などの新たな価値ある気付きを獲得する自己開発の学びを行うとともに、生活をより楽しいものへと変えていく「生活の学び」で学習を展開していくことである。具体的には、まず、対象に出会う時に、対象と一緒に触れたり調べたりしてくれる人との「かかわり活動①」を位置づけ、「どうしてだろう、調べてみたいな」という思いや願い、見通しをもつことができるようする。次に、思いや願いをもとに一人一人が個性的なかかわりをもとに自分で追究活動を行う。そして、そこで生じた疑問を明らかにするための調べ活動をする時に、子どもの求めに応じて、調べたりつくったりするための情報を与えてくれ、気付きや活動のよさを評価してくれる人との「かかわり活動②」を位置づけ、対象への価値ある新たな気付きを獲得することができるようにする。さらに、解決したことを伝えるときに、気付きや活動の善し悪しを判断して評価してくれる人、働きかけることによって自分たちの高まりを感じることができる人との「かかわり活動③」を位置付け、「ばくってすごいな。これからは色々なことに頑張っていこう。」など、自分のよさや可能性に気付き、楽しい生活をつくりだしていこうとするようにする。

2 学習プランの具体的構想

● 価値ある気付きを生み出す教材化

教材化については、価値ある気付きを生み出すように、身近な人とのかかわり活動を位置づけることを基本として、次の3点から教材化を図る。

- ① 子どもが直接かかわることができる地域の人・もの・ことを対象として、繰り返し働きかけることによって、思いや願いが膨らみ、自分にとって価値のある気付きが生まれる可能性があること
- ② 子どもにとって抵抗感はあるが、身近な人と協力しながら意欲的に活動することによって課題を解決し、自分なりの応えを見いだすことができること
- ③ 活動したり体験したりしたことを交流したり振り返ったりすることによって、それぞれの過程で成果として見とれ評価(自己評価・相互評価・他者評価)できること

● 対象にかかわりのある人の位置づけ方

思いや願い、気付きが価値あるものへと向かうように、人との出会いを学習段階ごとに位置づけるようにする。

	どのような人	具体的な人
で	子どもたちが身近に出会うことができ、対象への思いや願いをもって具体的に活動している人	・地域指導員・商店街の人・老人会の人・～会などボランティア的活動を行っている人等
ひ	対象に対するある程度の専門的な知識をもち、地域の人々の思いや願いを知って子どもたちの問いにこたえることができる人	・公民館の館長や主事さん・公立図書館や博物館の人・お巡りさん・商店街の会長さん等
い	対象にかかわりのある人で、子どもたちの表現活動によってその人の生活もよりよく変わっていくような人	・学校の友だちや下級生・幼稚園児・保護者・地域の人・老人会の人等

● かかわり活動を位置づけた活動構成

楽しい生活をつくりだしていくために、子どもが思いや願いを連続させながら、価値ある気付きを獲得するようにかかわり活動を位置づけていくようにする。

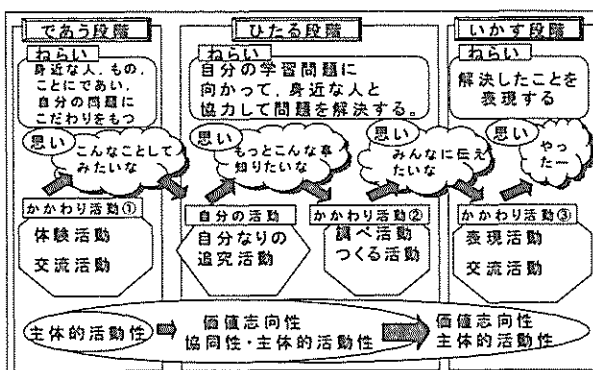


図2 身近な人とのかかわり活動を位置づけた基本的な活動構成

第2学年 単元

あんしんがいっぱい!

ぼく・わたしのつうがくろ

(1) 題材の目標

- 1 「安心マップ」づくりや「安心教室」を行うことを通して、通学路の様子やそこで出会う人に関心をもち、積極的に働きかけて、安心して楽しく登下校できる。
- 2 友達や地域の人と協力しながら、通学路のよさやできるようになっている自分に気づき、1年生や自分のために「つうがくろ安心マップ」を工夫してつくり上げることができる。

(3) 学習の流れと考察

第1次：1～3/12時

通学路自慢大会を開いて、自分たちで通学路探検を行い、通学路安心マップづくりへ向けた計画をたてる。

- (1) 通学路自慢大会を開いて、自分たちで通学路探検を行い、通学路のよさや安全について話し合う。
- (2) 通学路安心マップをつくるための探検をする計画を地域指導員の横尾さんと交流する。



写真1 守ってくれている人やものを見つけるといいですね。

横尾さんの話を聞いて、この次は、ものだけでなく、私たちを見守ってくれている人も見つけたら、1年生が安心できると思いました。

資料1 交流後のR児の感想（一部抜粋）

第2次：3～9/12時

こだわりをもって通学路探検をして、1年や自分のための「つうがくろ あんしんマップ」を自分なりに工夫してつくる。

- (1) 通学路探検の計画を立てて、「つうがくろ あんしんマップ」をつくるための通学路探検する。



写真2 見守ってくれている人を見つけたよ！

(2) 題材の考え方

生活の学びとして展開する本単元では、「みんなの安心マップづくり」や「ぼくと1年生の安心マップづくり」を通して、積極的に地域のいろいろな人とかがわったり通学路探検をして通学路を見つめ直したりして、通学路への気づきを深めながら、自分の成長を実感することができるようになるとともに安心して楽しく通学できるようにすることをねらっている。そのために、通学路へかかわっていくときに、身近な人とかかわり活動として、対象と一緒に触れたり調べたりして働きかけてくれる地域指導員の横尾さんとかかわり活動①や子どもの求めに応じて、調べてたり安心マップをつくったりするために情報を与えてくれ、気づきや活動のよさを評価してくれる荒戸交番の唐島お巡りさんとかかわり活動②、「1年生との安心教室」を行い働きかけることによって自たちの高まりを感じることができ1年生とかかわり活動③を位置付け、通学路での自分の生活を楽しいものへと変えていくように構成していく。

第1次は、通学路には、楽しい場所や危険な場所、色々な人々の出会いがあることや自分自身や1年生が安心して通学できていないことに気づき、安全に安心して登下校できるように安心マップをつくり上げたいという意欲をもつことをねらいとしている。そのために、通学路自慢大会を開くとともに、1年生からの手紙や通学路の危険なVTRを提示して、通学路には危険な場所があることや1年生の思いに気付かせるようにした。次に、通学路探検で出会った地域指導員の横尾さんと交流したいという思いから、一緒に探検してくれる横尾さんと交流する場を設定し、よりよい安心マップづくりを行うための観点到に気付かせるようにした。

考察1

通学の様子を振り返り、自分の不十分さや1年生のためにという課題意識をもち、資料1のR児の感想のように、安心マップをつくっていくときの新たな人という観点到に気付いたり、通学路について詳しく調べたいという思いをもったりすることができた。（主体的活動性）これは、地域指導員の横尾さんの子どもたちの安全を願う思いに触れるかかわり活動を位置付けたことが有効に働いたと考える。

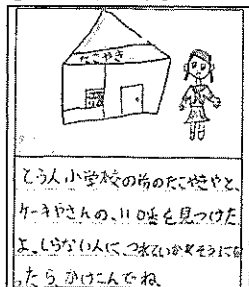
第2次では、「自分たちを守ってくれているもの」や「自分たちを見守ってくれている人」、「通学路の楽しみ」という観点を自分で選び決めてから探検を行い、友だちや身近な人と交流・協力しながら通学路の安心への気づきを深め、「みんなの安心マップ」や「自分と1年生の安心マップ」をつくり上げることをねらいとしている。そのために、まず、自分が教えてあげる1年生が、どんなことを心配しているのかを尋ねる活動を仕組んだ。その結果、「～さんが心配していることを解決してあげて、安心して登校できるようにしてあげたい」という思いをもつことができた。次に、2回目の「自分たちを守ってくれているもの・自分たちを見守ってくれている人を見つけよう。」という自分なりの思いをもった通学路探検を、3つのコースで行った。その結果、R児は写真2

(2) 通学路探検をして気付いたことを、お巡りさんと一緒に「みんなの安心マップ」にまとめる。



写真3 お巡りさんにぼくの

考えを聞いてもらったよ。 資料2 R児の見つけたよカード



(3) 「自分と1年生の安心マップ」づくりを行う。

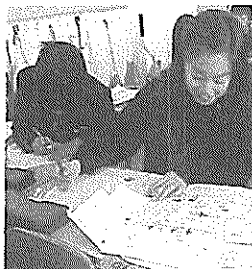


写真4 これで1年生に教えてあげられるよ。(R児)

- ① 110番の家のこと
- ② 花屋さんのこと
- ③ 警備員さんのこと
- ④ 白線のこと
- ⑤ 横断歩道の歩き方のこと
- ⑥ ドングリが落ちていること

第3次：10～11/12時

1年生との安心教室を開いて、自分たちや1年生が安心して通学できるようにする。

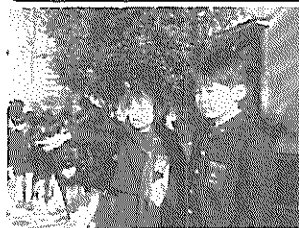


写真5 あれが安全バーで守ってくれているのよ。

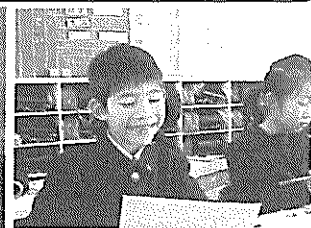


写真6 1年生が喜んでくれてよかったな。

わたしは、あらつ安心マップをべん強して、たくさんのことが分かりました。わたしは、その中で、子ども110番の家についてくわしくしらべました。わたしの通学路の中だけでも10こいじょうあったのでびっくりし、これで1年生も安心できると思いました。・・・これからは、林商店の人にもあいさつをして、1年生となかよく安心して通学していきたいです。

資料3 R児の学習後の感想（一部抜粋）

ように、自分の1年生の心配をもとに、見守ってくれている人にこだわりながら通学路探検を行い、110番の家や公民館の主事さん、花屋の方など、人への気付きを獲得することができた。そして、「これらが本当に自分たちを守ってくれているものや人なのか、どうしてつくられたのか」などの自分たちの疑問を明らかにするために、お巡りさんと交流したいという思いをもって、写真3のように積極的に荒戸交番の唐島さんとかかわり、資料2のような大きな気付きカードを作成することができた。さらに、みんなで協力してつくった「みんなの安心マップ」をもとに、「自分と1年生の安心マップ」を作り上げるようにした。その結果、R児は、写真4のように、思いに沿った「自分と1年生の安心マップ」を意欲的に作り上げることができた。

考察2

写真2、3、4や見つけたよカードから分かるように、R児の相手意識と目的意識をはっきりともって探検している姿（協同性）や「見守ってくれている人」と「守ってくれているもの」、「自分の行動の仕方」などをつないで通学路への気付きを深めている姿（価値志向性）、さらには、みんなの安心マップから自分の安心マップへと意欲を高めながら活動している姿（主体的活動性）を得ることができた。これらは、子どもの一人一人の疑問を明らかにするとともに、人やもののつながりを伝えることのできるお巡りさんとの交流活動や安心マップづくりをかかわり活動として中心に位置づけ、子どもの思いから活動をつないだことが有効に働いたと考える。

第3次は、通学路への気付きを確かに行うことができるようになって自分を実感することをねらいとしている。そのために、働きかけることによって自分たちの高まりを感じることのできる1年生との通学路安心教室を開いたり、1年生からの手紙を読んで、感想を出し合って、これまでの学習を振り返ったりする活動を行った。

考察3

写真5、6から分かるように、意欲的に安心教室を開き、自信をもって説明している姿（主体的活動性）、1年生のことを思いやっている姿、自分のやったことに満足し、自分が成長していることに気付いている姿（価値志向性）などを得ることができた。さらに、資料3のR児の感想から、通学路が自分にとって安心で身近なものとなり、楽しく安心して学校に来れるようにしようとしているのは、自分の生活をより楽しく変えていっている姿であると考えられる。これは、1年生との通学路安心教室を位置づけ、自分のこれまでの活動や自分自身の生活を振り返らせたことが有効に働いたと考える。

【全体考察】

本実践を通して、子どもたちは、考察1や考察2から分かるように、通学路には自分たちを守ってくれているものがあり、見守ってくれている人がいることや楽しいことやものがあることなどの通学路のよさを主体的に自分とのかかわりからとらえ直すことができた。また、考察3やR児の変容から分かるように、自分なりのかかわりを繰り返し自分の成長と自信を感じ取ることができた。これらは、価値志向性を発揮しながら、主体的活動性と協同性を高めて、自分の伸びを感じながら自分の生活をより楽しくしている姿であると考えられる。これは、子どもたちにとって身近で課題性のある通学路を身近な人とかかわりから教材化し、かかわり活動①②として、地域指導員の横尾さんやあらと交番の唐島お巡りさんと一緒に繰り返し通学路に働きかけたこと、かかわり活動③として、自分でつくった安心マップをもとに1年生に安心教室を開くことを位置づけたことが有効に働いたためであると考えられる。特に、人とかかわらせ方として、子どもの求めに応じて人を選択していくときに、かかわっていく人を子どもと一緒に考えたり提示したりしながら、一緒に活動して問題を見いだす人、問題を解決するために情報を与えて評価してくれる人、そして自分の高まりを感じ取ることができる人を各段階に位置づけ、活動をつないでいくことが大切である。

特別活動の〈ふくおかプラン〉

I 集団への関与を強めよりよい学校生活を築く特別活動

1 特別活動での学ぶことと生きること

特別活動のねらいは、望ましい集団活動を指導原理とし、学級や学校生活を形成する仲間と協力して自分たちの生活をよりよい生活へとつくりかえていく実践的な生活者を育成していくことである。特別活動でかかわる対象は子どもの学校生活そのものである。この特質を生かすことによって、環境に順応したり、支配されたりするだけでなく、自分たちの意志で自分たちの生活をつくりかえようとするのが可能になる。仲間と協力して生活をつくりかえる際には、集団のルールを守ること、協調すること、仲間と折り合いをつけ意思を統一することなど、民主社会を営んでいく上で基礎となる自治的な力を学ぶことができる。そして、生活をつくりかえる過程やつくりかえた結果において、自分の役割や仕事認められたとき、集団の中での自分の存在を価値あるものとして受け止めることができる。それは自信となって、さらによりよい生活をめざしていこうとする意欲へとつながるのである。ここに、特別活動における生きがいを見いだすことができる。

2 特別活動部主題についての説明

「集団への関与を強める」とは、集団の中での自分の役割を見つけ、積極的に集団とかかわり合いながら、集団の一員としての自覚を深めていくことである。

「よりよい学校生活を築く」とは、学校生活の主体者である子どもが、よりよい学校生活をめざして「やってみよう」とか「解決したい」という事柄を仲間と協力して実際にやったり、解決したりして学校生活をつくりかえていくことである。「集団への関与を強めよりよい学校生活を築く特別活動」とは、①学校生活をよりよくしたいという共通の願いから、集団活動の目的を共有化できる場があり、②その目的を達成するために各成員が活躍できる場があり、③その活躍が集団から認められる場がある特別活動のことである。このような特別活動を展開していくことで、子どもたちは集団を構成する単なる一員ではなく、よりよい集団をめざして集団に積極的にはたらきかける価値ある一員となり、集団への関与を強めることができる。そして、自分の存在を価値ある存在として自覚し、さらによりよい学校生活を築いていこうとする意欲を高めることができるのである。

- 学校生活をよりよくしたいという願いのもとに、集団の中で自分の役割を見つけ、それを責任をもって果たそうとする子ども（学ぶ意欲）
- 共通の目的を果たすために、自分の考えをしっかりと主張したり、折り合いをつけたり、協調したりしながら活動する子ども（能力）
- 自分の判断や行為を振り返り、自分を価値ある存在として自覚し、さらによりよい学校生活を築いていこうとする意欲をもつ子ども（自信）

【表 豊かに生きる子どもをはぐくむための特別活動の基礎基本】

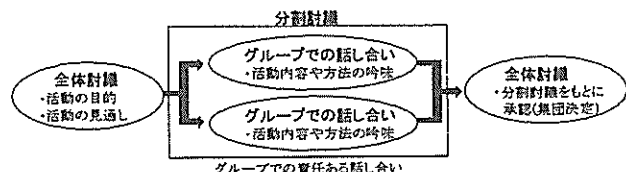
		特別活動を学ぶ意義			
		仲間と協力してよりよい学校生活を築いていく過程において、ルールを守ること、協調すること、折り合いをつけ意思を統一すること、個性を発揮し伸張していくことなど、民主社会を営んでいく上で基礎となる自治的な力を培うことができる。			
能力	A学力 実体的 学力	観点	低 学 年	中 学 年	高 学 年
		知識 理解	学級生活上の諸問題は、話し合いによって解決できることに気付くことができる。	学級内の組織づくりや、学級生活上の諸問題を解決する道筋を理解することができる。	学校生活上の諸問題の解決の仕方や集団活動の進め方を理解することができる。
	B学力 機能的 学力	問題 発見力	学級生活の中で困っていることがあったら、それを先生や友達に話すことができる。	学級生活の中で自分や友達が困っていることや、「みんなのためにこうしたい。」といったことを学級のみんなに話すことができる。	学級や学校生活の中で「もっとこうしたら学級や学校生活がよくなる。」ということを見つけ、提案することができる。
		社会的 思考力	学級生活をよりよくしていく方法を目的性の観点から考え、判断することができる。	学級生活をよりよくしていく方法を目的性、相互性の観点から考え、判断することができる。	学級や学校生活をよりよくしていく方法を目的性、相互性、現実性の観点から考え、判断することができる。
		人間関係 調整力	相手の話を聞くことができ、自分と違う考えをもっている人の存在を認めることができる。	友達の考えを共感的に理解し、自分の欲求を適度に抑えながら協調していくことができる。	自分や相手の立場を考え、自我を適度に抑制し、相手と協調・調和していくことができる。
自信	実践力		学級生活をよくするための仕事を友達と力を合わせて一生懸命行うことができる。	学級生活の向上をめざし、友達と役割を分担しながら最後まで責任をもって行うことができる。	自分の行為が集団に及ぼす影響を考え、責任をもって自分の役割を遂行することができる。
			集団の中での自分の役割や仕事をみつけ、よりよい学校生活をつくりだすために自覚し有用感を高め、さらによりよい学校生活を築いていこうとする意欲をもつことができる。		

Ⅱ 全体討議と分割討議を位置づけた学級活動プラン

特別活動部 矢野俊次

1 副主題の意味

全体討議とは、学級の全員で目的を共有化したり、活動内容を共通理解したりするために行う学級全体の話し合いのことである。分割討議とは、目的の達成のために検討しなければならない事項をいくつかに分けて、分担して討議していくグループでの話し合いのことである。これまでの学級活動では、全体での話し合いによっていくつもの事項を集団決定してきた。しかし、それでは意見を言う人数が制限される、自分の意見が反映されにくい、時間がかかる等の問題が生じていた。このことは、話し合いに対して消極的な子どもを生み、話し合いの中で自分の存在価値を見いだせない子どもをつくる要因にもなってきた。そこで、分割討議を取り入れることで、グループや個人の役割と責任が明らかになり、話し合いの中で自分の存在価値を自覚できると考えた。このことは、話し合いやその後の集団活動に積極的にかかわろうとすることにつながる。全体討議と分割討議を位置づけた学級活動とは、学級の全員で目的を共有化したり活動の見通しを共通理解したりする際には全体討議を行い、目的達成のためにいくつかの事項を決定していく際には分割討議を行いながら、よりよい学校生活を築いていくことである。このことにより、集団の中での自分の役割と責任を自覚し、集団の目的達成のために積極的にかかわろうとする新たな自分を創造でき、自己開発を大切にしたい生活の学びが展開できる。



【図1 全体討議と分割討議を位置づけた話し合い】

2 学習プランの具体的構想

● 集団への関与を強める題材化の工夫

子どもたちは学級編成により同じ集団に属していても、望ましい集団活動を展開しなければ個々の成員はばらばらのままである。そこで、集団への関与を強めていくために、次のような条件で題材化をはかっていく。

- 共通の活動目的を設定でき、その目的に向かって活動する姿が学級目標の具体的な姿として現れるもの
- 子どもたち一人一人が活躍できる場があり、ある程度継続した活動が必要になるもの
- 活動した足跡が残る、個々の活躍を具体的に振り返ったり、肯定的評価を受けたりできるもの

● 全体討議と分割討議を位置づけた学級活動の活動構成

集団への関与を強め、よりよい学校生活を築いていくために、つくる段階では、学校生活をよりよくしたいという共通の願いをもとに、集団活動の目的を共有化する。そのために全体討議を位置づける。きめる段階では、分割討議を位置づけ、各グループが責任をもって分担した事項について話し合い集団決定に結びつけさせる。分割討議の柱は、発達段階を考えて中学年は①選択できるもの、②活動の目的やみんなが活躍できるかといった相互性の観点から決められるもので設定する。高学年は、①解決策を導いたり、原案を改善したりするもの、②目的性、相互性、実現できるのかといった現実性の観点から決められるもので設定する。行う段階では、実践活動を協力して行い、これまでの一連の活動を振り返る場を設定する。そして、みんなでやり遂げた満足感や自分が行った判断や行為への有用感を味わえるようにする。

	つくる段階	きめる段階	行う段階
ねらい	活動の意義や目的を学級全員で共有化する。	一人一人の意見を大切にしながら活動内容や方法を集団決定する。	決定したことをもとに、役割を分担しながら実践活動を行い、これまでの活動のよさを味わう。
主な活動	1 学校生活をよりよくしたいという願いをもとに、活動の目的や見通しについて話し合う。 全体討議 ○目的の共有化 ○見通しの共通理解(内容・方法)	2 集団として実践する活動の具体的内容について話し合う。 分割討議 ○目的性、相互性、現実性からの吟味 責任ある話し合い 全体討議 ○集団決定とその共通理解 責任ある説明	3 協力して実践活動を行い、活動を振り返る。 ○ 活動の目的を意識して実践すること ○ 自分の役割を自覚し、有用感を感受すること
自信	○ よりよい学校生活をつくりだすために行った判断や行為が、集団の中で認められる場を各活動の中に位置づけることで、自分への自信を高めることができるようにする。		
支援	※ 願いを取り上げるシステムの整備 ※ 目的を共有化する場の設定	※ 分割討議の場の設定 ※ 発達段階に応じた話し合いへの助言	※ 実践活動を行う場や時間の確保 ※ 活動を振り返る具体的資料の提示

【図2 全体討議と分割討議を位置づけた学級活動の基本的な活動構成】

道徳学習の〈ふくおかプラン〉

I 道徳的な価値を主体的にとらえる道徳学習

1 道徳教育での学ぶことと生きること

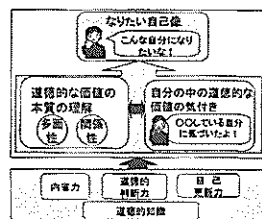
「生きる」ということから、道徳教育を考えると、人として「いかに生きるべきか」という生きる方向性が含まれる。人は「よりよい生き方」を求める存在であり、自分の生き方に価値を見出そうとする。そこに道徳的な価値がかかわっている。人と共によりよい生き方を求めるとき、放っておけない心情、最善のことを判断する力、よりよい生き方を実践していこうとする意欲・態度が不可欠である。つまり、人が人としてよりよく生きる基盤となるものが「道徳性」である。その育成が道徳教育の究極的なねらいである。道徳の時間の学習は、人間の生き方を学んでいく学習である。弱さや醜さ、気高さなどを持った人間本来の姿をとらえ、自分の生き方と比べて同質性や異質性をもとに、自分の生き方を見つめ直し、自らの生き方を創造していく。道徳の時間においては、「人間の学び」を位置づけ、人間のもっている弱さや気高さなどにふれて、人間の特質を多面的に見つめ、自分の生き方を向上していこうとする時間として展開していく。

2 道徳部主題についての説明

道徳的な価値を主体的にとらえるとは、道徳的な価値を対象として意識し、自分にかかわりのあることとして自覚することである。その姿として、次の3つの側面をとらえる。①多面性、関係性といった道徳的な価値の本

質について理解すること。これは、自分と他者との関係を考慮して多面的にとらえようとする立場である。②主人公との比較から、「〇〇している自分に気付いた」という自分の中にある道徳的な価値に気付くこと。③①と②をもとに高まった価値から「こんな自分になりたい」という具体的な未来の自己像を描くことである。そのためには、自己の内面を洞察する内省力、望ましい行為を選択していく道徳的判断力、自己更新力が必要である。

道徳的な価値を主体的にとらえる道徳学習とは、「自分だったら」という自我関与を大切にして展開する学習のことである。そうすることで、自分への問いが生まれ、学ぶ意義を感じて、道徳的な事象、主人公、過去の自分などの対象と自分を比べながら、常に道徳的な価値を自分とのかかわりで考える学習を展開できる。このことで自分のよさに気づき、自分への自信をもつことにつながる。



- 他者の生き方を学びたいという意欲をもち、そのすばらしい生き方から取り入れる価値を見出し、自分の生き方を高めようとする子ども（学ぶ意義）
- 主人公の人間としての弱さに共感し、それを乗り越えた強さ、気高さに気づき、道徳的な価値の大切さを理解することができる子ども（能力）
- 自分の中にある他者と似た心情面の共通性に気づき、自分の生活に生かしていこうとする子ども（自信）

【表1 豊かに生きる子どもをばぐむための道徳学習の基礎基本】

学ぶ意義		他者の生き方（生き方モデル）について学びたいという意欲をもち、そのすばらしい生き方から、自分の生き方に取り入れる価値を見出し、自分の生き方を高めていこうとすることができる。		
能	A 学力 実体的 学力	低学年	中学年	高学年
		道徳的な問題場面で、道徳的な価値に対して、善悪の区別から見て、道徳的な価値のよさを感じることができる。 （道徳的な価値の大切さの気づき）	主人公の心情や行為のよさから、多面性、関係性といった道徳的な価値の本質について理解できる。 （道徳的な価値を自分とのかかわりにおいて理解）	道徳的な価値を多面性、関係性などの視点で分析し、その本質について理解し、自分なりの解釈を加えて、自分の生活に生かしていこうとする。 （道徳的な価値を自分なりに発展）
力	B 学力 機能的 学力	・動作化などをもとに自分を中心にしながら、他者（主人公）の様子を観察し（表情など）他者の状況や心情を推し量ることができ ・道徳的な事象に対して、主人公に共感する中で、よりよい方を判断し、選択していくことができる。	・役割演技などをもとに、自分と他者（主人公・その他の人）という関係性をもとに、対象を広げて状況を的確に把握することができる。	・自分と他者（主人公・その他の人）という関係性、規範性など多面的な視点で主人公が置かれている状況を把握する。行為の結果予測をすることができる。
		・道徳的な事象に対して、主人公に共感する中で、よりよい方を判断し、選択していくことができる。	・道徳的な事象に対して、自分だったらどうするか、自分の経	・道徳的な事象に対して、自分だったらどうするか、自分の経
自	信	教師の促しによって、主人公になりきりながら、自分の生き方を見つめ、自分の中にも人間としての弱さがあることやそれを知り、乗り越えようとする心があることに気づくことができる。	主人公と自分の生き方を比べて課題を見つけ、道徳的な行為を支える主人公の心情を追求する中で、弱さや強さなどに対する自分の傾向性を知り、乗り越える強さが自分の中にもあることに気づくことができる。	主人公と自分の生き方を比べて課題を見つけ、主人公を支える心について自問自答しながら、自己の生き方を問い直し、自分の中にある道徳的な価値に気づき、取り入れる心を見付け、自己の生き方に生かしていこうとすることができる。
		モデルの生き方に感動し、自分の心情との重ねがたまねしてみようとする。ことができる。（共通性）（模倣的取り入れ）	生き方モデルとのかかわりにより自己との共通性を見付け、強化して、自己の生き方を方向づける。（生き方指針としての取り入れ）	生き方モデルとのかかわりにより自己との共通性、差異性を見出し、自分で選択、咀嚼して生き方に生かしていこうとする。（自己内変革としての取り入れ）

Ⅱ 自他の比較活動を位置づけた道徳学習プラン

道徳部 木下美紀

1 副主題の意味

比較活動とは、子どもたちが、道徳的な事象に出会い、①自分は価値に照らしてできているのかを他の事象と比べて見つけ、②自分と主人公の気持ちや考えを共通性や差異性から比べ、③高まった価値から自分の経験を見直す活動である。比較の対象である他者は、「具体的な道徳的事象（映像・写真・絵）」「主人公の行為や気持ち」「学習前の自分」である。それは、子どもが、人間の弱さ気高さなどにふれて、自分の生き方を見つめていこうとする人間の学びを可能にするものである。そのよさは、①「自分だったら」と常に自我関与を図り、自分の問題として学ぶ意義を感じて活動できる。②道徳的な価値と直接関わるので、自分の中にある道徳的な価値を見出し、自分のよさに気づき自信をもつことができるなどである。

比較活動を位置づけるとは、道徳の時間の学習指導過程を「見つける」「求める」「生かす」とし、その各段階に、「自分だったら」という自我関与のもと、自分と対象の共通性や異質性から比べる活動を設定することである。今の自分と道徳的な事象を比べる、自分と主人公の行為や気持ちを比べる、学習前と後の自分を比べるという過程を経る活動である。そうすることで、子どもが、道徳的な価値の本質を理解し、その価値を実現しようとする自分に気づき、未来の自己像を描くという自己開発を大切にしたい人間の学びが展開できる。

2 学習プランの具体的構想

● 自他の比較活動を位置づけた教材化の工夫

①資料の選定

取り扱う資料は、次の表のような視点で選んでいく。適切な資料がない場合は、自作や改作を行う。

- ①「なぜ?」「どうして?」という気付きが生まれ、課題設定が可能なもの
- ②葛藤場面があり、判断が多様にできるもの
- ③主人公が迷いや弱さを乗り越える姿が描かれ、なぜそれができるのか知りたくなるもの

②資料の分割提示

子どもが「自分だったら」と多様な選択ができる場面を前半として場面提示する。後半には、子どもが選択した価値を超える、または、道徳的な価値への見方が広がるような場面を設定する。

● 自他の比較活動を位置づけた基本的な活動構成

①複数時間の活動構成

「自分だったら」という自我関与を大切に、自分を見つめる時間を確保するために、複数時間での扱いをする。複数時間での扱いは、生命や人間としての特質などにふれて自分の生き方を見つめることができる高学年で主に取り上げる。具体的な流れは、次の通りである。

- ①比較活動Ⅰ（具体的な道徳的事象と自分のこれまでの道徳的な傾向性）→自分は〇〇ができているのか?
- ②比較活動Ⅱ（主人公の気持ちや行動との自分）→主人公と似ているところ、違うところ
- ③比較活動Ⅲ（学習前と後の自分の価値のとらえ）→自分は〇〇のようにできていたのか

第1次で、道徳的事象から自分を見つめ、価値に対する課題をつくり、次時でそれを解決するという問題解決的な活動を構成する。具体的な活動構成については、下図1のようになる。

低・中学年は、発達段階より基本的に1単位時間とし、留意点として、低・中学年は、道徳的な価値の理解を中心に、比較の視点は共通性を中心に扱う。高学年は、自分の中の道徳的な価値の気づきからなりたつ自己像を描く自己の客観視を中心にする。

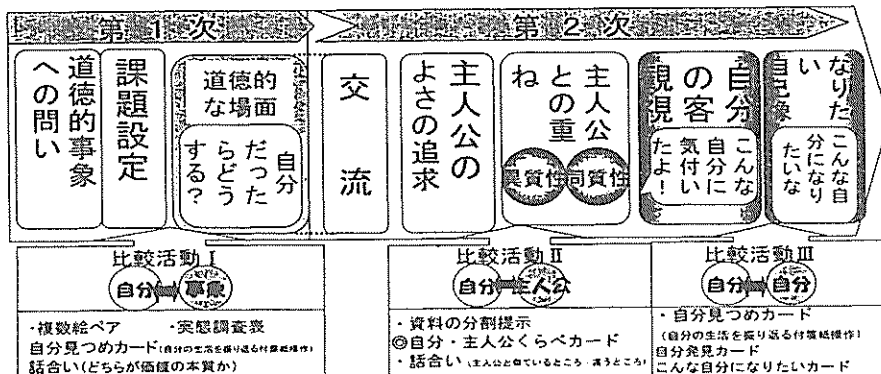
②内容の重点化

複数時間の重点内容として、自分と他者を比べて考え、他者との関係を大切にする2-(2)思いやり・親切、2-(3)信頼・友情、3-(2)生命尊重などがあげられる。発達段階等を考慮する必要がある。

③道徳的な価値についての子どもの意識の調査・分析
事前に、道徳的な事象について複数の生活体験を掘り起こし、子どもの価値への意識を分析して学習に生かす。

④自分の内面を見つめる自己評価活動の工夫

自分見つけカード、自分・主人公比べカード、自分発見カード等自分を意識させる具体的操作を行わせる。



（例）高学年における具体的な活動構成
第1次で
①道徳的事象と自分を比べる（比較活動Ⅰ）
②自我関与を図るため、自分だったらと決定する
第2次で
③行為と根拠について交流する
④主人公のよさを追求する
⑤自分と主人公の気持ちや行為を比べる
⑥なりたつ自己像を描くために、今までの自分を吟味する（比較活動Ⅲ）を設定する。

【図1 比較活動を位置づけた道徳学習の基本的な活動構成（高学年）】

3 指導の実例

第5学年 主題

本当の親切を見つけよう

(1) 主題の目標

- 1 自分・主人公比べカードなどから、主人公との気持ちの共通性や差異性から自分の親切を比較し、より高い価値（本当の親切）に向けて実践していこうとすることができる。
- 2 資料『心と心のあく手』を通して、①困っている相手を放っておけない心情に支えられて、②相手の状況や気持ちを推し量り、判断して、相手の望む親切をする（本当の親切）ことを理解することができる。

(3) 学習の流れと考察

第1次：1 / 2時

自分が今までやってきた親切について振り返り、「本当の親切」ができていないか自分なりに確かめ、課題について話し合う。

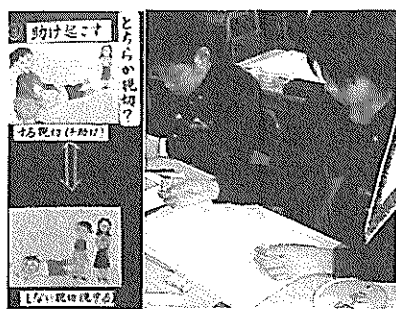


写真1 自分の親切は本当の親切になっていたかな？

絵ペアや友達の見聞を聞いて、今のところ、本当の親切は、相手のことをよく考えることだと思います。でも、まだ迷っている親切があるので、本当の親切が知りたいです。次の時間は、それをはっきりさせたいです。

第2次：2 / 2時

自分と主人公の気持ちや行動を比べて、共通性や差異性から自分の今までの親切について吟味し、本当の親切について話し合う。

- (1) 資料『心と心のあく手』前半部分から、おばあさんに再び会って、自分はどうか話し合う。

(その理由)

声をかける

放っておいてそのまま通りすぎたら、「転ばなかったかな？もし転んで交通事故にでもあったら、ぼくのせいのような気がするな」などいろいろな考えてとっても心配になるから。前、重い荷物を持ったおばあさんがいて、声をかけようと思ったけど、用事があってそのまま行ってしまっただけで、その後とても心配になったから。

資料1 主人公と自分の傾向性（自分だったら？）

(2) 題材の考え方

人間の学びとして展開する本主題では、自分の親切が本当の親切になっているか知りたいという課題意識をもって、主人公との同質性や異質性から自分の親切を吟味し、より高い価値（本当の親切）に向けて実践していこうとすることをねらっている。高学年では、自分の中の道徳的な価値の気づきから、なりたい自己像を描く自己の客観視を中心にする。そのために、常に道徳的な価値にかかわって、自分と対象を比較する活動を各段階に位置づけ、追求させたい。具体的な活動としては、第1次で①自分の親切が相手のためになっているかという気付きを持たせるために、複数絵ペアと自分の親切を比べる比較活動Ⅰ②自我関与を図るため、道徳的な場面で自分だったらと決定する活動、第2次で、③それを交流する活動④道徳的な価値を把握するための主人公のよさを追求する活動⑤自分と主人公の気持ちや行動を比べる比較活動Ⅱ⑥なりたい自己像を描くために、自分見つめカードで今までの親切を吟味する比較活動Ⅲを設定する。

第1次は、2時間を通して追求する「本当の親切」という課題をつかませることをねらいとしている。そのために、比較活動Ⅰを位置づけた。ここでは、転んでいる子を起こす絵と見守る絵などの複数絵ペアと、自分の親切を比べさせた。そして、資料『心と心のあく手』を分割提示した。この資料は、重い荷物を持ったおばあさんに声をかけて断られた主人公が、理由（リハビリ中）を知り、再びその人に出会って、見守り、その笑顔に満足するという話である。道徳的な場面で「自分だったら」と考えて記述させ、次時につないだ。

考察1

H児は、「本当の親切」について、写真1の下線部のように、現時点の親切について定義し、道徳的な価値の本質について知りたいという道徳的な価値の理解に向かう課題意識を高めていた。これらは、複数絵ペアというどちらにも価値が含まれていて選択が難しい具体的な絵を提示して自分の親切と比較させ（比較活動Ⅰ）、今までの親切のとらえとのズレを生じさせて、話し合わせたことが有効に働いたと考える。

第2次では、自分と主人公の気持ちや行動を比べて、共通性や差異性から自分の親切を吟味し、親切にしている自分に気づき、なりたい自己像を描くことをねらいとしていた。

まず、「見つめる段階」で、前次の活動を振り返り、めあてを確認した。そして、「求める段階」では、前時記述していたおばあさんに再び会って自分だったらどうするかをもとに話し合わせた。子どもたちは、①声をかけない、②声をかける、③見守るの3つの立場から話し合いをした。その中で、声をかけないのはリハビリをしている相手の思いを大切にしたいという相手の思う気持ちと、声をかけるのは、苦しそうな相手を放っておけない気持ちがあるという2つの心情面での話し合いが進んだ。子どもたちは、自分の経験をもとにその理由を発言していた（資料1）。そこで主人公はどうしたかということで、資料後半を提示した。後半部分は、主人公が、おばあさんを見守り続けたという話である。そして、主人公

(2) 資料の後半を読み、主人公が本当の親切について考えたことについて話し合う。

T1 主人公は、どんな心があつたから見守ることができたのだろう。

【親切の本質（道徳的な価値の本質）】

C1 よく相手のことを考えて、おばあさんを放っておけないという心配な気持ちだと思ふ。

【さらに高い価値（本当の親切）への気付き】

C2 今、本当に荷物を持っていいのかとか、そのまま素通りしていいのかとかおばあさんのしてほしいことは何か考えることだと思ふ。

H児 C4 くに似ているんだけど、おばあさんのやりとげたときの笑顔を見たいという気持ちだと思います。

資料2 道徳的な価値の本質についての話し合い

(3) 主人公の気持ちや行動と自分を比べてから自分の今までの親切について考える。



主人公と似ているところは、帰るまで見届けてあげたいという気持ちの部分で、違うところは、「ありがとう。」とお礼を言われなくても（気づかれなくても）、満足しているところ

写真2 私と主人公を比べるとこのくらい重なるかな？そのわけは。

私は、「めんどくさいからいいよ。」という親切と思っていたけど、けっこう人のことを思っている自分に気がきました。私は、相手の人が気になって仕方がないという見守る親切をしているんだと思います。主人公と似ている気持ちがあつたんだと思いました。

資料3 自分見つけめカードによる自分発見

(4) 自分見つけめカードに今までの自分の親切を思い出し、なりたい自己像について記述する。

なりたい自己像

本当の親切とは、「相手が本当にしてほしいことを考えて、相手の気持ち（心）を見ぬいてしまえるほどの親切」だと思います。（中略）「私は人が困っている時も相手が本当にしてほしいということを見通してあげて、人の心を分かりぬいてあげられる本当の親切ができる人になりたい。そして、ありがとうと言われなくても、自分の心がうれしくなるような親切をしたい。」

資料4 課題を解決し、なりたい自己像を描いたH児

を支えた心について話し合わせた（資料2）。その後、比較活動Ⅱを位置づけた。主人公の生き方と自分との共通性と差異性から、自分の親切を見つめ、道徳的な価値の実現をめざしている自分に気付かせることをねらいとしていた。自分と主人公の似ているところと違うところを自分・主人公比べカードで重なり部分を考え、操作させ（写真2）、道徳ノートに記述させた。そして、主人公と自分を比べる話し合いをさせた。

考察2

資料1でH児は、自分の親切にできなくて気になった経験から判断し、「自分だったら」という自我関与のもと、資料2でおばあさんを見守り笑顔を見たいという相手の望むことをする親切について気付いた。そして、自分と主人公を比べ、主人公との共通性から、「放っておけない心」、差異性から「お礼を言われなくても満足する親切」という道徳的な価値の本質をとらえることができた（関係性→①道徳的な価値の理解）。そして、資料3の自分見つけめカードに、主人公への同質性から、相手のことを思って親切をしている自分に気付いていた（内省力→②自分の中の道徳的な価値の発見）。それは、資料を道徳的な場面で分割提示して、自分だったらと考えたことで自我関与が図られたこと、主人公・自分比べカードを操作して、共通性と差異性から自分の親切を見つめさせることで自分への客観視ができたと考える。しかし、心情面についての発問が不十分だったために、自分と主人公の行為の面との違いに着目し、自分の中にある道徳的な価値に気付きにくい子もいた。そこで、自分と主人公を比べる際、主人公への共通性を考える手だて、例えば、この前に心の円グラフなどで、共通性を見出させておいて、自分と比べるなど、これに至るまでの手だてが必要だと考える。

次に、「生かす段階」で、なりたい自己像を明確にさせるために、比較活動Ⅲを位置づけた。自分見つけめカードの付箋紙を操作させて、学習前と後の自分の親切のとらえについて比較させ、自分を見つめさせた。そして、本当の親切についてまとめ、なりたい自己像を道徳ノートに記述させた。

子どもたちは、「放っておけない親切」と「相手のことを本当に考えた親切」の2つの視点で、付箋紙を操作した。さらに、学習を通して想起した親切を付箋紙に加えていった。

考察3

資料4でH児は、本当の親切について自分なりにまとめ、明確な自己像を描くことができた（自己更新力→③なりたい自己像を描く姿）。これは、生き方更新する姿で意義深い。自分見つけめカードの付箋紙を学習した価値から2つに分類し、自分の親切の傾向性に気付かせたこと、さらに、なりたい自分を道徳ノートに記述させたことが有効に働いたと考える。

【全体考察】

考察1→2から、道徳的な価値の本質への課題をもち、道徳的な価値の本質（本当の親切）の理解から、その実現に向けて実践しようとしている自分の姿に気付くことができた。考察3から道徳的な価値を含んだ未来のなりたい自己像を具体的に描くことができた。これらは、道徳的な価値をとらえる姿として、①道徳的な価値の本質についての理解②自分の中にある道徳的な価値への気付き③なりたい自己像を描く姿だといえる。また、道徳的な価値にかかわって、放っておけないという道徳的な心情（内省力）、道徳的な価値の理解による道徳的な判断力（道徳的知識）、なりたい自己像より道徳的实践意欲・態度（自己更新力）を見ることができ、道徳性の育成につながるものであり、意義深い。これらは、子どもの意識のズレを生じるような複数絵ペアから自分の傾向性を比べたこと（比較活動Ⅰ）、比較活動Ⅱで、資料を分割提示し、道徳的な場面について自己決定させ、資料後半を読ませ、自分・主人公くらべカードを操作して自分発見カードに記述させたことが有効であったといえる。また、比較活動Ⅲで、自分見つけめカードの付箋紙を操作して自分の親切を分類し、なりたい自己像を記述させたことが有効であった。課題としては、自分との心情面の共通性に気付かせるために、心の円グラフなどで、共通性を見出させておいて、自分と比べるなどの手だてが必要だと考える。

総合的な学習の時間のくふくおかプラン

I 自己の生き方を創る総合的な学習

1 総合的な学習で学ぶことと生きること

総合的な学習は、子どもの生活現実から学びを立ち上げ、子どもの気がりや願いを出発点にこだわりを発揮しながら、自らの応えを見出していく学びを展開する。そのために、価値ある「もの、人、こと」と出合ったときに生じる、「やってみよう」という実践的な求めや、「どうしてだろう、調べよう」という探究的な求めを大切にする。この強い求めに支えられた学びによって、自らの生活や生き方をよりよく更新する真の問題解決力を培うことができるのである。さらに、その過程で「知の総合化」をしていくことが、自己開発しながら、自らの応えを見出し、自己の生き方を創ることにつながるのである。

2 自己の生き方を創る総合的な学習とは

自己の生き方を創るとは、子どもが、生活現実についての見識をもち、自分への自信に支えられた将来の夢や希望を実現していこうとする態度や方法により方向性をもつことである。価値観や社会状況が多様化した今日では、問題場面に遭遇したときに、自らの応えが求められる。そのとき、単にある教科の一つの原則や法則を適用・発展させるだけでなく、子ども一人一人が自分のもてる知識や技能を総動員し、駆使しながら、解決し自分の

応えを見出していくことが必要である。このように知識や技能を活用し、自分自身を見つめ直し、自分の考えを導き出すことで、総合的な学習の学びが、“生きた学び”となるのである。そして、知識や技能が認識から見識へとそして、自分への自信に高まっていくのである。

3 総合的な学習で大切にする知の総合化

総合的な学習において、これまで以上に知の総合化を重視する。生活の問題を解決する学びでは、たとえば、企画・運営・実施という活動が展開する場合などは、教師の想定を超える問題が生じる可能性も考えられる。そのときには、子どもの知で解決可能なのかを吟味する必要がある。文化を継承・創造する学びにおいては、それまでの教科学習で、子どもがどのような知を身に付けているか見渡し、総動員し発揮できるように活動を構成する必要がある。生きることを追究する学びでは、道德の時間や各教科での生命についての内容知とのかかわりや、自分の過去に関する資料収集・分析する力が必要である。また、自分の未来を想定する力も必要となる。いずれの学びも子ども自らが知を総合化することができるように教師が想定して活動を構成する必要がある。そこで、次のように総合的な学習の全体計画を設定する。

【表2 くふくおかプランにおける総合的な学習の全体計画】

各教育法規	学校の教育目標	児童の実態
・日本国憲法 ・教育基本法 ・学校教育法 ・学習指導要領	「豊かに生きる子ども」 子どもの存在原理から、「生活・文化・人間の学び」を大切にし、生きるために必要な知識・技能と、それを生きることにつなげ活用する知的能力とを調和的に育み、心豊かにたくましく生きる子どもの育成をめざす。	・公共の交通機関を利用して様々な地域から通っている。 ・自分の課題をもって追究したり考えを表現したりすることを好んでいる。
社会の要請	総合的な学習の時間の目標	保護者の願い
・生きる力の育成 ・現代的な課題に主体的に対応できる資質や能力の育成 ・自信を高め夢や希望をもつことができる子どもの育成	「自己の生き方を創る総合的な学習の時間」 生活現実や価値ある文化、人間との出会いから、自ら課題を見出し、各教科領域等で獲得した知識や技能を総合化したり、生活化したりしながら課題追究することを通して、追究対象への理解を深め自分への自信と生きていくことへの夢や希望をもって自己の生き方を創る。	・基礎的な学力を身に付け、基本的な学習習慣の定着を図ること。 ・幅の広い、多様な見方や考え方を身に付けること。
総合的な学習の時間の学年の目標		
中学年	高学年	
身近な事物・事象から自ら課題を見つけ、見通しをもって追究するとともに、必要な情報を取捨選択しながら、自分の考えを広げ、追究の意義に気付くことができる。 (学ぶ意義) 自分の経験や知を生かしながら、情報を比べ、活用し自分の考えを広げることを通して、生活を見つめたり、文化の価値を理解したりして、自らの応えとなる考えを導き出すことができる。 (能力) 身近な地域や生活のなかの文化や人々の生活をよりよくするためのもの・人・ことと自分自身の関係を考え、自分の生き方を方向づけていくことができる。 (自信)	価値ある人・事象・事物から自ら課題を見つけ、課題解決と応えを想定しながら追究するとともに、目的に応じた情報の取捨選択、再構成をしながら、自分の考えを高め、追究の意義を感じることができる。 (学ぶ意義) これまで身に付けた知を総合化・生活化し、事実を分析し、関係づけながら、生活を見直したり、文化を獲得したり、自分を人間として高めたりすることで、自らの応えを見出すことができる。 (能力) 自分の存在価値や、成長への実感、無限の可能性に気付き、自分への自信や将来への夢・希望をもつことができる。 (自信)	

	内 容	中 学 年	高 学 年
郷土文化	○日本の伝統文化に対する理解と愛情を育て、文化を受け継ぎ守っていく態度を育てる。	地域の文化に積極的に親しみ、地域やその文化への愛着をもつこと。 地域や文化を支える人の工夫や努力を理解すること。 地域の一員であることに気付き、郷土の文化を守るための考えをもつこと。	日本の文化や伝統の特徴に気づき、郷土や文化への愛着を深めること。 進んで文化行事や活動に参加し文化を支える人の工夫や問題点を理解すること。 文化を調べたり、つくったりして自分たちの文化として実践すること。
環境	○身近な自然や環境と積極的にかかわり、生活と環境の関係について理解し、よりよい環境をつくる。	身近な自然と自分の生活の関係に気付き、愛着をもって接すること。 環境問題を解決するための機関について知り、自然を守る人々の工夫や努力について理解し、自分にもできる方法を考えて試してみること。	地域の自然や環境の美しさ、大切に気付き環境との共存について考えること。 環境問題の現状について、科学的方法を用いて調べるとともに自分たちの生活との関係を理解し、環境創造をめざし日常生活に実践すること。
福祉	○自分を含め高齢者や障害者、年少者の存在のことを理解し、皆が幸せに暮らせる社会をつくらうとする。	身近な高齢者、年少者、障害者について理解を深め、身近なところの配慮や工夫に気づくこと。 身近な福祉問題解決のために、自分たちにできる方法を考えて実践すること。	毎日の生活が人々の支えや助け合いで成り立っていることに気づき、他者を思いやり大切にすること。 人々が幸せに暮らせる社会をつくるには、どうすればいいか考え実践すること。
生命健康	○生きることのすばらしさや、生命の尊さに気づき、自他の生命を大切にし、心身ともに健康に生きる。	動植物の生態や生育環境に関心をもち、生命の神秘さや大切さを感じる。 健康で安全な生活を送るために、必要なことに気付き、よりよい生活習慣や態度を身に付けること。	生命の誕生について理解し自分の命と周りの人や環境との関係を理解すること。 生命や健康を維持するために、自分の生活を見直し、よりよい生活環境や生き方をつくること。
勤労・進路	○これまでの自分やこれからの自分の将来の夢を考え、自分の個性を生かしていく。	家庭や学校、地域での身近な人々の働く姿や仕事に出会い、その営みが自分たちの生活を支えていることに気付き、職業に関心をもつこと。 身近な人々の職業や生き方に関心をもつとともに自分自信の姿を見つめること。	職業調べや職場体験を通してそれぞれの職業や働く人の生き方を理解し、働く意義を考えること。 自分の個性や将来の夢について考え、なりたい自分に向かって、自分の理想像をもった生き方考えること。
国際理解	○日本や世界の国々に関心をもち、文化や生活習慣を理解し、他の国々の人々とともに生きていこうとする。	様々な国の人々と交流して文化を知り、互いのよさや違いに気付き、認め合うこと。 外国語に関心をもち、様々な場面での歌や言葉に慣れ親しむこと。	様々な国の文化や歴史、生活習慣を理解するとともに互いの違いを認め尊重しようとする。 外国語におけるごく簡単な日常会話を使得て話したり、聞いたりすること。

豊かに生きる子どもをはぐくむための総合的な学習の基礎・基本

学 ぶ 意 義		自 信	
生活現実や文化、価値ある人間に出会うことで、自分の課題を見出し、獲得した知識や技能を総合化したり、生活化したりしながら、課題解決することを通して、自分の追究の意義を実感することができる。		自分が他に役立つ存在であると感じたり、成長し何かをやり遂げる力があると考えたりして、自分の見識を高め、自分への自信や将来の夢や希望をもつことができる。	
能力	観 点	中 学 年	高 学 年
A学力 実体的 学力	生活更新・文化創造・生き方向上を支える認識	郷土文化、環境、福祉、生命健康、勤労・進路、国際理解を追究するなかで、見出すことができる具体的な知識を身に付ける。	郷土文化、環境、福祉、生命健康、勤労・進路、国際理解の知識を身に付け、もの・人・ことから生じる願いや取り組み、自分の具体的な行動の仕方などを知る。
B学力 機能的 学力	課題設定力	気がかりや疑問から追究可能な課題を設定することができる。	追究の価値を考え、追究可能な課題を設定することができる。
	情報活用能力	課題解決のために、取材や体験から情報を収集し、必要な情報が適切選択することができる。	施設や情報機器を有効に活用しながら、収集した情報を検索、選択、再構成することができる。
	総合表現力	伝えたいことを順序や内容がわかるように工夫して、目的に応じた表現媒体を選択し表現することができる。	目的意識や相手意識、状況意識をもち表現方法を駆使して意図に応じた効果的な表現をすることができる。
	多面的な見方・考え方	自分の経験や、各教科等で獲得した知識や技能をもとに、情報を比べながら、自分の考えを広げることができる。	各教科等で獲得した知識や技能を生かし、得られた事実を分析、関係づけして構造化し、自分の見方を高めることができる。
	実践力	自分の目的に応じて、周りの状況や、条件を意識して活動内容を決定し、自分や相手の立場を考え、他者と協力しながら活動することができる。	自他の目的に応じて、周りに対する影響を考えながら活動内容を決定し、自分や相手の立場を明確にし、自分の活動を客観的な視点で捉え活動することができる。
	自己評価力	自分の追究を、他者から助言を受けながら客観的に見つめたり、自他のよさを捉えたりすることができる。	自分の追究を他者と比較しながら、客観的、分析的に見つめ追究の広さを肯定的に捉えることができる。

「生活・文化・人間の学び」から、たち上がる3つの総合

生活総合	文化総合	人間総合
自分が生活する環境や学校・家庭・地域での社会生活において、生活者としての知を生かしたり、総合化させたりして、人とのかかわりながら生活更新する総合的な学習	文学や芸術、科学、歴史伝統、スポーツ、生活文化などの文化にふれて、文化のすばらしさ、文化を創り出した人や伝えてきた人の考えにふれ、文化を継承・創造する総合的な学習	人間の生命や生き方、人間の特質について見直したり、自分の個性について考えたりして、よりよく生きていこうと自分の生き方についての考えを深める総合的な学習

指導方法	指導体制	評価計画
総合化される知を想定した支援の明確化 ノート活用の工夫（個別指導の充実） 効果的な体験的活動の重視	総合部を中心とした各学年の連絡体制と支援体制の確立 ゲストティーチャーの招聘を行う指導の充実	子どもが見出す応えと学び方からの目標に準拠した評価規程の設定 ポートフォリオを活用した評価の充実

「生活・文化・人間の学び」から考える総合的な学習の〈ふくおかプラン〉

子どもたちは、生活科や特別活動の学習を通して、身近な生活事象について、自らかかわり、自分の生活を見直し、生活更新することを体験・実感してきている。ここに、「生活をふり返り、つくりかえる学び」が実現できると考える。また、各教科の学習では、文化財を意図的、計画的に教材化した学習対象や活動によって、子どもたちは、文学や芸術、科学、社会基盤、歴史事象、運動文化などにふれ、知識を獲得したり、発展させたりしてきている。ここに、「文化をつくりだす学び」の素地が形成されていると考える。さらに、道徳の時間や各教科等の学習において、様々な人の生き方や生命について考えたり、自分自身の個性や生き方について考えたりできるようになっている。ここに、「自己の生き方を見出していく学び」の可能性があると考える。そこで、以上の3つの学びを各々重点化し、「生活総合」、「文化総合」、「人間総合」で本校の総合的な学習を構想する。このことで、各教科領域で獲得された知識や技能を総合化・生活化できるようになるとともに、学習の対象や学習方法の違い、めざす学習のゴールが明確になると考える。

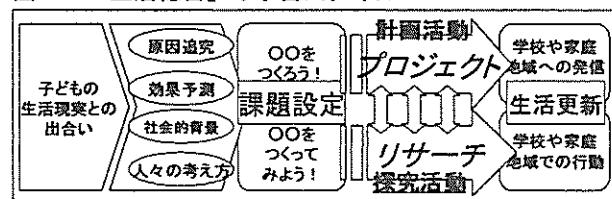
「生活総合」とは

○ 生活総合の学習スタイル

生活総合とは、自分が生活する環境や学校・家庭・地域での社会生活における生活者としての知を生かしたり、総合化したりして、家族や友達、地域の方などの人とかかわりながら自らの生活をよりよく更新していく目的達成のプロジェクト型の総合的な学習の時間である。

生活総合では、学習のゴールは、子ども自身の生活をつくりかえることである。このことから、具体的な生活の仕方について考え、学校や地域への発信などの行為化が必要である。そこで、生活現実から更新への課題をもち、原因追究や、課題解決方法の模索から具体的な行為の実践を考えていく。

図1 「生活総合」の学習スタイル



○ 生活総合の学習対象

「生活総合」は、追究する対象が子どもにとって身近な生活や、そのなかの人々の営みや考え方となる。子どもの生活は、学級・学校・地域と空間的に広がるが、子どもの発達特性や教科との関連、子ども自身がその生活をよりよくすることができる追究の可能性を考える。

○ 主に自分自身や家族の生活にかかわる対象

自分や家族の健康	健康は、食生活における栄養や運動生活における体力、生活習慣などを追究の
----------	-------------------------------------

	対象とすることができる。
自分や家族の余暇	価値観の多様化や情報化社会の浸透により、一人一人の生活スタイルに合わせた、様々な余暇活動が追究の対象となる。
自分や家族の生活設計	家庭や社会での役割立場、または職業について、自分の生活とのかかわりが追究の対象となる。
○ 主に学級や学校、地域生活にかかわる対象	
学級や学校イベントや行事	学級の凝集性を高めたり、個の存在感を高めたりできるような、学級のイベントや学校行事の企画・運営・実施などが追究の対象となる。
地域のイベント	それぞれの地域には、歴史や環境とかわる「祭り」が存在する。祭りへの地域に住む一人としての参加、企画、運営、実施が追究の対象となる。
ボランティア活動	学校や地域のための環境、福祉、平和などを目的とした実践的活動の企画・運営、実施が追究の対象となる。

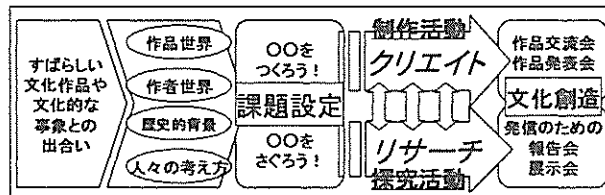
「文化総合」とは

○ 文化総合の学習スタイル

文化総合とは、文学や芸術、科学、歴史伝統、スポーツ、生活文化などの文化にふれ、各教科等で身に付けた知を総合化させながら、文化の素晴らしさや有用性、それを創り出してきた人や伝えてきた人の考えにふれ、自分も文化を継承し、新たな文化を創造する、リサーチ・クリエイティブ型の総合的な学習の時間である。

文化総合では、文学や芸術などのすばらしさにふれることから、作者や発明者などの意図や背景、対象とする事象の歴史的な背景を探り、作者の思いや時代の様子について考え追究する学習である。このとき、文化財や文化的事象について探っていく、「リサーチ型」と、自分も文化を創造していく、「クリエイティブ型」が考えられる。これらは単独で行われる場合もあるが、両方の型を往復する形で追究が進む場合も考えられる。活動のゴールとしては、作品展示会や文化発表会などの表現の機会を設定し、他者へ発信できる場を保障する。

図2 文化総合の学習スタイル



○ 文化総合の学習対象

「文化総合」は、追究する対象が子どもにとって価値ある文化財や文化性をもった人々の営み、考え方そのものとなる。それは日常生活のなかで使われている事物や事象の場合もある。その対象とするものの文化性を拡充していくという点を大切にして教材かを進めなければならない。

建築	高度な技術を用いた美しい建築物は、芸術性や科学性を備え、そのものがもつづくりの構造や環境との関係、歴史的背景などが追究の対象となる。
楽曲・楽器 美術・工芸 作品	伝統的な楽曲、楽器や伝統的なあるいは近代工芸作品は、その時代の背景や地域などと深いつながりがあり、その芸術作品がもつ価値を追究の対象とする。
演劇・映画	演劇や映画は高度な総合芸術であり、歴史的、科学的にも進化を遂げており、言語や音楽、美術などが関わる演出、演技が追究の対象となる。
スポーツ	歴史的な由来や人の健康、余暇などとの関係、科学的なトレーニング、用具の技術開発などが追究の対象となる。
工業製品	地域の特性や、特許の申請、開発される新製品の環境や人の配慮、科学性が追究の対象となる。
生活様式	各国の生活様式やマナーは、歴史的な背景や人々の考え方、価値観をもとにつくり出されており、衣食住の文化などが追究の対象となる。

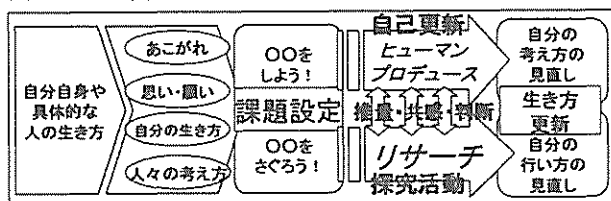
「人間総合」とは

○ 人間総合の学習スタイル

各教科や道徳の時間に学んできた、人間の生命や生き方、人間の特質について見直したり、自分自身の個性について考えたりして、よりよく生きていこうとする自分をめざす「ヒューマンプロデュース型」の総合的な学習の時間である。

人間総合では、人間とは何か、人間が生きるということを生命という観点からと、生きがいや個性について考えた観点からとらえるようにする。まず、具体的な人間やモデルとなる生き方と出合うことを出発点とする。ゴールでは、自分の生き方と照らし合わせて、価値判断を行い、これからの自分の生き方を方向づけたり、実践してはたらきかけたりできるようにする。

図3 「人間総合」の学習スタイル



○ 人間総合の学習対象

「人間総合」の場合、追究対象は、自分自身や子どもにとって価値のある人や人の生き方、考え方になる。ここでは、各教科や道徳の時間、特別活動などの全教育活動における教育を踏まえて人間が強たくたくましく生きる姿やあたたかい心をもった存在であることを自覚していくことをねらいとすることから、人間としての特質や人

の生き方を取り上げるようにする。

価値ある人・その人の生き方	人と人、人と文化や自然、人と社会など、様々な場所や立場で人のために生きる人が追究の対象となる。
生命誕生や死にかかわる事象	生命の誕生や死、生命の連続性につながるような、人間の生命にかかわる事象が追究の対象となる。
自分自身の生き方、将来像	誕生からこれまでの、自分自身の生き方や自分のこだわりある考え方、行い方、夢や希望が追究の対象となる。

3つの総合のカリキュラムへの位置づけ

3つの総合のカリキュラムへの位置づけについては、各教科領域等の教育課程全体を見渡した側面と、学習能力や見方、考え方、表し方、興味関心といった子どもの学びの側面の2つの側面から、3つの総合を意図的、計画的に順序よく配列することが大切である。そこで図4のように段階的に3つの総合を配列する。

「生活総合」は第3学年から始め、総合的な学習の時間の基本的な学び方を身に付けていけるようにする。「生活総合」は自分の生活を更新していくことを目的としたプロジェクト型の学習であるが、第3学年においては、イベントプロジェクトを中心とした単元を配列し、基本的な学び方を獲得することに重点をおく。第4学年以降は徐々に、自分たちの生活現実をよりよく更新していくようなプロジェクト単元を配列するようにする。

「文化総合」は、各教科での学びの発展や、獲得した知の総合化を意図している。そこで、それぞれの学年の教科で身に付いた知を生かすことができるように、特に各学年における各教科との関連を意識した単元を配列していくようにする。それによって、それぞれの学年における教科での「文化の学び」で培われる知が重点化されることで、総合的な学習の時間における指導内容や指導方法を明確にすることができると考える。

「人間総合」は、各教科、道徳の時間、特別活動等、全教育活動を見据え、高学年に位置づけるようにする。特に、「人間総合」では、人の生き方や考え方と出合うことを通して、自分自身の生き方や考え方を創っていくことを目的とし、自己の未来への夢や希望を抱き、自分の理想を求めて主体的に生きる力の育成をすることからも高学年での配列が適当であると考えられる。

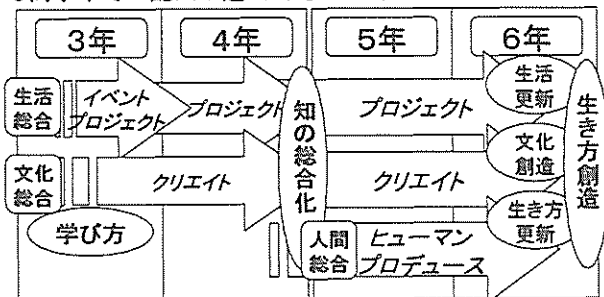


図3 3つの総合のカリキュラムへの位置づけ

単元 見直そう お菓子とのかかわり方

総合部 平 島 健 二

1 単元づくりの考え方

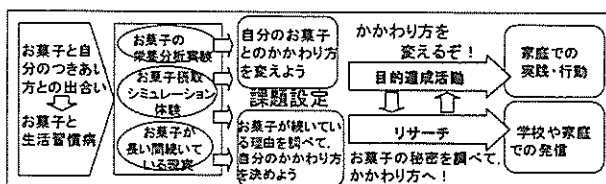
本単元は、健康から見たお菓子について気がかりをもち、自分のお菓子とのかかわり方を見直していく生活の学びを通して、身に付けた内容知や方法知を生かしながら課題解決を図っていく生活総合の学習である。主な学習内容として、「健康を大切にし、維持していくために、自分の生活や将来を見つめ直し、よりよい生活環境をつくっていく」ことである。具体的には、①お菓子とのかかわり方に対する疑問や気がかりから課題を設定し、お菓子の伝統や文化、人々の思いなどに触れながらかわり方を変えていくこと、②お菓子作りに思いをもっている人々に出合ったり、お菓子作り体験をしたり、文献などで調べたりしながら、自分に生活を変える力があると感じて自信や満足感をもつこと、③これまでに身に付けた学び方を駆使しながら、情報を収集したり、表し方の工夫をしたりすることなどである。この内容を確実に獲得させるために、次の点に留意して単元作りを行った。

① 追究対象の価値の見定め

追究対象となるお菓子は、健康面からは塩分や糖分、脂質分の摂りすぎによる生活習慣病へつながるというマイナス面をもっているが、栄養を補う役割と心を落ち着ける役割をもっている。さらに、伝統的なお菓子は、年中行事に合わせたお菓子文化を創ってきており、それを守っている人々の思いなどが込められている。普段何気なくかかわってきているお菓子について、健康面から立ち止まらせ追究させることで、お菓子とのかかわり方を多面的にとらえ、変えていく学習を展開できる。以上から、身に付けた知識や技能を総合化しながら、追究の広がり期待できる価値ある対象であると考えた。

② 「変えなければ!」という強い思いを大切に

生活総合の学習対象は、子どもの生活現実そのもので

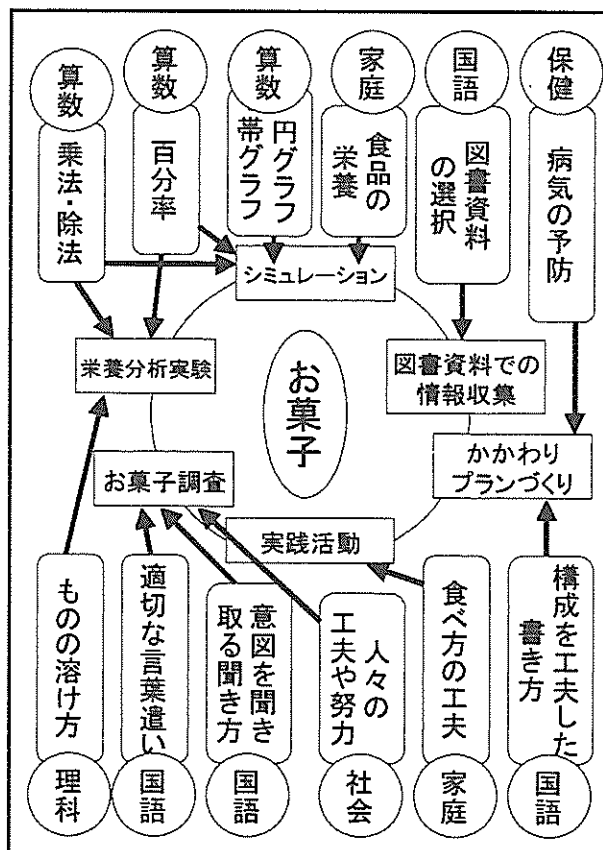


【図1 本単元の構想図】

ある。しかし、生活の中から問題を見つけだすことは容易なことではない。そこで、本単元は、課題設定までにさまざまな体験的活動を設定している。1つ目が自分のお菓子の採り方を分析するシミュレーション体験である。2つ目は、お菓子と健康をとらえるための栄養分析実験である。3つ目は、専門家との出会いである。

2 本単元において想定した知の総合化

本単元は、追究対象がお菓子であり、子どもの生活現実そのものである。その生活を見つめるためには、自分の生活を分析する力と追究対象を分析する力が必要になる。それらの力が発揮し知が総合化されるように、活動を構成していく。本単元においては、次のような活動において、生活や対象を分析するために、これまでに身に付けた知が必要となり、総合化されると想定した。



【図2 想定される知の総合化】

3 単元の目標

- 自分とお菓子のかかわり方の課題を見出し、お菓子のリサーチ活動を通して、各教科等で獲得した認識や技能を総合化したり、生活化したりしながら、自分の活動のよさや生活を変える力を実感することができる。
- 「お菓子かかわり方プランを立て、かかわり方を変えよう」という見通しのもとに、お菓子への見方・考え方を広げ深めながら自分のお菓子とのかかわり方を見つけ、実践して生活を変えていくことができる。

第1次：1～8／23時

自分とおかしのかかわり方を振り返ったり、自分のかかわり方を探究したりして、課題を設定する。

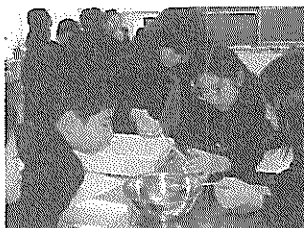


写真1 栄養分析実験

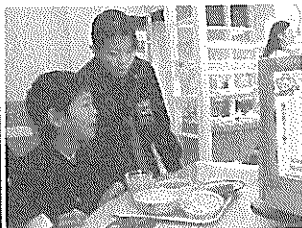


写真2 シミュレーション

第2次：9～19／23時

自分の課題解決に向けて、計画を立て、追究し、自分のお菓子とのかかわり方を見付ける。



写真3 お菓子工房見学



写真4 インターネットで



写真5 インタビュー活動



写真6 お菓子づくり

第3次：20～23／23時

家庭で実践し、実践報告会を開く。

オリジナルを考えて何度も作り直しました。富田さんがおっしゃったように、できたお菓子はかわいく思えました。家族といっしょに食べた時は、普段話さないことを話して家族の気持ちがわかりました。お菓子は心と心をつなぐというのは、本当だなと思いました。…自分に合うお菓子を作ったので、このごろ疲れにくくなりました。お菓子と健康から普段の食事もあるようになり、それが習慣になりました。…課題を解決して、自分の考え（健康、心のつながりを大切にしたい食生活）を実践していることが私の何よりの自信です。

資料 M児の実践報告会のまとめから

第1次は、お菓子とのかかわり方に対する気付きや疑問から自分のかかわり方を変えようとする課題を設定することをねらっている。そこで、お菓子の採り方が生活習慣病に影響する可能性があるという事実に出合わせ、お菓子の栄養分析実験や自分のお菓子の採り方を分析するシミュレーション活動を仕組んだ。その活動で、「お菓子は健康によくない。お菓子は必要ないんじゃないか。」という疑問をもち、その疑問を明らかにするために、食に詳しい栄養士の先生や保護者の方に来ていただき、お話を聞く場を設定した。しかし、そこでも「なぜ、健康にはあまりよくないお菓子が、特に昔からあるお菓子が今も続いているのか。自分のお菓子とのかかわり方をどう変えたらよいのか。」ということが解決できず、さらに追究したい思いから課題を設定することとなった。

第2次は、他教科で得た方法知や内容知を総合的に用いながら、自分の力で課題を追究することをねらっている。子どもたちが設定した課題は、大きくまとめると、①お菓子がなぜ長い間続いてきたのか歴史から、②お菓子の役割から、③お菓子の種類から追究して、自分のかかわり方を明らかにしたいという3つに類型化できた。これらの課題を追究していくために追究方法を話し合い、①文献や資料を収集する、②専門家に聞く、③実際に理想のお菓子を作るなどの方法を明らかにし、これらを組み合わせて追究を行った。図書室や健康作りセンターなどから資料を取りそろえたり、インターネットを用いて資料を収集したり、お菓子工房を見学に行ったり、専門家の方から取材をしたりしながら自分の応えを見つけていく姿が見られた。このような活動のなかで、お菓子のもつ文化や人々の思い、役割などの価値にまで気づき、そこから単にお菓子の食べ方だけではなく、自分なりに健康とお菓子の価値のバランスを取りながら、お菓子とのかかわり方という自分の応えを見つけていった。そして、自分の応えは間違いないのか、友達はどうな応えを見つけているのかという思いから中間報告会を仕組んだ。中間報告会において、自分の課題、追究方法、収集した情報、自分の応えを出し合う中で、友達の応えにアドバイスしたり、友達の応えを参考にしたりする姿が見られた。また、そのことを通して、自分の実践への自信や意欲を高めている姿を見ることができた。

第3次は、家庭で実践し自分の活動の満足感を味わわせるとともに、生活更新への自信を高めることをねらっている。子どもたちは、「お正月という行事にあったお菓子をいただいて、日本の文化にしてみたい。」「家族といっしょにお菓子をいただいて、家族との交流を楽しみたい。」「自分の食生活のスタイルに合ったお菓子をつくりたい。」などそれぞれの応えを家庭で実践し、自分の活動に効力感を感じたり、お菓子に対する価値を見出しながら、自分のお菓子とのかかわり方を変え、更新していこうとすることができた。

第1次：1～4／20時間＋課外

歌舞伎と出会い、自分たちが感じた歌舞伎のおもしろさや美しさについて話し合うとともに、“自分たちの手で6の2歌舞伎ゼミナールをつくっていく”という全体の課題のもと、自分の追究課題を設定する。



写真1 歌舞伎ゼミナールへの参加

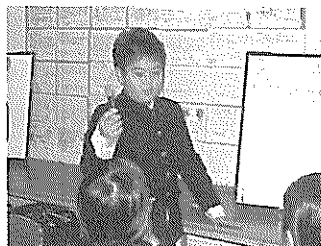


写真2 歌舞伎の魅力について話し合う。

第2次：5～15／20時間

歌舞伎の魅力について明らかになる情報を収集し、それをもとに、歌舞伎俳優さんとともに歌舞伎ゼミナールや歌舞伎のお芝居をつくっていく



写真3 自分の演技の型をつくらう！

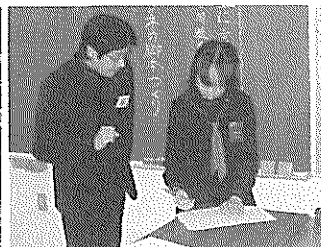


写真4 役者さんにアドバイスもらって台本づくり

第3次：15～20／20時間＋課外

歌舞伎ゼミナールやお芝居という形で発信する「歌舞伎卒業公演」を開催し、多くの人に、自分たちが見だし、つくりあげた歌舞伎の魅力を発信していく。



写真5 自分の夢や生き立ちを口上し見得を切る

第1次は、歌舞伎との出会いを通して、日本の伝統文化の魅力について見つめることをねらいとした。そこで、まず歌舞伎との出会いである。福岡市の文化振興財団が主催する“歌舞伎ゼミナール”や博多座で行われた歌舞伎公演“南総里見八犬伝”の鑑賞を通して本物の歌舞伎と出会わせた。子どもたちは、社会科で学習した江戸時代の文化や、音楽科で鑑賞した日本の伝統音楽などと、歌舞伎を比較し、教室で学んで知っていたことと、実際に本物を見たことの相違点から、歌舞伎の魅力について「歴史と歌舞伎の演技や演目の関係」や「音楽と演技の関係」などについて、追究していく課題を各人が設定することができた。また、リサーチしていくだけでなく、自分たちも歌舞伎をつくって演じてみたいという強い欲求から、「歌舞伎卒業公演」をつくる活動提案をした。その提案から、子どもたちの課題はただリサーチしてその魅力を解明するだけでなく、その魅力をお芝居にして発信していく課題へと発展できた。

第2次は、歌舞伎の魅力を発信していく「歌舞伎ゼミナール」をつくる計画を立て、多様な方法でリサーチしたり歌舞伎をつくったりしていくことをねらいとしている。まず、それぞれの追究課題に合わせて、追究方法や追究の計画を立てた。その追究では大きく「歌舞伎の魅力を明らかにするリサーチ型の追究」と「歌舞伎のお芝居をつくっていくクリエイティブ型の追究」の2つに分け、それぞれ計画を立てた。リサーチ型の追究では、主にインターネットや図書資料、歌舞伎に関係する人からの聞き取りなどを中心に情報収集し、クリエイティブ型の追究では、実際に澤瀉屋俳優の市川笑三郎さんに指導を受けながら、リサーチしたことをまとめたり、それをもとにお芝居の台本や演出・演技をつくったりした。ここでは、本物の役者さんや長唄師、演出家といった現場で活躍されている人と交流したことで、生の生きた情報を収集できたとともに、その方々の歌舞伎などの伝統文化に対する思いや願いにふれることで、自分たち自身の歌舞伎といった伝統文化に対する考えもつくることができた。

第3次は、これまでリサーチしたことをもとに、自分たちが明らかにした歌舞伎の魅力を、ゼミナールやお芝居という形で発信していくことを通して、自分たちの文化をつくっていくことをねらいとしている。子どもたちは、国語科で学習した七五調の言い回しで台本をつくったり、図画工作科で鑑賞した浮世絵をもとに自分のメイク案をつくったりした。本番ではそれぞれが歌舞伎にありしつらねにて自分の夢や生き立ちを思い思いの見得の切り方や小道具を使って演じ、自分たちの歌舞伎をつくりあげることができた。はじめは難しく興味をもてなかった歌舞伎も自分たちの手で作り上げることで達成感と自信をもち伝統文化を受け継ぎさらにつくっていく思いをもつことができた。

障害児教育の〈ふくおかプラン〉

I 豊かな生活を営む子どもをはぐくむ教育課程の創造

1 障害児教育での学ぶことと生きること

現在、ノーマライゼーションの理念の下、障害のある人も、そうでない人と同様の生活ができるように生活条件・生活環境条件が整えられてきている。そのために、障害児教育では、豊かな人間性や基礎・基本を身につけ、個性をいかし、自立し社会参加する力を培うことで、将来の自立的な生活を見通した教育課程を創造していくことが大切である。

さらに「特別支援教育」の中で、従来の「障害の種類や程度」からではなく「一人一人の教育的ニーズ」から子どもたちを理解することが強調されている。また、もてる力をいかし、生活上や学習上の具体的な困難に向き合っていくことが強調されている。そのために、特別な教育的支援を必要とする子どもたちに対して、障害の状態や子どもの特性をふまえたより一層適切な教育を行い、一人一人に自立し社会参加する力を培っていかねばならない。そこで、本校障害児教育においては、このような「より個に応じる」といった点から、これまで行ってきた教育課程を見直し、子どもたちの将来を見据えた意味のある学びを展開していく。

2 障害児教育部主題についての説明

豊かな生活を営む子どもとは、生活の中で自然や社会や文化など身の回りの様々な事象とのかかわりを通して、自立し社会参加するために必要な知識・技能、態度を身につけたり、事象のもつ意味や価値をとらえたりしながら、自分自身を肯定的にとらえ、自分の生活をよ

りよく創っていく子どもでもある。具体的には、次のような資質や能力が必要であると考え。一つは、自分ができたことや分かったことからもつ心的なパワーである「自信、やる気」である。一つは、身の回りの事象にかかわる

豊かな生活を営む子ども

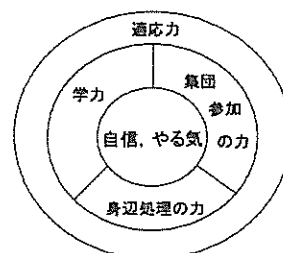


図1 豊かな生活を営むための力

ために必要である「かかわる力」として、主に自分自身にかかわる「身の回りの事象にかかわる力」、主に他の人々とかかわる「集団参加の力」、主に身の回りの物事にかかわる「学力」である。一つは、新たな場面や実際の生活の中で、身の回りの事象にかかわる様々な力をいかしたり併せたりする「適応させる力」である。

豊かな生活を営む子どもをはぐくむ教育課程の創造とは、一人の人間として、生活者として生きがいのある生活が送れるように、上述した資質や能力が一人一人に身に付く教育の営みのことである。豊かな生活を営む子どもの姿を具体的には次のように考える。

- 自分の考えや行動と成果をつなげて振り返るとともに、新たな事象に対して働きかける意欲や見通しをもつ子ども (自信・やる気)
- 身の回りの事象とのかかわりを通して、生活に生きる知識・技能を身に付け、事象の意味や価値をとらえていく子ども (かかわる力)
- 身に付けた力を新たな場面で発揮し、生活をよりよく変えていく子ども (自信)

【表 豊かな生活を営む子どもをはぐくむための障害児教育の基礎基本】

学 ぶ 意 義	
・身の回りの事象とかかわる可能性をもっており、様々な事象と出会い多種多様な経験ができる。 ・自分への自信をもち、目の前にあるものに注目し、興味をもって働きかけることができる。 ・身の回りの事象を確実にできることや集団生活ができるようになることや、身の回りの事象の意味が分かったり知識・技能が身に付いたりすることで、家庭生活から学校生活、地域生活の充実につながっていく。	
自信・やる気	・今までの自分に対する自信と未来に対する自信と、そのような自信から生まれる生活への期待感であり、様々な事象への働きかけの原動力となる心的なパワーである。
かかわる	・衣服の着脱、食事、排泄、あいさつ、移動、衣服の調整、身だしなみ、手洗いやうがいなど、主に自分自身にかかわる内容で、基本的な生活習慣を身につけていく上で必要なものである。
集団参加	・自分の意志を伝えたり行動を抑制したりしながら人間関係を築いていく力や、きまりやルールを守る力など、主に身の回りにいる人々とかかわる内容で、社会生活を営む上で必要なものである。
学力	・知識や技能（実体的な学力） ・思考力、表現力、判断力、課題解決力、見方・考え方、意欲など（機能的な学力）
適応力	・新たな場面や実際の生活の中で、身の回りの事象にかかわる様々な力をいかしたり併せたりするなど、生活をよりよく変えていくものである。

Ⅱ 生活を創り出す意味ある学びを位置づけた特別支援プラン

障害児教育部

1 生活を創り出す意味ある学びとは

生活を創り出す意味ある学びの展開とは、軽度の知的障害のある子どもたちが豊かな生活を営むために必要となる力を身につけさせるための学びである。生活とは、子どもたちの現在及び将来の生活まで見通したものであり、家庭生活をはじめ、学校生活、地域生活をも含めている。生活を創り出すとは、生活場面での子どもたちの行動がよりよく変化することであり、できることが増えたり身の回りの事象について理解を深めたりすることである。そのためには、子どもたちが学習する内容と生活を創り出すこととつなげて吟味し、子どもたちの障害の状況や学習上の特性を踏まえた指導方法を検討することが必要となる。具体的には、次に2つの学びを教育課程上で展開する。「生活に生きる基礎的・基本的な力をはぐくむ学び」では、生活するなかで必要となる知識・技能、見方・考え方、概念、感覚などを確かにすることを大切にする。この学びは、発達が未分化である子どもたちが内容を身につけるために機能する「変化と繰り返し」を学習原理として、反復的な活動や往復的な活動を展開する。「生活上の課題を実際、総合的に解決する力をはぐくむ学び」では、発達が未分化な子どもたちが具体的、実際の活動のなかで内容を身につけることを大切にする。各教科等の学習で身につけた内容を具体的・実際の活動のなかで発揮し強化することを大切にする。この2つの学びを通して豊かな生活を営む力がより身に付くために、子どもの特性をいかすようにする。つまり、子どもの得意とする部分をもとに支援していくことで、「より個に応じる」ようにするものである。

2 その特別支援プランとは

生活を創り出す意味ある学びを位置づけた特別支援プランとは、領域・教科を合わせた指導及び教科別の指導の2つの指導形態において、2つの意味のある学びを通して、自信ややる気、学力、適応力を確実に身につけていくものである。そのためには、子どもの実態を、知識・技能といった面からだけでなく、それらを身につけていくときに必要な力の中から子どもの得意とするものを見とるようにする。この部分から子どもたちに支援していくことで、今まで以上に内容を確実に身につけることができると考える。次にこのような観点から子どもたちを見とった実態をもとに、個別の指導計画を立てる。さらに、子どもの特性をいかした学習を構想・実践・評価していく。こうした考えをもとにして、各教科別の指導等において身につけるべき資質・能力、特性となる力を具体化し、独自の内容と方法を創造していくことで教育課程を創造していくことができると考える。

2 学習プランの具体的構想

● 個別の指導計画のバージョンアップ

個別の教育支援計画をめざし、単元における個別の指導目標や指導内容、方法についての根拠を確かにするために、次のような項目を付け加えて個人の情報とする。

- 1 関係機関からの情報(医療・療育機関、相談機関)
- 2 諸検査の結果とまとめ

諸検査については、知的発達の度合いを調べるための田中ビネーに、指導内容や方法についての教育的ニーズをとらえるために、K-ABC など子どもの特性をより明らかにできるものを取り入れていく。

3 領域への整理

保護者アンケートや諸検査などの個人情報や踏まえ、大きな項目ごとに個人の課題について把握する段階を重視し教育的ニーズを明確にする。

4 1～3を踏まえた個別の指導計画の作成

● 個別のアプローチプランについて

個別のアプローチプランとは、子どもたちの全体的な実態をもとに年間カリキュラムを立て、単元の目標、1単位時間の指導内容等に個別のものを入れ込んでいくものである。このとき、各教科でねらう内容を身につけるために必要な力の中から、その子どもが得意とするものをいかすことで、より個に応じた学びとする。具体的には次の点から、個別化をはかっていく。

- 教材開発の観点
 - ・生活更新につながるもの、学習内容の意味理解と生活への適応をめざせるもの、子どもの特性からみて得意なものといった点から教材化を図る。
- 学習過程の工夫
 - 【学習過程のモデル】

動機段階：学習課題のとらえ方や活動への動機付けへの配慮
熱中段階：・反復的往復的な活動を位置づけた指導課程による概念形成、知識・技能の獲得や仲間との共同活動による課題解決
・身につけさせたい力の中の得意とするものをいかした学習過程
発展段階：学習してきた成果の新たな場面での活用や成果をいかした表現物の作成

- 障害の状況や学習上の特性に応じた教材・教具の支援
 - ・処理内容の考慮(視覚、聴覚情報など)
 - ・処理様式の考慮(継次処理、同時処理)
 - ・操作性や巧緻性の考慮
 - ・人とのかかわり方の傾向性の考慮

障害児教育国語科学習の〈ふくおかプラン〉

I 言葉を確かに理解し表現する国語科学習

1 国語科での学ぶことと豊かな生活

障害のある子どもたちにとっての豊かな生活とは、社会の中で自分から積極的にもの・人・ことに働きかけて生活していくことである。そのためには言葉はなくてはならないものであり、より多くの人と理解し合えるような社会的な言葉を獲得し、言葉を使って自己表現し、円滑なコミュニケーションをはかれるようになることが早急な課題である。ところが、知的に障害のある子どもたちが日常生活で言葉を使ってコミュニケーションしていく時、対象が身近な人に限られているため、使われる語彙量は少なく、文法的に整っていないことも多い。しかし、自立や社会参加を考えたとき、誰とでも、どこでも、言葉を理解し合えるように使うことができる必要がある。そのためには、語彙量を増やし、文字力や文法力を身に付け、言葉を使う事ができた自分に自信をもち、いろいろな場面で使っていこうとする意欲や態度を育てる事が大切である。このような学びが障害児教育国語科における「生活に生きる基礎的・基本的な力を確実に身に付ける学び」と考える。そして、この学びを通して、社会生活の中で使える言葉の理解や表現ができるようにしていくことが、国語科が担う役割・立場である。

ところで本校障害児教育国語科では今まで言葉の意味を捉えさせることを重点的に研究を進めてきた。そこで、次の段階として身に付けた言葉を使って書くことで表現することに焦点を絞って研究を進めることにする。

2 国語科学習主題についての説明

「言葉を確かに理解し表現する」とは、いろいろな人とわかりあえる言葉を獲得し、「聞く・話す・読む・書く」ことを基礎的な知識・技能を確実に身に付けて、

言葉を正しく使うことである。そのためには、日常生活や社会生活の中で意味理解したり使ったりできる言葉の量（語彙量）を増やすとともに、文字の表記の仕方等の文字力や語句や文の決まり等の文法力を身に付ける事が必要である。また、このような力をつけることで、身近な人との関係だけでなく、より多くの人との間で、言葉を通して相手の事を理解し、自分の事を伝えるように表現できるようになると考える。

「言葉を確かに理解し表現する国語科教育」とは、生活する中で必要となる基礎的・基本的な言葉の力を、複数事象で繰り返し言葉を使っていくことで、確実に身に付けさせていくことである。そのために、言葉を使うことができた自信と、言葉でまわりの人に働きかけようとするやる気（自信、やる気）を原動力として、身の回りの事象とかかわる力となる国語の知識、技能（実体的な学力）と、言葉を通して事象を捉えて考える力（機能的な学力）を育てる。そして、身に付けた言葉を似た事象に対して適応していく力（適応力）を育てていく。

しかし、知的障害がある子どもは、子どもによって情報を処理するやり方に、継次的や同時的、視覚的や聴覚的な情報処理の仕方にアンバランスさがあるために、教え方で、言葉の意味や使い方等の理解の程度に個人差がでてくる。そこで、活動や支援を子どもの情報の処理の仕方の傾向性を考え合わせた国語科教育を考えていく。

- 自分一人で読めた、話せた、書くことができた
と自信をもって、自分一人でまたしてみようと意欲をもつ子ども（やる気・自信）
- 言葉を理解し、表現することを身に付け、事象を言葉を通して捉えている子ども（学力）
- 身に付けた言葉を他の場面で使っている子ども（適応する力）

【表1 豊かな生活を営む国語科の基礎基本】

障害児教育国語科と豊かな生活とのつながり			
聞く・話す・読む・書くことの知識や技能を身に付け、より社会的な言葉を獲得し理解し表現して自信をつけ、社会生活の中で身に付けた言葉を使ってコミュニケーションをとり、積極的に社会参加していく。			
観点	力の高まり		
自信 やる気	言葉を使う 自信 やる気	既習の言葉の意味を理解できる、表現できる という思いをもつ。	新しい言葉の意味を理解できる、表現できると いう思いをもつ。
表現 確かに 理解し	知識・技能	身近な生活場面で使われる言葉を使った、「聞く・話す・読む・書く」ことのきまりを理解し、身に付ける。	社会的な生活場面で使われる言葉を使った、「聞く・話す・読む・書く」ことのきまりを理解し、身に付ける。
	特徴づける力	身近な事象や単純な事象の特徴を捉えて、言葉とむすびつける。	社会的な事象や複雑な事象の特徴を捉えて、言葉とむすびつける。
	関連づける力	同じ事象について使われる、意味の似た言葉と言葉を関連づける。	上位の概念の枠で、同じ意味の言葉と言葉を関連づける。
	意味づける力	事象を一面的に見て、その意味を言葉であらわす。	事象を多面的に見て、その意味を言葉であらわす。
適応力	生活の中で活用する力	言葉を身近な生活場面の中で同じような用途で活用する。	言葉を社会的な生活場面の中の同じような用途で活用する。

II 言葉を捉える傾向性を活かした書くことの学習プラン

障害児教育研究部 原 口 和 美

1 副主題の意味

「言葉を捉える傾向性」とは、言葉と事象と結んでその意味理解をしたり、言葉のきまりを理解したりして、自分の表現に取り入れる時の子どもに応じたやりやすさのことである。この傾向性には大きく二つあり、一つは文字の形や文型等を一目見て丸ごと把握するタイプ（同時的理解）で、言葉を視覚的にとらえると理解しやすい特徴をもつ。もう一つは、意味づけながら順序立てて理解していくタイプ（継次的理解）で、言葉を聞いて覚えたり説明を聞いたりする等言葉を聴覚的にとらえて理解できる特徴をもっている。

「言葉を捉える傾向性を活かした書く」とは、前述した子どもの傾向性をとらえて、それを生かした活動と支援し書く力を付けることである。知的障害のある子どもたちは、言葉の発達の遅れから語彙力・文字力・文法力などが充分身に付いていないがために、表現したいことを多くの人の理解をえる形では十分表現できていない。そこで、傾向性をとらえて指導に生かすことにより基礎的な言葉の力を確実に身に付けることができると考える。

「言葉を捉える傾向性を活かした書くことの学習プラン」とは、知的障害のある子どもたちそれぞれのやりやすい方法で文字や語句や文を書く活動を、実態に応じて位置付け、子どもたちの書く学習内容を、教材化し各学年に配置することである。このことで、確実に書くことの基礎的な知識・技能を身に付け、誰にでも伝わる確かな表現になり、自立や社会参加へつなげると考える。

2 学習プランの具体的構想

● 言葉を捉える傾向性を判断する実態把握

言葉を捉える傾向性を、日常生活での言葉の意味理解や文字の形を捉えて書く時の実態より、どのやり方得意とするかで捉える。

● 言葉の実態にあわせた教材化

子どもたちの書く学習内容を「表記能力」「文の構成」「書く内容」「扱う生活行為・事象」「書く形式」「書く対象」の視点で検討し、題材を選び各学年に配置する。配列順は表2のように、短い文から複雑な文等の難易度や、身近な繰り返しある事象から特別な事象へ等の特殊性等で、段階的に考えていく。

【表2 教材化の視点（一部）】

	低学年 → 高学年
文の構成	一語文「～している」→複数の文
扱う生活行為・事象	学校で毎日繰り返す生活行為→一つの目標に向けて持続的に努力し続けている学習活動→事前事後の取り組みがある行事で思い出に残る活動

● 子どもの傾向性を生かした活動と支援

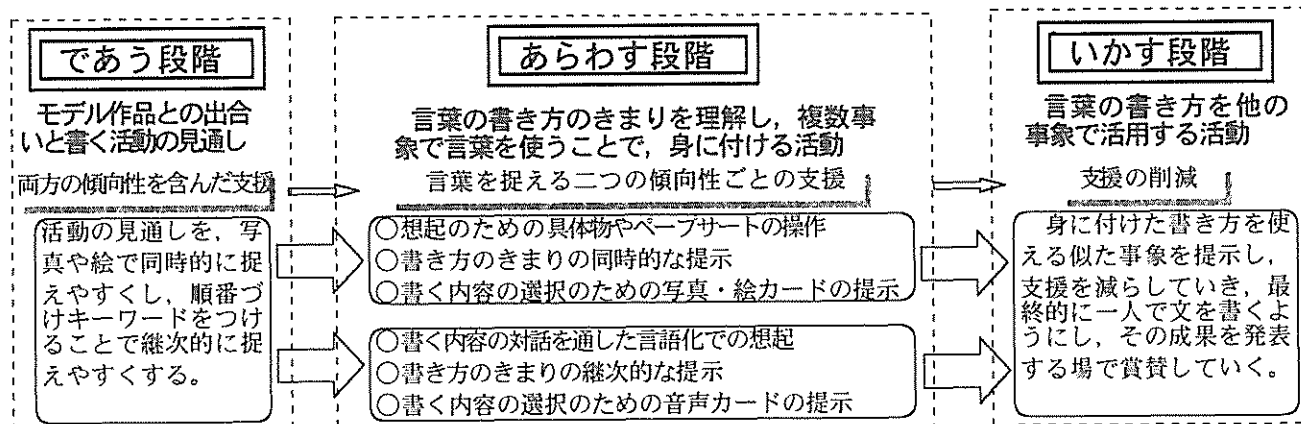
子どもの傾向性に合わせて、資料1のようなノートとヒントをつけた教具を使用する。同時的理解の得意な子どもには、語句のヒント付きの写真や絵カードを配列する事で、文を書き上げられるようにする。一方継次的理解の得意な子どもには、文の構成要素に番号とキーワードをつけて、順に語句を配列したり、文字チップを並べて語句を作ったりする事で文を書き上げられるようにする。

同時的理解のタイプ	継次的理解のタイプ
 写真1 同時的ノート	 写真2 継次的ノート

【資料1 言葉を捉える傾向性に応じたノート】

● 活動構成

図1のように活動構成をしくみ、「であう段階」では両方の傾向性を含んだ支援、「あらわす段階」では、子どもの傾向性に合わせた支援、「いかす段階」では支援を減らして、表し方を確実に身につけるようにする。



【図1 言葉を捉える傾向性を活かした書くことの学習の基本的な活動構成】

3 指導の実際

第3・4学年 題材

みんなでかこう「さくらぐみえほん」

(1) 題材の目標

- 1 意欲的に語句を書き入れて文を完成させて、さくら組の絵本ができた満足感を実感することができる。
- 2 生活行為や事象を正しい文型で正確に表すことができる。AG：目的語＋助詞，BG：目的語＋助詞＋述語，CG：主語＋目的語＋助詞＋述語，DG：主語＋目的語＋助詞＋修飾語＋述語

(3) 学習の流れと考察

【表3 児童の実態と個別の目標】

	A児（CG）	B児（BG）
実態と傾向性	○ 口頭作文は、質問に名詞や動詞や形容詞からなる一～二語文を数文つなげて答える。助詞がぬけやすい。 ○ 写真や絵や動作化で理解することや文字の形をまるごと覚える等、同時的・視覚的な方が理解しやすい。	○ 口頭作文は、質問に名詞や動詞からなる一～二語文で答える。助詞の使い分けが難しい。 ○ 言葉を聞いて理解することや文字の形を書き順で覚える等、継次的・聴覚的な方が理解しやすい。
目標	○ 学校生活の様子を、助詞を正しく使って、主語と目的語と述語や手段を表す語や場所を表す語を中心とした三～四語文を書くこと	○ 学校生活の様子を、目的語や述語や手段を表す語や場所を表す語と、「を」「で」の助詞を使って二語文を書くこと

第1次：1／6 時

モデル作品となる『くまのがっこう』の絵本の読み聞かせを聞き、自分たちも学校の様子を絵本にすることを話し合う。

A児は、挿絵を見て、「ちりとり。（をしている。）」とつぶやいた。また、書きたい内容を「算数グループ」と発表した。B児は読み聞かせを聞いて、「（わたしは）ほうきと台ふき。（をしている）」と説明した。また、書きたい内容を「給食」と発表した。

(2) 題材の考え方

本題材のねらいは、語句を選定して記述し、文を完成させていくことで、文型や助詞の理解や習得をはかり、書くことができた自信と意欲をもたせることである。具体的には、①文型や助詞の使い方を理解すること、②既習の文型や助詞の使い方を生かして表現すること、③意欲的に文作りに取り組み書くことに慣れることである。そのために、文づくりにおいて、同時的に理解していく傾向がある子どもには絵や写真カードで視覚的に全体像がとらえやすいように、継時的に理解していく傾向がある子どもには文字チップや音声カードで聴覚を活用しながら順序よくとらえていけるようにする。このようにすることで、子どもに応じて確実に文型や助詞の使い方を身に付け、自信を育てることができると考える。また同時に、正しい文型や助詞の使い方ができることで、より多くの人に理解できるような表現に近づくと考える。

第1次は、学校生活についての文を書くという目的と見通しをもつことをねらいとした。そのために、子どもたちの学校生活と類似した絵本『くまのがっこう』の主人公を子どもたちに置き換えて読み聞かせ、書きたい内容を挿絵を選択せたり、対話をしながら考えさせたりした。

考察1

左記のように子ども達は書く内容を発言しており、さくら組絵本づくりの見通しをもっていると考えられる。このことより、絵本の読み聞かせと話し合いが有効に働いたといえる。これは、子どもたちを主人公にすることで興味をもたせ、挿絵や対話で同時的・継次的にどの子どもにもわかりやすくてできたからと考える。

第2次：2～5／6時

給食、掃除、授業の様子のビデオから、書きたい内容を発表し、個別の絵本のノートに挿絵を構成して、文を書く活動に繰り返し取り組み、ノートを発表する。

第2次では、学校生活の様子を、文型や助詞を正しく使って文にすることをねらいとした。そのために、言葉を捉える傾向性が同時的・視覚的か、継次的・聴覚的のどちらがしやすいのかで、書く内容の想起と口頭作文、絵本のノートと文作りの活動と文のヒント提示や支援を、以下のように個に応じてしていった。

	A児（視覚的・同時的な理解が得意）	B児（聴覚的・継次的な理解が得意）
活動と支援	活動：質問に答えて、絵や写真カードを選んで文型の枠にはり、文を作って清書する。 支援：絵カードにヒントとして語句をつけて、かたまりとして言葉を捉えやすくする。また、絵本のノートを枠を色分けして文型を捉えやすいようにする。	活動：音声カードを聞きながら文字チップを並べて語句を作ったり、語句を並べて文をつくったりする。 支援：文字チップを並べることで文字を順に並べて言葉を捉えやすくする。また、絵本のノートに番号やキーワードをつけて文型を捉えやすいようにする。
	体育の絵本の文作りで、教師のビデオの問いかけに、「ぼーんけた。」とつぶやく。そして一試行めは、蹴っている様	図工の絵本の文作りで、一試行めは、「えのぐ」とつぶやくものの「（どうやって書けばいいの）かわからない。」という。教師

子の絵カードを選んで、絵カードの枠の色と同じ色のノートの枠の部分にはる。しかし「けりました。」という語句を一人で書くことができずに、絵カードについているヒントの語句の部分をめくって見て試写した。この繰り返しで文を完成させた。二試行目は、「あしで」とつぶやいて、足の絵と「で」の助詞を並べてノートにはり、次に「けりました」とつぶやいて蹴っている様子の絵もはってから文を書いた。二試行目の絵カードには、ヒントの語句はついていないが、一人で文を書き込んで完成させた。(4/6時)



写真3 写真カードを並べて文をつくろう

が文字チップを指さし「これを使ってなべよう」と提案すると、音声カードを何度も聞いて「え」「の」「ぐ」と一文字ずつ文字チップを選んで並べる。教師が「えのぐだけでいいかな」と質問すると、ノートの「なに(で)」のキーワードを見て、「で」をつけたし、文の清書をした。二試行目は、「すぽんじ」とつぶやき、「す」「ぽ」「ん」「じ」と一文字ずつ声に出しながら枠に記入した。教師がノートのキーワード「なに(で)」を指さし「何かたりませんか?」と聞くと、「で」に気づき、書き足して文を完成させた。(5/6時)

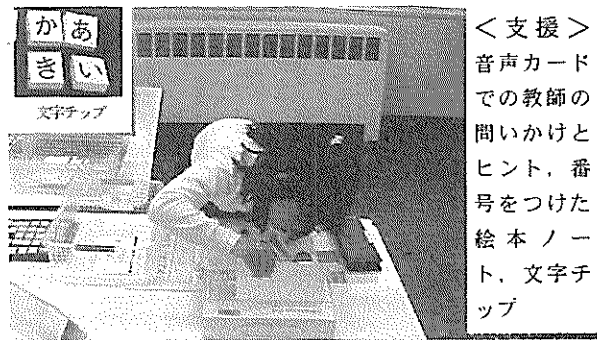


写真4 ヒントカードを聞いて文をつくろう

考察2

上記のように、A児は、一試行めでヒントを手がかりに語句を書き入れ文を完成させて、二試行目では文をつぶやきながら絵カードを並べて、文型や助詞の使い方を身に付けていっている。また、B児は、一試行めで音声のヒントカードを聞き文字チップを順に並べて文作りをして、二試行目でノートのキーワードを手がかりに文作りができ、文型や助詞の使い方を身に付けていっている。これは、A児にとっては絵や写真カードを並べたり、ヒントの語句をつけたことが、文型や語句を一目で見てかたまりとして捉えることにつながり、B児にとっては文字チップ並べやノートのキーワードが、一文字ずつつないで順序立てて語句や文型を捉えることにつながったからと考える。このことより、子どもの言葉を捉える傾向性によって、絵本のノートと文作りの活動と文のヒント提示や支援を個に応じてしたことが、有効に働いたと考える。

第3次：6/6時

今日学校でしたことを写真を見て想起し、書きたいことを発表して、写真の様子を文で表し絵本のノートをつくる。

A児は、教師と一緒に動作化して「ボールをけりました。」「あしでけりました。」と口頭作文し、一試行目は「ぼくはボールを足でけりました。」と書いた。また、二試行目は、「ぼくは、はがきがサインペンでかきました」と書くが、教師と読み直し「はがきを」と書き直した。またB児は、「ぼうるをけりました。」と口頭作文し、一試行めは文字チップを並べて文を作り、二試行目は何も使わないで「ボール」と片仮名を使って文を書いた。

第3次は、身に付けた文型や助詞の使い方を、他の生活事象についても活かして使うことをねらいとした。そのために、あらかず段階で文にした給食・掃除・学習のその日の様子をビデオにとり提示し、書きたい内容を発表させる時に、文型や助詞を強調して復唱した。また、既習の絵本のノートと同じ形式のものを提示した。

考察3

左記より、A児は、二つの場面で同じ文型をあてはめて使うことができ、B児は、文字チップを使わなくても語句や文を考え正しい助詞を使って文を書いており、身に付けたことを活かしている。これは、文型の強調で想起しやすく、既習内容を参考にすることで、身に付けた文型をあてはめやすかったからと考える。このことより、既習の学習内容を総括する生活事象のとりあげと、口頭作文で既習の文型を強調したこと、既習の絵本のノートの活用が有効に働いたと考える。

【全体考察】

書く題材を子どもたちの生活の中から取り上げ教材化したことが、子どもたちの意欲を引き出し、個の傾向性に応じた活動を有効に働かせることがわかった。また、全体像をとらえる写真や絵カード、順序立ててとらえる文字チップや音声カードで個に応じる際は、提示の仕方や言葉かけの質や量を一人一人に合わせて行うことで、適度の抵抗を与え、効果があがることがわかった。子どもの傾向性をとらえるとともに学習内容としての実態を確実に把握しておくことが一人一人に書くことの基礎的な力を身につけさせる条件である。しかし、どちらの情報処理の仕方とも比重が違うが使っており、視覚的に見てする活動と聴覚的に聞いてする活動自体、切り離すことは難しくからみあっているので、より適切な支援をしていくためには、検査の細かい項目を取りあげて細かく傾向性を分析して、重点化した活動や支援を工夫していかなければならない。つまり、情報処理の仕方をより重点化した効果的な活動構成と題材開発が課題である。

障害児教育算数科学習の〈ふくおかプラン〉

I 数に確かにかかわる算数科学習

1 算数科での学ぶことと豊かな生活

現在ノーマライゼーションの理念のもと、知的障害のある人々も、社会の一員として他の人々と同様の生活ができるように生活条件が整えられてきている。そのような社会の中で、生活者としての満足感や充実感、生きがいといった生活の質が問われている。知的障害のある子どもたちは、抽象的で論理的な思考を必要とする課題への取り組みや、数量や図形についてのきまりの理解と、そこで学んだ知識や技能を生活に役立てていくことが難しいと考えられている。しかし、子どもたちは、個数、順番といった数対象を見出すことができる様々な事物に囲まれて生活している。このような数について、その意味を捉え根拠としながら、いかす範囲を広げていくことによって、より豊かな生活が送れるようになると思う。そのためには、これらの数対象である事物から数を見出し、根拠となる数の見方とともに、それに意味づけられた知識・技能を身につけていくことが大切である。この様な学習を通して、数に確かにかかわっていくことが障害児教育算数科が担う役割・立場である。

2 算数科部主題についての説明

数にかかわるとは、子どもと数対象とのやりとりのことである。子どもから数への働きかけとしては、対象から数そのものを見出し数操作を行うことである。数対象

から子どもへの働きかけとしては、数の見方を広げ数についての知識・技能を身につけることである。その結果、新たな数対象にいかし、数への自信をもつことができる。数に確かにかかわるとは、このような数対象とのやりとりの中で、より実地的な対象から数を見出し、根拠をもって数にかかわる判断していくことである。そのためには、数の構成のきまりをいかした抽象的な操作や見方ができること、知識・技能が数のきまりをもとに意味づけられることである。その結果、新たな数対象に身につけたものを用いることができ、自分と数対象とのやりとりに対して、自信をもつことができるようになると思う。

数に確かにかかわる算数科学習とは、目的を達成していく中で、対象に対して、数にかかわるために必要な力を発揮しながら、数の見方を根拠に数をとらえていく学習のことである。このためには、抽象性の高い数のきまりをとらえやすくした学習を構想していかなければならない。特別支援教育への転換期である今、より個に応じるという視点から、根拠となる数の見方を明らかにし、子どもの得意とする認知処理をいかし、根拠をもって数にかかわっていくことが大切だと考える。

- 数対象に対して、数のきまりをとらえ、自信を深めていく子ども（やる気・自信）
- 数対象から、数を見出し操作することで、見方や知識・技能を身につけていく子ども(学力)
- 身につけた数操作や見方や知識・技能を新たな数対象にいかしていく子ども(適応する力)

【表1 豊かな生活を営むための算数科の基礎基本】

算数科と豊かな生活のつながり					
様々な数対象に対して、数にかかわるために必要な力を発揮しながら繰り返し働きかけ、自分なりの根拠をもって個数、順番、大きさなどの判断ができる。					
観 点			—————→ 数に確かにかかわる		
やる気・自信		自 信	目的に対して、活動の結果をもとに、できたという思いをもつ。	目的を達成する数処理に対して、できたという思いをもつ。	
数にかかわる	機能的な学力	見出す力	干渉的な属性が捨象された数対象から数の属性を見出す。	多様な属性のある実地的な数対象から数の属性を見出す。	
		数操作する力	長さ、高さなど量感覚をいかして具体的な操作をする。	数の構成にかかわるきまりをいかして抽象的な操作をする。	
		見方	数対象と数を「対応づけ」てとらえる見方をもつ。	数対象と数を、数の構成などの数のきまりでとらえる見方をもつ。	
	実体的な学力	知識・技能	生活経験をもとに意味づけられたものである。	新たな数のきまりをもとに意味づけられたものである。	
適応力		いかす力	新たな数対象に対して、身につけた数操作の手順を用いる。	新たな数対象に対して、身につけた見方を用いる。	

Ⅱ 数の見方と認知処理の傾向性をいかした算数的活動の学習プラン

障害児算数科部 園田 洋一

指導内容へと再構成・細分化、子どもの実態をみとる。

1 副主題の意味

子どもの数の見方、認知処理といった特性の違いをもとに得意な面をいかした活動を通して、数に働きかけることが大切である。数の見方とは、特に数の構成に対するとらえ方のことであり、知識・技能の根拠となる子どもがもつ考えのことである。それをいかすとは、見方の高まりの段階をもとに、指導内容を見直し、より細やかに内容を設定していくことで、より個に応じた内容を設定することである。認知処理の傾向性とは、特に情報の処理様式のことであり、物事を順序立ててとらえる継次処理様式と、物事の全体から関係をとらえる同時処理様式のことであり、問題を解決する過程において、子どもの得意とする認知処理様式による数操作を位置付けるものである。つまり順序性を重視した数操作や、全体性を重視した数操作を行うことで、より個に応じた方法で支援することである。数の見方や認知処理の傾向性をいかした算数的活動とは、①数の見方や認知処理の傾向性をもとにした教材から数の視点にきづき、②順序的な手がかりや、全体的な手がかりをふまえた数操作をこころみながら新たな見方や知識・技能を身につけ、③それを新たな数対象にいかしていくことで、数への自信をもつ活動のことである。よってその学習プランとは、数の見方をもとに内容の設定の面から、また得意な認知処理をもとに数操作の設定の面から、より個に応じる学びを構想し、生活に生きる基礎的・基本的な力を確実に身につけることをねらう学びのことである。

2 学習プランの具体的構想

● 数の見方をいかした実態把握

主に知識・技能を中心とした従来の指導内容から、数のきまりをもとにした子どもの数のとらえ方を加味した

● 数の見方と認知処理の傾向性をいかした教材化

子どもの学ぶ意欲にかかわる目的性、数の見方にかかわる価値性、認知処理の傾向性にかかわる個性の観点から教材を工夫する。

- 目的意識を引き出し、繰り返し数対象にかかわれる遊びや遊びの場作り（目的性）
- 数の構成が操作の過程や結果に視覚化され、数の見方や知識・技能がとらえられるもの（価値性）
- 部分的に、順序よく、数のきまりをもとにしたもの（継次処理が得意な子どもに応じた個性）
- 全体的に、視覚で、量感覚をもとにしたもの（同時処理が得意な子どもに応じた個性）

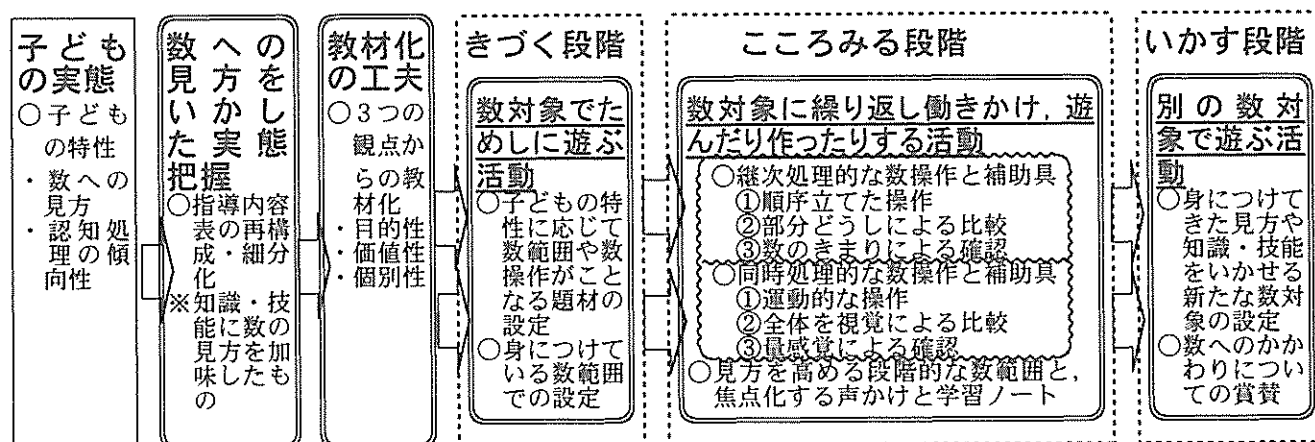
● 2つの数操作を位置付けた活動構成

認知処理の傾向性をいかした算数的活動を展開するため、子どもの得意とする処理様式に応じた数操作を位置付ける。そこで図1のような学習段階と活動を設定し、こころみる段階に2種類の数操作を位置付ける。

継次処理の数操作	同時処理の数操作
○段階的	○全体的
○部分から全体へ	○全体から部分へ
○順序性	○関連性
○聴覚的・言語的	○視覚的・運動的
○時間的・分析的要因	○空間的・統合的要因

● 数の見方と認知処理の傾向性をいかした支援

- 数の見方をとらえさせるために、操作結果への理由を焦点化する声かけ（「どこで分かったのか」）
- 大きい位から順に比べることができるといった継次処理的な教具
- 数どうしを全体的に量として視覚的に比べることができるといった同時処理的な教具



【図1 数の見方や認知処理の傾向性をいかした基本的な活動構成】

3 指導の実際

第5・6学年 題材

あそぼう!コロコロランド (数の大小)

(1) 題材の目標

- 繰り返し数の大きさの違いを比べながら、コロコロランドで楽しむことができる。
- コロコロランドのコース作りや、ゲームで遊ぶことを通して、数についての大小の違いが分かる。
(AG) は、20 までの数の大小の違いについて
(BG) は、30 までの数の大小の違いについて
(CG) は 500 までの数の大小の違いについて
(DG) は 1000 までの数の大小の違いについて

(3) 学習の流れと考察

＜数の大小関係に関わる見方をもとに更に細分化した指導内容表と子どもの実態＞

1	2	3	4	5	6
何と何 2と4 ※5まで 目で判断すること d児	何と何 6と8 ※10まで 目で判断すること e児	何と十何 8と12 十の有無を比べること	十何と十何 13と18 一の位を比べること a児	十何と二十何 19と21 十の位を比べること	二十何と二十何 23と28 ※30まで 一の位を比べること
7	8	9	10	11	12
何十何と何十何 32と46 ※50まで 十の位を比べること b児	何十何と何十何 67と89 ※100まで 十の位を比べること	百何十何と 百何十何 123と167 十の位を比べること	何百何十何と 何百何十何 345と456 ※500まで 百の位を比べること c児	何百何十何と 何百何十何 645と879 ※1000まで 百の位を比べること	△百何十何と △百何十何 456と498 十や一の位を比べること

「十進位取り記数法」による数の見方をもとに指導内容表を作成し、この表をもとに子どもの実態を把握することで、より個に応じた内容を設定する。

BG	DG
a児 (5年男子)	c児 (6年女子)
(実態)・位の違いや位の数には気付いていない。視覚的に全体をとらえる傾向がある。	(実態)・大きき位から順に比べることに気付いていない。順序よく考えていく傾向がある。

第1次：1～2 / 6時

コロコロランドのコース作りや、コロコロコリントゲームに出合い、試しの活動を行う。

a児は、材料の数を示した数字を比べゴール側に小さい数の材料を反対側大きい数の材料を置いてコースを作り遊んだ。c児は、先生と自分用の10と1点の玉を転がし、得点場所に入った玉の数から得点を数え比べた。得点が高いときは喜び、小さいときは悔しがっていた。

第1次は、数の大小を見つけるという目的と見通しをもち、材料や得点といった数に着目することにをねらっている。そのために、①子どもの特性に応じた題材を設定し、②試しの活動を行った。

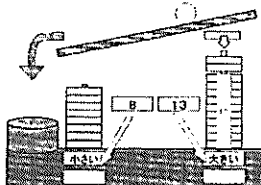
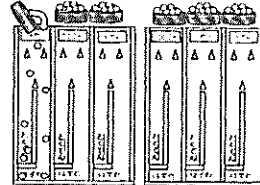
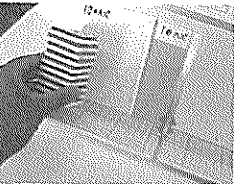
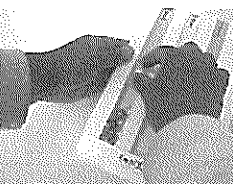
考察1

コース作りにおいては、子どもの下線の姿からコースの材料や入った玉の得点という数の大小を比べる対象をとらえ(見出す力)、活動の見通しをもつことができたと考える。このことは、コース作りの材料やゲームの得点を数対象とし、身につけている数範囲をもとに試しの活動を行ったことが有効であったと考える。

第2次：3～5 / 6時

数対象に繰り返し働きかけ、コロコロコースを作ったりコリントゲームで遊んだりする。

(ねらい)・コース作りを通して30までの数の大小をとらえること	(ねらい)・ゲームを通して1000までの数の大小をとらえること
BGのコロコロコース作り	DGのコロコロコリントゲーム

	材料の数を示したカードをもとに正しく大小を判断することで坂道のコースができる。数操作の対象が材料であり、高さの違いから判断ができる。		百・十・一の箇所に入った。玉の総計が得点となる。得点の大きい方の勝ちである。十進位取り記数法をいかし位に目をつけて、得点の大小の判断ができる。
十のまとまりと1個ずつの材料群から、2つの柱の材料を取り出し、十と一の部屋に分けられた教具で見比べながら、高さの違う部分から大きさを確認する操作と教具		百・十・一の箇所に入った玉を、百・十・一の位に分けられた教具に、先生用と自分用の玉を置き直し、大きい位から順に比べ、3桁の得点として大きさを確認する操作と教具	
数範囲を段階的に大きくしていくことで、新たに出合う数の大小にかかわる見方			
(BG) 30までの数範囲の二十何と二十何において、一の位どうしを比べ数の大小をとらえること	(DG) 1000までの数範囲の△百何十何と△百何十何において、十の位どうしを比べ数の大小をとらえること		
数の大小を判断するとき、新たな見方をとらえさせるための数範囲の段階的な提示			
本時における数範囲の設定			
①14と24、②26と21 ③24と28、④29と26	①何百何十何と何百何十何、②4百何十何と4百何十何 ③7百何十何と7百何十何、④9百何十何と9百何十何		
①試行目(14と24)・24が大きいと答える。十の部屋に2こあるからと答える。 ②試行目(26と21) a1: 数え板の十の部屋にそれぞれ20ずつおく。次に一の部屋に6と1を置く。26の方を指さしてこっちが大きいと言う。教師と十の部屋が同じであり一の部屋が違うことを確認した後、どこで分かるかにa2: 一の部屋と答える。	②試行目(436と464) ゲームで436と464ができる。c1: 数え板を用いて、100点玉を百の位に、10点玉を十の位に、1点玉を一の位それぞれ並べる。各位の玉をみながら、得点表に図で表す。464○、436に×(小さい)を付ける。464が大きいことは、教具に並べた玉のどこを見て分かったのか尋ねると、c2: 十の位を指さしながら「十の位」と答える。		

考察2

BGのa児は、a1のように十と一の部屋に、十のまとまりの材料と一つずつの材料を並べて比べ(操作する力)、大きい小さいを見つけ(知識・技能)、a2のようにどこで分かるかの問いに「一の部屋で分かる」と答えている(見方)。CGのc児も、c1のように入った玉を、それぞれ百・十・一の位毎に分けて教具で比べ(操作する力)、c2のように百の位が同じ場合、「どこを見たら、大きいことが分かったのか」の問いに「十の位」と答えている(見方)。これらの姿は、数操作を通して、数の大小の見方を広げ、数の大小についての知識・技能を身につけていっている姿であると考えられる。これは、a児がコース作りの材料という具体物を十・一の部屋に別れた教具で見比べたり、c児が入った玉を百・十・一の位毎に分けられた教具で大きい位から順に比べたりする数操作を通じたことが有効であったと考える。また、新たな見方に出合う段階的な数範囲の設定と、操作結果の理由を焦点化する声かけが有効であったと考える。

第3次: 6/6時

身につけた見方や知識・技能をいかしながら、新たなカードゲームで遊ぶ。

c児は先生188と自分658を比べ、「私の勝ち」6を取り出し「百の位で分かったの」と答える。a児は、先生26と自分27を比べ、「ふふ」と喜ぶ。「同じくらいではないか」の問いに、「ぼくの勝ち、7があるもん、一の部屋でわかった」と答え、勝ったことを喜ぶ。

第3次は、数の大小を見つけていくことについて、自信を深めることをねらっていた。そこで新たな数対象として、引いたカードに記された数の大小を比べる遊びを設定した。

考察3

a児もc児も、自分の勝ちであることをカードゲームの数から判断している(いかす力)。さらにその理由として、a児は一の部屋の数が多いこと、c児は、百の位の数が多いことを述べている(自信)。これは身につけた見方や知識・技能をいかすことができるように数どうしを比べるカードゲームを設定したことが有効であったと考える。

【全体考察】

子どもの数への見方や認知処理の傾向性をいかした算数的活動による教材化の工夫を行ったことは、考察1、2のように、数操作の仕方を身につけ、新たな見方に気付いていく上で有効であった。これは、「十進位取り記数法」という数のきまりをもとに指導内容を細分化し、子どもが身につける知識・技能の根拠となる数の見方を明確化していったからだと考える。また子どもの得意とする処理様式をもとに数操作を位置付けたことで、抽象性の高い数の見方をとらえ、これらを根拠に自分の知識を意味づけることができた。この結果、考察3のように新たな数対象にいかしていくことができ、自信ややる気を高めることができた。課題は、認知処理の違いをもとにした活動構成の在り方を究明したい。

障害児教育体育科学習の〈ふくおかプラン〉

I 状況に応じた動きを身に付ける体育科学習

1 体育科での豊かな生活を営むこと

知的に障害のある子どもたちは、障害の特性や生活経験の違いなどから運動経験、運動の量が不足したり制限されたりしていて、十分な体力がついていないといわれている。しかしながら、子どもたちは、運動することへの興味があり、運動をしたいという欲求をもっていると考えられる。そのような子どもたちの体育科の指導については、同じように何回も繰り返し運動して技能を習得させることはもちろんのこと、状況の変化に柔軟に対応できるようになることが課題としてあげられる。地域のスポーツ行事などに積極的に参加できるためには、社会性を培い、集団のなかで運動することを楽しむことが大切になる。そのためには、きまりをもとに、おかれてる状況によって動きを発揮していくことで、目標を達成したり競争したりして、運動に参加できた喜びや動くことができた楽しみが生まれてくると考える。このことが、運動に積極的に参加する態度を培うことができ、健康増進が保障できるといったことが期待できる。

2 体育科主題についての説明

状況に応じた動きを身に付けるとは、子どもが運動を行うために必要なきまりのもと、物理的な場や共に運動をする友達によって変わっていく様子をとりえて動くことができるようになることである。ここでいう状況とは、動きを発揮する

ための場や人が変化していくそのときどきの様子であり、それによって動く判断が生み出されされていく。よって状況がつくられるのは、活動する場と活動をとにもする人がかかわっており、それぞれに自ら判断して動くために必要な力として、活動の場をとらえる力、人とかかわる力がある。この2つの力は動きと関係しており、それぞれが変化してことをとらえて、動くための判断をして動きを身に付けることへとつながっていくと考える。

状況に応じた動きを身に付けることは、障害のある子どもたちにとって、おかれている場面の变化を自分で判断して動くことができるようになることであり、そのことが、現在または将来の集団での自分から運動にかかわることができるようになることへとつながっていく上で価値があると考えられる。

状況に応じた動きを身に付ける体育科学習とは、運動するきまりのもと、場や人とのかかわりにおいて、変化していく状況から子どもが自分で動きを発揮していくことのできる学習のことである。この学習を行うには、子ども一人一人の実態に視点をあて、子どもが運動へのかかわり方を生かして運動課題を設定する必要がある。

- 自ら意欲的に活動するなかで、何度も繰り返し取り組むことができる子ども (やる気自信)
- 活動の場の空間をとらえて友達とかかわる中で動きを発揮して運動を楽しんでいる子ども (運動へのかかわり)
- 体育や他の日常生活で自分から進んで動きを発揮することができる子ども (適応する力)

【表1 豊かな生活を営む子どもをばぐくむための体育科学習の基礎基本】

体育科と豊かな生活とのつながり				
やる気・自信、運動へのかかわり、適応する力、それぞれの側面が育つことで豊かな生活を営む力となると考える。これらの側面は、心身の健康と確かな体力を培い、日常生活での身体活動や余暇活動への意欲へと発展していく。				
観 点	子 ども 像 の 高 ま り			
やる気・自信	○ 運動の対象へ興味をもち、活動の場や仲間とかかわりをもとうとしている。	⇒	○ 自分から進んで運動を行おうとする姿が見られ、繰り返し課題に取り組むことができる。	
状況に 場	○ 活動の場が変化することにより、その場に応じて今までの動きを場に合わせて変えようとしている。	⇒	○ 場が変化したことにより、自分でどのように動くのかを判断してこれまでとは違った動きを身に付けることができる。	
人	○ 一緒に活動をする友達の位置や動きをとらえ、自分の動きにいかしながら運動することができる。	⇒	○ 友達の動きや位置により自分でどのように動くのかを判断して、これまでとは違った動きを発揮し、身に付けることができる。	
適応力	○ 体験した動きを次の時間で発揮し、自分から意欲的に活動しようとしている。	⇒	○ 日常生活のなかで、状況に応じた判断をしながら自分でどのように動くのか考えながら活動している。	

Ⅱ 場，人をとらえる優位性をいかしたゲーム学習プラン

障害児教育研究部 下 川 勝 彦

1 副主題の意味

子どもたちが、状況に応じて動きを発揮するためには、一人一人の動きの実態と動きを発揮するために必要な情報が必要となる。特に、体育科学習のゲームにおいては、共通のきまりのもと、活動の場のなかで集団対集団での競い合いながら、自分で動く判断をするために活動の場をとらえることや一緒に運動をとともにする仲間や相手の位置や動きをとらえることが大切になってくる。

場をとらえるとは、活動する空間でものの位置や広さなどの状態をつかむことである。人をとらえるとは、一緒に活動する友達の働きかけや動きをつかむことである。場，人をとらえる優位性とは、子どもがもっている場をとらえることと人をとらえることの2つのなかで、よりよくとらえることができる方であり、具体的には、場のとらえが優位な子どもは、場に置かれているものの位置や場の広さ、目的となるゴールなどへの距離をとらえ、自分で得点したり達成したりするための動きを発揮する姿が多く見られる。また、人のとらえが優位な子どもは、友達の声かけに応じた動きや友達の位置や動きを見て、その友達に向かって、ボールを投げたり転がしたりまたは、蹴ったりする姿で表れると考える。

場，人をとらえる優位性をいかすとは、子どもの個人内にある場のとらえと人のとらえでより優位な方を発揮しながら、活動のなかでの場，人による状況に応じた動きを発揮することである。よって、場，人をとらえる優位性をいかしたゲーム学習プランとは、子ども一人一人が場のとらえが優位なのか人のとらえが優位なのかの実態をとらえ、それに応じた場の設定、ペアリングやポジションなどをふまえたゲームにより、場の変化や友達とのかかわりにより動きを身に付けていく学習のことである。この学習を行っていくためには、個の実態として、場，人をとらえる優位性をとらえていくこと、ゲームの教材化を図ること、活動構成の工夫が必要となる。

2 学習プランの具体的構想

● 場，人をとらえる優位性の実態把握

子どもが、場と人のどちらをとらえることが優位なのか、障害特性をふまえて行動観察を中心に実態をつかんでいく。例えば、子どもの行動から、ボール蹴りゲームなどで、ゴールに向かってシュートを繰り返して、守備がいるにもかかわらず自分でねらったところへ繰り返しシュートをする傾向にある子どもは、人より場をとらえるのが優位である子ども、自分でもシュートをすることができるポジションにしながら友達の声かけによってすぐにボールを渡すような傾向にある子どもは、場より人をとらえるのが優位である子どもであるというように、体育の学習での様子や日頃の遊びの様子から活動している場を意識しているか、友達を意識しているかみていく。

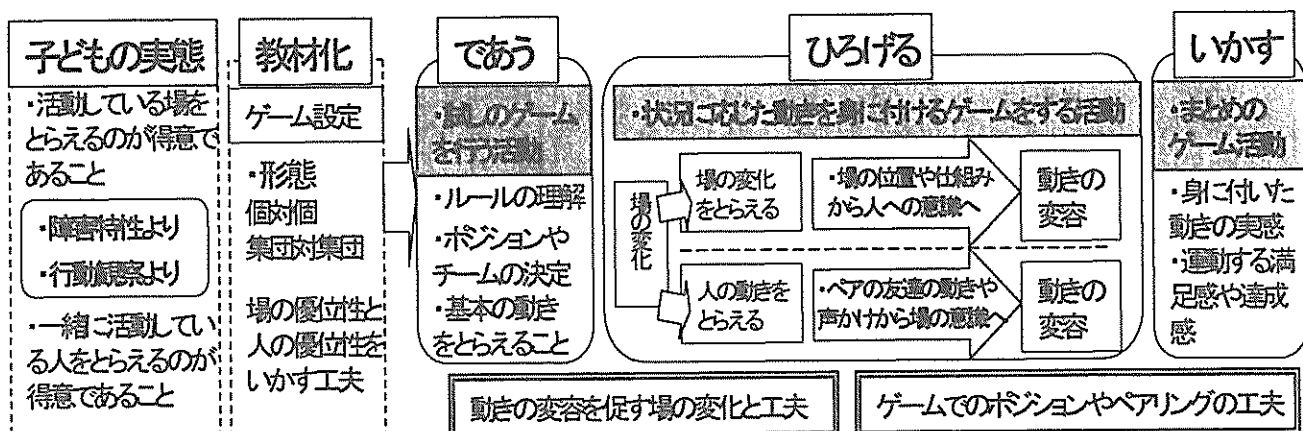
● ゲームの教材化

ゲームづくりについては、まず、子どもの実態と動きの実態からとらえ、ゲームを設定し、子どもが動きを身に付けることができるように、ポジションやペアを決めていく。

	攻守分離型	攻守交差型	攻守混合型
もとのゲーム	バレーボール テニス	ベースボール	バスケットボール サッカー
形態	個対個が中心	集団対集団	集団対集団
場の優位性をいかす工夫	対戦相手を得点できる場所の広さと得点ゾーンの設定	攻撃の目標(攻撃目標を視覚的にとらえられるようにすること)	得点できるゴールの位置や固定ポジションの設定
人の優位性をいかす工夫	相手の守備がいない位置へ攻撃の目標をつくること	ゲームでの守備位置を設定してエリアをつくること	ボールの受け渡しを促す味方とのペアリング

● 活動構成の工夫

活動構成を「であう」「ひろげる」「いかす」の3段階に設定する。特に「ひろげる」段階では、活動の場の変化とチームでのポジションやペアリングの工夫により状況をつくりだし、それに応じた動きを発揮し身に付けていくことができるようにする。



【図1 場，人をとらえる優位性をいかした基本的な活動構成】

3 指導の実際

第5・6学年 題材

ビッグネットボールゲームをしよう

(1) 題材の目標

- 1 ゲームをしながら場の変化や味方の友達の動きを意識して得点をとることをめざしてゲームを楽しむことができる。
- 2 ゲームでの場の変化や一緒に活動する仲間や相手の動きなどから状況に応じたボールを投げる動きを自分で身に付けることができる。

(2) 題材の考え方

本学級の子どもたちは、これまでに、鬼遊びやボールを使った攻守分離型のゲームにおいて、ゲームを楽しむために必要なきまりを理解することや役割を分担していく経験をしてきているが、ゲームでの自分の役割や相手への意識をもつことができている子から自分だけでボールを投げたり蹴ったりすることが楽しいと感じる子まで実態は様々である。本題材は、ゲームの仕方を理解し、活動に見通しをもちながら、場の変化や味方の位置などから生まれる状況をとらえ、ボールを投げるなどの動きを身に付けることができることをねらいとしている。具体的な学習内容としては、①ゲームの活動の進め方やきまりを理解すること、②相手の位置や動き、場が変化したことなどの状況に応じた走る動きや止まる動き、投げる方向を変えて素早くボールを投げる動き、走りながらボールを投げる動きを身に付けること、③ゲームでの得点が増えることや勝利することをめざし、協力してゲームを楽しむことができること、などである。このことは、生活に生きるためのたくましい体力を育てる上でも意義がある。

(3) 学習の流れと考察

【児童の実態】

Aグループ (a児)	Bグループ (b児)
(子どもの実態とねらい) 自分から進んで友達とかかわることができる。ゲームでも、友達に声をかけたり一緒に活動したりして人を意識して運動をする姿が多く見られる。そこで、 <u>a児</u> については、 <u>人をとらえるのが優位</u> であるという実態から、同じ人のとらえが優位なe児とペアになり、a児がボールを投げてパスをだす側のポジションでゲームを行うこととした。	(子どもの実態とねらい) 人より活動の場をとらえることが優位で、自分が目標とする場所に向かってボールを投げたり蹴ったりする姿が多く見られる。そこで、 <u>b児</u> については、 <u>場をとらえることが優位</u> であるという実態からシュートする技能が高いc児とペアになり、b児がボールを投げてパスを出す側のポジションでゲームを行うこととした。

第1次：1／5時

「ビッグネットボールゲーム」のきまりについて理解し、正しいゲームの仕方とボールを投げる動きに出会う。

「ビッグネットボールゲーム」のきまり

・2つのチームに分かれて対戦し、攻撃するときは、自分のエリアからボールを投げる。ゴールに入らずに相手のエリアに入ってしまったらアウトとなる。得点が入ったら続けて攻撃できる。攻撃側は10個のボールが与えられる。

第1次は、「ビッグネットボールゲーム」の仕方やきまりの理解とボールを投げる動きをつかむことをねらいとした。ここでは、教師を相手にしてビッグネットボールゲームを行った。子どもたちは、教師の位置を見ながら守りである教師のいない方のビッグネットに向かってボールを投げる事ができた。

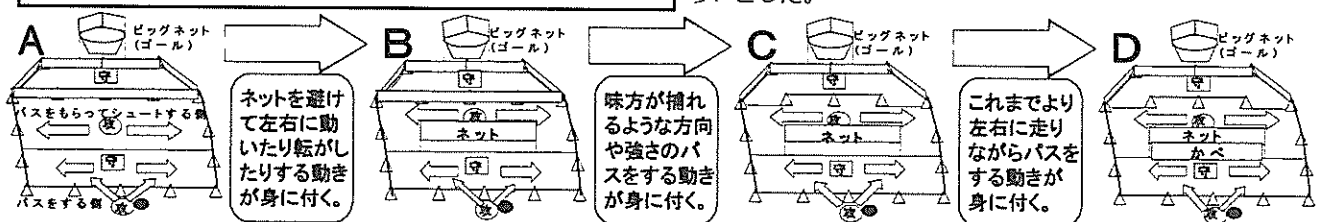
考察1

試しのゲームをしながら、相手を避けながらボールを投げて得点を増やすことができ、ゲームの理解と関心を深めていった。これは、教師が相手になりボールを投げる位置や守る位置を意図的に設定したことが有効に働いたといえる。

第2次：2～4／5時

2対2でゲームを行い、仲間にボールをパスしていきながら得点を重ねてゲームを楽しむことができる。

第2次では、2つのチームに分かれて、「ビッグネットボールゲーム」を行い、状況に応じて仲間にボールを渡したりパスしたりする動きを身に付け、ボールが仲間に渡って得点が増えていくといったゲームの楽しさを味わわせることをねらいとした。



a 児の変容



写真1...それっ、パスだ。写真2 ネットのよこへパス。

a児は、味方の友達にパスをしようと仲間であるe児のいるところに向かって、常にコート中央の場所からオーバースローでボールを投げていた。しかし、投げたボールが対戦相手にあたりネットにかかったりしていた。e児は、自分の目の前にあるネットにかかってしまうのを見て、ネットのない場所に動いたり、ネットの下に屈んだりしてパスをもらおうとした。すると、a児は、(写真1) ネットの下をくぐってサイドスローでの投げ方をするようになり、(写真2) ネットのないサイドの場所に向かってボールを投げるようになった。

b 児の変容

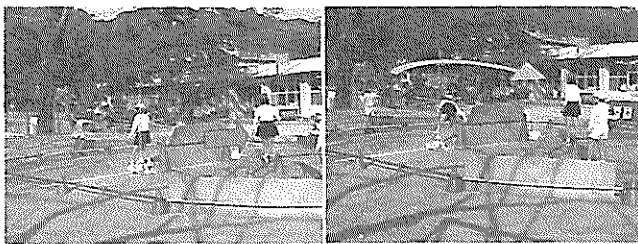


写真3...こっちになげるよ。写真4...とつてね。

b児は、ネットのある場(Bの場)になり、ネットを意識して、ネットを越えるような高いボールを投げている。しかし、どうしてもネットにかかってしまうことで、ネットのない所へ向かってボールを投げた。すると、後ろの壁にあたって味方のエリアにボールが止まってそれをc児が捕ってシュートをするということが多く見られた。しかし、後ろの壁がない場(Cの場)になると、自分が投げたボールが味方のエリアに止まらずにオーバーしてしまうようになった。すると、ネットのない場所にいたc児に向かってボールを投げるようになった。(写真3、4)

考察2

a児については、写真1や写真2のような同じ位置からのオーバースローから左右に向きを変えてのオーバースローと下の方向へのサイドスローというように状況に応じて自分で投げ方を変えることができた。これは、①場においてネットや壁を設け、ネットや壁を避けないとボールが味方へ渡らないという状況をつくったこと、(Aの場からBの場への変化とCの場からDの場への変化)②e児とのペアでのゲームをしたことで、e児が左右に動いたりネットの下に構えて声かけしたりしたこと、の2点が、a児が自分で動きを判断し、動きを身に付けることができた要因である。b児については、高く強いボールでネットを越えようとするボールから、ネットのないところへ向かってゆっくりとふわりとしたボールを投げるというように投げ方を変えることができた。これは、①ゲームの場において、ネットを設けたことと、後ろの壁を設けたこと、その壁を外したこと、(Aの場からBの場への変化とBの場からCの場への変化)②シュートの技能の高いc児とのペアにしたことで、写真3や写真4のようにc児が捕れるようなボールを投げるように声かけしたこと、の2点がb児が自分で動きを発揮しながら身に付けることができた要因である。

第3次：5/5時

これまでの学習を生かしてチームで協力して「ビッグネットボールゲーム」の楽しさを味わう。



写真5 パスができた。写真6 シュートがきまった。

【全体考察】

本題材では、人をとらえることが優位なa児と場をとらえることが優位なb児が、場が変化したことや友達の声かけや動きを見たことによってボールを投げる動きを身に付けることができるように活動を進めていった。考察2からわかるように、攻守分離型から攻守混合型へ向かうゲームのなかで個に応じたポジションやペアリングを行うことで、場をとらえるのが優位な子ども、人をとらえるのが優位な子どもそれぞれに自ら動きを判断して発揮することができたことがわかる。これは、個に応じて意図的に声かけができるペアを組んだりネットや仕切りを変化させることで状況をつくりだしたことが動きを身に付けることへとつながったからである。また、場をとらえるのが優位な子どもについては、場の変化から友達へ意識が生まれ、動きを発揮することができたこと、人をとらえるのが優位な子どもは、場の変化による友達の動きの変化から場を意識しながら動きを発揮することができた。これは、どちらか優位なとらえだけでなく、優位なとらえをいかすことでもう一方のとらえも意識させることができたという点でも価値があったと考える。課題は、より攻守混合型へ近づくゲームでの子ども優位性をいかしたゲームを行っていくことである。

帰国子女教育の〈ふくおかプラン〉

I 自信と誇りをはぐくむ帰国子女教育

1 帰国子女教育での学ぶことと生きること

国際社会における日本人の活躍の場の拡大により、海外在留をする人が増えている。このような状況の中で、帰国子女は、滞在国において、その国の文化の一端に触れる貴重な体験をしている。その一方で、海外滞在中も日本の教育の重要性が認識され、補習校など海外で日本の教育を受けることができる機会も増えてきている。このため、帰国児童が日本の学校に不応適を起こすという状況は改善されてきている。しかし、日本と異なる文化やカリキュラムの中で成長してきた子どもたちの学習上、生活上の課題や心理的不安が解消されたわけではなく、以下のような状況が現存していることも事実である。

- ① 海外在留の期間、年齢等の多様化や、滞在国の広域化により、適応課題が個別化している。
- ② 未習の内容がある、学習で用いられる言葉がわからない、違った意味でとらえているなどの学習上の課題が見られる。
- ③ 日本語での会話がうまくできない、社会生活のシステムの違いから適切な行動ができないなどの生活上の課題が見られる。
- ④ 海外生活経験の中で身に付けてきた特性を生かせる将来の進路に対する強い願いがある。

以上のことから、日本の学校や生活への適応を図りながらも、海外での体験や身に付けてきた能力を伸ばし、生かしていくことが必要である。このことによって、国際社会の中で生かされる帰国子女としての自分の特性に対する自信と誇りをはぐくんでいけると考える。

2 帰国子女教育部主題についての説明

自信と誇りをはぐくむと帰国子女教育とは、 自分の夢や希望に向かって生き抜く力の基礎・基本となる各教科等で培う実体的な学力（知識、技能など）や機能的な学力（見方・考え方、表現力など）といった力を確実に身に付け、海外での生活経験をもつという特性を肯定的にとらえ、それらを進んで伸ばそうとする意欲をはぐくむことである。そのためには、帰国児童が滞在国での学習や生活を通して学び、身に付けてきた能力を把握し、日本での学習や生活の違いを克服していく。そして、帰国子女としての特性の保持、伸長のために、異なる文化・習慣の中で身に付けていた見方・考え方・感じ方を発揮しながら、新たな見方・考え方・感じ方をつくり出していけるような内容構成を行っていく。このようにして、帰国児童の実態に即したカリキュラムを構想していくことが大切である。

- 滞在国で身に付けた言葉や習慣などをもとに、日本や諸外国の生活・文化を理解・共感するとともに、新たな見方・考え方・感じ方をつくり出しながら、様々な人々と相互理解を深めていく子ども（学ぶ意義）
- 言語や数学、国土に対する考え方を身に付け、様々な立場から、日本と外国の違いや共通点を見つめ、相互に理解し共存・共生していくための新たな考えや生活の仕方をつくり出す子ども（能力）
- 自分のよさや課題をとらえ、特性を生かしながら自信や誇りを高める子ども（自信）

【表 自信と誇りをはぐくむための帰国子女教育の基礎基本】

学ぶ意義			
- 日本の生活・文化を理解し、受容していくことができる。 - 日本と諸外国との生活・文化の共通点や差異点に気づき、それぞれのよさをもとに、新たな見方・考え方・感じ方をつくり出すことができる。 - いろいろな考えをもつ人と互いの考えを理解し合い、よさを認め合うことができる。			
能力	A 学力 実体的学力	観 点 知識・技能	各教科・領域において使われる必要な知識や技能を体験をもとにとらえることができる。
	B 学力 機能的学力	多面的な見方・考え方	自分をもつ経験（知識や技能）と得られた事実を関係づけながら、一つの事象を様々な視点でとらえていくことができる。
		総合表現力	目的意識や相手意識、状況意識をもち、自分の意図に応じて効果的な表現媒体や方法を選択しながら自分の考えを表現することができる。
		コミュニケーション力	自他の目的に応じて、異なる言語・文化をもつ人とも自分や相手の立場を明確にしながら意思の疎通を行うことができる。
自信	- 滞在国で身に付けた言葉や習慣を生かすことができることで自信をもつ。 - 学習の中で身に付けた知識や技能をもとに、新たな見方や考え方をつくり出していくことができることへの自信をもつ。 - 諸外国の文化を理解・共感していくことができることへの誇りをもつ。		

Ⅱ 帰国子女教育における教育課程の編成

帰国子女教育部

1 帰国子女教育における教育課程の考え方

帰国子女教育でめざす子どもをはぐくむために、児童の実情に応じたカリキュラムを構想していくことが必要となる。そこで、帰国子女学級では、滞在国の文化やカリキュラムの共通点や差異点、内容の系統性、学習活動等を考慮し、学習、生活への適応、帰国子女としての特性を伸ばすといったことから次のように考える。①海外との違いが少なく、学習活動への適応がしやすい音楽科、図画工作科、体育科、理科については通常の学級のカリキュラムで行う。②カリキュラムや文化の違いが大きく、適応が難しい国語科、社会科、算数科、については、発達段階を考慮しながら、学年別の独自のカリキュラムで行う。③滞在国と日本の文化や生活習慣の違いを見つめ、それぞれのよさをとり入れていくといった点から総合的な学習の時間（国際交流タイム）、道徳、学級活動については、帰国子女学級全体でカリキュラムを考える。このとき、②、③については、以下のような点からカリキュラムを構想する。

● 学習適応の面から

①子どもの実態に応じてことばの獲得をめざすことができるように、「読むこと」「書くこと」の内容を重点化した国語科の個別カリキュラム、②未習内容の補充と既得事項の整理を念頭に置いた算数科の個別カリキュラム、③社会生活の基礎知識という視点から構成した社会科の個別カリキュラムを構想していく。

● 生活適応と特性伸長の面から

①国際社会に生きる子どもの育成をめざし、子どもたちが将来出会うであろう4つの視点（文化理解、相互依存関係、グローバル・イシュー、共生）から学習内容を設定する国際交流タイムのカリキュラム、②海外と日本での生活習慣の違いを踏まえながら社会集団の形成を図る道徳や学級活動のカリキュラムを構想していく。

2 帰国子女教育における教育課程編成の手順

帰国児童が日本の学校生活・社会生活を行っていく上で必要な力を確実に身につけていくために、それぞれの側面から以下のようにして学習プランを構想していく。

(1) 教科の学習プラン

系統的な学習により内容の獲得を図る算数科、内容のくり返しや段階的な高まりを図っていく国語科社会科で

【表 算数科指導内容表（一部抜粋）】

	1	2	3	4	5	6
面積	面積の単位(c㎡)を知る。	正方形や長方形の面積の求め方	面積の単位(m ² 、km ²)と単位関係	平行四辺形、三角形の面積の求め方	台形、ひし形の面積の求め方	円の面積の求め方

は、年間指導計画の作成を行うために、まず、各教科でめざす子どもの姿を設定し、それぞれの領域における指導内容を知識面から段階的にまとめた指導内容表を作成する。そして、児童がどの段階にあるのかを実態調査から把握することで、計画を具体化していく。そのために、以下のような手順を踏んでいく。①海外での学習経験を指導内容表より未習内容と既習内容を明らかにする。②その教科の内容を系統性や関連性に注意しながら配列する。③卒業までの日数を考え、軽重をつけながら配当時間を決定していく。

次に、単元の具体的な構想と1単位時間の計画を子どもの実態に即して行っていく。そのために、子どもが現在培ってきている学力をもとに、各教科ごとに伸ばしたい学力を重点化することで学習状況を正確に評価できるようにしていく。

そして、本年度行った指導計画を学習内容の定着度や子どもの能力との適合性の面から見直していく。見直す主な視点としては、①国語科・算数科の内容習得が効果的に行われる学習内容の重点化と配列がなされていたか。②社会認識の深まりが得られる学習内容の重点化や追究対象の選定がなされていたかということである。

(2) 国際交流タイムや学級活動の学習プラン

国際交流タイムの単元づくりでは、①海外生活を行う中で身につけてきた知識、見方・考え方などをさらに深めることができること②滞在国と日本というように2つ以上の国の文化や生活習慣について比較・追究していく活動があること③異文化についての理解を深め、日本の文化のよさと外国の文化のよさを共に受容していくことが可能なことという3つの条件から吟味していくようにする。また、このようにして設定した単元を4、5、6年生合同という形態で学習していくために、同じ内容が重複することがないように3年間で1サイクルとした年間指導計画を作成していくようにする。

学級活動については、生活適応の面からは日本における集団生活の基礎となる題材を中心に取って年間指導計画を作成していく。また、活動を展開していく際には、海外と日本の生活習慣の違いや共通性に気づくように配慮しながら望ましい集団づくりを考えられるようにすることで、海外での生活経験をできるだけ生かせるように計画していき、特性の伸長を図れるようにしていく。

そして、本年度行った指導内容を次の視点から見直していく。①子どもの生活現実にあった単元であり、子ども自身の手で追究可能であったか。②帰国子女としての特性を伸ばした姿を見ることができたか。

帰国子女教育算数科学習の〈ふくおかプラン〉

I 数量や図形の意味理解を確かにする算数科学習

1 算数科での学ぶことと自信と誇り

帰国児童は特に、日本と滞在国におけるカリキュラムの相違により学習していない内容があったり指導法の違いにより意味の理解を伴わずに形式だけをとりえていたりということがある。また、算数科の用語や記号を滞在国の表し方でとらえていることもある。そのために、日本での学習に違和感を感じ、使われている用語や記号の意味がわからないままになってしまいがちになり、学習への不適応が起こってくる。これらのことから、帰国児童に日本での算数の数量や図形の用語や記号などについての理解を図り、算数の学習に自らの力で参加できるようにしていくことが、自己を取り戻し、自信と誇りをはぐくむことになると考える。そのためには、子どもの既有的経験を把握し、未習部分を補いつつ、新たな内容を身に付けていくように学習を進める必要がある。特に、算数科は系統性が強く、既有的経験によってできる学習が限られてくる。また、新たな内容を学習していく際には、身に付けた既習の知識や技能が活用できるようになっている必要がある。これらのことから、帰国子女教育算数科では、算数的活動を通して数量や図形についての知識や技能を確実に身に付けていくことで、日本の算数科の学習を進めることに自信をもち、アイデンティティを確立することにつながると思う。

2 算数科部主題についての説明

数量や図形の意味理解を確かにするとは、算数で用いられる数量や図形の用語や記号、性質などが表していることや大きさ、用い方をとらえ、それらを必要に応じて

用いることができるようになることである。算数科の学習を進めるなかで、自分の考えに既習内容や調べたことから根拠をもったり自分の考えを整理して表現することが大切になる。その場合に、数量や図形の意味の理解の程度によって、表現できる内容もかわってくる。ここの理解の程度とは、次のようになっていると考える。

- ①表面的理解…数量や図形を直感的にとらえた表面的な知識をもっている。
- ②形式的理解…数量や図形の用語や記号などの表している形式的な知識をもっている。
- ③関係的理解…数量や図形の用語や記号などの関係をとらえた知識をもっている。

これらは、それぞれ段階的に高められていくものと考えている。そして、とらえた数量や図形の用語や記号、性質などを違う場面や違った状況にあてはめたり、活用できるようになることで、子どもの「できる」「わかる」といった心情をはぐくむことになるのである。

数量や図形の意味理解を確かにする帰国子女算数科学習とは、数量や図形についての用語や記号、性質などについての理解を高め、必要に応じて使うことができるようにする学習である。

- 日本の算数の学習に参加していくための力を身に付けていくことができる。 (学ぶ意義)
- 算数で用いる言葉、記号などの意味をとらえ、表現方法を駆使しながら考えを表すことができる。 (能力)
- 自分の力で算数の学習を進め「できる」「わかる」ことを増やしていくことができることへの自信を持つことができる。 (自信)

【表 自信と誇りをはぐくむための算数科の基礎基本】

滞在国で身につけた算数の内容をもとに、日本での算数文化を理解するとともに、新たな見方・考え方を創り出していくことができる。						
		学ぶ意義				
能力	実体的 学 力	観 点		理解の程度 ← 低い → 高い		
		数学的な知識・技能		数量や図形などについての言葉や記号について知っている。	数量や図形などについての言葉や記号の意味がわかり、用いることができる。	数量や図形などの言葉や記号の意味がわかり、適切に用いることができる。
	機能的 学 力	数理を理解する力	事象分析力	一つの事象について、数量や図形を取り出すことができる。	自分のもつ知識をもとに、事象から数量や図形を取り出すことができる。	自分のもつ既有的経験をもとに事象から取り出した数量や図形の表していることをとらえることができる。
			関係把握力	得られた事実にもとづいて、一つの事象をとらえていくことができる。	得られた事実にもとづいて、他の知識と関係づけていくことができる。	他の知識と得られた事実とを関係づけていくことができる。
	力		数理を応用する力	数学的表現技能	記号、図などを使いながら表現する。	記号、図などを使って表現する。
				算数の言葉や記号などを用いて表したり、説明したりする。	算数の言葉や記号などを用いて表したり説明したり聞いたりする。	目的に応じて、算数の言葉や記号などを用いて、意思の疎通を行うことができる。
自信	算数科の学習を通して身につけた知識や技能をもとに、安心感、安定感をもち、日本での算数科の学習を進めていくことへの自信をはぐくむ。					

Ⅱ 理解力に応じた学習展開を取り入れた学習プラン

帰国子女教育算数科部 澤 村 重 則

1 副主題の意味

子どもの理解力とは、事象に含まれる数量や図形の表していることをとらえたり、それらを操作するために必要なことを関係づけたりすることである。子どもは活動のなかで事象に含まれる数量や図形に既知の知識や技能をもとに働きかけたり問題を解決したりしていく。そのとき、具体物を使って、あるいは念頭で対象を観察したり変化させたりしていく。子どものなかには、具体物や半具体物などを用いて、それらを移動させたり、変えたりしながら対象を見たり思考したりしていく場合がある。また、そのような具体物や半具体物を念頭において頭の中で動かしてみたり変化させたりしていく場合もある。これらは、子どもが既知の知識や技能として持っているものと関係づけて見ることができるとそうでない場合では、子どもの活動の進み具合も変わってくる。関係づけて見られる場合にはそれら既知の知識や技能を活用していくような場の設定が必要になる。また、もっていない場合には、体験として子どもにもたせることが必要になる。そして、それを具体化していくことによって、学習内容の理解へとつなげていくのである。

このような理解力に応じた学習展開を取り入れた学習プランとは子どもが学習活動を進めていく過程に、それぞれの理解力に合わせて具体物や半具体物を提示し、操作したり形式に沿って自分で操作したりしながら、対象を探索したり考えを表現したりしながら子どもの意味理解を確かにしていく学習である。

2 学習プランの具体的構想

● 子どもの理解力に応じるための準備

- ① 知識、技能が少なかったり関係づけが困難であったりする場合
 - 対象となる数量や図形の具体物や半具体物を準備する。
 - 対象となる数量や図形についての理解の段階を分析し、手順をふみながら活動を進める。

- ② 既知の経験との関係づけが可能となっている場合
 - 対象についての既知の経験が呼び起こされるような対象を準備する。
 - 自分の既知の知識や技能を生かして活動するための操作の対象を準備する。

● 子どもの理解力に応じるための活動構成

具体的には「対象に出会う」「対象を探索をする」「成果を発信する」という3つの段階を設定し、次のような過程をとる。

- ① 対象に出会う段階

子どもに対象についての知識や扱った体験がない場合には今体験していることを具体的な形にしたり、ある場合にはそれらを想起させたりして、探索のための素地をつくる段階である。
- ② 対象を探索する段階

対象を観察し、比較したり特徴づけたり整理したりしていく段階である。
- ③ 成果を発信する段階

探索の結果を使いこなしていく段階である。ここでは、具体物や操作したものなどを使ったり相手を意識してわかりやすく伝えたりすることを目的とする。

● 学習活動を進めるための個に応じた支援

- ① 個に応じる段階的指導

数量や図形について子どもが理解していく過程を分析し、既知の経験の違いや理解の仕方の違いをとらえ、それぞれに応じた活動を展開していく。特に、具体的に1つ1つの事項を確かめながら進めていく必要がある場合や、言葉による表現が難しい具体物による表現が必要な場合には、具体物や半具体物などを用いながら、1つの対象について手順をふみながら活動が進めていけるようにする。
- ② 言葉による支援

数量や図形を操作するとき、操作の仕方について助言したり操作していることの理由について問うたりしながら活動を進めさせるようにする。

【表 子どもの理解力に応じる基本的活動構成】

	出会う段階	探索する段階	表現する段階
学習活動と内容	1 事象の中から数量や図形を取り出し、目的をもつ。 観察・操作活動 出合った対象に含まれる数量や図形を操作し、体験する。 ○ 対象についての知識を整理し、調べる内容を明確にすること 数量や図形を操作したりつくり出したりする。 ○ 探索の目的をもつこと	2 対象に働きかけながら調べる。 観察、比較、記号化活動 対象を段階的に調べたり新たな対象を調べたりする。 ○ 調べたり比較したりしたことを言葉や記号に置き換えること 対象について調べ、まとめる。 ○ 対象について知っていることに根拠をもったり言葉や記号で表したりすること	3 これまでにつかんだ数理を使って、つくる。 表現、創作活動 探索してきたことを表現物としてまとめたり新たなものをつくる。 ○ 調べたことから新たなものをつくり出し、できるようになった自分を実感すること
手だて	※ 具体的に操作できる数量や図形の提示 ※ 操作したことを言葉で表現する場の設定	※ 操作したことが残るような学習ノートの提示 ※ 操作したことを言葉化、記号化する支援	※ つかんだ数理を発表するための場づくり ※ 達成感・有用感への支援

3 指導の実際

第5学年 単元

面積取りゲームをしよう

(1) 題材の目標

- ＜N・K児，T e・Y児，N・H児＞Aグループ
- 円の面積を求める公式を知り，いろいろな大きさや区切られた円にあてはめながら求積できる。
- ＜S・T児，T a・Y児＞Bグループ
- 円の面積を求める公式を知り，面積取りゲームに使う円を分割したり円の一部を使ったりした図形をつくり出すことができる。

(3) 学習の流れと考察

第1次：1～2／6時

面積取りゲームをして，円の面積の近似値を求め，計算で求めるための必要な長さを見つけ出す課題をもつ。

＜Aグループ＞

- (1) 周りが20cmの図形を使って面積をとるゲームをし，自分のとった図形の面積を求める。

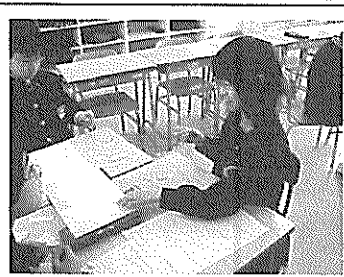


写真1 ゲームをするN・F児と終わったときの様子

- (2) 方眼を使ったり既習の図形に分割したりして，円の面積の近似値を求める。
- (3) 周りの長さが40cmの図形を使って面積取りゲームをし，円の面積の求め方についての課題をもつ。

＜Bグループ＞

- (1) 長さが20cmの線を使って，形をつくりながら面積をとるゲームをし，どんな形がたくさん面積をとれるか話し合う。
- (2) 長さが40cmの線を使って面積取りゲームをし，円の面積の求め方についての課題をもつ。

第2次：3～4／6時

円の求め方について調べ，つくった円の面積の求め方を話し合い，円の面積を求める式をつくり出す。

(2) 題材の考え方

本単元は，円の面積を半径との関係でとらえ，式化したりそれを用いて面積を求めることができるようにすることをねらいとしている。具体的には次のようなことがねらいとなる。①円の面積を変形しながら求めること，②円の半径と面積との関係をとらえること，③円の半径と面積の関係の式を用いることなどである。特に，面積を半径との関係でとらえるためには，変形による操作が必要となる。しかし，変形にあたって，円では曲線部分ができるために理想的に見る必要がある。そのため，子どもの円の面積についてもっている知識や理解力から2つのグループに分けて，探求の活動を進めていく。また，周りの長さを決めて面積を比べた場合，面積が一番広くなるのは円である。このことを利用して，周りの長さが等しい図形を使ったり周りの長さが等しい図形をつくり出しながら，面積をとって勝ち負けを競うゲームを仕組む。

第1次は，周りの長さが等しい図形による面積取りゲームを仕組み，円の面積について探求していく目的や知識の整理をし，課題をもたせるようにした。

AグループのN・F児は，まず周りの長さが20cmの長方形や正方形，平行四辺形，円を使って面積取りゲームをした。このなかで，円の面積がわからないことから既習の曲線図形の求め方をあてはめ，方眼シートをのせて方眼の数を数えたり既習の図形に円を分割して計算したりしながら近似値を求めた。そのことから，円が一番面積が大きくなることに気づき，周りの長さが40cmの図形の面積取りでは，最初に円を使って面積を取っていった。しかし，方眼シートをのせて数えたり既習図形に分割して計算することに面倒さを感じ，もっと簡単に面積を求める方法を見つけることを課題としてもった。BグループのS・T児は，20cmの線を使って図形をつくりながら面積取りゲームをした。このなかで，円が一番面積がとれそうなことを求積公式から見つけていった。そこで，求積公式を使って出てきた値が正しいかどうかを既習の方眼を使ったりいくつかの図形に分割して計算したりする方法を使って近似値を出して確かめた。そして，どうして円の面積が半径から出せるのか調べることを課題としてもった。

考察1

N・F児は，円の面積の求め方を課題としてもった。これは，円を含んだ図形による面積取りゲームを設定し，円を使うことで既習のやり方の不十分さに気づいたことによると考える。また，円の面積の公式を知っているS・T児は，円の面積と半径との関係に目が向いていった。これは，自分で図形をつくり出しながら面積をとるゲームをすることで，知っている面積の公式をふり返ることができたからだと考える。

第2次では，円を16等分したおうぎ形を使って，変形操作をし，変形した図形の求積に必要な長さから求積公式をつくり出したり確かめたりできるようにした。まず，これまでの平行四辺形や三角形などの面積を求めるのに必要な部分を

<共通>

変形への見通しをもつ。



図1 おうぎ形を並べた平行四辺形

<Aグループ>

- (1) 円を半径で16等分したものを並べ変形する。
- (2) 変形した図形の面積を求めるのに必要な長さを計算し、円の面積を求める。
- (3) 円の面積を求める式をつくり出す

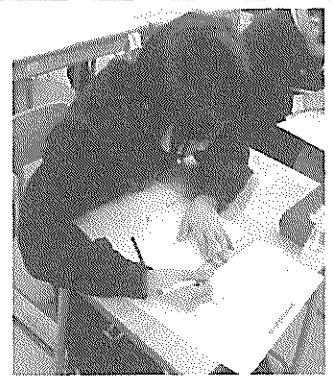


写真2 変形した形に線を引く

<Bグループ>

- (1) 円を半径で16等分したものを並べて変形し、面積を求めるのに必要な長さを取り出す。

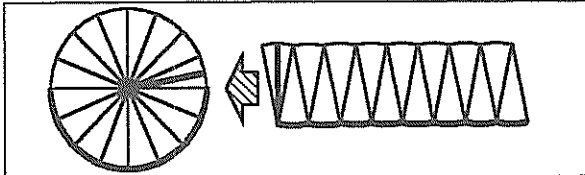


図2 変形した図形に線を引きもとに戻した図

- (2) 円の面積を求める式を言葉で表す。
- (3) 円の面積を求める式をつくり出す。

第3次：5～6 / 6時

面積取りゲームの周りの長さのルールを40cm以内として図形をつくり、ゲームをする。

<Aグループ>

- (1) 周りの長さが40cm以内のいろいろな大きさの円をつくり、面積取りゲームをする。
- (2) 円を使ったいろいろな図形を使って、ゲームをする。

<Bグループ>

- (1) 周りの長さが40cm以内の円を使ったいろいろな図形をつくる。

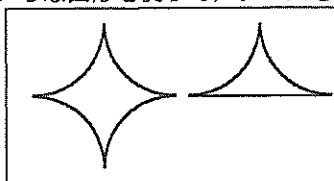


図3 S・T児がつくった図形

- (2) つくった図形を使って、ゲームをする。

見つけるために変形したことをもとに、円を16等分したおうぎ形4枚を使って並べた。その結果、図1左のように4枚を交互に向きを変えて並べるにより平行四辺形のような形をつくり出した。S・T児は、残りの12枚を並べて、平行四辺形に見立て、底辺と高さが円の半径と円周の半分になることを見つけていた。そして、円の面積を出すために円周の半分の計算し、面積を求めた。ここで、円の面積を出すために使ったところを言葉で表す助言を受けて、円の面積を求める式を1つにし、「半径」を用いて言葉の式に表していった。N・F児は、残りの12枚を平行四辺形のように並べた。ここで図2のように変形した平行四辺形の底辺と高さにあたる場所に線を引く、もとの形へもどす操作により、高さが「半径」にあたり、底辺が「円周の半分」になることに気づいた。そして、それを計算し、面積を出した。面積が出たところで、使った長さが円のどこかを確かめながら言葉に置き換えていった。

考察2

子どもたちは、図1の右のように並べ、平行四辺形に変形することができた。これは、まず円を16等分したおうぎ形を4枚使って並べ、変形への見通しをもたせたことによるものと考えられる。その後S・T児は、 $(\text{円周}) \div 2 \times (\text{半径})$ という言葉の式に表し、円周を求める式から円の面積が半径と円周率から求められることを見つけていった。N・F児も円の面積が半径と円周率で求められることをとらえていった。これは、平行四辺形への変形、面積を求めるのに必要なところに線を引く、それをもとに戻す。底辺と高さを円の言葉で表す。円周を半径と円周率で置き換える。これらの操作を1つ1つ順番に行わせることによってとらえることができたと考えられる。

第3次は、円の面積の公式を使いこなすことをねらいとして、自分で形をつくりながら、面積取りゲームを行わせた。このとき、円を使ってとった残りの面積はどれくらいになるかを考えさせ、新たな図形をつくらせるために、ルールを周りの長さが40cm以内に変更して、図形づくりをしていった。このとき、S・T児は、図3のように正方形から円の部分を切り取った形をつくり出していた。N・F児は、いろいろな大きさの円をつくっていった。そして、それぞれに円の面積の公式を用い、面積を求めていった。

考察3

S・T児は図3のような円を使った図形を自らつくり出したり、N・F児はいろいろな大きさの円をつくっていったりした。これは、円を使って面積を取った後の残りの部分に目を向けさせたことによると考える。

【全体考察】

本単元では、子どもたちのもっている知識と数理を見つけ出していくときの理解の仕方によって、グループをつくりそれぞれに応じた面積取りゲームを仕組んだ。このとき、図形の周りの長さになる線だけを与えて、図形をつくりながらゲームをする場を設定することで、S・T児が行ったように自ら円の面積を目を向け、半径との関係を課題とすることができた。また、N・F児のように円を取り入れたゲームをすることで、円の面積の求め方がわからないことに気づき、面積の求め方を課題としてもつことができた。「対象を探求する」段階においては、N・F児やS・T児のように、円の面積が半径と円周率で計算できることを見つけていった。これは、それぞれのグループの実態に合わせて円の面積の探求活動を行わせたことによると考える。特に、N・F児では、既習の方法を段階的に示していきながら、1つ1つ手順をふんで活動を進めたことが理解へとつながったと考える。さらに、Aグループのように、円を使った図形を自分たちでつくり出していたり、Bグループではそれを使ったりすることで理解を確かにしていったと考える。

帰国子女教育社会科学学習の〈ふくおかプラン〉

I 社会的事象についての知識を獲得する社会科学学習

1 社会科での学ぶことと生きること

帰国児童は、学習カリキュラムや言語や生活スタイルの違いのため、未習の内容があったり経験が不足していたりする場合があり、帰国後、学年相応の社会科学学習に適応することが難しいという課題を抱えている。このことは、日本での学校生活への適応だけでなく、十分な社会生活も難しいということにもつながり、本人や保護者にとっては、大きな不安にもなっている。そのため、帰国児童は、まず日本で生活していくことができる力を身に付けることが必要である。そこで社会科では、未習や理解が不十分な内容を補充しながら、当該学年の学習内容を確実に身に付けさせることで、学習適応と学力保障の立場から学習を構成していく。このことは、帰国児童が日本での学校生活や社会生活に希望をもち、自信をもって生活できることにつながり、このような姿を目指すことが、帰国子女教育における社会科の役割なのである。

2 社会科部主題についての説明

社会的事象とは、社会科学学習で子どもたちが追究していく対象であり、社会生活を構成するものや人やこと、さらにはそれらが関係し合っている事柄である。社会的事象についての知識とは、社会科学学習の中で事象を追究していく過程で得られる情報である。つまり社会生活について理解していく過程で身に付けていくものである。この知識には、①事象の存在そのものの知識②事象の目的や手段や過程などを分析した知識③事象間の因果関係をつかんだ知識があり、それぞれ独自の追究をした結果

得られる知識であり、①→③においてとらえるために基礎として必要な知識は増加していく。そこで社会的事象についての知識を獲得するとは、個々のこれまでに身に付いている知識の実態に合わせて、さらに新しい知識を身に付けていくことである。具体的には、既有的知識が、①断片的で漠然としている場合は、まずは知識量を増やすことに重点をおき、存在そのものの知識を②事象の存在は知っているという程度の場合は、具体的に事象を分析する知識を③ある程度事象の概要をつかんでいる場合は、事象の原因と結果の関係を解明する因果関係の知識をそれぞれ主な知識として扱い、身に付けていく。社会的事象についての知識を獲得する社会科学学習とは、自己の知識の実態に応じて、新たな知識を身に付けていく子どもをはぐくむために、個々の既有的知識を中心として社会体験の経験や日本語能力などを含めた、個の実態に合わせた追究活動を展開する学習である。そのためには、個の実態に応じて個別につくられた学習計画をもとに学習が展開される必要がある。以上のことから、次のような子どもの姿を目指す。

- よりよい社会生活を送りたいという願いのもとに、学習に意欲的に取り組み、日本社会を構成している社会的事象について理解を深める子ども（学ぶ意義）
- 日本での社会生活を送るために、様々な社会的事象について実態に応じた追究を行い、必要な知識を身に付けていく子ども（能力）
- 社会科学学習を通して、「また一つ日本のことについて詳しくなれた」と実感し、日本での学習や社会生活に自信を高めていく子ども（自信）

【表1 豊かに生きる子どもをはぐくむための社会科の基礎基本】

社会科を学ぶ意義			
日本で豊かに生きていきたいという強い願いをもっているにもかかわらず、学習カリキュラムや日本語能力の違いにより社会科学学習に適応できない子どもたちに、その実態に応じた学習指導を行うことで、「できた」「わかった」経験を味わわせ、学習適応を図ることができる。そして、その結果として、社会的事象についての知識が増え、子どもたちが日本での生活に親しんでいけるアイデンティティの確立へとつながっていくと考える。			
能力	観点	断片的で漠然 ◀ 社会科学学習内容の既有的知識の様子 ▶ 事象の概要をつかんでいる	
	知識理解	社会的事象を構成している事実について基本的な意味を理解しており、自分とのかかわりでとらえている。	社会的事象そのものの意味を理解しており、自分や身のまわりとのかかわりでとらえている。
力	技能表現	資料を正しく読み取り、調べたことを具体的に表現している。	資料から必要な情報を収集し、調べたことを相手に伝えるように表現している。
	思考判断力	調べたことをもとに、社会的事象の全体的なイメージをつくっている。	事象の共通点や相違点をとらえ、社会的事象の目的や構造などについて考えている。
自信	社会科学学習全体を通して、自己の中に学習した社会的事象についての概念を形成する活動を位置づけ、一人一人に「できた」「わかった」という実感を味わわせることで、身に付いた知識が増えたことを自覚させ、日本での学校生活や社会生活を送っていくことに対しての自信をはぐくむことができる。		

Ⅱ 個の実態をもとに作成した個別カリキュラムをいかした社会科学学習プラン

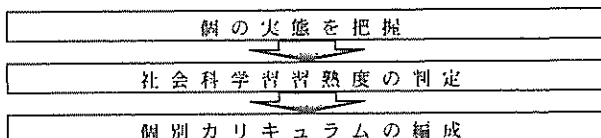
帰国子女教育社会科部 高 良 祐 治

1 副主題の意味

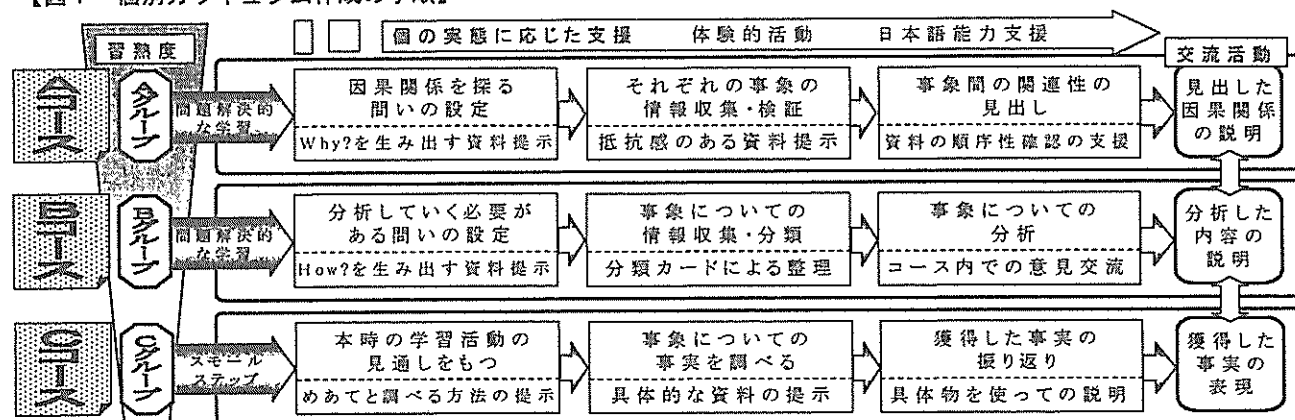
個の実態とは、一人一人の習熟の状況に応じた学習を展開するために把握しておくべき、海外での社会科関連学習経験、帰国後の社会科学学習経験、これまでの社会科学学習内容の知識の様子、社会科学学習の技能、社会体験、日本語能力といった視点から見た一人一人の現在の様子である。個の実態をもとに作成した個別カリキュラムをいかした社会科学学習プランとは、個の実態の中でも、特に知識の実態から見た習熟度をもとに、新たな知識獲得ができるように個別に学習計画を構成し、その他の実態からの支援を取り入れながら展開する学習の過程である。このプランを実施するためには、単元、学年、卒業までを見通し、計画的に知識を身に付けさせる個別に構成されたカリキュラムを作成することが必要である。

2 個別カリキュラムの作成

個別カリキュラムを作成するためには、個の実態の中でも、これまでに学習してきた社会科学の知識がどの程度あるのか、つまり社会科学学習習熟度を踏まえて編成していくことが必要となってくる。そこで、図1のような手順をとる。①個の実態把握は、個別の聞き取り調査や日頃の学習の様子を観察することで、各内容の未習・既習を把握しておく。②学習習熟度の判定は、まず、各単元で習得される知識を割り出し、それらを基礎的な内容から3段階に設定することで指導内容表を作成する。次に、この指導内容表と個の実態把握をもとに、単元ごとの習熟度を判定する。そして、この判定をもとに、ある程度学習内容の概要をつかんでいるAグループ、表面上は概要をつかんでいるBグループ、断片的で漠然としているCグループに分ける。③個別カリキュラムの編成



【図1 個別カリキュラム作成の手順】



【図2 習熟度によるコース別学習を位置付けた学習展開】

は、まず、学習習熟度の判定と指導内容表をもとに、今後学習していく単元でどこまでの知識獲得を目指すのかを明確にし、各単元の3つのコースを設定する。さらに、それぞれの単元の系統性や関連性を考慮しながら、未習などにより習熟が不十分な内容の補充計画を立てる。以上の過程を通して、個別カリキュラムを作成していく。

3 学習プランの具体的構想

● 問いを分類したコース別学習展開

各コースが設定した知識を獲得できる問いを設定する。

【表2 獲得する知識に合わせた問いの分類】

獲得する知識	獲得する知識に合わせた問い
存在そのもの	時、場所、人、個別的事象などの情報を求める問い
分析	事象の構造、過程、手段、方法、目的などの関係を明らかにする問い
因果関係	結果を示してその原因を求める問い

● 個の実態に応じた学習展開の工夫

各コースが、設定した知識を獲得することができるように、問題解決的な学習を展開するA・Bコースは、単元全体を貫く学習問題も毎時の問いも、それぞれ因果関係のとらえ（Aコース）事象についての分析（Bコース）を主にしたものにする。また、スモールステップで学習を展開するCコースは、体験的活動を十分に取り入れることで、追究意欲を持続させるように配慮する。そこで、図2のようなコース別の学習活動を設定し、展開する。

● 評価およびカリキュラムの更新

個々の学習理解の様子を常に把握し、不十分な部分は補充指導を行っていく。また、単元を終えて、補充できたかどうか内容を整理し、残りの単元のどの部分で補充できるか検討し、個別カリキュラムの更新を行う。

3 指導の実際

第5学年 小単元

目指せ!森林博士

(1) 小単元の目標

- 1 森林に関心をもち、見学や実験や森林保護育成に従事している人々との交流などの体験的活動を通して、森林と生活との関係を考えることができる。
- 2 森林資源について、(Aコース)森林と人々の生活との関連 (Bコース)森林保護育成に取り組む人々の工夫 (Cコース)森林保護育成の様子やそれに取り組む人々の様子、を中心にとらえることができる。

(3) 学習の流れと考察

第1次：1～4/9時 森林の機能を調べ、森林保護育成の様子を追う問いをつくる (A, Bコース)。毎時間段階的な問いを設定し、森林の機能について調べる。

Aコース	Bコース	Cコース
問いを設定するために、①森林の見学②森林の機能を調べる実験③森林ボランティアの活動の紹介を行った。 因さんのような森林を育てる専門家がいるのに、なぜ、たくさんのふつうの人たち(一般市民)が、森林の急なしや面で作業をしているのだろうか。危ないし、きついと思う。きっと農業のように働く人が足りないからだと思う。 資料1 a児の問題意識 a児の反応から、次のような学習問題を設定した。 どうしてここまでして一般の人たちも森林を育てているのだろうか。 資料2 Aコースの学習問題	問いを設定するために、①森林の見学②森林の機能を調べる実験③荒廃林と健康な森林の比較を行った。 因さんの森林は、緑が多く元気だけど、もう一つの森林は、根が見えていて土が流されている。これでは森林の役割はだめになってしまう。森林を守ることは大切なことだな。 資料3 森林を守ることの大切さへの気づき このことをもとに、次のような学習問題を設定した。 大切な森林は、どのようにして守られているのだろうか。 資料4 Bコースの学習問題	「森林の様子やどんな人が働いているか調べよう。」 →「森林の役割を調べよう。」という問いを設定し、見学や実験を行った。 写真1 森林の土は水をためることができるね 日本の森林は広いです。森林でないと広いと思っていました。実験で、森林は水をきれいにしたり安全にしたりすることがわかりました。また、きれいな空気にします。動物が安心できます。そして家や道具をつくるために木を使っています。もっと森林のことを知りたいです。 資料5 森林の機能を調べたc児の感想

考察1

Aコースでは、資料1から森林保護育成に市民も参加している理由を追う問いを、Bコースでは、資料3をきっかけに森林保護育成の様子を調べていく問いをもたせることができた。このような学習問題をもたせることができたのは、Aコースは意外性のある資料を、Bコースは健康な森林と荒廃林という違いが明確な比較資料を提示したことが有効であったからだと考える。Cコースは、森林のもつ様々な機能をとらえさせることができた。これは、森林を見学させたことや、森林の機能を様々な実験を通して、段階的にとらえさせたことが、五感を通して森林の様子や森林の役割をとらえることに有効に働いただけでなく、c児にとって負担となる日本語能力を支援する上でも有効であったからだと考える。

第2次：5～8/9時 森林の保護育成の様子について調べる。

Aコース	Bコース	Cコース
森林ボランティアの活動理由を探ることで、森林の現状や守る必要性をとらえ 図1 福岡県の森林を育てる人の数 資料6 林業従事者の変化	第2次では、森林保護育成に取り組む人々の様子をとらえること 写真2 因さん教えてください	森林保護育成の様子を具体的にとらえるために、①道具②森林育成手順③森林ボランティアの活動の順で調べさせた。まず道具については、因さんと交流しながら使ってみることで、その役割をとらえさせた。そ

メ モ

お わ り に

「人間力」の育成、学習指導要領の全面的な見直し、学校の自己評価や目標管理等、教育課題が山積するなか、各学校は、主体的にそれぞれの学校教育目標をめざす「特色ある教育」を展開しなければなりません。

本校では、今日の教育課題に対応すべき新たな教育の在り方を求めて、「豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造」の研究主題のもと、教育研究と実践を積み重ねて参りました。本校の研究では、「豊かに生きる」という豊かさを、人間が、生活をよりよく更新する生活の主体者として、文化を継承し創造する者として、よりよく生きる人間としてという3つの側面からとらえました。そして、学びのなかで自分自身を強く意識することができるように－自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する＜ふくおかプラン＞の展開－という研究の視点を明確にしながら、子どもにとって意味ある学びを生み出すためのカリキュラムづくりとその展開の在り方を追究してきました。

本年度は、昨年度までの研究を基盤に、各教科等の役割や立場に言及して次の3点を中心に研究を進めてきました。

- ① 各教科等は、その役割・立場から身に付ける学力を明確にし、3つの学びへの重点化をもとに、その目標像・学習像を明らかにすること
- ② 子どもが自己開発し、重点化した学びを実現する活動や支援を具体化し、それに応じた評価方法を明らかにすること
- ③ 各教科等の内容の編成や系統について見直し、自己開発と3つの学びの統合の視点から＜ふくおかプラン＞（本校のカリキュラム）に位置づけること

こうした考え方を＜ふくおかプラン＞として展開していくことで、子どもの課題追究や実践活動の姿のなかに、研究成果の一端を実感することができました。具体的には、自分の学級や学校、さらには地域社会での生活を創りかえ充実させる姿や自分の作品など文化を創り上げようとする姿、自分自身を多面的に見つめたり、モデルとなる生き方から自分に取り入れようとしたりする姿をみとれるようになりました。

本校はまた、帰国子女学級及び特殊学級を併設し、それぞれの教育研究と実践を行っています。本年度は特に、教育的ニーズに基づいた、子ども一人一人の学習や生活への適応や特性伸長をめざした各教科等のカリキュラムづくりと個別の指導計画を生かした評価活動の具体化に取り組んでいます。

最後になりましたが、本校研究の深化・充実のために、ご指導を賜りました上智大学総合人間科学部教育学科教授の奈須正裕先生、福岡教育大学の先生方及び本校先輩をはじめ関係の先生方に深く感謝申し上げます。また、わたしたちの研究に各方面から、厳しいご指導・ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年6月

副校長 金子孝信

福岡教育大学附属福岡小学校・福岡教育大学研究同人(平成17年度)

◎ 学 長 松尾 祐作

◎ 大 学

(国 語 科)

(社 会 科)

(生 活 科)

(算 数 科)

中谷 雅彦

前田 眞澄

石丸 哲史

寺岡 聖豪

山下 昭

飯田 慎司

山口 武志

清水 紀宏

(理 科)

中村 重太

宮脇 亮介

田中 浩朗

森藤 義孝

平井 建二

岩崎 洋一

木村 次宏

長山 芳子

(音 楽 科)

(家 庭 科)

(図画工作科)

(体 育 科)

(道 徳)

(特別活動)

(婦女子教育)

(障害児教育)

(養 護)

草尾 和之

相部 保美

兄井 彰

堺 正之

高田 清

小林万 里子

納富 恵子

藤金 倫徳

照屋 博行

◎ 附 小

(職名)

(担任)

(専 攻)

(氏 名)

(出身地区)

校 長

副 校 長

教 務 主 任

教 務 主 任

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

教 諭

6 の 2

1 の 1

1 の 2

2 の 1

2 の 2

3 の 1

3 の 2

4 の 1

4 の 2

4 の 3

5 の 1

5 の 2

5 の 3

6 の 1

6 の 3

専 攻

ふ さ

く 梅

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

専 攻

心理 理

社 会

体 育

特 別

図 画

工 作

体 育

生 活

道 徳

算 数

国 語

理 科

国 語

社 会

算 数

家 庭

語 文

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

国 語

永江 誠司

金子 孝信

高野 誠一

岩城 一磨○

矢野 俊次

北田 尚雄○

久保 勝美

塚本 正典

木下 美紀

永尾 健

光延 次郎

今泉 伸一郎

平川 洋一郎

清水 隆一郎

藤野 俊明○

田中 健悟

脇本 孝枝

平島 健二○

高良 祐治

秦 克伸

諏訪 佳子

原田 敏男

下川 勝彦○

園田 洋一

畠山 佳子

松本 剛

田中 庸二

正路 澄代

山浦 健

柳 正彦

大脇 猛

清水 知子

※ ○印は平成17年度研究部員

※ ○印は平成17年度研究部員

※ ○印は平成17年度研究部員

※ ○印は平成17年度研究部員

※ ○印は平成17年度研究部員

※ ○印は平成17年度研究部員

※ ○印は平成17年度研究部員

※ ○印は平成17年度研究部員

※ ○印は平成17年度研究部員

※ ○印は平成17年度研究部員

※ ○印は平成17年度研究部員

大宗 学

筑 紫

三井・小郡

甘木・朝倉

福岡 市

筑 紫

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

三井・大川

平成16年度 附属福岡小学校転出教員

吉田 正樹(福岡市)

澤村 重則(筑 紫)

穴井 仁人(福岡市)

川口 克典(宗 像)

坂本 聖佳(宗 像)

谷崎和一郎(久留米)

原口 和美(福岡市)

宮崎 昌人(三井・大川)

縄田 光美(嘉 穂)

原 クミ(糸 島)

北島 孝徳(八女・筑後)

塩谷美紀子(糟 屋)

鬼塚 展明(福岡市)

平成17年5月 印刷・発行
福岡教育大学附属福岡小学校
研究紀要 No.36

発行者 福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061 福岡市中央区西公園12番1号
TEL 092 (741) 4731(代)

印刷所 (株)ネオプリンテイング
TEL 092 (511) 8941(代)

Fuzoku
FuKoka

